

博士学位請求論文

指導教員 松田和信教授

中辺分別論における空性の研究

佛教大学大学院 文学研究科 仏教学専攻

金俊佑

はしがき

大乘仏教の哲学の基盤になるのは空思想であり、唯識学派と中観学派はこの空思想に基づいて自らの思想を展開した。本論文は、空が唯識学派にとってどのように理解され、受容されたのかを「無の有」という概念を中心として考察したものである。

本論文の執筆に際して、数多くの方々に御世話になりました。筆者は、修士課程の指導教授であった韓国学中央研究院の李鍾徹先生の勧誘と紹介で、2013年4月から佛教大学の松田和信先生のもとで留学生生活を始めました。筆者の研究活動と留学生生活の全般にわたって格別なる御指導と御高配を賜りました李鍾徹先生と松田和信先生に心より感謝申し上げます。

李鍾徹先生からは、先入観に振り回されずテキストの原意をあるがままに見るという仏教学研究の基本的な指針を教えて頂きました。そして、松田和信先生からは、文法と歴史的な脈絡に根拠して、テキストを正確に読解する方法を教えて頂きました。また、松田和信先生の紹介で、大谷大学の小谷信千代先生の『中辺分別論』勉強会に参加させて頂きましたが、小谷信千代先生からは唯識思想のみならず、仏教全般に登場する諸概念を哲学的に分析し、解釈する方法を教えて頂きました。なお、本学の並川孝儀先生、小野田俊蔵先生、山極伸之先生、森山清徹先生、本庄良文先生、吹田隆道先生からも貴重な御教示を頂きました。先生方に心より感謝申し上げます。

本学の田中裕成さんと吹田隆徳さんには本論文の原稿を読んで頂き、貴重な助言と批評を頂きました。ここに深く感謝申し上げます。

2018年11月27日

金俊佑

目次

序論	1
本論	5
第1章. 「無の有」とは何か	5
1-1. 「無の有」について	5
1-1-1. 序論	5
1-1-2. 唯識学派と「空性の定型句」	5
1-1-3. 諸文献における定型句の解釈	7
1-1-4. 「無の有」とは何か	12
1-1-5. 小結	14
1-2. 「無の有」批判	15
1-2-1. 序論	15
1-2-2. 『般若灯論』における「無の有」批判	16
1-2-3. 『中観心頌』における「無の有」批判	17
1-2-4. 『中辺分別論釈疏』における「無の有」の擁護	23
1-2-5. 小結	27
第2章. 般若経の空と「無の有」	29
2-1. 「無の有」の起源-abhāvasvabhāva	29
2-1-1. 序論	29
2-1-2. 般若経における abhāvasvabhāva	29
2-1-3. 「無の有」と abhāvasvabhāva	31
2-1-4. 小結	36
2-2. 唯識学派の『金剛般若経』理解	36
2-2-1. 序論	36
2-2-2. 『金剛般若経』の逆説と空	37
2-2-3. 『金剛般若経』の逆説と「無の有」	41
2-2-4. 小結	46
第3章. 空と三性	49
3-1. 三相と三性	49

3-1-1. 序論	49
3-1-2. 「弥勒請問章」の三相説	50
3-1-3. 三相説に対する二つの解釈	53
3-1-4. 小結	59
3-2. 三性説の変遷と空	60
3-2-1. 序論	60
3-2-2. 諸文献における円成実性の定義	60
3-2-3. 円成実性と空性	65
3-2-4. 小結	71
第4章. 翻訳批判	73
4-1. 虚妄分別という複合語に対する二つの解釈	73
4-1-1. 序論	73
4-1-2. 格限定複合語 (tatpuruṣa) としての虚妄分別	74
4-1-3. 同格限定複合語 (karmadhāraya) としての虚妄分別	77
4-1-4. 小結	83
4-2. 『中辺分別論』における grāhyagrāhakabhāva の意味	83
4-2-1. 序論	83
4-2-2. grāhyagrāhakabhāva の登場文脈	84
4-2-3. 安慧註釈の検討	84
4-2-4. ggbh の bhāva は関係か	89
4-2-5. 小結	91
結論	93
テキストと翻訳	99
1. 『中辺分別論』 「空性章」の梵文テキスト	103
2. 『中辺分別論』 「空性章」の翻訳	109
3. 『中辺分別論釈疏』 「空性章」の梵文テキスト	117
4. 『中辺分別論釈疏』 「空性章」の蔵文テキスト	137
5. 『中辺分別論釈疏』 「空性章」の翻訳	155
略号	170
参考文献	173

序論

本研究は唯識学派の空の理解を解明することを目的とした研究である。従来、唯識思想に対する研究は唯識学派の識の理論に焦点が当てられていった。相対的に、空という主題は唯識思想の研究において注目されていなかった。しかし、唯識学派は中観学派とともに大乘仏教の哲学を二分する学派であり、大乘仏教の哲学は「般若経」で説かれている空思想を基盤とする。したがって、唯識学派の教義を理解するためには、まずは唯識学派が「般若経」の空思想をどのように理解していたのかを解明しなければならない。特に、唯識学派の教義の中で存在論に該当する三性説を解明するためには、唯識学派が一切法無自性を示す空をどのように理解していたのかを明らかにする必要があるといえよう。

本研究は唯識学派の空の理解を明らかにするために、*Madhyāntavibhāga*（『中辺分別頌』、以下 MAV と省略する）とその註釈である *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*（『中辺分別論』、以下 MAVBh と省略する）を主な資料と選定して活用する。選定する理由としては主として次の三点である。

第一に MAVBh が唯識学派の文献の中でも初期に成立したものだからである。唯識思想は *Mahāyānasamgraha*（『撰大乘論』、以下 MS と省略する）において理論的に整備され、*Triṃśikākāriā*（『唯識三十頌』、以下 TK と省略する）に至って完成した。MAV はそれらより先に成立したものである。これは MAV が自派の思想を確立させる前の段階、いわゆる既存の思想を解釈・受容する段階で成立したものであることを意味する。したがって、初期唯識文献に属する MAVBh が他のものより、既存の思想であった空思想との関係を意識しながら議論を展開させた可能性が高い。

第二に初期唯識文献として想定される弥勒の五部のうち、MAV がもっとも信頼できるものだからであり、他の文献より空をもっとも詳細に、そして、組織的に記述しているからである。弥勒の五部に対する中国とチベットとの伝承に相違があることはよく知られているが、そのような相違のなかでも両伝承で共通的に弥勒の五部として認めているものが MAV と *Mahāyānasūtrālamkāra*（『大乘莊嚴經論』、以下 MSA と省略する）である。したがって、これら二つの文献は初期唯識文献のなかでも特に信頼できる資料であると言える。また、MAV は MSA と比べて空に対して体系的であり、組織的な論述を見せている。このことは MAV の第一章の後半部では、空性が主題となって特立的に扱われていることから確認できる。

第三に後代の文献において唯識学派の空理解を紹介する際には、MAV を引用することがよく確認されるからである。幾つか例を挙げればラトナーカラシャーンティが著した唯識学派の綱要書、*Madhyamālamkāropadeśa*（『中観莊嚴教示』、以下 MAU と省略する）や *Prajñāpāramitopadeśa*（『般若波羅蜜多優婆提舍』、以下 PPU と省略する）、そして、清弁の *Prajñāpradīpamūlamadhyamakavṛtti*（『般若燈論』、以下 PPr と省略する）や、*Madhyamakahrdayakārikā*（『中観心頌』、以下 MHK と省略する）などがそうである。

以上の三点が MAV を研究の主な資料とする理由である。

唯識学派における空は、長尾[1968]の研究以来に、「空性の定型句」を中心に研究されてきた。長尾[1968]は『瑜伽師地論』『菩薩地』、MAVBh、RGV、『顯揚聖教論』において「余れるもの」(yat ... avasiṣṭam)という表現が空を述べる文脈で共通的に登場し、この表現は『中阿含』『小空經』に由来すると指摘した。向井[1974]は長尾[1968]が「余れるもの」と名づけた唯識学派の空に対する表現を「空性の定型句」と称し、「空性の定型句」が登場する文献として長尾[1968]が挙げた文献に『瑜伽師地論』『摂事分』と『阿毘達磨集論』とを追加した¹。そして、阿理生[1984]は、『瑜伽師地論』『菩薩地』等の唯識学派の諸論書に『中阿含』『小空經』に由来する「空性の定型句」が登場することに基づいて、唯識学派の空性説は般若經類ではなく初期仏教の伝統を背景として成立したと述べる²。以上の先行研究に基づけば、唯識学派の空の理解は「空性の定型句」を特徴とし、「般若經」ではなく初期經典に根拠するものである。

これら先行研究をふまえ、本研究は、「空性の定型句」とともに唯識学派の空理解の特徴になる「無の有」に焦点を当てて唯識学派が空をどのように理解したかを考察する。そして、「無の有」を手がかりとして唯識学派の空と「般若經」の関係を考察する。

本研究は、唯識学派の空理解に対する思想研究と MAVBh の翻訳研究に分けられる。

まず、唯識学派の空理解を明らかにするために思想研究として三つのテーマから分析を行う。第一のテーマは MAVBh において空性の相として登場する「無の有」の意味の解明である。第二は「無の有」と代表される唯識学派の空と「般若經」との関係の解明である。第三は唯識学派の三性と空との関係の解明である。そこで、これら三つのテーマについてそれぞれ章を立てて分析を行う。次に、MAVBh の翻訳研究として、唯識思想の重要語句である abhūtaparikalpa や grāhyagrāhakabhāva に対する訳語の検討を行う。そして、そのような重要語句の研究をふまえて、MAVBh と MAVT の翻訳を行う。

以上が本研究の大綱である。以下に各章の概略を述べる。

まず、第一章においては第一のテーマ、「無の有」という概念の意味を解明する。「無の有」が有する重要性は数々の研究で指摘されているが、「無の有」が何であることを考察した研究としては山口[1941; 1951]が代表的である。山口[1951]は戲論寂滅なる勝義空を、能所内外としての世間が顕現しなくなり、未顕現であった勝義空が顕現することになった境地、または、まだ了得されていなかった勝義空が了得されることになった境地であると定義する。そして「顕現」あるいは「了得」とは「識」を意味するが、勝義空を認識するときのその認識は「顕現」や「了得」としての「識」と区別されるものとして「智(jñāna)」である。すなわち、勝義空が認識される前は「識」であるが、認識してからは「智」であって、戲論寂滅なる勝義空の境地とは転識得智の境地である。ところが、智とは知るはたらきであり、はたらきがはたらいているということは能所の世俗の態であり、有の態である。唯識学派はこのように戲論寂滅の勝義空、能所寂滅の空無を智というはたらき、有の態として把握しており、これが「無の有」が意味するところであると、山口

¹ 向井[1974]は、また、『瑜伽師地論』三摩地と『楞伽經』においても「空性の定型句」の一部が認められると指摘する。

² 阿理生[1984: p. 57, 2-7]

[1951]は「無の有」という概念を説明する³。また、世間・戲論を寂滅させる空用の行は限りなく続けなければならない、そのためには般若・無分別・出世間の慧が世間的な分別の態・有の態で働かなければならない。これが「無の有」なる智のはたらきである。また、「「無の有」の智は、空勝義諦なる出世間が能所の世間に出で、能所を寂滅する利他行である」⁴と、勝義空が空無を超えて「無の有」の態で顕なければならなかった理由を論じている⁵。以上のように、山口[1951]は「無の有」を智として把握している。本稿の第一章では、山口[1951]の先行研究を念頭に置きながら、「無の有」が何を意味し、どのような意図で登場した概念であるかを考察する。

第二章においては第二のテーマ、「無の有」を中心として唯識学派の空と「般若経」の空との関係を論じる。唯識学派と「般若経」との関係は長尾[1972]によって詳細に論じられている。長尾[1972]は唯識学派の諸論書において引用・言及される「般若経」の箇所を根拠として、唯識学派は「般若経」に違反しておらず、「般若経」から大きく影響を受けたと論じる⁶。特に、長尾[1972]が挙げている唯識学派の諸論書のうち、『中辺分別論』の場合をみれば、安慧と世親とは『中辺分別論』において説かれている十六空説と非空非不空の中道を註釈するさいに、「般若経」を用いている。このことは唯識学派の空が「般若経」の空と無関係なものではないことを示唆する。本稿の第二章では、このような先行研究の成果を踏まえ、「無の有」を中心として唯識学派の空と「般若経」との関係を考察する。

第三章においては第三のテーマ、唯識学派の三性説と空との関係を論じる。唯識思想、その中でも三性説の背景には空思想があるということは平川[1979]によってすでに論証されている。平川[1979]は「般若経」の空思想を理論的に発展させた中観学派の『中論』に唯識学派の三性説の前段階と見てもいい思想がみとめられることから、唯識学派の三性説の根底には空思想があると、『中論』の思想を媒介にして唯識学派の三性説と空との関係を論証する⁷。このような先行研究を受けて、本稿の第三章では、無著と世親による著述を中心として唯識学派の三性説が空とどのような関係にあるのかを考察する。

第四章は、本稿が主な資料として採用している MAV の主要概念である *abhūtaparikalpa* という複合語、そして、空性を定義するとき登場する *grāhyagrāhakabhāva* という語句に対する既存の翻訳を検討したものである。

³ 山口[1951: pp. 73, 9-74, 2]:

そして智 (*jñāna*; *√jñā + ana*) の *ana* とは、この場合は「はたらき」を示す *suffix* であるから、智 (*jñāna*) とは知るはたらきであり、はたらきがはたらいているということは、能所の世俗の態であり、有の態である。能所寂滅の空無を、さういう有の態、すなわち智で捉へてゆくから、唯識ではそれを、能所寂滅の空無が、智なる有の態としてはたらく意味で「無の有」と云う。

⁴ 山口[1951: p. 78, 5-76]。

⁵ 以上は山口[1951: pp. 71, 5-80, 1]の要約。同一な趣旨の内容が山口[1941: pp. 36 11-37, 11]においても述べられている。工藤[1982: pp. 231, 3-232, 9]も山口の解釈に従い、「無の有」を智として理解する。

⁶ 長尾[1972: pp. 556, 12-559, 13]

⁷ 平川[1979: pp. 133, 8-135, 1]

最後に、MAVBh 第一章の後半部である空性章とそれに相応する安慧の註釈とを翻訳する。特に、安慧の註釈であるMadhyāntavibhāga-tīkā（『中辺分別論釈疏』、以下 MAVT と省略する）の場合、Bhattacharyaと Tucci（1932）、山口益（1934）を始め、Richard Stanley（1988）、小谷信千代（2017）等によって、テキスト校訂や翻訳研究が行われているが、校訂の底本として用いられた現存するサンスクリット語写本が三分の一ほどが欠落されている状態のものであった。そのため既存の校訂本は全面的に信頼しがたい。そこで、今まで発表された諸校訂本と翻訳を参照しながら MAVT の空性章に対する校訂と翻訳とを行い、本研究の論旨を資料的に補強した⁸。

⁸ 本研究に使用された MAVBh と MAVT の梵文写本は、松田和信先生、吹田隆道先生、駒澤大学の加納和雄先生、ゲッティンゲン大学の Jin-il Chung 先生のご好意により提供を受けた。記して謝意を表す。

本論

第1章. 「無の有」とは何か

1-1. 「無の有」について

1-1-1. 序論

MAVBh 第一章の後半部は空性を主題とする。そのなかでも、空性の記述が始まる第十三偈においては、四つの相を挙げて空性の相を説明する。「無の有」は、その四つの相のうち、第二番目の相として登場する。

ラトナーカラシャーンティが著した唯識学派の綱要書、MAU と PPU は、MAVBh の当箇所を採用して唯識学派が有する空理解を記述し⁹、清弁の PPr、MHK も、MAVBh に基づいて唯識学派の空理解を紹介する¹⁰。さらに、清弁は、PPr と MHK とにおいて、空性の四つの相の一つである「無の有」に対する批判も行っている¹¹。このようなラトナーカラシャーンティと清弁との著作からみれば、MAVBh における空性の記述は唯識学派が有する空理解を代表するものであると言える。そして、清弁が、「無の有」という概念を批判の対象としている点から、「無の有」が唯識学派の空理解の特徴になると言えるであろう。

一方、「空性の定型句」は、「無の有」とともに、唯識学派の空理解の特徴になるものである¹²。Bodhisattvabhūmi (『瑜伽師地論』「菩薩地」、以下 BoBh と省略する) を始めとして、唯識学派の諸文献では「空性の定型句」に基づいた空の叙述が認められる。

本稿の目的は唯識学派が提示する「無の有」という概念がいかなるものであるかを解明することにある。まず、「空性の定型句」という唯識学派が採用する空の記述より唯識学派が有する基本的な空理解を明らかにし、「無の有」を「空性の定型句」との関係で考察する。そして、MAVT の註釈に依拠して MAVBh で登場する「無の有」の意味を究明する。

1-1-2. 唯識学派と「空性の定型句」

⁹ MAU[224b8; 225a7] (MAV 第十三偈)、[225a7-8] (MAV 第十四偈)、[225b3-4] (MAV 第十六偈、第二十一偈、第二十二偈)。PPU[140a3-4] (MAV の第十三偈)、[140b3-4] (MAV の十六偈、第二十一偈、第二十二偈)。

¹⁰ PPr[247a5-6] (MAV の第十三偈)。MHK[20a4] (MAV の第十三偈)、[20a4-5] (MAV の第十四偈)。

¹¹ PPr[247a5-b2]、MHK[20b1-5]。

¹² 諸唯識文献において登場する空に対する定型的な表現を指摘し、その起源を明らかにした最初の論文は長尾[1968]である。そして、空に対する定型的な表現を「空性の定型句」と名付けた最初の論文は向井[1974]である。

「空性の定型句」とは、『中阿含』「小空經」に起源を置く空に対する定式化された表現として、何かが空であるというときの空の意味を記述したものである¹³。「空性の定型句」は「A は空である」ということを、「A に B がないとき、A は B について空である。そして、A に余れるもの、C は存在する」と記述する。

この定型句には、A、B、C の三つの項と空、無、有の三つの概念とが登場する。そして、三つの項において中心になるのは A である。B は A にないものとして、C は A に余れるものとして規定されるからである。同様に、三つの概念において中心になるのは空である。「A は空である」という表現は A における B の無と C の有として分析されるからである。このように、「空性の定型句」は A を中心とする三つの項と、空を中心とする三つの概念とから構成される。そして、それぞれ、A は空なるもの、B は無なるもの、C は有なるものとして規定される。

「空性の定型句」が空、無、有の三つの概念から構成されるということは、空の意味が無に限定されないことを示す。空によって無として否定されるのは A、B、C の三つの項のうち、Bのみであって、C は有として肯定されるからである。それゆえに、空には B という無の側面と C という有の側面がともに存在する。したがって、空として規定される A は無、あるいは、有のどちらかによって規定されるものではない。そして、このように、空なる A に有と無との意味がともにあるということが矛盾を意味するとは言えない。A が有でありながら無であるのではないからである。無なるものは B であり、有なるものは C である。このように、空は有と無との両面を有するということが「空性の定型句」から導かれる空の意味である。したがって、空に何かを否定する無の意味があるのは確かであるが、空がただ無だけを意味するとは言えない。「空性の定型句」は空を通じて、「余れるもの」(C) という否定されないものの実在を肯定しているからである。

唯識学派が採用している「空性の定型句」の特色はこの「余れるもの」にある。例えば、『明句論』においては、空を無自性と言い換え、空の持つ無の意味を示す。しかし、空が無自性を意味するといえども、空が、すなわち、無であるのではないと指摘する¹⁴。それゆえに、空が有する無の意味を認めながらも、空が単なる無を意味するのではないと理解することが「空性の定型句」が有する特色であるとは言えない。「空性の定型句」の特色は C 項にある。C という、空による否定ののちに「余れるもの」の実在性を積極的に認めることに「空性の定型句」が有する空理解の特徴がある。C の実在を認めることにより、空には無だけではなく有の意味もあるようになる。唯識学派はこの「空性の定型句」に基づいて空を理解する。

「空性の定型句」は BoBh や、Abhidharmasamuccaya (『阿毘達磨集論』、以下 AS と省略する)、『顯揚聖教論』(以下『顯揚論』と省略する)、MAVBh において認められ、唯識学派が共

¹³ Majjhima Nikāya (No. 121), Cūḷasuṇṇatasutta (PTS ed., III p. 104ff.); 『中阿含』(一九〇)「小空經」[T1. 736c27-738a2]; mdo chen po stong pa nyid ces bya ba [(P 956) mdo sna tshogs, lu 274b2-278a7 (vol. 38, p.278)]。

¹⁴ 『明句論』[491, 2-3; 491, 16-17; 496, 10]。

有する空理解の典型として見なされる¹⁵。そして、これら文献は、有無の両概念をともに主張する文脈で「空性の定型句」を登場させている。すなわち、BoBh は、仮説された一切法の無とその仮説の所依になる事物 (vastu) の有を述べる文脈で、この定型句を登場させる。そして、MAVBh においては、虚妄分別と所取・能取の二取と空性のうち、二取は無であり、虚妄分別と空性は有であることを述べる文脈で、この定型句を登場させる。この二つの文献は、いずれも、空というのは、あるものの無のみならず、別のあるものの有をも意味する概念であることを意識している。また、AS と『顕揚論』においては、この定型句が空性の相を定義する文脈で登場する。そして、両文献は空性を有と無の意味をともに持つものとして定義する。

以上のように、「空性の定型句」と代表される唯識学派の空理解は空を無一辺倒で理解するものではない。空を通じて現れる有の意味も肯定し、空には無と有との意味があると認める理解である。以下、先に触れた各文献において登場する「空性の定型句」の記述を具体的に検討する。

1-1-3. 諸文献における定型句の解釈

BoBh、AS と『顕揚論』、MAVBh においては、「空性の定型句」に基づいた空の理解が窺われる。しかし、定型句を構成する三つの項のうち、実在性が認められるものである C の項においては、不一致を見せる。そこで、「空性の定型句」において、余れるもの、有として肯定されているもの、C に焦点を当てて、以上の諸文献における定型句の解釈を考察する¹⁶。

① BoBh

BoBh においては、仮説のみならず仮説の所依になる事物 (vastu) までも無であると損滅する見解を批判する文脈で、その損滅の見解は誤った空性の理解 (悪取空) に起因するものであると指摘し、空性に対する正しい理解 (善取空) として「空性の定型句」を提示する。

¹⁵ 「空性の定型句」が唯識学派にとって一般的に受け入れられた空理解であったことは長尾[1968: p. 26, 4-7]によって指摘されている。また、それは様々な先行研究においても支持されている。しかし、『解深密経』に関しては、空性に関係する記述が違った形で登場する。当該箇所については最近、サンスクリット文が李学竹・加納和雄[2017]によって『牟尼意趣莊嚴』より回収された。和訳とともに引用すれば(李学竹・加納和雄[2017: p.14, 7-10; p. 20, 4-7])、次のようである。

yat tūktam sandhinirmocanasūtre |
yat paratantralakṣaṇasya pariniṣpannalakṣaṇasya ca sarvaprakāraṃ sāmkleśikavaiyavadhānīkenātyantarahitatā tasya
tatrānupalabdhiḥ, idam ucyate samastam śūnyatālakṣaṇam iti
いっぽう『解深密経』に次のように説かれた。

依他起性と円成実性が、雑染なる〔遍計性〕と浄化なる〔遍計性〕をあらゆる点で離れている場合、それ(遍計性)の認識はない。このことが完全な空性の相といわれる。

この引用文からみれば、『解深密経』では空性が三性と結合され、三性の概念により説明されている。また、依他起性に遍計所執性が存在しないのが円成実性であるということも見いだせない。さらには、「空性の定型句」において有として肯定される余れるものの発想も認められない。以上の特徴に基づけば、『解深密経』は BoBh 等の文献と異なる空理解を有すると言えるであろう。

¹⁶ 長尾[1968; 1978]、向井[1983]と阿理生[1984]とにおいても以上の四つの文献における「空性の定型句」解釈が検討されている。本稿は、これら先行研究をふまえて、「無の有」の背景としての「空性の定型句」という観点で、C の解釈の違いを中心に内容を補足する。

BoBh [47, 8-48, 3]

katham punar durgrhītā bhavati śūnyatā. yaḥ kaścic chramaṇo vā brāhmaṇo vā tac ca necchatī yena śūnyam tad api necchatī yat śūnyam iyaṁ evaṁrūpā durgrhītā śūnyatety ucyate. tat kasya hetoḥ. yena hi śūnyam. tadasadbhāvāt. yac ca śūnyam tat sadbhāvāc chūnyatā yujyeta. sarvābhāvāc ca kutra kiṁ kena śūnyam bhaviṣyati. na ca tena tasyaiva śūnyatā yujyate. tasmād evaṁ durgrhītā śūnyatā bhavati.

katham ca punaḥ sugrhitā śūnyatā bhavati. yataś ca yad yatra na bhavati. tat tena śūnyam iti samanupaśyati. yat punar atrāvaśiṣṭam bhavati. tat sad ihāstīti yathābhūtam prajānāti. iyaṁ ucyate śūnyatāvakrāntir yathābhūtā aviparītā. tadyathā rūpādisaṁjñake yathānirdiṣṭe vastuni rūpam ity evamādiprajñaptivādātmako dharmo nāsti. atas tad rūpādisaṁjñakam vastu tena rūpādi saṁjñakena prajñaptivādātmanā śūnyam. kiṁ punas tatra rūpādisaṁjñake vastuny avasiṣṭam. yad uta tad eva rūpam ity evamādiprajñaptivādāśrayaḥ. tac cobhayaṁ yathābhūtam prajānāti yad uta vastumātram ca vidyamānam vastumātre ca prajñaptimātram na cāsadbhūtam samāropayati.

さて、どのように空性は誤って把握されるのか。ある沙門や婆羅門は、あるもの（B）について空であるときのそのあるもの（B）を「有であると」認めない。また、「そのあるもの（B）について」空であるもの（A）、それ（A）も「有であると」認めない。以上のようなこれが誤って把握された空性であると言われる。それはどうしてか。なぜならば、あるもの（B）について空であるときのそのあるもの（B）は存在しないから、また、空であるもの（A）、それ（A）は存在するから、空性は成立するであろう。一切が存在しないから、どこで、何が、何について空であるとなるであろうか。〔一切が存在しないとすれば〕あるもののあるものについての空性とは成立しない。それゆえに、このようなことが誤って把握された空性である。

それでは、どのように空性は正しく把握されるのか。あるもの（B）が、あるもの（A）に、存在しないから、そのあるもの（A）はそれ（B）について空であると正しく見る。さらに、そこに（A）余っているもの（C）、それ（C）は今実在すると如実に知る。これが、如実なる、顛倒されていない、空性に入ると言われる。すなわち、「言説されるとおりの色等として名付けられた事物（vastu）」（A）において、「色等としての仮説を本質とする法」（B）は存在しない。それゆえに、その色等として名付けられた事物（vastu）は、その色等としての仮説を本質とする「法」について、空である。さらに、その色等として名付けられた事物（vastu）において、余っているものは何であるか。すなわち、その「色等としての仮説の所依」（C）である。そして、その両者を如実に知る。すなわち、「その両者とは」現存する事物だけがあるということと、事物だけであることに対して仮説することだけがあるということである。実在しないものを増益させない。

この箇所は仮説されたもの、仮説を本質とするものは無であるが、その仮説の所依になるものは有であるということを示すために、「空性の定型句」を用いる。これより、BoBh には空の有する有と無との意味が認められていることが確認される。BoBh が挙げている「空性の定型句」における A、B、C はそれぞれ次のようである。

A：色等として名付けられた事物（rūpādisaṁjñakam vastu）

B：色等としての仮説を本質とする法（rūpam ityevamādiprajñaptivādātmako dharma）

C：色等としての仮説の所依になるもの（rūpam ityevamādiprajñaptivādāśraya）

このうち、有として存在性が肯定される C は無として否定される B の所依になるものであって、事物 (vastu) のことを指す。そして、無なる B と有なる C の間には C が B の原因になる因果関係が設定される。

② AS

AS においては「空性の定型句」が空性の相を述べる文脈で登場する。

AS(D) [76b3-b6]

stong pa'i mtsan nyid gang zhe na | gang la gang med pa de ni des stong par yang dag par rjes su mthong
ba ste | 'di la lhag ma gang yin pa de ni 'dir yod pa'o zhes yang dag pa ji lta ba bzhin du rab tu shes so || 'di
ni stong pa nyid la 'jug pa yang dag pa'i lta ba ste | phyin ci ma log pa zhes bya'o || gang na ci zhig med ce
na | phung po dang khamdang skye mched rnam la rtag pa dang brtan pa dang ther zug pa dang mi
'gyur ba'i chos can dang bdag dang bdag gi med do||de lta bas na de dag ni des stong ngo || de la lhag ma
yod pa ci zhig ce na | gang bdag med pa de nyid de | de lta bdag ni med kyi bdag med pa ni yod par stong
pa nyid khong du chud par bya'o || 'di las dgongs nas bcom ldan 'das kyis yod pa yang yod par | med pa
yang med par yang dag pa ji lta ba bzhin du rab tu shes so || zhes gsungs so ||

空性の相は何であるか。あるもの (A) にあるもの (B) が存在しない。それ (A) はそれ (B) について空であると正しく見る。ここ (A) に余れるもの (C)、それ (C) はここ (A) に存在すると如実に知る。これが空性に入る正しい見解であって、無顛倒であると言う。そこ (A) に何 (B) が存在しないか。蘊・界・処において、常・堅固・不変・不壊の属性を有するもの (chos can) と我と我所が存在しない。それゆえに、それらはそれらについて空である。そこ (A) に存在する余れるもの (C) とは何であるか。無我、まさに、それである。このように我は無であるが、無我は有であると空性を理解すべきである。それゆえに、世尊は密意して「有を有として如実に知る。無を無として如実に知る」と説いたのである。

この引用文からみれば、空性の相は有と無の意味をともに有する。それゆえに、AS の空理解は「空性の定型句」と一致すると言える。そして、定型句を構成する三つの項は、次のように、規定される。

A：蘊・界・処

B：常・堅固・不変・不壊の属性を有するものと我と我所

C：無我

ここで、無として否定されるもの (B) は常等の属性を有する基体や我、我所である。そして、有として肯定されるもの (C) は、そのような我等がないこと、すなわち、無我である。この場合、B の否定自体が、そのまま、C と設定される。これは BoBh においては見いだせなかったことである。さらに、AS においては空の文脈で、BoBh のように、事物 (vastu) というものは登場しない。それゆえに、AS と BoBh は「空性の定型句」に基づいた空理解においては一致を見せるが、C の規定においては差異を見せると言える。

③ 『顕揚論』

『顕揚論』においては「空性の定型句」が偈頌の形で登場する。そして、散文部ではそれを空の自相と関連付けて説明する。ここでの空の自相とは非有非無の無二である。これより、『顕揚論』の空理解は「空性の定型句」に基礎することが確認される。

『顕揚論』 [T31. 553b18-c02]

云何成立空相。當知空相有三種。一自相。二甚深相。三差別相。云何自相。頌曰。

若於此無有 及此餘所有
隨二種道理 說空相無二

論曰。空自相者。非定有無。非定有者。謂於諸行中衆生自性及法自性畢竟無所有故。非定無者。謂於此中衆生無我及法無我有實性故。隨二種道理者。謂即於此中無二種我道理。及有二種無我道理。隨此二種故說空性無有二相。一非有相。二我無故。二非無相。二無我有故。何以故。此二我無即是二無我有。此二無我有即是二我無故。是故空性非定有相非定無相。

どのように空相は成立するのか。空相には三種があると知るべきである。第一は自相であり、第二は甚深相であり、第三は差別相である。何が自相であるか。偈頌に曰く。

もし、ここに無があり、また、ここに余るものがあれば、
二種の道理に従って、空相は無二であると説く

論じて曰く。空の自相は絶対的に有でもなく無でもない。絶対的に有ではないということは、諸行の中で、衆生自性と法自性とが畢竟して無だからである。絶対的に無ではないということは、これら（諸行）の中で衆生無我と法無我との実在性があるからである。二種の道理に従ってとは、すなわち、ここでは二種の我は無であるという道理と、二種の無我は有であるという道理とがある。この二種の〔道理に〕従うから、空性には二相がないと説く。一、有相ではない。二〔種〕の我（衆生自性・法自性）は無だからである。二、無相ではない。二〔種〕の無我（衆生無我・法無我）は有だからである。なぜであるか。この二種の我の無が、すなわち、二種の無我の有だからであり、この二種の無我の有が二種の我の無だからである。それゆえに、空性は絶対的に有を相とするのではなく、無を相とするのでもない。

諸行において衆生自性と法自性とは無であるから非有であり、衆生無我と法無我とは有であるから、非無である。それゆえに、空は有と無から離れた無二を自相とする。『顕揚論』で規定する「空性の定型句」の三つの項は次のようである。

A：諸行

B：衆生自性と法自性

C：衆生無我と法無我

『顕揚論』で提示する三つの項は、表現上の差異を除いては、AS と一致する。特に、C を B の否定自体とすることにおいては AS と完全な一致を見せる。また、事物（vastu）という概念も登場させていないから、『顕揚論』は、AS と同一の空理解を持ち、それゆえに、BoBh とは区別されると言える。

④ MAVBh

MAV の第一章第一偈は、所取・能取の二取は無であり、虚妄分別と空性とは有であると虚妄分別、二取、空性の三つの概念の有無を弁別する。世親は、以下のように「空性の定型句」を用いて MAV k.1 を註釈する。

MAVBh[17, 16-18, 7]

**abhūtaparikalpo 'sti dvayan tatra na vidyate |
śūnyatā vidyate tv atra tasyām api sa vidyate || (k.1)**

tatrābhūtaparikalpo grāhyagrāhakavikalpaḥ | dvayaṃ grāhyaṃ grāhakaṃ ca | śūnyatā
tasyābhūtaparikalpasya grāhyagrāhakabhāvena virahitatā | tasyām api sa vidyate ity abhūtaparikalpaḥ |
evaṃ yad yatra nāsti tat tena śūnyam iti yathābhūtaṃ samanupaśyati yat punar atrāvaśiṣṭaṃ bhavati tat
sad ihāstūti yathābhūtaṃ prajānātīty aviparītaṃ śūnyatālakṣaṇam udbhāviṭaṃ bhavati |

虚妄分別は存在する。そこにおいて二つは存在しない。

しかし、空性はその中に存在する。それにおいても、それは存在する。(k.1)

ここで「虚妄分別」とは所取と能取とを分別することである。「二つ」とは所取と能取とである。「空性」とはその虚妄分別が所取・能取性から離れていることである。「それにおいても、それは存在する」とは虚妄分別が〔存在するということ〕である。このように、あるもの (A) にあるもの (B) が存在しないとき、そのあるもの (A) はそれ (B) について空であると如実に正しく見る。また、そこに余ったもの (C)、それこそが今ここに実在するものであると如実に知ると言う顛倒されない空性の相が示された。

そして、世親の註釈では直接的に記述されていないが、安慧の註釈によれば、上記の三つの概念は、次のように、定型句の三つの項と対応する¹⁷。

A：虚妄分別 (abhūtaparikalpa)

B：所取・能取 (grāhyagrāhaka)

C：空性 (śūnyatā)

ここで、無として否定される B は所取・能取である。そして、有として肯定される C は空性である。このように、MAVBh においても「空性の定型句」に基づいた空の理解は維持される。そして、有として肯定される C、空性は、「虚妄分別が所取・能取性から離れていること」である。すなわち、B の否定そのものを、そのまま、C とするのである。これは AS と『顕揚聖教論』とにおいても登場する C の規定であった。反面、BoBh のように、事物 (vastu) という概念は登場しない。したがって、MAVBh の空理解は AS と『顕揚論』に一致し、BoBh とは差異を見せると言える。

¹⁷ MAVT(Y) [14, 10-13]。しかし、安慧は虚妄分別を「空性の定型句」の A に該当させているが、また、余れるものでもあると註釈している。

以上のことを纏めれば、これら四つの文献は「空性の定型句」的な空理解、すなわち、空には有の意味と無の意味があるということに関しては一致する。しかし、「空性の定型句」を構成する三つの項のうち、「余れるもの」、C の理解に関しては差異を見せると言える。BoBh は C を事物 (vastu) としている反面、AS 等は 無我、無我性、空性としているからである。このような差異は定型句を構成する三つの項のうち、B と C との関係の差異に連結される。BoBh では C が B の原因である。それゆえに、C があるとき B があり、C がないときには B がない。一方、AS 等の文献は C を B の否定そのものにしている。それゆえに、C があるということが B がないということである。BoBh とは反対に、C があるときに B がなく、C がないときには B があるのである。したがって、これら四つの文献は皆「空性の定型句」に基づいた空理解を共有するが、空により有として肯定される C の理解に関しては、BoBh と AS、『顕揚論』、MAVBh とに二分されると言える。

この AS、『顕揚論』、MAVBh が共有する C の理解は MAV の「無の有」という概念と連結される。そこで、MAV における「無の有」の記述に基づいて「無の有」の意味を究明することにする。

1-1-4. 「無の有」とは何か

「無の有」は、MAV において、空性が有する四つの相の一つとして登場する。四つの相とは、「二取の無」、「無の有」、「非有非無」、「不一不異」である¹⁸。空性は「二取の無」と「無の有」という無と有との二つの側面を持つ。それゆえに、空性は有や無のいずれによって規定されない「非有非無」のものである。「二取の無」と「無の有」とは「非有非無」である空性の根拠になる。そして、空性は法性であって、法である虚妄分別と「不一不異」の関係にある。以上が MAV が提示する四つの相によって現れる空性の意味である。

空性が非有非無の相を有するという理解は空性に無のみならず、有の意味もあると認めることであって、「空性の定型句」の空理解と軌を一つにすることである。したがって、MAV における空性の理解は「空性の定型句」を継承すると言える。また、非有非無である空性が有する非無の側面、有的な側面は、四相のうち、「無の有」の相を通じて現れる。それゆえに、「無の有」は、「空性の定型句」において、空の有的な側面を表すもの、余れるものである C に相当すると言える。したがって、このことより、「無の有」の背景には「空性の定型句」があるということが確認される。

安慧は「無の有」を次のように註釈する。

MAVT[本書120, 5-6]¹⁹

¹⁸ MAVBh[22, 23 - 23, 11]

¹⁹ MAVT(Y)[47, 1-3]

*abhāvasya bhāva iti kim etat | abhāvasyātmā vidyamāna eva / anyathā dvayabhāvasyāstitvam eva syāt |
tadabhāvasya bhāvato 'vidyamānatvāt*²⁰

無の有というこれは何であるか。無という本質が存在するということである。そうでなければ、二〔取〕の有が存在することになってしまうであろう。それ（二取）の無が、本性として（bhāvatas）、存在しないからである。

MAVT[本書121, 2-4]²¹

*na hi dvayābhāvo dvayābhāvarūpeṇābhāvaḥ / so 'bhāvaś ced dvayasyāstitvam syān na ca syād
abhūtaparikalpasya dharmatā yathānityaduḥkhatā /*

二の無が二の無というあり方として無であるのではない。それ（二の無というあり方）が無であれば、二の有になり、虚妄分別の法性にもならないであろう。例えば、無常性と苦性のようである。

第一の引用文は「無の有」という語の登場につれ、語自体を説明する文脈でなされた註釈であり、第二の引用文は空性がある非有非無の相のうち、非無のことを説明する文脈でなされた註釈である。この二つの引用文は共通的に二つの点を挙げて「無の有」の意味を説明する。一つは「無の有」といって有として肯定するものに関することであり、もう一つは「無の有」が「二の有」と有する関係に関することである。

まず、「無の有」において「無」が指すのは「二取の無」である。したがって、「無の有」とは「二取の無の有」である。これは二取の否定自体を有として肯定することであって、先に触れた AS 等の C の理解と同一の構造のものである。それゆえに、「無の有」は、BoBh が示している「空性の定型句」とは差異を見せると言える。

これは BoBh から始まった唯識学派の「空性の定型句」が、AS と『顕揚論』との段階で思想的な変化を経て、MAV に至って「無の有」という概念に代替された可能性を示唆する。無著は MAV で「無の有」を空性の相の一つとして提示する。そして、世親は MAVBh で、空性を「空性の定型句」を用いて註釈する。したがって、「無の有」は「空性の定型句」と無関係なものではない。さらに、MAVBh が提示する「余れるもの」は AS と『顕揚論』と一致する。これは、同様に、MAV の「無の有」が AS と『顕揚論』との「空性の定型句」理解に基づいて出現した概念である可能性を示唆する。それゆえに、「無の有」は AS、『顕揚論』の「空性の定型句」の解釈を継承したものであると言える。

また、安慧は「二取の無」を意味する「無」に本性（bhāva）や本質（ātman）という語を加えて「有」として肯定する。したがって、「無の有」において「有」が指すのは「二取の無」という本性や本質である。これは「二取の無」が本性や本質という形で抽象化され、有として肯定されることを意味する。

本性とは法の本性、法性であり、空性を意味する。法とは、MAVBh の文脈においては、虚妄分別を指し、安慧の註釈によれば、二取との関係で「所取・能取から離れたもの

²⁰ 引用文中のイタリック体の箇所は MAVT の梵文写本の散失箇所に対する還梵文である。以下、MAVT からの引用文のイタリック体の箇所は還梵文を示す。

²¹ MAVT(Y)[263, 6-8]

（grāhyagrāhakarāhita）」と定義されるものである²²。これは空性の四つの相のうち、「二取の無」に該当する。一方、空性は、二取との関係で虚妄分別が「所取・能取から離れたこと（grāhyagrāhakarāhitatā）」と定義される²³。これは法である虚妄分別が所取・能取から離れていることを抽象化したことである。したがって、空性は法の本性、法性であり、「二取の無」がその内容になるものである。

「無の有」はこのような意味の「無」と「有」とから構成される。それゆえに、「無の有」は空性が「二取の無」を内容とすることと、「本性」というあり方で存在するということを表す概念である。「無の有」により、空性は諸法の本性、法性としての実在性を獲得する

上記の二つの引用文が共通的に挙げているもう一つの点、「無の有」が「二の有」と有する関係は、「無の有」が「二取の無」を本性として抽象化したものであることを確認させる。「無の有」がなければ「二取の有」になると述べているからである²⁴。このことより、「無の有」と「二取の無」とが、それぞれ、空性の有的な側面と無的な側面とを現しているとしても、両者間には相互対立の矛盾関係が成立するのではないということがわかる²⁵。

以上の分析を整理してみれば、「無の有」は空性の内容とあり方とを表す概念であり、法性としての空性を有として認める概念である。そして、「無の有」は非有非無である空性の非無の面を表すものである。したがって、基本的に「無の有」は「空性の定型句」を背景とするものであり、定型句のうち、「余れるもの」、C 項に相当するものである。さらに、「無の有」は「二取の無」をそのまま有として肯定するものであるから、「空性の定型句」の空理解を共有する文献の中でも BoBh よりは AS 等に近似すると言える。

1-1-5. 小結

以上、考察してきた内容は次のように整理される。

MAV において空性の一つの相として登場する「無の有」は、「空性の定型句」とともに、唯識学派の独特の空理解を成し、前者は後者を背景として出現した概念であると言える。「空性の定型句」は空に有と無との意味があるという空理解であり、「無の有」は非有非無である空性の非

²² MAVT(Y)[10, 16; 11, 17; 13, 22; 22, 3-4]

²³ MAVT(Y)[11, 2; 12, 3; 22, 16; 23, 10]

²⁴ 「無の有」がなければ「二取の有」になるということは「無の有」と「二取の無」とが同一の意味であることを示す。「二取の無」と「無の有」とを同一の意味と理解するのは前で引用した『顕揚論』[T31. 553b29-c01]と MSA[65, 6-13]においても窺われる。MSA においては、空性ではなく、円成実性を説明する箇所、円成実性の自性の一つとして有無平等性が述べられている。そして、これに関して、安慧は SAVBh[188a2-3]において、空性があるところに、所取・能取の無があり、所取・能取の無があるところに、空性の有があるから有無は平等であると註釈する。また、安慧は MAVBh 第一章の第一偈と『大乘莊嚴經論』第九章の第七十八偈をその典拠として挙げている。

²⁵ この両者間を矛盾関係と理解する見解もあるが（海野[1966]）、「無の有」は「二取の無」を抽象化したものであるから、両者間には矛盾関係が形成するとは考えがたい。

無の側面である。それゆえに、「無の有」は「空性の定型句」を背景として成立した概念であると言える。

さらに、「無の有」は AS や『顕揚論』の「空性の定型句」の理解を継承したものである。「空性の定型句」の核心になるのは「余れるもの」であるが、それに関する規定の違いにより、AS・『顕揚論』・MAVBh と BoBh とに二分される。「無の有」は、これらのうち、AS と『顕揚論』との立場に従っていると言える。「無の有」は二取の否定、それ自体を抽象化して有と肯定しているからである。これは AS 等の「余れるもの」の規定と一致する。また、MAVBh は「無の有」を相とする空性を「空性の定型句」を用いて註釈するが、MAVBh の「空性の定型句」は BoBh ではなく AS と『顕揚論』の「空性の定型句」の系列に属するものである。したがって、「無の有」は AS と『顕揚論』の「空性の定型句」の理解を継承したものである。

最後に、MAVT によれば、「無の有」は空性の内容とあり方を表す概念である。「無の有」の「無」は「二取の無」を意味し、「有」とは「二取の無」という本性の「有」を意味する。そして、「二取の無」という本性は法性としての空性である。それゆえに、「無の有」とは、法性としての空性の実在性を認める概念であると結論付けられる。

1-2. 「無の有」批判

1-2-1. 序論

唯識学派は「無の有」が空性が有する相の一つであると主張するが、MAV における「無の有」の「無」とは、所取・能取の「二取の無」であり、「有」とは「二取の無」という本性の「有」である。このことから、唯識学派が「二取の無」という本性の存在を認めていたことが窺える。

清弁は、PPr の第二十五章と MHK の第五章において、唯識学派の「無の有」という概念を批判する。まず、PPr においては、円成実性を勝義有として認める唯識学派の見解を批判する箇所では「無の有」批判が行われる。円成実性が勝義有である根拠は、空性の「無の有」という相で求められるからである。また、MHK においては、唯識学派の勝義諦の理解を批判する箇所では「無の有」批判が行われる。勝義は空性の異名であり、唯識学派は「二取の無」のみならず「無の有」も空性の相として提示しているからである。

このように PPr と MHK とは唯識学派が空性を「二取の無」と「無の有」の両者を通じて理解すると捉える。そして、両者のうち、「二取の無」のみならず「無の有」も空性の相とすることに異議を提議し、「無の有」という概念の不成立を論証しようとする。一方、MAVT において、安慧は「二取の無」のみならず「無の有」も空性の相として認められなければならない理由を論じる。そこで、「無の有」という概念が唯識学派において意図するところを明らかにすべく、MAVT における安慧による「無の有」擁護と、PPr と MHK における清弁による「無の有」批判を検討する。

1-2-2. 『般若灯論』における「無の有」批判

PPrにおける「無の有」批判は、唯識学派の三性説のうち円成実性を批判する箇所が登場する。清弁によれば、唯識学派は円成実性が諸法の真如であり、法性であり、勝義有であると主張しており、その根拠として「無の有」という空性の相を挙げている。

清弁は、まず、円成実性が法性として勝義有であるという唯識学派の主張を、法と法性の関係に基づいて否定する。次の通りである。

PPr[247a3-a5]

chos rnams kyi de bzhin nyid gang yin pa'o zhe na 'o na don dam par chos de rnams nyid ma grub pas de rnams kyi chos nyid kyang mi 'thad pa ma yin nam | ci ste tha snyad du rmi lam lta bu'i bdag nyid du skyes pa yod pa rnams don dam par de ltar yod pa ma yin pa nyid ni chos rnams kyi de bzhin nyid yin no zhe na ni de ngo bo nyid kyis skye ba med pa kho nar grub pa'i phyir dbu ma pa'i smra ba'i rjes su smra ba nyid yin no ||

一切法の真如であるとすれば、そうであれば、勝義としてそれら諸法は成立しないから、それらの法性も妥当ではないのではないか。そうではなく、世俗として夢のような我として生じるものらが勝義としてはそのようには存在するものではないことが諸法の真如であると思うなら、それは自体無生を成立するから、中観の説に従うのである

法性は法が有する特定な性質である。それゆえに、法性は諸法を拠り所とするものである。しかし、諸法は勝義として成立しない。それゆえに、法性も勝義として存在すると言えない。なぜならば、法性が拠り所とする諸法が勝義的に存在しないからである。このように清弁は、ただ諸法が勝義として無であることが真如であると主張し、諸法の無以外に、諸法の真如、法性として円成実性が勝義的に存在するとは認めない。

つづいて、清弁は唯識学派が円成実性を勝義有とする根拠を批判する。MAV I.k13ab においては「二取の無」と「無の有」が空性の相として提示される。唯識学派は、このうち、「無の有」という空性の相に依拠して、円成実性が勝義有であると主張する。清弁は「二取の無」のみならず、「無の有」も空性の相として認める唯識学派の見解を批判し、さらに、円成実性が勝義有であることを否定する。

清弁の「無の有」批判は「二取の無」の「無」が有する意味を分析する方式で、以下のように、展開する。

PPr[247a6-b2]

gnyis med pa zhes bya ba'i dgag pa 'di yang gal te med par dgag pa'i don yin na ni de gnyis med par dgag pa kho na mthu zad pa yin te | med pa'i skyon du ma gyur pa ni dgag pa gtso che ba'i phyir don dam par med pa ma yin pas 'di ltar gnyis med pa'i dngos po yin no zhes skur ba 'debs pa mi rigs so || 'o na de ma yin par dgag pa'i don yin na ni de sgrub pa gtso che ba'i phyir dngos po med pa ston par byed pas de ni mi 'dod de| skur pa 'debs pa'i mtha' yin pa'i phyir ro || ri bong gi rva med pa yang dngos po med pa ma yin te | 'di ltar med pa'i dngos po de dang | don dam par 'dra bar gyur na chad par lta ba 'grub par 'gyur ro ||

二の無というこの否定が、もし、「非定立的否定」(med par dgag pa, *prasajya-pratiṣedha) の意味であれば、それは二が無であると否定することで効力を尽くすのである。〔この「非定立的否定」としての二の無が〕無の過失にならないのは否定が主質であるから、勝義として〔存在する〕無ではないからである。それゆえに、二の無の有であるという損減は理にかなわない。

そうではなく、それ（二の無）が「定立的否定」（ma yin par dgag pa, *paryudāsa-pratiṣedha）の意味であれば、それは定立が主質であるから、〔二の無が〕無の有（dngos pa med pa）を示すことにより、それは〔正しいとは〕認められない。損減の辺になるからである。兎角の無も無の有ではない。なぜならば、無の有がそれ（＝兎角の無）と勝義として等しくなれば、断見が成立するようになるからである。

清弁は二取の存在を否定する「無」を「非定立的否定」（med par dgag pa, *prasajya-pratiṣedha）と「定立的否定」（ma yin par dgag pa, *paryudāsa-pratiṣedha）とに分ける。「非定立的否定」とは、否定を主質とする否定として、ある対象の存在を否定することだけで意味を限定する。一方、「定立的否定」とは、定立を主質とする否定として、ある対象に対する否定を通じて別のものの存在を肯定する。すなわち、否定対象の以外に別の存在を定立する。例えば、「非定立的否定」は「バラモンがない」という否定に、「定立的否定」は「バラモンではない。クシャトリヤである」という否定に相当する²⁶。

このうち、「二取の無」の「無」が「非定立的否定」であれば、「無」が有する否定の意味は二取は存在しないということだけに限定される。そして、「二取の無」以外の如何なるものも定立されない。一方、「二取の無」の「無」が「定立的否定」であれば、二取ではない別のものの有を定立することとなる。

清弁は唯識学派が「二取の無」の「無」を、これら二種の否定のうち、「定立的否定」と理解すると捉える。なぜならば、「二取の無」と別個に、「無の有」を空性の相として定立しているからである。「二取の無」を「定立的否定」と理解して、「無の有」というもう一つの空性の相を立てるのは、「無」というものが「有」であると、「無」を勝義的実在と認めることにほかならない。このような見解は「無」に執着する見解であるから、「損減」であり、「断見」でもある。それゆえに、「無の有」を空性の相として立てることは「損減」と「断見」という過失を招くから、不適切である。つまり、「無の有」は「無」を「定立的否定」と理解したときに生じる余計なものであり、「無の有」を根拠として円成実性の勝義有を主張するのも成立しない。このように清弁はPPrにおいて「二種の無」や「無の有」を空性の相として捉える唯識学派の見解を批判する。

1-2-3. 『中観心頌』における「無の有」批判

²⁶ PPrT[299b3-b5]

gnyis med pa zhes bya ba'i dgag pa 'di yang zhes bya ba la sogs pas ni mtsan nyid las dgag pa ni rnam pa gnyis te | med pa dgag pa dang | ma yin par dgag pa'o || de la med par dgag pa ni dgag pa gtso che ba ste| dper na bram ze med do zhes dgag pas rgyal rigs yod pa mi sgrub par bram ze med par dgag pa nyi tse tsam zhig ston pa lta bu'o || ma yin par dgag pa ni sgrub pa gtso che ba ste| dper na bram ze ma yin no zhes dgag pas bram ze ma yin bar dgag pa nyi tse tsam mi ston par rgyal rigs yin par sgrub pa lta bu'o ||

二の無というこの否定もということ等は、定義から、否定は二種類である。「非定立的否定」と「定立的否定」である。そのうち、「非定立的否定」は否定が主質である。例えば、バラモンがないという否定によりクシャトリヤがあるとは定立せず、バラモンがないということとしての否定のみが示されることのようにである。「定立的否定」は定立が主質である。例えば、バラモンではないという否定により、バラモンではないこととしての否定のみを示すのではなく、クシャトリヤであるということを示すようである。

MHK における「無の有」批判は、唯識学派の勝義諦理解を批判する箇所が登場する。清弁は、批判に先立って、MHK k.2 において唯識学派の勝義諦理解を要約する。当該箇所のMHK 及び、自註である *Madhyamakahrdayavṛttitarkajvālā* (『思釈炎』、以下 TJ と省略する) を引用すれば、次の通りである²⁷。

TJ[199b2-b5]

**dn̄gos po gnyis po med pa'i phyir || gnyis dn̄gos med pa'i yod pa ni ||
yod la sogs pa'i blo yi yul || dam pa'i don du 'dod do lo || (k.2)
(dvayābhāvasya sadbhāvād abhāvād vā dvayasya ca |
sadādibuddhiviṣayaḥ paramārtho mataḥ kila || (k.2))**

gnyis ni gzugs la sogs pa gzung ba dang | mig gi rnam par shes pa la sogs pa 'dzin pa'o || de gnyis kyi med pa'i ngo bo nyid **med pa'o** || med pa'i dn̄gos po de'i ngo bo nyid du rtag tu yod pa nyid kyi phyir dang | gzung ba dang 'dzin pa zhes bya ba gnyis su ni med pa nyid kyi phyir na | ji ltar gnyis kyi dn̄gos por med pa'i ngo bo yin pa de'i phyir ni **yod pa'i blo yul** yin la | gang gi phyir gnyis kyi ngo bor med pa yin pa de'i phyir na **med pa'i blo'i yul** yin te | rnam pa de lta bu'i don dam pa ni bdag cag rnal 'byor spyod pa pa rnams '**dod do** zhes bya ba ni de'i bstan pa bstan pa yin no || lo zhes bya ba'i sgra ni bstan bcos byed pa | bdag nyid kyi mi 'dod pa bstan pa yin te | de lta bu'i don dam pa ni phyis 'byung ba'i dpyad pa dag gis bsgrub par dka' ba yin pa'i phyir rol||

二の無は実有であるから、また、二は無であるから、
勝義は、有等の知覚の対象であると考えられると伝承される。(k.2)

二とは、色等の所取と、眼識等の能取とである。その二〔取〕の無という自性 (ngo bo nyid) が無である。その無の有 (med pa'i dn̄gos po) という自性 (ngo bo nyid) としては常に有であるから、また、所取・能取という二〔取〕としては無であるから、〔勝義は〕二〔取〕のもの (dn̄gos po) として無というあり方 (ngo bo) であるから、**有の知覚の対象**である。そして、二〔取〕というあり方 (ngo bo) としては無であるから、それゆえに、**無の知覚の対象**である。このような様相の勝義が我々唯識学派によって**考えられる**ということが、それ(第二偈)の内容により示されたことになった。**伝承** (kila) という語は、論書の作者である私によつては主張されるのではないということを示す。そのような勝義は後で行う分析によって成立し難いからである。

清弁が要約した唯識学派の勝義諦理解は二つに分けられる。一つは勝義諦が「二取の無の有」と「二取の無」と特徴づけられるということであり、もう一つはその各々が有と無との知覚の対

²⁷ TJ にはサンスクリット本が伝わっていないが、TJ が註釈する MHK にはサンスクリット本が存在する。以下の TJ の引用文のうち、括弧内にあるサンスクリット文は TJ で引用する MHK の偈頌のサンスクリット文である。

象になるから勝義諦は認識の対象になるということである²⁸。これらは、清弁により、後の偈で批判されるが、前者に対する批判は k.10、k.11、k.12 において、後者に対する批判は k.13、k.14、k.15 において行われる。

「無の有」批判は、このうち、前者に対する批判で登場する。清弁は「二取の無の有」と「二取の無」とで唯識学派の勝義諦の特徴を要約したが、「二取の無」に関しては批判しない。k.10、k.11、k.12 において批判されるのは「無の有」のみである。清弁は自分の批判に対する唯識学派の反論を想定しつつ、それをさらに反駁する形で自分の「無の有」批判を強化する。

清弁の批判は「無の有」が有する言葉自体の矛盾性を指摘することに焦点を当てている。「無」と「有」とは相互矛盾する概念だからである (k.10ab)。これに対して唯識学派は「無の有」の「有」を、通常の「存在」の意味ではなく、別の意味として解釈する方式で反論を展開する (①k.10cd、②k.11、③k.12)。以下、該当箇所を一つずつ引用しながら清弁の批判を検討する。

① k.10ab

TJ[203a2-a4]

gnyis med pa yi dngos po ni || rigs pa ma yin 'gal ba'i phyir ||
nam mkha'i me tog med dngos sam || de dngos yin par brtag mi bya || (k.10)
(dvayābhāvasya bhāvo hi virodhitvān na yujyate |
khapuṣpābhāvasattāvān na vā tadbhāvakalpanā || (k.10))

zhes bya ba smras te | gal te re zhig gnyis med pa dngos po yin na ni ji ltar med pa yin | ci ste med pa yin
na ni 'o na de lta ni dngos po ma yin no || de'i phyir **gnyis med pa'i dngos po ni rigs pa ma yin te** | rang
gi tshig dang **'gal ba'i phyir ro ||**

²⁸ 認識の対象としての「二取の無」と「無の有」が登場する文献資料には MSA の第十四章 k32-k33 がある。

MSA[94, 17-24]

traidhātukātmasaṃskārān abhūtaparikalpataḥ |
jñānena suviśuddhena advayārthena paśyati || (k.32)
sa **traidhātukātmasaṃskārān** abhūtaparikalpanāmātrān paśyati | **suviśuddhena jñānena** lokottaratvāt |
advayārthenety agrāhyagrāhakārthena |

tadabhāvasya bhāvaṃ ca vimuktaṃ dṛṣṭihāyibhiḥ |
labdhvā darśanamārgo hi tadā tena nirūcyate || (k.33)
tasya grāhyagrāhakābhāvasya bhāvaṃ dharmadhātūn darśanaprahātavyaiḥ kleśair **vimuktaṃ** paśyati |

三界に属することを本質とする諸行を虚妄分別として〔見る。また〕、
無二を対象とする清浄智で見る。 (k.32)

彼は三界に属することを本質とする諸行をただ虚妄分別のみであると見る。清浄智でとは、出世間であるからである。無二を対象とするとは、所取・能取がないことを対象とする〔という意味〕である。

その無の有を見ることによって捨てられるべきものから解放される。
実に、そのとき、それによって見道が得られると説明される。 (k.33)

その所取・能取の無の有、〔即ち〕法界を見ることによって捨てられるべき煩惱から解放されると見る。

二〔取〕の無の有は理に適わない。矛盾するからである。空華 (khapuṣpa) の無
が有存在性を有するか、あるいは、それ（二取の無）が有であると分別されるべ
きではないかである。(k.10)

という。もし、まず、二〔取〕の無が有であれば、どうして〔二取は〕無であるか。そうでは
なく、〔二取が〕無であれば、そのようであれば、〔二取の無は〕有ではない。それゆえに、
二〔取〕の無の有は理に適わない。言語自体が矛盾するからである。

k.10abは「無の有」に対する批判の基本となる。以下の議論はこれに対する唯識学派の反論と清
弁の反駁である。「無の有」を批判する主な根拠は「無の有」自体が自語相違
(svavacanaviruddha)²⁹の誤謬を犯しているということである。すなわち、「無の有」は「二取の
無の有」である。二取は無であるから、無なる二取を有であるとするのは、その言語自体が矛盾
であるということである。二取が無であれば、それに有という述語を付けてはならない。それゆ
えに、「無の有」という言語自体が矛盾を含んでいるから、「無の有」は勝義の特徴になれない
と清弁は批判する。

唯識学派は、「自語相違」という批判に対して、「無の有」の「有」の意味を新しく解釈する
形で「無の有」の「無」と「有」との間に成立する矛盾関係を解消しようとする。そして、清弁
の反駁はそのような唯識学派の反論は成立できないことを論証する形で為される。唯識学派の
「有」に対する解釈は三つに分けられ、これに対する清弁の反駁も三回に分けて為される。各々
MHK の偈頌を基準として言えば、k.10cd、k.11、k.12 に相当する。

② k.10cd

TJ[203a4-a5]

gal te gnyis med pa'i tsul kho nar rtag tu nges par gnas pa'i phyir med pa nyid dngos po yin no zhe na | de
lta na nam mkha'i me tog med pa yang dngos po yin par thal bar 'gyur ro || gal te nam mkha'i me rtog med
pa dngos po yin par mi 'dod na ni gnyis med pa de yang **dngos po yin par brtag par mi bya'o** ||

〔唯識学派が〕もし、二の無という原理がそのまま、常に、確実に存続するから無は有である
というのであれば、そうであれば、無である空華も有になってしまう。もし、無である空華が
有であることを認めないならば、その二の無も有であると分別されるべきではない。

この引用箇所は、直前に引用した箇所に続く散文註であって、k.10cd を説明する箇所である。
ここから、「無の有」が「自語相違」であるという批判に対する唯識学派の反論が始まる。

一番目に想定される唯識学派の反論は「無の有」の「有」を「存続」の意味で解釈すること
である。このような「有」の解釈に従えば、「無の有」とは「二取の無」という原理が存続する
という意味になる。この場合「無」と「有」とには意味が対立する矛盾関係が形成されない。それ
ゆえに、「二取の無の有」は「自語相違」ではないと言えるようになる。

²⁹ 自語相違 (svavacanaviruddha) は誤った主張 (pakṣābhāsa) の一つである。NP は自語相違を「自語相違とは、例えば
「私の母は不妊である」というようなことである (NP[141, 21]: svavacanaviruddho yathā | mātā me vandhyeti ||)」と説明し
ている。

このような唯識学派の反論を想定したうえで、清弁は空華の譬喩を挙げて反駁する。空華は常
に無であって、空華が存在しないことはいかなる場合においても変わらない。つまり、空華の無
という原理は存続するのである。しかし、「無の有」を「無の存続」の意味として解釈するなら
ば、空華も常に無として存続するから、実在しない無である空華も有であると言わなければなら
なくなる。しかし、空華を有であるとは言えない。それゆえに、「二取の無」と「空華の無」と
は、ともに常に無であることを存続するから、無である空華を有であると言えない限り、無であ
る二取に関しても有であると言うことはできない。したがって、清弁は「有」を「常に存続する」
という意味で解釈しても「無の有」という概念は成立しないと批判する。

③ k.11

TJ[203a5-b3]

ci ste 'di snyam du kho bo cag gi tshul ni |

**rnam par rtog pa gang gang gis || dngos po gang gang rnam brtags pa ||
de ni kun brtags kho na ste|| ngo bo nyid ni yod ma yin ||
gzhan gyi dbang gi dngos nyid ni || rnam rtog rkyen las 'byung ba yin ||
de la rtag tu snga ma shos || bral ba nyid gang yongs grub yin ||³⁰**

zhes bya ba ste | gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid de la rtag tu snga ma shos zhes bya ba kun brtags pa'i
ngo bo nyid kyi gzung ba dang 'dzin par brtags pa'i dngos po dang bral ba nyid gang yin pa de ni yongs su
grub pa'i ngo bo nyid yin te | kun brtags pa dang gzhan gyi dbang la ltos nas med pa gang yin pa de nyid
yongs su grub pa la ltos nas dngos po yin pas de ltar na med pa dang dngos po zhes bya ba gnyis dbyer
med pa'i phyir tha dad pa nyid ma yin pas de'i phyir 'gal ba med do snyam du pha rol po dag sems pa la
brtags nas de dgag pa'i lan yang gdab pa'i phyir |

**gal te yang dag brtag med phyir || de la dbye ba med snyam na ||
mtshan gzhi mtsan nyid rnam gzhas la || de ni mthsungs phyir lan ma yin || (k.11)
(tattvataḥ kalpitābhāvāt tadabhedo mato yadi |
lakṣyalaṣavyavasthāyām tattulyatvād anuttaram || (k.11))**

zhes bya ba smras te | kun brtags pa dang gzhan gyi dbang dag med pa nyid kyi yongs su grub pa la
dbyer med du zin kyang gang gi tshe mtshan nyid kyi gzhi dang mtshan nyid rnam par gzhas pa byed pa
na mtshan nyid kyi gzhi de nyid ces bya ba de'i mtshan nyid ni gnyis med pa'i dngos po yin no zhes bya
ba de'i tshe na | gal te re zhig gnyis med pa'i dngos po yin na ni ji ltar med pa yin| ci ste med pa yin na ni
'o na de lta na dngos po ma yin no zhes 'gal bar sngar bstan pa de mthsungs pa'i phyir pha rol po dag gis
smras pa'i lan de ni bzang po ma yin no||

【唯識学派の反論】そうではなく、我々（唯識学派）の教理は

あらゆる分別によってあらゆる事物が分別される。

それは遍計所執であり、その〔遍計所執〕性は存在しない。

依他起性は分別である。縁より生じる。

それに、常に前者が完全に離れていることが円成実〔性〕である。

³⁰ TK. K.20~21

yena yena vikalpena yad yad vastu vikalpyate |
parikalpita evāsau svabhāvo na sa vidyate || (k.20)
paratantrasvabhāvas tu vikalpaḥ pratīyodbhavaḥ |
niṣpannas tasya pūrveṇa sadā rahitā tu yā || (k.21)

という。依他起性、「それに常に前者が完全に」、〔すなわち、〕遍計所執性という所取・能取として分別された体性（*dnegos po*, **bhāva*）が「離れていること、それが円成実性である」。遍計所執性と依他起性に関して無であること、それが円成実性に関して有であることであるから、そうであれば、無と有という二つには差別がない。それゆえに、〔二つの間には〕別異性がないから、したがって、矛盾はないと考える相手たちの説を検討して、その反駁の答えを、さらに、与えるために、

もし、真実として遍計所執〔性〕は無であるから、それ（円成実性）に〔無と有との〕差別は存在しないと考えるならば、所相と能相の安立において、それは同じであるから、答えにならない。(k.11)

という。遍計所執〔性〕と依他起〔性〕の無性により、円成実〔性〕に「差別がない」としても、「所相と能相を安立する」とき、〔すなわち、〕その真実（*de nyid*）という所相にとって能相は二〔取〕の無の有であるとするときには、「もし、まず、二〔取〕の無の有であれば、どうして〔二取は〕無であるか。そうではなく、〔二取が〕無であれば、そのようであれば、〔二取の無は〕有ではない」という矛盾として先に述べた「それは同じであるから」、相手によって語られたその答えは正しくない。

二番目に想定される唯識学派の反論は、「無の有」の「有」を「無」と意味上の差異がないものとして解釈することである。すなわち、「無の有」というときの「無」と「有」とに差異がないから、「自語相違」の誤謬は起こらないということである。

清弁が想定した唯識学派の反論は TK の k.20、k.21 に基いている。TK の k.20、k.21 は三性説が説かれている箇所である。そのうち、円成実性が定義されている箇所（TK k.21cd）では、依他起性における遍計所執性の無が、すなわち、円成実性であると述べられる。遍計所執性の無が円成実性を意味するから、この場合、遍計所執性が存在しないという「無」と円成実性が存在するという「有」とには意味上の差異がない。それゆえに、「遍計所執性の無」と「円成実性の有」との関係を「無の有」に適用すれば、「二取の無の有」における「無」と「有」とには差異がないから、「無の有」という語が自語相違の誤謬を犯しているとは言えなくなるのである。

これに対する清弁の反駁は、「遍計所執性の無」と「円成実性の有」とに置き換えられた「二取の無」と「無の有」とを、所相・能相の関係で把握することである。唯識学派によれば、勝義は「無の有」を通じて理解されるものであるから、所相は勝義・真如であり、能相は「無の有」である。そして、能相は所相という単一のものを知らせる機能を有する。しかし、この場合、能相である「無」と「有」という二つの相反する属性を同時に表しており、単一な所相に相反する二つの属性がともに存在するということは矛盾である。それゆえに、「無の有」が能相である場合、所相に無と有という相反する属性があるようになるから、矛盾は起こる。したがって、清弁は所相・能相の観点で「無の有」という概念は成立しないと批判する。

④ k.12

gal te de'i dngos ma btang gang || de ni de dngos yin 'dod na ||
de ltar dngos nyid mi gtong ba || de phyir de ni dngos ma yin || (k.12)
(svarūpātāgītā yasya sã cet tadbhāva iṣyate |
na ca bhāvo 'ta evāsau svarūpaṃ na jahāti cet || (k.12))

zhes bya ba ni gal te pha rol po dag 'di skad ces gnyis med pa'i dngos po nyid yongs su mi gtong ba gang
yin pa de nyid dngos po zhes bya'i ngo bo nyid gnyis pa ni med do zhes zer na | de la 'di skad ces de ltar
ngo bo nyid mi gtong na de'i phyir dngos po de ni med pa kho na yin pas de la dngos por brtag par mi
bya'o zhes brjod par bya'o ||

また、

〔唯識学派が〕もし、あるものが自分の自性を捨てないこと、それがそれ（あるもの）の有であると考えられるのであれば、それが自性を捨てないならば、それゆえにこそ、それは有ではない。(k.12)

というのは、もし、相手たち（唯識学派）がこのように、〔すなわち〕二〔取〕の無という自性を「捨てないこと、それが有である」といって、〔二取の無と別なる〕第二の自性は存在しないとすれば、それに対して、このように〔中観学派は〕反論する。そのように〔二取の無という〕自性を捨てないとすれば、それゆえに、その有がまさしく無であるから、「それ（二取の無）に対して有であると分別すべきではない」（k.10cd）と言うべきである。

最後に想定される唯識学派の反論は「無の有」の「有」を「自分の自性を捨てない」という意味で解釈することである。この解釈に従えば、「無の有」の「有」は「無」に該当する「二取の無」という自性を捨てないことを意味する。したがって、「無の有」という場合、「無の有」という、「二取の無」と別なる特定の自性が設定されるのではない。ただ、「無の有」の「無」に該当する「二取の無」という自性を捨てず、それをそのまま維持するのが「無の有」が意味するところである。それゆえに、「二取の無」という無の自性と、「無の有」という有の自性という二つの相反する自性が、一つの対象の中に一緒に存在するのではないから、矛盾は発生しない。「二取の無」という自性のみがあるのである。

これに対する清弁の反駁は、もし「無の有」の「有」が「自分の自性を捨てない」という意味であれば、「二取の無」に「有」という語を加える必要はないということである。「二取の無」という自性を捨てないということは、勝義諦を「二取の無」という自性で表現することで済むからである。したがって、「無の有」の「有」が「無の有」の「無」、すなわち、「二取の無」にほかならないから、「二取の無」とともに「無の有」も言う必要はない。つまり、清弁は「有」を「自性を捨てない」という意味と解釈しても「無の有」という概念は成立しないとして批判する。

1-2-4. 『中辺分別論釈疏』における「無の有」の擁護

MAVT においては「無の有」という相が空性の相として挙げられなければならないと擁護する記述が認められる。これが清弁の批判を念頭に置いて述べられたものであるか否かは判断できない。

しかし、安慧は「無の有」の「無」という語は「有」の否定を意味するから、「無」だけでも「二取の無」の意味は十分に現れ、それゆえに、「無の有」を空性の相として挙げる必要はない、すなわち、「無の有」は余計なものであると批判する見解を想定し³¹、それに対する反論を展開する形で「無の有」を擁護する。その際に、安慧は二つの理由を挙げ「無の有」の必要性を力説する。一つは「無の有」は空性が法性として存在することを表すために必要であるということである。もう一つは「無の有」は「二取の無」の「無」が畢竟無であることを表すために必要であるということである。そこで、それらの詳細について見てみたい。

① 法性としての空性

安慧が「無の有」を必要と提示する第一の理由は、「二取の無」だけでは法性としての空性の意味が現れないという点である。「無の有」とは、法には「二取の無」という本性があるということである。つまり、空性が「無の有」という相を有するということは空性が法の本性・法性として存在することを示す。そして、安慧はこのような意味の「無の有」が空性の相ではないとき、次のような問題が発生すると指摘する。

MAVT[本書120, 10-13]³²

nādhikah | dvayābhāvaḥ śūnyatālakṣaṇam itīyati nirdiśyamāne dvayābhāvasya svātantryam evāvagamyate śaśaviṣṇābhāvat | na duḥkhatādivad dharmatārūpatā | tasmād eva ucyate dvayābhāvaḥ śūnyatā tasya cābhāvasyābhūtaparikalpe bhāvaḥ śūnyatety / abhāvasya bhāvalakṣaṇaparigrhītatvād dharmatārūpatā paridīpitam /

余計なものではない。二の無が空性の相だということのみが示される場合、兎角の無のように、二の無の独在相 (svātantrya) のみが理解される。苦性等のように、〔空性の〕法性というあり方は〔理解され〕ない。それゆえに、二の無が空性であり、そして、その無が、虚妄分別の中で、有であることが空性であると説かれる。無が有の相に包摂されることから、〔空性の〕法性としてのあり方が明らかになった。

もし、空性が「二取の無」のみを相とすれば、空性は、「兎角は存在しない」という言明のように、「二取は存在しない」ということだけを意味するようになる。つまり、空性は兎角のようなただの無となってしまう。しかし、空性は、兎角のようなものではなく、苦性のように、具体

³¹ MAVT[本書120, 8-9]

bhāvapratiśedhāvācakatvād abhāvaśabdasya bhāvaśabdābhāve 'pyeṣo artho 'vagamyata iti bhāvaśabdo 'trādhikah |
〔無の有のうち、〕無という語は有を否定する語であるから、有という語がなくても、その意味は理解される。それゆえに、有という語は余計なものである。

この安慧が想定する「無の有」に対する批判は、先に紹介した清弁の批判のうち PPr に近いと言える。PPr においては「無の有」が二取に対する定立的否定の結果として批判される。つまり、二取を非定立的に否定する清弁にとって、「無の有」は「二取の無」で十分な空性の意味に付け加えられた余計なものである。それゆえに、安慧が想定する「無の有」の批判は MHK より PPr における清弁の批判に近いと言える。しかし、PPr に述べられた通りに、唯識学派の「無の有」が定立的否定と非定立的否定との二重否定の脈絡で登場したかは断定できない。以下考察する安慧の論述においては「無の有」を「無」や「否定」が有する定立的機能に基づいて説明していないからである。ちなみに、清弁の説に従い、「無の有」を相とする唯識学派の空理解が二重否定の非定立的否定に根拠していると解釈する研究としては早島[2014: pp. 24, 16-56, 15; 2015]がある。

³² MAVT(Y)[47, 6-12]

的な存在の有する抽象的存在である。このような性質は、MAV klc の「空性は虚妄分別の中に存在する」という文句からも確認できることである³³。それゆえに、空性には「二取の無」のみならず「無の有」という相もなければならない。「無の有」は空性が法性というあり方で存在するというを示すために必要なものである。このように安慧は「無の有」は余計なものではないと解釈する。

② 畢竟無としての二取

つづいて、安慧の提示する「無の有」が必要な第二の理由は、「無の有」という相によって「二取の無」が畢竟無であることが現れるという点である。安慧は四無という概念をもって「無の有」が空性の相として必要であると論証する。次の通りである。

MAVT [本書120, 14-18]³⁴

atha vā dvayābhāvaḥ śūnyatety abhāvaśabdasya sāmānyavācivān na vijñāyate katamo 'trābhāvo 'bhipreta iti | atyantābhāvapradaśanārtham ucyate | abhūtaparikalpe dvayābhāvasya bhāva iti | na hi prāgabdhāvaprādhvaṃsābhāvau svopādānād anyatra ākhyātum yuktau / anyonyābhāvaś caikāśrayatvaṃ na yuktaṃ ubhayāśrtiātvāt / tasmād bhāvasyābhāvalakṣaṇopādānād grāhyagrāhakayor atyantābhāva eva śūnyatety etaj jñāpitam bhavati |

あるいは、「二の無」が空性だというのは、無という語は〔他の無と〕共有される語だから、ここにおいての「無」の意味が〔それら無の中で〕何れであるのかが知られない。それゆえに〔二取の〕畢竟無(atyantābhāva)を示すために「虚妄分別に「二の無の有」がある」と言われる。未生無(prāgabdhāva)と已滅無(prādhvaṃsābhāva)とは自分の依りどころなくては不合理であるからである。相互無(anyonyābhāva)が一つに依りかかるのも不合理である。二つに依りかかるからである。それゆえに、有は無を相とすることより、所取・能取の畢竟無こそ空性であることが示されたことになる。

四無とは未生無（prāgabdhāva）と已滅無（prādhvaṃsābhāva）と相互無（anyonyābhāva）と畢竟無（atyantābhāva）からなる四種類の無の在り方である。このうち未生無は未来に生じるであろう特定のものの現在における無であり、已滅無は過去にすでに存在した特定のものの現在における無である。これら二つは自体という生滅する一つの基体の状態に寄りかかる無である。つぎに、相互無は独立的に存在する二つのものが互いに対して無であることである。これは二つの独立的な

³³ MAVBh[17, 17] śūnyatā vidyate tv atra.

³⁴ MAVT(Y)[47, 13-20]

基体の関係に寄りかかる無である。最後に、畢竟無は、いかなる基体にも寄りかからない無として、兎の角のように、常に存在しないという意味の無である³⁵。

これら四無は未生無・已滅無・相互無と畢竟無とに二分されると言える。前者が有する無の意味は相対的である半面、後者は絶対的であるからである。未生無・已滅無・相互無は相対的な無である。未生無等はある基体の状態や関係に寄りかかるからである。一方、畢竟無の無は絶対的な意味の無である。畢竟無は他のものに影響を受けずに、常に無であるからである。それゆえに、四無は未生無・已滅無・相互無という相対的な無と畢竟無という絶対的な無に二分されると言える。

さて、「二取の無」はこれら四無のうち、未生無でもなく已滅無でもない。未生無と已滅無とは寄りかかる一つの基体を前提とする。しかし、二取は実在する基体ではない。したがって、実在しない二取が過去に存在した、あるいは、未来に存在すると言うのは不可能である。それゆえに、「二取の無」は未生無でもなく已滅無でもない。また、「二取の無」は相互無でもない。もし、二取を一つの実在する基体と想定するならば、相互無は二つの基体の間で成立する無であるから、二取以外のもう一つの基体を想定しなければならなくなる。それゆえに、「二取の無」は相互無でもない³⁶。

四無のうち、残るのは畢竟無であり、したがって「二取の無」は畢竟無である。畢竟無は四無のうち唯一に絶対性を有する無である。すなわち、如何なる基体にも寄りかかることなく、常に自体的に自分の非存在性を維持する無である。さて、このように、いかなる場合においても常に無であるということはそれが本性的に無でなければ成立できないことである。なぜならば、本性とは、特定のものを常にその通りに維持させる原理だからである。それゆえに、「二取の無」が

³⁵ 島[1978: pp. 17, 7-18, 6]では Mīmāṃsāsūlokavārttika (=MŚV) の abhāva 章 (k2cd-k4) に基づいた四無が紹介されている。MŚV の該当箇所を翻訳とともに引用すれば次の通りである。

MŚV[336, 10-14]

kṣīre dadhyādi yan nāsti prāgabhāvaḥ sa ucyate || (k.2)
nāstītā payaso dadhni pradhvaṃsābhāva īṣyate |
gavi yo 'śvādyabhāvas tu so 'nyonyābhāva ucyate || (k.3)
śīraso 'vayavā nimnā vṛddhikāṭhinyavarjitāḥ |
śaśaśṛṅgādirūpeṇa so 'tyantābhāva ucyate || (k.4)

乳に凝乳等が存在しないこと、これが未生無 (prāgabhāva) であると言われる。(k.2)

凝乳における乳の無性が已滅無 (pradhvaṃsābhāva) であると認められる。

牛における馬等の無、これが相互無 (anyonyābhāva) であると言われる。(k.3)

兎の角等の形において、隆起して固くなることが欠かれた頭の凹んだ部分、
これが畢竟無 (atyantābhāva) であると言われる。(k.4)

また、渡辺[1992: pp. 48, 20-51, 26]ではインド思想一般で説かれた四無が仏教内部でどのように受容されたかが論じられている。

³⁶ また、二取を構成する所取と能取とを各々の一つの基体と見て、所取と能取という二つの基体があるから二取の無は相互無であるとも言えない。なぜならば、所取と能取とは能所の関係で成立するもの、相互依存するものだからである。すなわち、所取があるということは能取もあるということを意味し、その逆も同一である。それゆえに、二取を所取と能取とに分けて二つの基体と考えても、所取における能取の無や能取における所取の無を意味する相互無が二取の無の無が意味するところであるとは言えない。

畢竟無であることは、二取が本性的に無であることである。つまり、二取の無が本性である場合に限って、二取は如何なる場合においても無であることができる。

空性の相として提示される「無の有」とは二取の無という本性が存在するという意味である。これは二取が存在しないことを本性として表現することにより、二取の無が有する絶対性を表す。もし「二取の無」という本性を認める「無の有」の相がなければ、「二取の無」は本性に根拠した無ではないから、二取の無が有する絶対性は現れなくなる。それゆえに、「無の有」は「二取の無」が畢竟無であることを示すためにはなくてはならないものであり、余計なものではない。

以上のように、安慧の註釈に基づけば「無の有」は余計なものではない。むしろ空性の相の一つとして、なくてはならない特質である。なぜならば「無の有」という相があるからこそ、空性の法性としてのあり方が現れるからであり、二取の畢竟無性が現れるからである。

1-2-5. 小結

MAV において登場する「無の有」という空性の相をめぐる、清弁と安慧は各々批判と擁護を行う。そのうち、批判する立場に立っている清弁は「無の有」とともに空性の相として提示する「二取の無」は認めるが、「無の有」は余計なもの、あるいは、言語自体が矛盾するから成立しないものであると批判する。これに反して、安慧は「二取の無」のみならず「無の有」も空性の相として挙げなければならないと擁護する。なぜならば、「無の有」という相がなければ、空性が諸法の本性を示すものであることを表現できないからであり、また、「二取の無」の「無」が有する絶対性も表現できないからである。

安慧の解釈に基づけば、「無の有」という空性の相は、二取は如何なる場合にも存在しないということ、絶対的に存在しないことを確立させる意図で提示されたものである。唯識学派では一切法に自性がないことや、空であることは所取・能取の「二取の無」として表現される。「無の有」は、その「二取の無」が諸法に本性として存在し、その同じ本性こそが空性であるということを表す。つまり、安慧は法に空性、あるいは、「二取の無」という自性があるということ認める。

しかし、この場合、一切法が自性とするものは空性・「二取の無」である。自性は他のものに影響を受けず、常に自分自身の状態を維持するものである。したがって、諸法が空性、「二取の無」を自性とするということは、諸法はいつも自性がなく、二取は如何なる場合でも存在しないということである。それゆえに、諸法は空性を本性・自性とするという「無の有」により、一切法の無自性や、二取の無は絶対性を得るようになると言える。このように、安慧に基づけば、唯識学派は「無の有」を通じて一切法の空であることを存在するものの本性の観点から定礎する。それゆえに、「無の有」は一切法が絶対的に空であることを存在論的に確立させる概念である。ここに「無の有」の意図がある。空の絶対性を知らしめること、これが「無の有」が意図するところである。

第2章. 般若経の空と「無の有」

2-1. 「無の有」の起源—abhāvasvabhāva

2-1-1. 序論

「無の有」という概念は、「二取の無」という本性が諸法に存在し、それが空性であるということの意味する。これは諸法を空と規定することによって諸法の自性を一方的に否定するのではなく、空なる諸法が有する空である性質、空性を諸法の自性として認め、自性を肯定的に捉えようとする考え方である。このように「無の有」という概念は「二取の無」という本性、空性を諸法の自性として肯定する、自性肯定的な考え方に基づく。ただ、この場合、自性として肯定されるものは、自性がないという自性である。MAV における空性は「二取の無」と「無の有」とを相とする。二取の無という本性があるということ、これが「無の有」で現れる自性肯定的な考え方である。

このような意味の自性肯定的な考え方は「般若経」においても窺われる。「般若経」では一切法は空であり、自性がないという文句だけではなく、一切法は無を自性とするという文句も登場するからである。「無を自性とする (abhāvasvabhāva)」ということは、一切法は自性がないことを自性とするということの意味する。つまり、「自性の無」という自性を認める表現である。それゆえに、MAV の「無の有」と「般若経」の「無を自性とする (abhāvasvabhāva)」とは、両者共に、自性肯定的な考え方を見せるといえよう。

「無を自性とする (abhāvasvabhāva)」という表現を媒介にして、MAV の「無の有」と「般若経」の関連性を指摘した研究としては、森山[1978; 1979]や、渡辺[1983b; 1985b]がある。これらの研究では、abhāvasvabhāva という概念が「般若経」の増広される過程でできた概念であることとや、世親がMAVの「無の有」を abhāvasvabhāva という語で註釈していることが指摘されている。

そこで、本節では、これら先行研究を踏まえ、MAV に対する世親と安慧との註釈、MAVBh と MAVT を参照しながら、唯識学派の「無の有」という概念の起源について考察する。

2-1-2. 般若経における abhāvasvabhāva

「abhāvasvabhāva」という語は *Aṣṭādaśasāhasrikā-prajñāpāramitā* (『一万八千頌般若』、以下 ADP と省略する) と *Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitā* (『二万五千頌般若』、以下 PSP と省略する) の増広された般若経 (以下、「増広般若経」と呼ぶ) で頻出する。PSP に基づけば、「abhāvasvabhāva」が登場する文脈は二つに分けられる。一つは五蘊や一切法を形容するものとし

てであり³⁷、もう一つは二十空性という空性の部類を述べる際の第十六空性に該当するもの、abhāvasvabhāvaśūnyatā としてである³⁸。以下の先行研究では、この abhāvasvabhāva という語に着目して「増広般若経」が有する「自性肯定的」な考え方を指摘する。

森山[1978; 1979]は最初の「般若経」から ADP、PSP へ増広される過程における空に関する表現の変遷に注目して空性思想の変化について述べたものである。氏は空の表現に次の二つの変遷があると指摘する。一つは、「A は空である」という表現が「A は自性について空である」というふうに、空による否定が自性に限定されることを明らかにする方向への変遷である³⁹。そして、もう一つは、そのように自性がないこと、空であることが諸法の自性であるというふうにより、ものの空であること自体を自性として肯定する方向への変遷である⁴⁰。そして、両者のうち、「abhāvasvabhāva」は後者の根拠として挙げられる。

渡辺[1983b; 1985b]も「増広般若経」に自性について肯定的な記述が認められると指摘する。まず、渡辺[1983b]では、「増広般若経」で二十空性を述べる際に、一切法が空である理由として、空であることがその本性 (prakṛti) であるからという文句を反復的に挙げていることを根拠に、「増広般若経」では本性が肯定的に用いられていると指摘する⁴¹。そして、この本性 (prakṛti) という語が意図するのは事物が空であり、それが事物の本性とすることであり、「無を自性とする」という意味の abhāvasvabhāva が意図するところと同様であると論じている⁴²。

³⁷ PSP I-1[182, 10-28]、PSP I-2[5, 23-28; 138, 29-139, 3; 149, 28-30; 151, 1-8]、PSP II-III[96, 25-97, 13; 154, 11-155, 7]、PSP IV[153, 15-154, 3; 155, 16-28]、PSP V[136, 12-138, 14; 168, 11-22; 169, 10-31]、PSP VI-VIII[1,8-14; 6, 13-18; 7, 23-9, 17; 10, 16-12, 24; 27, 12-24; 36, 5-22; 38, 28-39, 16; 43, 6-10; 44, 6-21; 45, 6-17; 46, 19-26; 108, 1-7; 109, 6-23; 145, 28-146, 1; 158, 1-5; 158, 24-28; 163, 10-17; 168, 26-169, 7]。

³⁸ PSP 全般に渡って、二十空性は頻繁に登場する。したがって、二十空性のうち第十六空性としての abhāvasvabhāvaśūnyatā が登場する箇所も多い。そのうち、二十空性の各項目を定義する箇所 (PSPI-2[60, 13-63, 31]) において第十六空性は次のように述べられている。

PSPI-2 [63, 12-15]

tatra katamā abhāvasvabhāvaśūnyatā? nāsti sāmāyogikasya dharmasya svabhāvaḥ pratītyasamutpannatvāt, saṃyogah saṃyogena śūnyo 'kūṭasthāvināśitām upādāya. tat kasya hetoḥ. prakṛtir asyaīśā, iyaṃ ucyate abhāvasvabhāvaśūnyatā. そのうち、無性自性空性とは何であるか。和合した法に自性は存在しない。縁によって生じたものだからである。常住するものでなく滅するものでもないから、和合は和合について空である。なぜであるか。それがその本性であるからである。これが無性自性空性と言われる。

³⁹ 森山[1978: pp. 122, 15-127,2; 1979: pp. 754下, 12-755下, 9]。また、同一のことが鈴木[1990: pp.145, 17-147, 8]にも指摘されている。空による否定が自性に限定されるということは「小空経」の「空性の定型句」と一致するところである。しかし、「小空経」の場合、空による自性の否定の後に「余れるもの」の実在性を述べているが、般若経は「余れるもの」に対する言及なしに自性の否定だけを言っている。

⁴⁰ 森山[1979: pp. 756下, 9-757上, 16]

⁴¹ 渡辺[1983b: pp. 203下, 18-204下, 16]。定型句として挙げている文句は PSPI-2[p. 60, 21-22]「常住するものでなく滅するものでもないから、そのうち (=六根のうち)、眼は眼について空である。なぜであるか。それがその本性であるからである。tatra cakṣuḥ cakṣuṣā śūnyam akūṭasthāvināśitām upādāya. tat kasya hetoḥ? prakṛtir asyaīśā」である。ここでは眼を主語としているが、一切のものがこの定型句に適用され、あるものが空であるのはそれがその本性だからであると、一切法が空であることをその一切法が有する本性として記述している。

⁴² 渡辺[1983b: pp. 203下, 18-204下, 16.]。

また、abhāvasvabhāva という語は *Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā* (『八千頌般若』、以下 ASP と省略する) で一回だけ登場するが⁴³、ADP と PSP に頻出されていることや、ASP や ADP の abhāva、asvabhāva と記述される箇所が PSP では abhāvasvabhāva という語で記述されていることを根拠に、「増広般若経」に至って自性を肯定的に表現する傾向が現れたと指摘している⁴⁴。

以上の先行研究に基づけば、「般若経」は「一切法は空である」から「一切法は無を自性とする」、すなわち、「一切法は自性がないことを自性とする」という表現へと変化した⁴⁵。換言すれば、自性を肯定的に表現する傾向に増広した。そして、その傾向を代表するのが abhāvasvabhāva という語である⁴⁶。これらの先行研究は、このような意味の abhāvasvabhāva を通じて「増広般若経」の「自性肯定的な考え方」を導き出す。さらに、abhāvasvabhāva が世親の MAVBh においても用いられていることを指摘し、「増広般若経」と唯識学派との連関性を言及している⁴⁷。以下、二つの先行研究が指摘している MAVBh の abhāvasvabhāva を、安慧の註釈を参照しながら、検討する。

2-1-3. 「無の有」と abhāvasvabhāva

MAV において、abhāvasvabhāva という語は登場しないが、MAVBh においては二箇所 abhāvasvabhāva が登場する。一つは空性の相を述べる偈頌に対する註釈の箇所であり⁴⁸、もう一つは十六空性の第十六空性を述べる偈頌に対する註釈の箇所である⁴⁹。これらはいずれも MAV で

⁴³ 渡辺[1989: p. 123, 6-17]、また、渡辺[1992: pp. 68,13- 69, 12]は、ASP においても abhāvasvabhāva という語が登場していることを指摘する。しかし、玄奘の漢訳を除いた ASP の漢訳諸本の対応箇所においては abhāvasvabhāva に該当する訳語が窺われなく、自性肯定的な意味の abhāvasvabhāva が登場するのは ADP や PSP の成立するまで待たなければならないと言っている。

⁴⁴ 渡辺[1985b]。また、ASP の asvabhāva が PSP において abhāvasvabhāva に変わっていることは鈴木[1988: pp. 112, 16-115, 13]にも指摘されている。

⁴⁵ abhāvasvabhāva の abhāva が自性の無を意味することは次の文句からも確認できる。

PVPI-2[149, 28-150, 4]

punar aparaṃ yad āyusman śāriputra evaṃ āha, abhāvasvabhāvaḥ sarvadharmā itī, evaṃ etat. tat kasya hetoh? tathā hy āyusman śāriputra nāsti sām̐yogikāḥ svabhāvaḥ. śāriputra āha: kasyāyusman subhūte nāsti sām̐yogikāḥ svabhāvaḥ? subhūtir āha: rūpasyāyusman śāriputra nāsti sām̐yogikāḥ svabhāvaḥ, vedanāyāḥ saṃjñāyāḥ saṃskārāṇāṃ vijñānasyāyusman śāriputra nāsti sām̐yogikāḥ svabhāvaḥ, cakṣuṣo nāsti sām̐yogikāḥ svabhāvaḥ, evaṃ śrotrasya ghrāṇasya jihvāyāḥ kāyasya manaso nāsti sām̐yogikāḥ svabhāvaḥ,

さらにまた、長老舍利弗は一切法は無を自性と言った。そのとおりである。なぜであるか。長老舍利弗よ、和合した自性は存在しないからである。舍利弗が言った。長老須菩提よ、何に和合した自性は存在しないのであるか。須菩提は言った。長老舍利弗よ、色には和合した自性が存在しない。長老舍利弗よ、受、想、行、識には和合した自性が存在しない。眼には和合した自性が存在しない。同様に、耳、鼻、舌、身、意には和合した自性が存在しない。

⁴⁶ 森山氏や渡辺氏の研究以外に、鈴木[1984; 1988]も「増広般若経」の abhāvasvabhāva という語に基づいて、般若経が増広される過程で、空性を普遍的なもののあり方と把握する傾向が現れたと指摘している。

⁴⁷ 森山[1978: pp. 137, 4-138, 16]、渡辺[1983b: p. 205上3-6; 1985a: p. 161下17-23]

⁴⁸ MAVBh[23, 1-2]

⁴⁹ MAVBh[26, 14]

「無の有」と表現しているものに対する註釈である。このことより、「無の有」が有する abhāvasvabhāva との関連性が想定される。

① 空性の相と abhāvasvabhāva

MAV では空性の相として「二取の無」、「無の有」、「非有非無」、「不一不異」を挙げている。このうち、「二取の無」、「無の有」が第一章第十三偈で述べられているが、これを世親は abhāvasvabhāva という語を用いて註釈する。

MAVBh [22, 24-23, 2]

dvayābhāvo hy abhāvasya bhāvaḥ śūnyasya lakṣaṇam | (k.13ab)

dvayagrāhyagrāhakasyābhāvaḥ | tasya cābhāvasya bhāvaḥ śūnyatāyā lakṣaṇam ity
abhāvasvabhāvalakṣaṇatvaṃ śūnyatāyāḥ paridīpitaṃ bhavati |

二の無と無の有とが空〔性〕の相である。 (k.13ab)

所取・能取の二の無、そして、その無の有が空性の相であるという、空性には無を自性とする相があるということが明らかになった。

ここでは、MAV で述べられている「二取の無」と「無の有」を相とする空性が「無を自性とする (abhāvasvabhāva)」相のものであると註釈されている。「無の有」という相だけではなく「二取の無」という相も含めて、「無を自性とする (abhāvasvabhāva)」相と表現しているが、「無の有」の「無」は「二取の無」であるから、abhāvasvabhāva は「無の有」に対応する意味であることがわかる。これは安慧の註釈からも確認できる。安慧は MAV 第一章で述べられた空性の相を次のように要約している。

MAVṬ [本書122, 6-7]⁵⁰

evam eṣā śūnyatāsallakṣaṇā abhāvasvabhāvalakṣaṇā advayalakṣaṇā ca | tattvānyatvavinirmuktalakṣaṇā
ca paridīpitā | uktam śūnyatālakṣaṇam ||

以上のように、この空性は無相・無を自性とする相・無二の相、同一と別異とを離れた相を有することが明らかになった。空性の相が説かれた。

MAVにおいて、空性の相として提示されている「二取の無」、「無の有」、「非有非無」、「不一不異」が、安慧により「無相」、「無を自性とする相」、「無二の相」、「同一と別異を離れた相」と言い換えられている。このうち、二番目の相である「無の有」は「無を自性とする相」(abhāvasvabhāvalakṣaṇā)と言い換えられている。したがって、「無の有」という空性の相は空性の「無を自性とする相」であることが安慧の註釈からも確認できると言える。

② 第十六空性と abhāvasvabhāva

⁵⁰ MAVṬ(Y)[49, 12-14]

MAV においても、「般若経」と同様に、空性を分類して説く箇所が登場する⁵¹。ただ、「般若経」では二十空性に、MAV では十六空性に分けられており、その各々の説明においても差異を見せている⁵²。また、MAV では十六空性を構成する十六個それぞれの空性の名称が言及されておらず、各空性の意味だけが一つずつ述べられている。

世親は、MAVBh において、MAV で言及しなかった十六個の空性の名称を挙げながら、各空性を註釈する⁵³。この註釈によれば、「般若経」と MAVBh とが共有する空性の法数の名称は一致を見せている。さらに、「般若経」も MAVBh も第十六空性に関しては無性自性空性、abhāvasvabhāvasūnyatā と名づけている。

MAV における十六空性は、大きく分ければ、第一空性である内空性から第十四空性である一切法空性までの空性と、第十五空性である無性空性と第十六空性である無性自性空性とに二分される。このうち、第一から第十四空性までは眼等の六内処、乃至、十力等のそれぞれの項目に対する空性である。そして、第十五と第十六空性は空性そのものに関するものとして空性の自性を表す空性である⁵⁴。abhāvasvabhāva という語は、このうち、第十六空性の名称として登場する。

空性の自性を表す第十五空性、無性空性と第十六空性、無性自性空性は次のように記述される。

MAVBh [26, 9-16]

**pudgalasyātha dharmāṇām abhāvaḥ śūnyatātra hi |
tadabhāvasya sadbhāvas tasmin sā śūnyatāparā || k.20**

⁵¹ MAV k.17-k.20。安慧は MAV の十六空性という空性の分類が般若経に由来するものであると註釈している。(MAVṬ [Y[52, 22-23] *sā śoḍaśavidhā śūnyatā* Prajñāpāramitāyām paṭhyate | adhyātmasūnyatā yāvad abhāvasvabhāvasūnyateti | 内空、乃至、無性自性空性というその十六種類の空性は般若波羅蜜多において暗誦されている。)

⁵² PSPの二十空性は次のようである。1)内空性 (adhyātmasūnyatā) 2)外空性 (bahirdhāsūnyatā) 3)内外空性 (adhyātmabahirdhāsūnyatā) 4)空性空性 (śūnyatāsūnyatā) 5)大空性 (mahāsūnyatā) 6)勝義空性 (paramārthasūnyatā) 7)有為空性 (saṃskṛtaśūnyatā) 8)無為空性 (asaṃskṛtaśūnyatā) 9)畢竟空性 (atyantaśūnyatā) 10)無始無終空性 (anavarāgrasūnyatā) 11)無散空性 (anavakāraśūnyatā) 12)本性空性 (prakṛtisūnyatā) 13)一切法空性 (sarvadharmasūnyatā) 14)自相空性 (svalakṣaṇasūnyatā) 15)不可得空性 (anupalambhasūnyatā) 16)無性自性空性 (abhāvasvabhāvasūnyatā) 17)自性空性 (bhāvasūnyatā) 18)無性空性 (abhāvasūnyatā) 19)自性空性 (svabhāvasūnyatā) 20)他性空性 (parabhāvasūnyatā)。

そして、MAVBhの十六空性の各々は次のようである。1)内空性 (adhyātmasūnyatā) 2)外空性 (bahirdhāsūnyatā) 3)内外空性 (adhyātmabahirdhāsūnyatā) 4)大空性 (mahāsūnyatā) 5)空性空性 (śūnyatāsūnyatā) 6)勝義空性 (paramārthasūnyatā) 7)有為空性 (saṃskṛtaśūnyatā) 8)無為空性 (asaṃskṛtaśūnyatā) 9)畢竟空性 (atyantaśūnyatā) 10)無始無終空性 (anavarāgrasūnyatā) 11)無散空性 (anavakāraśūnyatā) 12)本性空性 (prakṛtisūnyatā) 13)相空性 (lakṣaṇasūnyatā) 14)一切法空性 (sarvadharmasūnyatā) 15)無性空性 (abhāvasūnyatā) 16)無性自性空性 (abhāvasvabhāvasūnyatā)。

MAVBh においては PSP の15)不可得空性 (anupalambhasūnyatā)、17)自性空性 (bhāvasūnyatā)、19)自性空性 (svabhāvasūnyatā)、20)他性空性 (parabhāvasūnyatā) が登場しない。そして、MAVBh においては 4)空性空性 (śūnyatāsūnyatā) 5)大空性 (mahāsūnyatā) との順番になっているが、PSP は 4)空性空性 (śūnyatāsūnyatā) 5)大空性 (mahāsūnyatā) との順番になっている。同様に、MAVBh において 13)相空性 (lakṣaṇasūnyatā) 14)一切法空性 (sarvadharmasūnyatā) となっているのが、PSP においては13)一切法空性 (sarvadharmasūnyatā) 14)自相空性 (svalakṣaṇasūnyatā) となっており、各空性間の順番においても両者間の差異が認められる。

「般若経」における空性の分類に対する詳細な考察については渡辺[1983a]を参照。

⁵³ MAVBh[24, 14-26, 16]

⁵⁴ MAVBh[26, 12]。般若経においてはこのような見方は確認できない。森山[1978: p. 138, 10-12]参照。

pudgaladharmābhāvaś ca śūnyatā | tadabhāvasya ca sadbhāvaḥ tasmin yathokte bhoktrādaḥ sānyā śūnyateti | śūnyatālakṣaṇakhyāpanārthaṃ dvividhāṃ ante śūnyatāṃ vyavasthāpayati | abhāvaśūnyatāṃ abhāvasvabhāvaśūnyatāṃ ca | pudgaladharmaśāntaropasya tacchūnyatāpavādasya ca parihārārthaṃ yathākramam | evaṃ śūnyatāyāḥ prabheda vijñeyāḥ |

人と諸法の無がここにおける空性である。それらの無の有、これがここにおけるもう一つの空性である。(k.20)

人と諸法との無が空性である。そしてそれらの無の有、これがここにおける、〔すなわち〕享受者等として説かれたものにおける、もう一つの空性である。空性の相を説明するために最後に、無性空性と無性自性空性との二種の空性を設定する。順番通りに人法の増益と、それら（人法）の空性の損減とを取り除くためにである。空性の部類は以上のように知られるべきである。

空性の相である第十五、十六空性は各々「人と諸法の無」と「それらの無の有」を意味し、世親はこれら二つを「無性空性」と「無性自性空性」と名づける。したがって、「無の有」を「無性自性空性（abhāvasvabhāvaśūnyatā）」に対応させているから、「無の有」は abhāvasvabhāva と同一の意味のものであることがわかる⁵⁵。

また、世親の註釈によれば、これら二つの空性は人法の増益と空性の損減を取り除く目的でも説かれたものである。これについて安慧は次のように説明する。

MAVṬ [本書131, 1-3]⁵⁶

yady abhāvaśūnyatā nocyeta parikalpitarūpayor dharmapudgalayor bhāva eva prasajyeta | yady abhāvasvabhāvaśūnyatā nocyeta śūnyatāyā abhāva eva prasajyeta | tadabhāvāc ca pudgaladharmayoḥ pūrvavad bhāvaḥ syāt |

もし無空性が説かれなかったら、遍計所執性を有する法と人々が存在することになる過失に陥るであろう。もし無性自性空性が説かれなかったら、空性が存在しないことになる過失に陥るであろう。また、それ（空性）が存在しないから、人法が、以前のように、存在するであろう。

安慧は無性空性と無性自性空性とが説かれない場合に起こる過失を言及しているが、このうち、無性自性空性に対する記述は「無の有」が空性の相として説かれない場合の記述と一致する。すなわち、安慧は無性自性空性が説かれなければ、空性が存在しないという過失に陥るだけでなく、人と諸法が存在するようになる過失にも陥るようになることを註釈する。このことは、「無の有」を定義する際に、「無の有」がなければ、所取・能取が存在するようになることを註釈と軌を一

⁵⁵ 上記の引用文のうち、「無性空性」と「無性自性空性」とを註釈する部分に関して、玄奘は次のように翻訳し、「無性自性空性」が「無を自性とする」意味の空性であることを明らかにしている。

『辯中邊論』[T31. 466b5-b07]

論曰。補特伽羅及法實性俱非有故名無性空。此無性空非無自性。空以無性為自性故名無性自性空。

論じて曰く。プドガラと法とは実性が俱に有ではない。それゆえに、「無性空」と名づける。この「無性空」は自性がないのではない。空は無性を自性とする。それゆえに、「無性自性空」と名づける。

⁵⁶ MAVṬ(Y)[57, 19-21]

つにする⁵⁷。それゆえに、安慧の註釈からも、「無の有」は *abhāvasvabhāva* と同一の意味であることがわかる。

以上のように、MAVBh では空性の相と十六空性のうち第十六空性を述べる箇所では *abhāvasvabhāva* が登場する。そして、いずれも「無の有」という概念を説明するために用いられている。このことより、MAVBh の「無の有」と「増広般若経」の *abhāvasvabhāva* は同一の意味のものであることと、「自性肯定的な考え方」を共有していることが確認できる。

森山[1978]と渡辺[1985b]とは、MAVBh において「増広般若経」の *abhāvasvabhāva* が登場していることから現れる両者間の関係を言及する。まず、森山[1978: p. 138, 13-16]は世親が *abhāvasvabhāva* を「増広般若経」から持ってきて MAV の「無の有」概念の註釈に活用したと結論づける。一方、渡辺[1985ab]は、「般若経」の増広過程に唯識学派の思想を持った人が関与したと結論づける。いずれも、唯識学派と「増広般若経」の関連性を認めている。ただ、渡辺[1985ab]は唯識学派の「無の有」という「自性肯定的な考え方」の影響で「増広般若経」で *abhāvasvabhāva* という語が登場するようになったと見ている⁵⁸。しかし、「無の有」より以前に *abhāvasvabhāva* が自性肯定的な意味で成立していたと考えられる。

「無の有」という語は無著（5世紀）の著作より以前には遡らない⁵⁹。それゆえに、もし、「無の有」が *abhāvasvabhāva* より先であるとすれば、「増広般若経」において *abhāvasvabhāva* を自性肯定的意図で用いるのは無著より後のことでなければならないであろう。しかし、A.D. 286年に竺法護により漢訳された『光讚般若波羅蜜経』には、現行のサンスクリット本の PSPの

⁵⁷ MAVT[本書120, 5-6]

abhāvasya bhāva iti kim etat | abhāvasyātmā vidyamāna eva / anyathā dvayabhāvasyāstitvam(13a7) eva syāt | tadabhāvasya bhāvato 'vidyamānatvāt |
無の有というこれは何であるか。無という本質が存在するということである。そうでなければ、二〔取〕の有が存在することになってしまうであろう。それ（二取）の無が、本性として（bhāvatas）、存在しないからである。

⁵⁸ 渡辺[1985a: p. 161下20-23]

asvabhāva は般若経の最も一般的な無自性の原語であるが、瑜伽行派の思惑に反し、この語も *abhāvasvabhāva* と同義とせねばならないものであった。

渡辺[1985b: p. 554下11-25]

これらは、般若経に雑然と説かれていた勝義・真如・法性としての無、及びその無こそが諸法の自性であるという思想を *abhāvasvabhāva* から看取したものであった。従って、このような瑜伽行派的の考え方を持った人々が、般若経増広に荷担していたと推察される。

小峰, 勝崎, 渡辺[2014: p. 128, 14-18]

そこで、般若経自身が増広され（後代に付加され）ていくなかで、その両者の無を区別するために、単に「自性がない」というだけではなく、「一切法は無を自性とする」と、肯定的に説くような経文も登場するようになった。後代、中観派とともにインド大乘仏教を代表する瑜伽行派は、空や無自性に対する虚無主義的な理解を批判するために「無の有」「非有非無の中道」を説き、般若経の空思想をある意味肯定的な仕方で解釈したのだが、これはその瑜伽行派的な思想的背景からの増広とされている（渡辺章悟）。

⁵⁹ MAV を除いて、「無の有」という概念は MSA 14. k33、AS(D) [69b4; 76b5]、『顯揚論』[T31. 553b29-c1]、『七十頌』k11 においても窺われる。

「abhāvasvabhāvaḥ prajñāpāramitā」⁶⁰、「sarvadharmā abhāvasvabhāvaḥ」⁶¹、「abhāvasvabhāvaḥ sarvadharmā」⁶²、「asvabhāvaḥ sarvadharmāḥ」⁶³に相当する文句として「般若波羅蜜爲無所有則爲自然」⁶⁴、「一切諸法爲無所有則謂自然」⁶⁵、「一切諸法亦無所有悉爲自然」⁶⁶、「一切諸法皆無所有悉爲自然」⁶⁷が登場する。これは般若波羅蜜が、そして、一切法が「無」（＝「無所有」）を「自性」（＝「自然」）とするという意味である。それゆえに、無著（5世紀）の著作より以前に成立した『光讚般若波羅蜜經』（A.D. 286）に自性肯定の意味で abhāvasvabhāva が用いられていることが確認できることから、abhāvasvabhāva は「無の有」が登場する前から自性肯定の意味で存在した概念である。したがって、唯識学派の「無の有」の影響で「増広般若經」の abhāvasvabhāva が登場したとは言ない。そして、MAV の「無の有」は世親と安慧により abhāvasvabhāva という語で註釈されている。それゆえに、「無の有」は「増広般若經」の abhāvasvabhāva の影響を受けてできた概念であるといえよう。

2-1-4. 小結

「無の有」は「二取の無」という本性の「有」を意味する概念として「自性肯定的な考え方」を前提としている。このような「自性肯定的な考え方」は「増広般若經」でも確認でき、それを代表的に表しているのが無を自性とするという意味の abhāvasvabhāva である。「増広般若經」では「一切法は空である」ということを「一切法は無を自性とする」、すなわち、「一切法は自性がないことを自性とする」と表現する。これは無自性という自性を認めていることにほかならない。それゆえに、MAV で空性の相として登場する「無の有」とは「増広般若經」の abhāvasvabhāva に起源を置く概念である。

2-2. 唯識学派の『金剛般若經』理解

2-2-1. 序論

『中辺分別論』において登場する「無の有」という空性の相は唯識学派が空を自性肯定的に理解していることを表す。このような空の理解は、『金剛般若經』に対する唯識学派の註釈書、『三

⁶⁰ PVSI-1[182, 13]

⁶¹ PVSI-1[182, 17]

⁶² PVSI-2[149, 28-29]

⁶³ PVSI-2[150, 19]

⁶⁴ 『光讚經』[T8. 172a15-a16]

⁶⁵ 『光讚經』[T8. 172a20]

⁶⁶ 『光讚經』[T8. 206c5-c6]

⁶⁷ 『光讚經』[T8. 206c11-c12]

百頌般若に対する七十頌』（以下、『七十頌』と省略する）、そして、それに対する散文註である『能斷金剛般若波羅蜜多經論釋』（以下、『頌釈』と省略する）からも確認できる⁶⁸。『七十頌』と『頌釈』においても「無の有」という概念が登場するからである。

『七十頌』と『頌釈』においても「無の有」という概念が登場するということは、すでに、長尾[1972]、大竹[2013]により指摘されている⁶⁹。そこで、本稿では『七十頌』と『頌釈』に基づいて、唯識学派がどのように「般若經」の空を理解していたのかを考察する。まず、『七十頌』と『頌釈』が註釈している『金剛般若經』がどのように空を説いているのかを解明する。つづいて、『金剛般若經』において説かれている空が『七十頌』と『頌釈』とにおいてどのように註釈されているのかを「無の有」が登場する箇所を中心に分析し、唯識学派は「般若經」の空を自性肯定的に理解していたということを確認する⁷⁰。

2-2-2. 『金剛般若經』の逆説と空

⁶⁸ 『七十頌』と『頌釈』の著者が誰であるかに関してはまだ確定されていない。

まず、『七十頌』は中国の伝承では弥勒の五部として挙げられるが、チベットの伝承では弥勒の五部として挙げられない。また、弥勒、無著、世親のうち、誰が『七十頌』を著し、誰が『頌釈』を著したのかについても諸説が存在する。これは弥勒が歴史的に実存した人物であるかという問題とも関係するから（弥勒に関する諸伝承と弥勒の実存性をめぐる論争については早島[2003]を参照。弥勒実在説を批判する最新の研究としては松田[2001; 2018b]がある。松田[2001; 2018b]は弥勒は実在の人物ではなく、三昧の中、無著の心の中の信仰上の存在であると結論づけている。）、『七十頌』と『頌釈』との著者を確定することには多くの困難がある（『七十頌』と『頌釈』とが有する著者の問題に関する諸伝承の相違と現代研究者たちの見解に対しては大竹[2009: pp. 18, 11-24, 12; 2013: pp. 55, 1-68, 21]を参照。大竹[2009: pp. 24, 13-25, 13; 2013: pp. 59, 1-65, 21]は弥勒が実存人物であるという立場で弥勒が説いたものを無著が『七十頌』の形に文字化したと、すなわち、『七十頌』の著者は弥勒であると見ている。）。

ただ、長尾[1972]によれば、『七十頌』と『頌釈』は唯識学派に属する文献である。長尾[1972: pp. 559, 14-569, 12]は『七十頌』と『頌釈』とにおいて「唯識性」（k.20）や「阿頼耶識」（k.76 に対する散文註）という唯識学派の述語が登場していることと、唯識学派の仏身観と、『中辺分別論』において登場する「虚妄分別」と「無の有」との概念が『七十頌』と『頌釈』においても窺われることを指摘している。

また、文献間の関係からみれば、『七十頌』と『頌釈』とは『中辺分別頌』と『中辺分別論』、『大乘莊嚴經頌』と『大乘莊嚴經論』と同一な性格の文献であると言える。大竹[2013]が指摘したとおり、『七十頌』は『中辺分別頌』・『大乘莊嚴經頌』と、『頌釈』は『中辺分別論』・『大乘莊嚴經論』と、用語や思想の共通点を見せているからである。大竹[2013: pp. 59, 1-65, 4]は、共通点を見せていると用語や思想として「無の有」、「虚妄分別」、「界増長」、「法界における諸仏の非一非異」、「心所法としての見」提示する。

以上の先行研究に基づけば、『七十頌』と『頌釈』とは『中辺分別論』と同一な過程で著述された唯識学派の文献であると推定される。ちなみに、本稿で資料として使用するサンスクリット本の『七十頌』においては『七十頌』の著者を無著としており、義浄の『頌釈』においては『七十頌』の著者は無著、『頌釈』の著者は世親としている。

⁶⁹ 長尾[1972: pp. 566, 18-569, 2]、大竹[2013: pp. 61, 15-63, 7]。両方、『七十頌』と『頌釈』においても、『中辺分別論』と同様に、「無の有」が登場していることを指摘している。しかし、「無の有」という概念が『金剛般若經』の空の教説をどのように註釈しているのかに関しては詳細に論じていない。

⁷⁰ 『七十頌』には G. Tucci によるサンスクリット校訂本とチベット訳、義浄の漢訳が存在する。この『七十頌』は実際に七十七の偈頌から構成されている。しかし、当文献のサンスクリット本においては題名が *Trisatīkāyāḥ prajñāpāramitāyāḥ kārīkāṣaptatīḥ* となっている。また、『頌釈』には義浄の漢訳と菩提流支との二種の漢訳のみが存在し、どちらも『七十頌』の全偈頌を載せている。本稿では、『七十頌』は G. Tucci によるサンスクリット校訂本を、『頌釈』は義浄の漢訳を使用する。そして、『金剛般若經』は E. Conze によるサンスクリット校訂本を使用する。

『金剛般若經』には空という語が登場しない。しかし、『金剛般若經』においては逆説的表現が反復的に登場する。その逆説とは「A は A ではない。故に A である」と定式化される文句である⁷¹。これは否定的な表現である「A は A ではない」という前半部と、肯定的な表現である「A である」という後半部と、これら二つをつなげる「故に」という連結詞とから構成される。そして、前半部で否定される A が後半部では肯定される点から逆説的であると言われる（以下、「A は A ではない。故に A である」という逆説的表現を逆説と呼ぶ）。

この『金剛般若經』の逆説は般若經の空を代替していると言われている。しかし、どのような点で空を説いているかに関しては十分に論証されていない。そもそも、『金剛般若經』の逆説をめぐる種々の解釈が存在する⁷²。そこで、『金剛般若經』の逆説を前半部と後半部とに分けて考察し、逆説の意味を明らかにする。そして、最終的に『金剛般若經』は逆説を通じて空を説いていることを論証する。

逆説の前半部は「A は A ではない」という否定文である。これは A の自己同一性を否定する。自己同一性とは自性を根拠とする概念である。したがって、自己同一性を有するものは自性を有する。そして、あるものの自己同一性を肯定する判断は「A は A である。A には A の自性があるからである」という形式を取ると言える。逆説の前半部はまさにこのような自己同一性を否定する。これは A にある A の自性を根拠とした自己同一性を否定する判断であるから、「A は A ではない。A には A の自性がないからである」という思考過程を経て導きだされたものであると言え

⁷¹ 逆説のAとしては衆生 (§17f, §21b) や凡夫 (§25)、あるいは、仏法 (§8) や般若波羅蜜 (§13a) 等の様々なものが挙げられている。さらに、§17d においては一切法をAとする逆説が述べられている。したがって、『金剛般若經』の逆説は一切法に適用されるものであると言えよう。

⁷² 『金剛般若經』の逆説に関する種々の解釈のうち、代表的なものを挙げれば次のようである。

①鈴木説：鈴木[1968: pp. 381-388]によれば、『金剛般若經』の逆説とは、「A は A だというのは、A は A でない、故に、A は A である」と定式化されるものとして、肯定が否定であり否定が肯定であるというふうに矛盾と矛盾するものの相即、解消を語っているものである。このような意味の『金剛般若經』の逆説を鈴木[1968: p. 387]は「即非の論理」と名づけ、これが般若經思想の根幹をなす論理であり、禪の論理であるといっている。

②谷口説：谷口[1991]は『金剛般若經』の逆説を「A1 は A2 ではない。故に A3 と呼ばれる」と定式化する。そして、逆説において登場する三つの A は、A と表記されているが、実はそれぞれ異なるものであると言っている。すなわち、A1 は「仏の極に属するもの」であり、A2 は「凡夫に近い者の側に属するもの」である。そして、A3 は「その両者とともに表す言葉、名前」である。それゆえに、まず、「A は A ではない」というのは矛盾ではない。最初の A と二番目の A とは異なるものだからである。

そして、「A は A ではない」という逆説の前半部が、それに反する後半部、「A と呼ばれる」と、逆接の接続詞ではない、「故に」という順接の接続詞で連結されていることから、『金剛般若經』の逆説は「客観的事実を述べた文ではなく、実践的な勧誘を説いた教えである」と解釈する。つまり、「故に」という接続詞は「決して客観的な論理を示しているのではなく、仏の側に立場を置いて、仏が説法を弟子たちのために続けなければいけない必然性を示したもの」である。したがって、逆説は仏が A1 と A2 とをともに表す A3 を用いて A2 にある弟子たちを A1 の仏の境地に導く目的で説かれたものであると、『金剛般若經』の逆説を実践論的に解釈する。末木[1994: p.51; p.53]は谷口説に賛同し、同様に「『金剛般若經』の逆説」、「即非の論理」を実践論的な意味のものとして解釈する。

③立川説：立川[1993]は『金剛般若經』の「A は非A である。ゆえに A である」という逆説的表現において、「非」と訳されているサンスクリットの否定詞、「a-」には「非存在」の意味もあり、この場合、否定詞は「非」ではなく「非存在」を意味すると理解すべきであると言っている。それゆえに、逆説の前半部は「A は非A である」ではなく「A は非存在である」という意味のものである。そして、「ものが存在しないからこそ、言葉があり、活動が有り得るというのが、『金剛般若經』や『中論』の立場である」から、逆説は「A は非存在である。ゆえに言葉によって A と表現される」という意味のものであると、『金剛般若經』の逆説を解釈する。

る。すなわち、自性の否定により成立する判断である。それゆえに、「A は A ではない」は自性の否定を前提として成立する判断であるから、逆説の前半部は自性の否定を表していると言える。

つづいて、逆説の後半部は「Aである」という肯定文である。そして、後半部において「Aである」と肯定されるAは「AはAではない」というときのAである。逆説の後半部は前半部の叙述と無関係なものではないからである。それゆえに、後半部のAは逆説の前半部で自己同一性が否定されたA、自性が否定されたAである。逆説の後半部は自性のないAを肯定している⁷³。

逆説の前半部ではAの自性が否定され、後半部ではその同じAが「Aである」と肯定される。BやCが肯定されるのではない。すなわち、自性がないAがAとして肯定される。そうだとすれば、Aという存在の成立において、自性はその原因になるものではない。自性がなくてもAはAであると肯定されるからである。したがって、後半部の肯定対象が前半部において自己同一性が否定されたAであることより、Aは自性を持たずに存在するということ、自性により成立するものではないということが導き出される。

このような自性とAの成立との関係は逆説の前半部と後半部を連結する「故に (tena)」という語からより明らかにされる。すなわち、Aの自性を否定する前半部が原因となり、Aの肯定が後半部においてその結果として導き出される。それゆえに、Aは自性がないからこそ成立するものとなる。AをAとして成立させるのは自性ではない。むしろ自性がないとき、AはAとして成立する。このように、逆説の後半部はAという、存在する一切のものは自性がないことにより成立するということを述べている。

以上のように、前半部と後半部とに分けられる『金剛般若経』の逆説は、自性の否定、そして、自性の否定によりものの存在が成立するということを提示している。これは以下のような『金剛般若経』の他の経文からも検証できる。

§ 19. [51,22-52,12]

tat kiṃ manyase subhūte yaḥ kaścit kulaputro vā kuladuhitā vemaṃ trisāhasramahāsāhasraṃ lokadhātum sapta-ratna-paripūrṇaṃ kṛtvā tathāgatebhyo 'rhadbhayaḥ samyaksaṃbuddhebhyo dānaṃ dadyāt, api nu sa kulaputro vā kuladuhitā vā tato nidānaṃ bahu puṇya-skandhaṃ prasunuyāt? subhūtir āha: bahu bhagavan, bahu sugata. bhagavān āha: evaṃ etat subhūte evaṃ etat, bahu sa kulaputro vā kuladuhitā vā tato nidānaṃ puṇyaskandhaṃ prasunuyād. tat kasya hetoh? puṇya-skandhah puṇya-skandha iti subhūte a-skandhah sa tathāgatena bhāsiṭah. tenocyate puṇya-skandha iti. sacet subhūte puṇya-skandho 'bhavisyat, na tathāgato 'bhāsisyat puṇya-skandhah puṇya-skandha iti || 19 ||

「須菩提よ、どう思うのか。善男子にせよ、善女子にせよ、この三千大千世界を七種の宝石で満たして、正しいさとりを得た尊敬されるべき諸如来に布施をするならば、善男子にせよ、善女子にせよ、その者は、それによって、功德の集積が功德の集積が多くなるであろうか。」須菩提は言った。「多いです。世尊よ。多いです。善逝よ。」世尊は言った。「そのとおりである。須菩提よ。そのとおりである。善男子にせよ、善女子にせよ、その者は、それにより、功德の集積が多くなるであろう。なぜであるか。功德の集積、功德の集積というが、須菩提よ、それは〔功德の〕集積ではないと如来は説き、それゆえに、功德の集積と言われるからである。

⁷³ 逆説は、あくまでもAの自性を否定することであって、A自体をも否定しているのではない。したがって、否定と肯定との対象が、それぞれ、自性のあるAと自性のないAと異なるから、『金剛般若経』の逆説は矛盾を含んでいるのではない。

もし、須菩提よ、功德の集積であれば、如来は功德の集積、功德の集積と説かなかったであろう。」

§ 30a. [59,7-60,2]

yaś ca khalu punaḥ subhūte kulaputro vā kuladuhitā vā yāvanti trisāhasra-mahāsāhasre lokadhātāu pṛthivī-rajāmsi tāvatāṃ lokadhātūnāṃ evaṃrūpaṃ maṣiṃ kuryāt yāvad evaṃ asaṃkhyeyena vīryeṇa tad yathāpi nāma paramāṇu-saṃcayaḥ, tat kiṃ manyase subhūte api nu bahuḥ sa paramāṇu-saṃcayo bhavet? subhūtir āha - evaṃ etad bhagavan, evaṃ etad sugata, bahuḥ sa paramāṇu-saṃcayo bhavet. tat kasya hetoh? saced bhagavan bahuḥ paramāṇu-saṃcayo 'bhaviṣyat, na bhagavan avakṣyat paramāṇu-saṃcaya iti. tat kasya hetoh? yo 'sau bhagavan paramāṇu-saṃcayas tathāgatena bhāṣitah, a-saṃcayah sa tathāgatena bhāṣitah. tenocyate paramāṇu-saṃcaya iti |

さらにまた、須菩提よ、善男子、あるいは、善女子が三千大千世界にある地の塵の数のほどの世界を、数えきれない努力により、例えば極微の集合のように、粉にしたとしよう。須菩提よ、どう思うのか。その極微の集合は多いであろうか。須菩提は言った。「そのとおりである。世尊よ。そのとおりである。善逝よ。その極微の集合は多いであろう。なぜであるか。もし、世尊よ、多い極微の集合であれば、世尊は極微の集合と説かなかったであろう。なぜであるか。世尊よ、如来が説いた極微の集合、それは〔極微の〕集合ではないと如来は説いたからである。それゆえに、極微の集合と言われるのである。」

以上の引用文においては、逆説とともにそれに反対する場合を仮定した文句が登場し、逆説の意味をより明確にしている。すなわち、「A は A ではない。故に A である」という逆説が「A であれば、世尊は A であると説かなかったであろう」という反対の形式で記述されている。

上記の引用文では A に該当するものが功德の集積、あるいは、極微の集合として登場する。そして、功德の集積、あるいは、極微の集合が多いと述べた後、それらがそのように多い功德の集積、あるいは、極微の集合であればと仮定する。これは「A が A であれば」として、A の自己同一性を仮定している意味のものである。そして、自己同一性は自性を前提として成立する概念である。それゆえに、「A であれば」という前半部は自性を肯定する。前半部で登場している A とは「自性を有する A」である。

前半部においては A の自性が肯定されたが、後半部である「世尊は A であると説かなかったであろう」においては、まさにその同じ A が否定される。すなわち、自性がある A が A として否定される。そうであれば、自性により A が成立するのではないことがわかる。「自性を有する A」が否定の対象になっているからである。このことは、前半部と後半部とが条件文の形式で繋がっていることから読み取れる。前半部の条件が充足されるとき、後半部のことが結論として導き出されるが、前半部の条件とは A が自性を有するということであり、後半部の結論とは A の否定である。それゆえに、自性があるとき、A は否定されるから、自性は A を成立させるものではない。

以上のように、上記の引用文は自性を肯定するとき、ものの存在は成立しないことを述べる。これは一切法には自性がないことを表す。それゆえに、『金剛般若経』の逆説が自性の否定し、自性の無によりものの存在は成立することを説いていることが、このことより、検証されと言える。『金剛般若経』の逆説は無自性のことを説いている。

『金剛般若經』は、このように、逆説を通じて自性のないことを説く。これは存在するものは自性の無により存在するというあり方で存在するという意味でもある。すなわち、逆説によって顯れる諸法は自性を持たないもの、自性がないから存在するものである。このようなあり方の法は「非 A 非非 A」とも表現される。次のようである。

§21b [53, 14-54, 1]

evam ukta āyusmān subhūtir bhagavantam etad avocat: asti bhagavan kecit sattvā bhaviṣyanty anāgate 'dhvani paścime kāle paścime samaye paścimāyāṃ pañca-śatyāṃ saddharma-vipralope vartamāne ya imān evaṃrūpān dharmān śrutvā-abhiśraddhāsyanti? bhagavān āha: na te subhūte sattvā na-a-sattvāḥ tat kasya hetoḥ? sattvāḥ sattvā iti subhūte sarve te subhūte a-sattvās tathāgatena bhāṣitāḥ tenocyante sattvā iti || 21 ||

このように言われて、長老須菩提は世尊に次のように言った：世尊よ、将来、のちの時節、のちの時代に、正法が減じた後五百世に、このような法を聞いて信じるようになる衆生があらましようか。世尊は言った：須菩提よ、彼らは衆生ではなく、衆生でないのでもない。それはなぜであるか。衆生、衆生と言われるが、須菩提よ、彼らは衆生ではないと如来によって説かれた。それゆえに、衆生であると言われる。

ここでは、衆生を A とする逆説と「衆生は衆生ではなく衆生でないのでもない」という「非 A 非非 A」のジレンマ的表現とが登場する。そして、そのうち、逆説がジレンマ的表現の理由となる形で両者はつながっている。したがって、A が非 A であり、非非 A であるというジレンマ的表現は逆説が意味する自性の無が適用された A のあり方を示す文句である⁷⁴。そして、「非 A 非非 A」の「非 A」と「非非 A」とは、各々、逆説の前半部と後半部とに対応すると言える。逆説の前半部は A に対する否定であり、逆説の後半部は A に対する肯定であるからである。それゆえに、「非 A 非非 A」とは、A は自性がなく、自性のなしに存在するものであることを表現する文句であると言える。

以上のように、『金剛般若經』の逆説は自性の無と自性の無によりものは成立するということを説いている。この逆説の意味からみれば、存在するものは自性がないことにより存在する無自性のものである。したがって、『金剛般若經』の逆説はものがどのように存在するかに対して論じる存在論的言明である。さらに、『金剛般若經』の逆説が言っている存在論とは、自性の無を以って存在を説明する存在論である。したがって、『金剛般若經』の逆説は無自性を説いており、無自性とは空にほかならないから、『金剛般若經』は空という用語の代わりに逆説を用いて無自性、空を説いていると言えよう。このことより、『金剛般若經』の逆説が、すなわち、空の記述であることが明らかになる。

2-2-3. 『金剛般若經』の逆説と「無の有」

⁷⁴ もう一つのジレンマ的表現が『金剛般若經』§10c の後半部 においても登場する。しかし、これに対応する文句が漢訳とチベット訳とには省略されているから、引用しない。

『七十頌』は『金剛般若經』において逆説の形で現れている空を「無の有」を用いて註釈する⁷⁵。「無の有」という語は、『七十頌』の k.11 と、k.15 に対する『頌釈』の註釈とにおいて登場する⁷⁶。これらは逆説により顯れる空なる存在のあり方、「非 A 非非 A」を註釈の対象とする。

『七十頌』の k.11 は『金剛般若經』の第六節に対する註釈である。『金剛般若經』の第六節は菩薩には八種の想がないことを主題とする⁷⁷。八種の想とは我相 (ātmasaṃjñā)、衆生相 (sattvasaṃjñā)、命者相 (jīvasaṃjñā)、個我相 (pudgalasaṃjñā)、法相 (dharmaṃsaṃjñā)、非法相 (adharmasaṃjñā)、想 (saṃjñā)、非想 (asaṃjñā) である。

このうち、法相と非法相とは法に対して法であるとする想と法ではないとする想である。そして、これら二つは菩薩により否定されるものである。それゆえに、菩薩は法を非法であり非非法であ

⁷⁵ 長尾[1972: pp. 567, 19-568, 11]は『金剛般若經』の逆説と唯識学派の「無・無の有」とが構造的に一致することを指摘する。即ち、両方否定から肯定へという形式を取っている。このことより、「無・無の有」が逆説を解釈する最適の釈語であると言っている。しかし、構造的な一致性を指摘することにとどまり、「無・無の有」を通じる註釈の具体的な様相に対しては考察していない。

⁷⁶ 長尾[1972: p. 567, 9-11]は『七十頌』の k.46 には abhāvakāyabhāva、「無なる身体の有」という語が窺われるから、k.11 のみならず k.46 においても「無の有」は登場していると述べている。しかし、「無の有」の「無」は無自性や空性という抽象的実在を意味する。反面、k.46 の abhāvakāyabhāva、「無なる身の有」は「無自性の身体の有」、自性のない身体が存在するという意味である。それゆえに、k.46 の abhāvakāyabhāvaが無自性という抽象的実在の有を意味する「無の有」のことであるとは言いがたいと考えられる。

『七十頌』 [76, 11-12]

[guṇamahā]tmyatāś cāpi mahākāyaḥ sa eva hi |
abhāvakāyabhāvāc ca akāyo 'sau nirucyate || (k.46)

功德が大きいから、それは巨大は身体である。

また、無なる身が有であるから、「身ではない」と言われるのである。(k.46)

『頌釈』 [T25. 881a27-b1]

云「非有身是有 説彼作非身」。如來說為非身。由此名為具身。大身者、斯何所陳？以非有為身故，名彼為非身。即真如性故，由其無身故，是故名此為具身大身。

「非有なる身は有である。彼は非身であると言う」と言う。如来は非身であると説かれる。これによって、具身・大身であると名づけられる。これは何を述べているのか。非有を身とするから、彼は非身である。

即ち、真如性であるから、その無という身であるから、それゆえに、具身・大身であると名づけるのである。

⁷⁷ §6[31, 10-32, 2]

jñātās te subhūte tathāgatena buddha-jñānena, dṛṣṭās te subhūte tathāgatena buddha-cakṣuṣā, buddhās te subhūte tathāgatena. sarve te subhūte 'aprameyam asaṃkhyeyaṃ puṇyaskandhaṃ prasaviṣyanti pratigrahiṣyanti. tat kasya hetoh? na hi subhūte teṣāṃ bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ ātma-saṃjñā pravartate na sattva-saṃjñā na jīva-saṃjñā na pudgala-saṃjñā pravartate. na-api teṣāṃ subhūte bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ dharma-saṃjñā pravartate, evaṃ na-adharma-saṃjñā. na-api teṣāṃ subhūte saṃjñā na-asamjñā pravartate. tat kasya hetoh? sacet subhūte teṣāṃ bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ dharma-saṃjñā pravarteta, sa eva teṣāṃ ātma-grāho bhavet, sattva-grāho jīva-grāhaḥ pudgala-grāho bhavet. saced a-dharma-saṃjñā pravarteta, sa eva teṣāṃ ātma-grāho bhavet, sattva-grāho jīva-grāhaḥ pudgala-grāha itī | tat kasya hetoh? na khalu punaḥ subhūte bodhisattvena mahāsattvena dharma-udgrahītavyo na-adharmah.

スプーティよ、彼らは如来の仏知によって知られる。スプーティよ、彼らは如来の仏眼によって見られる。スプーティよ、彼らは如来によって理解される。スプーティよ、彼らすべては量られなく、数えられない功德を積み、自分のものにするであろう。それはなぜか。スプーティよ、この偉大な菩薩たちには、我相、衆生相、命者相、個我相が存在しないからである。スプーティよ、また、この偉大な菩薩たちには、法相、非法相、想、非想が存在しないからである。それはなぜであるか。スプーティよ、もし、この偉大な菩薩たちに法相が存在するならば、彼らには我執があるであろう。衆生執、命者執、個我執があるであろう。もし、非法相が存在するならば、彼らには、我執があるであろう。衆生執、命者執、個我執があるであろう。それはなぜであるか。スプーティよ、偉大な菩薩は法に執着してもいけないし、非法に執着してもいけないからである。

ると見ていることになる。このような見方はAが「非 A 非非 A」というあり方で存在するとする逆説の内容と一致する。したがって、法想と非法想との無は逆説により現れるもののあり方を根拠していると言える。『頌釈』はこれを「無」と「無の有」を用いて註釈する。次のようである。

『七十頌』 [59, 1-2]

sarvābhāvād abhāvasya sadbhāvān nābhilāpyataḥ |
abhilāpapravogāc ca dharmasaṃjñā caturvidhā || (k.11)

一切は無であるから、無は有であるから、言説できないから、
言説の因であるから、法想は四種である。(k.11)

『頌釈』 [T25. 876b2-b10]

法想四者，頌曰：

皆無故非有 有故不可説、
是言説因故 法想有四種。(k.11)

法想四者、一法想二無法想三想四無想。此謂能取所取諸法皆無故、法想不生、即無法想。彼之非有法無自性空性有故、非無法想。即彼非有有非有性、非言所詮故非是想、是言説因故非是無想。由想力故、雖非言顯、而以言説故。

法想の四とは、頌に曰く。

すべては無であるから、有ではないことが有であるから、
不可説と言説の因であるから、法想には四種類がある。(k.11)

法想の四とは、第一は法想であり、第二は無法想であり、第三は想であり、第四は無想である。これは能取・所取の諸法が皆無だから、〔菩薩にとって〕法想は生じない。即ち、「法想」はない。それ（能取・所取の諸法）の非有、法無自性、空性は有であるから、「無法想」ではない。即ち、その非有は非有性を有する。言語で言われないものであるから、「想」はない。こ

れは言説の因になるから、「無想」ではない。想の力によって、言語で現れないけれども、言語で説くからである⁷⁸。

法であるという想がない理由を『七十頌』は「無であるから」と註釈し、『頌釈』はこの無を「所取・能取の諸法の無」と説明する。所取・能取は自性を保持して実体的に存在すると分別されるものである。したがって、二取が存在しないということは自性が存在しないということである。『頌釈』は、このように、菩薩に法想がないこと、法に対する否定を自性の無に基づいて註釈する。それゆえに、『七十頌』によれば、法が非法であることは法には自性がないということである。

つづいて、法ではないという想がない理由を『七十頌』は「有ではないことが有であるから」、すなわち、「無の有」と註釈する。『頌釈』はこれを「二取の無、法無自性、空性の有」と説明する。すなわち、法には自性がないこと、空であることがあるから、法は法でないのでもない。『頌釈』は、このように、菩薩に非法想がないこと、法に対する肯定を無自性、空性の有に基づいて註釈する。したがって、『七十頌』によれば、法が非非法であることは法には無自性、空性があるということである。

以上のように、『七十頌』の k.11 は法が非法であることを自性の無として、法が非非法であることを無自性、あるいは、空性の有として註釈する。法を基準として見れば、自性があるときに法は否定され、無自性、空性があるときには法は肯定される。したがって、自性は否定されるものであるが、自性に対応する無自性、空性は肯定されるものである。すなわち、自性は否定されるものの、自性がないということ、無自性、空性は自性のような抽象的な実在として肯定されるのである。

無自性、空性という抽象的な実在は『七十頌』の k.15 に対する『頌釈』の註釈においても登場する。次のようである。

『七十頌』 [61, 1-2]

⁷⁸ 菩提流支の訳 (T25. 783c8-c15) は次のようである。

一切空無物 實有不可説、
依言辭而説 是法相四種。 (k.11)

何者は四種。一者法相；二者非法相；三者相；四者非相。此義云何。有可取、能取一切法無故，言無法相。以無物故，彼法無我，空實有故。言亦非無法相。彼空無物，而此不可説有無，故言無相。依言辭而説故。言亦非無相。何以故。以於無言處依言相説。

一切は空であり、ものが存在しないことは実有である。
言説されなく、言葉により言説される。これが法相の四種である。 (k.11)

何が四種であるか。第一は法相であり、第二は非法相であり、第三は相であり、第四は非相である。取る、また、取られる一切法は無であるから、法相はないと言う。もの（取る、また、取られる一切法）が存在しないから、その法の無我、空は実有であるから、法相がないのでもないと言う。それは空であり、存在しない。しかし、これは有とも無とも言えない。それゆえに、相がないと言う。言葉によって言説するから、また、相がないのでもないと言う。なぜであるか。言説がないところで、言葉により相を説くからである。

nairmāṇikena no buddho dharmo nāpi ca deśitaḥ |
deśitas tu dvayāgrāhyo 'vācyo 'vākpathalakṣaṇāt || (k.15)

化身は真仏ではない。また、〔化身によって〕法が説かれたのではない。

〔法が〕説かれたとしても、〔それは〕二つによって捉えられない。また、言説されない。無言辞の特徴を有するものだからである。(k.15)

『頌釈』[T25. 876c27-877a3]

頌曰：

説法非二取， 所説離言詮。(k.15cd)

如是二種謂法性非法性。非耳能聽非言能説。是故應知非法非非法。此據真如道理而説。彼非是法謂是法無為其性故。復非非法由彼無自性體是有故。

頌に曰く。

説法は二として捉えられない。所説は言詮を離れている。(k.15cd)

このような二種、謂く、法であることと法ではないこととは耳で聞くことができなく、言語で説くことができない。それゆえに、「非法、非非法」というこれは真如の道理に依拠して説かれたものであると知るべきである。それは法ではない。謂く、この法は無をその自性とするからである。また、それは法でないのではない。その無自性という本性は有だからである⁷⁹。

『七十頌』の k.15 は『金剛般若經』の第七節に対する註釈である。『金剛般若經』の第七節は如来の悟った法、説示した法は法でもなく法でないのでもないことを述べている⁸⁰。このことが k.15において、「二として捉えられない」（＝法であると、或は、法でないという二つとして捉え

⁷⁹ 菩提流支の訳 (T25. 784b28-c3) は次のようである。

「説法不二取，無説離言相」者、聽者不取法不取非法故。説者亦不二説法非法故。何以故。彼法非法非非法。依何義説。依真如義説。非法者、一切法無體相故。非非法者、彼真如無我相實有故。

「説法は二つとして捉えられない。言説されない。言葉の相を離れている」とは、聞くものは法であると捉えない。法ではないと捉えない。説くものも法である、非法であると二つで説かない。なぜであるか。それは法でなく法でないのでもないからである。如何なる意味に基づいて説くのか。真如の意味に基づいて説くのである。法ではない。一切法は体性がないからである。法でないのでもない。その真如、無我の相は実在するからである。

⁸⁰ §7 [Cz 32, 6-33, 2]

punar aparaṃ bhagavān āyusmantam subhūtim etad avocat: tat kiṃ manyase subhūte, asti sa kaścīd dharmo yas tathāgatena-anuttarā samyak-sambodhir ity abhisambuddhaḥ, kaścīd vā dharmaḥ tathāgatena deśitaḥ? evam ukta āyusmān subhūtiḥ bhagavantam etad avocat: yathā-aham bhagavan bhagavato bhāṣitasya-artham ājānāmi, na-asti sa kaścīd dharmo yas tathāgatena-anuttarā samyak-sambodhir ity abhisambuddhaḥ, na-asti dharmo yas tathāgatena deśitaḥ. tat kasya hetoḥ? yo 'sau tathāgatena dharmo 'bhisambuddho deśito vā, agrāhyaḥ so 'nabhilapyah, na sa dharmo na-adharmaḥ. tat kasya hetoḥ? asaṃskṛta-prabhāvitā hy ārya-pudgalāḥ || 7 ||

さらにまた、世尊は長老スプーティにこのように語った。スプーティよ、あなたはそれをどう考えるか。如来が無上正等覚として覚った如何なる法が存在するのであるか。或は、如来によって説示された如何なる法が存在するのか。このように言われたとき、長老スプーティは世尊にこのように語った。世尊よ、私が世尊の説いた意味を理解したところでは、如来が無上正等覚として覚った如何なる法、如来によって説示された如何なる法は存在しない。それはなぜであるか。如来の覚った法や説示した法は取ることができず、言説することもできないからである。それは法でもなく、法でないでもない。それはなぜであるか。聖者たちは無為によって特徴付けられるからである。

られない)と記述されており、『頌釈』はこのような法の非法非非法であることを、k.11と同様に、「無」と「無の有」を用いて註釈する。

まず、法が非法であることを『頌釈』は法が無を自性とするからと註釈する。「無」を自性とするということは自性の無を自性とすることである⁸¹。それゆえに、法が非法であることは法に自性がないからである。このように『頌釈』は法の非法であることを自性の無をもって説明する。しかし、これを法は無自性を自性とするとして表現する。これは法に無自性という抽象的実在が自性として存在すると、自性の存在を認めることである。

つづいて、法が非非法であることを『頌釈』は法には無自性という本性があるからと註釈する。この場合においても、無自性は法が有する本性として登場する。これは無自性ということが法に自性、本性として存在するということであって、「無の有」を説いているのであると言える。

このように、『七十頌』の k.15 に対する『頌釈』の註釈は法が非法非非法であることを法が有する無自性という自性、本性をもって註釈する。k.11においては、無自性、空性が一つの抽象的実在として存在することが説かれたとしたら、k.15 においてはその無自性という抽象的実在が法のなかで、自性、本性として存在することが説かれていると言える。したがって、非法非非法に対する以上の註釈からみれば、『七十頌』は自性肯定的考え方を持っていると言える。無自性、空性といえども、それを法の自性、本性として認めているからである。

『金剛般若経』において、法が非法非非法であることは逆説を通じて現れる法のあり方、法に自性がなく、自性がないから法であるということであった。『七十頌』も、それと同様に、自性を否定し、法は自性なしに存在すると説いている。しかし、それを無自性という自性、本性をもって説明する。すなわち、『金剛般若経』が一切法は自性がないと表現することを『七十頌』では一切法は無自性を自性とするとして表現する。これは自性がないことを一つの自性として認め、その存在を肯定する考え方なしには成立しないことである。このような自性肯定的考え方、無自性が自性の形態で存在するということが、まさに『七十頌』において「無の有」という語で現れている。

2-2-4. 小結

⁸¹ 無を自性とするときの無とは自性の無である。『七十頌』k.44 に対する世親の註釈では、法の非法であることが法には自体の相がないことであり、法に自体の相がないことは法に非有の相があることであると述べられているからである。次のようである。

『頌釈』[T25. 881a13-a18]

「由法是佛法，皆非有為相」者、此顯以無為體。此何所陳。由一切法以真如為自性、此乃但是佛所覺悟、是故一切法名為佛法。由此色等不能持其自體相故、所有彼諸色聲等法皆不是法。由不是法、是故此成其法即是畢竟能持非有之相。

「それゆえに、法は仏法である。皆非有を相とする」とは、これは無を本性とするということを顯す。これは何を述べているのであるか。一切法は真如を自性とするから、これは、すなわち、ブツダが悟った所である。それゆえに、一切法は仏法であると名づけられるのである。この色等は自体の相を持たないからである。その諸々の色声等の法は皆法ではない。法ではないから、それゆえに、これはその法が必ず非有の相を持つということを成立させる。

「A は A ではない。故に A である」という『金剛般若經』の逆説は、存在するものには自性がないという前半部と、自性がないからものは存在するという後半部から構成されている。これは存在するものに自性がないことを表す文句として、空を説いていると言える。

逆説が有するこのような意味は『七十頌』の註釈においても維持される。『七十頌』は「A は A ではない」こと、すなわち、法が法ではないことを二取の無、自性の無として註釈するからであり、「故に A である」こと、法が法でないのでもないことを無自性、空性の有として註釈するからである (k.11)。また、その無自性、空性は諸法の自性、本性として存在するものである。それゆえに、諸法には自性がないという点で、法は法ではない。そして、諸法には無自性という自性があるという点で、法は法でないのでもないと法の非法非非法である理由を註釈するからである (k.15)。

このように、『七十頌』と『頌釈』は『金剛般若經』の逆説を一切法には自性がないということの意味する文句として解釈している。しかし、『七十頌』と『頌釈』は、「一切法に自性がない」ということを「一切法には無自性という自性がする」と表現する。これは一切法に、無自性という自性を認めることである。このような自性肯定的な考え方は、『中辺分別論』と同様に、「無の有」という語、無自性という本性が存在することを意味する語を通じて現れる。したがって、唯識学派は自性肯定的な考え方をもって般若經の空を理解したということが、『金剛般若經』の逆説に対する註釈から確認することができる。

第3章. 空と三性

3-1. 三相と三性

3-1-1. 序論

一切法を無自性であり、空であると捉えることは、「般若経」の出現以降、大乘仏教を代表する存在に対する見方であった。しかし、唯識学派にとっては、一切法を空をもって捉えるよりも三性をもって捉える傾向が強い。三性とは遍計所執性、依他起性、円成実性という三つの性質を言う。唯識学派はこれら三つの性質を通じて存在するものを分析し、このような見方が三性説という唯識学派の独特な教義を形成した。一方、三性説と類似する見方として三相説がある。三相とは遍計、分別、法性という三つの様相 (ākāra) のことであって、この三相によって一切法が分析される、という存在に対する見方が三相説である⁸²。

三相説が登場する文献としては、まず、「般若経」の「弥勒請問章」が挙げられる⁸³。「弥勒請問章」は無性の *Mahāyānasamgrahopaniṣadbandhana* (『撰大乘論釈』、以下 MSU と省略する) において、二回引用されており⁸⁴、清弁は TJ において唯識学派が提示する唯識無境の教証として引用

⁸² 三性が遍計所執相、依他起相、円成実相の三相と表現されることもある。このうち、「性」(svabhāva)と表現する文献には AS、『瑜伽師地論』『撰決択分』、『顕揚論』、MAVBh、TrBh があり、「相」(lakṣaṇa)と表現する文献には『解深密経』、MSA、MS がある。しかし、この両者間に本質的な意味の差異はないと思われる。したがって、本節では両者を三性に統一して表記することにし、三相は遍計、分別、法性を指す。

⁸³ Conze・Iida[1968]の「弥勒請問章」のサンスクリット校訂本は文章の各行に番号をつけている。「弥勒請問章」において三相説は番号(36)-(60)で登場する。この三相説が登場している「弥勒請問章」は文献学的に問題が多い文献である。まず、「弥勒請問章」はチベット訳の ADP の第83章として、また、PSP の第72章として「般若経」のなかに収められているが、漢訳の「般若経」にはこれに相応する箇所が見出されない。すなわち、「弥勒請問章」はチベット訳の「般若経」にはあるが、漢訳の「般若経」にはない。「弥勒請問章」がチベット訳にしか見られず、これは漢訳よりも後代のものであるから、「弥勒請問章」が後代に挿入されたものであると推定する見解もある(E. Obermiller, “The Doctrine of Prajñāpāramitā”, Acta Orientalia, 1932)。また、玄奘が訳した無性の MSU には「弥勒請問章」の一部が「般若経」という名前で引用されているが、無性の MSU のチベット訳には玄奘訳の「弥勒請問章」の引用箇所の全部が抜け落ちている。

このような事情で、「弥勒請問章」の成立年代はまだ確定されていない。袴谷[1975b; pp. 23, 12-24, 12]は「弥勒請問章」が無性(A. D. 450-530)と清弁(A. D. 500-570)により引用されているから、5世紀には成立していたと推定している。また、長尾[1982; pp. 39, 7-40, 10]は無性の以前、世親の以降と見ている。

「弥勒請問章」に関する主要な研究としては、まず、Iida[1966]は無性と清弁とが引用している「般若経」の一部が「弥勒請問章」であることを解明した研究として、唯識学派の三性説が最初に登場するのは『解深密経』ではなく「般若経」であると主張する。Conze・Iida[1968]はPSPのサンスクリット写本から「弥勒請問章」を抽出し、校訂したものである。袴谷[1975a]はConze・Iida[1968]に基づいて「弥勒請問章」を日本語で翻訳した。袴谷[1975b]はASとMAVBhにも「弥勒請問章」が引用されていることを指摘しており、長尾[1982]は今までの「弥勒請問章」の研究を総合的に整理している。また、チベット仏教において「弥勒請問章」がどのように認識されているかに関しては白館[1992; 1999]と片野[1992]を参照。

⁸⁴MSU[T31. 382c2-c10]、MSU[T31. 399b28-c13]。

する⁸⁵。そして、「弥勒請問章」という名は言及されないが、ラトナーカラシャーンティのPPU においても遍計、分別、法性の三相が引用の形で登場する⁸⁶。

一方、三相説は無著の MAV と AS とハリバドラの *Abhisamayālaṃkāra* (『現觀莊嚴論光明』、以下 AAĀ と省略する) とにもみられる⁸⁷。しかし、これらは「弥勒請問章」からの引用という形で三相説を言及しない。それゆえに、三相説が「弥勒請問章」に初出のものであるか、それとも、「弥勒請問章」成立以前から存在したものであったのかは判断できない。ただ、MAVBh や AS の段階で、無著が三相説を知っていたということは確かである。

本節は、MAV と AS とにみる無著の三相説に対する解釈を主題とする。まず、「弥勒請問章」に説かれている三相説がどのような意味のものであるかを明らかにする。つづいて、MAV と AS とにおいて見られる無著の三相説に対する解釈を検討する。最後に、三相説の解釈を手がかりとして空と三性との関係を論じる。

3-1-2. 「弥勒請問章」の三相説

「弥勒請問章」は、もし一切法が無を自性とするもの (*abhāvasvabhāva*) であれば、菩薩は五蘊から仏法に至る一切法をどのように学ぶべきか、という弥勒の問いから始まる⁸⁸。これに対して世尊は一切法は名称にすぎない⁸⁹ (*nāmamatra*) と学ばなければならないと答える。そして、この名前というものは行の因相 (*saṃskāranimitta*) である事物 (*vastu*) に付加されたものであり、外来的な (*āgantuka*) ものであり、事物なくては成立されないものであると、説明する⁹⁰。

三相に対する教説は、その無を自性とし、名前にすぎない一切法を菩薩はどのように理解すべきかという弥勒の問いに対する世尊の答えとして登場する。

「弥勒請問章」[(36) - (37)]

(36) maitreya āha: prajñāpāramitāyāṃ caratā bhagavan bodhisattvena mahāsattvena dharmaprabhedakauśalye vartamānena katibhir ākārair rūpaprabhedaprajñaptir anugantavyā? katibhir ākārair vedanā saṃjñā saṃskārā vijñānaṃ yāvad buddhadharmaprabhedaprajñaptir anugantavyā? (37) bhagavān āha: tribhir maitreyākārair bodhisattvena mahāsattvena prajñāpāramitāyāṃ caratā dharmaprabhedakauśalye vartamānena rūpaprabhedaprajñaptir anugantavyā, vedanā saṃjñā saṃskārā vijñānaṃ yāvad budhdhadharmaprabhedaprajñaptir anugantavyā, yad utedaṃ parikalpitam rūpam idaṃ vikalpitam rūpam idaṃ dharmatā rūpam iti.

(36) 弥勒が言った。「世尊よ、般若波羅蜜多に対して修行し、法の区別における善巧を行って
いる菩薩摩訶薩によつては、いくつの相 (*ākāra*) で色の区別が設定されると理解すべきか。い

⁸⁵ TJ[208a1-a6]

⁸⁶ PPU[138a2-a3; P. 156a5-a8]。

⁸⁷ MAVBh [44, 12-22]、AS(P)[31, 6-11]、AAĀ[47, 12-15]。

⁸⁸ 「弥勒請問章」 (1) - (5)

⁸⁹ 一切法が名前にすぎない (*nāmamatra*) ということは、一切法はただ仮説にすぎない (*prajñaptimātra*) という語でも言い換えられて登場する。(「弥勒請問章」 (14) - (19))

⁹⁰ 「弥勒請問章」 (6) - (12)

くつの相で受、想、行、識、乃至、仏法の区別が設定されると理解すべきか」と。(37) 世尊が言った。「弥勒よ、般若波羅蜜多に対して修行し、法の区別における善巧を行っている菩薩摩訶薩によっては、三つの相で色の区別が設定されると理解すべきである。受、想、行、識、乃至、仏法の区別が設定されると理解すべきである。すなわち、これは遍計された色であり、これは分別された色であり、これは法性としての色であると⁹¹。

世尊は五蘊の色蘊から仏法に至る一切法は三種の様相 (ākāra) 、三相により理解されるべきであると弥勒の問いに答える。三相の各々は次の通りに定義される。

「弥勒請問章」[(39) - (41)]

(39) bhagavān āha: yā maitreya tasmin saṃskāranimitte vastūni rūpam iti nāmasaṃjñāsaṃketaprajñaptivyavahāran niṣṛitya rūpasvabhāvatayā parikalpanā idaṃ parikalpitam rūpam ... yāvad ime parikalpitā buddhadharmāḥ. (40) yā punas tasya saṃskāranimittasya vastuno vikalpamātradharmatāyām avasthānatā vikalpapratītyābhilapanatā tatredaṃ nāmasaṃjñāsaṃketaprajñaptivyavahāro rūpam iti ... yāvad buddhadharmā iti. idaṃ vikalpitam rūpam ... ime vikalpitā buddhadharmāḥ. (41) yā utpādād vā tathāgatānām anutpādād vā sthitaiveyaṃ dharmāṇām dharmatā dharmasthititā dharmadhātur yat tena parikalpitarūpeṇa tasya vikalpitarūpasya nityam nityakālaṃ dhruvaṃ dhruvakālaṃ niḥsvabhāvatā dharmanairātmyaṃ tathatā bhūtaakoṭir idaṃ dharmatā rūpam ... ime yāvad buddhadharmāḥ.

(39) 世尊は言った。「弥勒よ、その行の因相である事物に対し、色という名、想、言説、仮説、言葉に依って色の自性として遍計すること、それが遍計された色である。... 乃至、これらが遍計された諸仏法である。(40) また、その行の因相である事物には、ただの分別にすぎない法の本性を設定する性質、分別により言語的に表現される性質がある。それ(事物)に対して「色である」... 乃至、「仏法である」というのは、名、想、言説、仮説、言葉であり、これが分別された色、乃至、これらが分別された諸仏法である。(41) 如来たちが出現しても出現しなくても、諸法におけるこの法性、法住性、法界は確立されている。その遍計色によってその分別された色に、常に、常時に、恒久に、恒時に、無自性があり、法無我があり、真如があり、実際があること、それが法性としての色であり... 乃至、これらが〔法性としての〕諸仏法である。

一切法が有する三相とは遍計、分別、法性である。したがって、色の場合を挙げて言えば、色には遍計された色、分別された色、法性としての色という三種の様相がある。

一切法は名前にすぎないが、その名前とは事物 (vastu) に付加された外来的な (āgantuka) ものである。「遍計」とは、名前が外来的なものであるにもかかわらず、名前が指示する対象が名前に相応する自性を持って存在すると間違っって想定することである。したがって、「遍計された色」とは色という名前に相応する自性を持って存在すると想定された色であり、このように遍計により間違っって想定された諸法の自性が色等の「遍計相」である。

事物 (vastu) に対する言語的表現により想定された自性、「遍計相」は事物 (vastu) を対象とするものであり、また、事物 (vastu) に対する言語活動に起因して生起するものである。「遍計相」を生じさせる言語活動とは「これは色である」という、事物 (vastu) を特定のあるものとして名付けて規定することであって、このような言語活動が、すなわち、「分別」である。したがっ

⁹¹ 以下同一な文句が仏法に至るまで繰り返される。

て、「分別された色」とは事物（vastu）が色という特定のあるものとして規定されたときの、「色」という名称としてのものであり、「分別相」とは、諸法の有する名前、事物（vastu）に色等として付加された名称である⁹²。

「法性相」とは「分別相」が「遍計相」として無自性であること、すなわち、「分別相」に「遍計相」がないことである。分別という言葉活動により色等として名づけられたもの、それは名前という外来的なものに過ぎず、自性を持っていない。このように一切法には自性がないということが諸法の本来的な性質、法性である。したがって、「法性としての色」とは、色という外来的な名前前で規定されたものが有する本来的な性質、無自性としての色であり、「法性相」とは諸法が本性として持っている無自性性である。

以上のことを要約すれば、「弥勒請問章」に説かれている三相説は諸法のあり方を「自性」の観点で三種に分析したものである。諸法は自性を持たず、無自性であることを本性とする。これが諸法の有する「法性相」である。そして、存在しない自性を存在すると想定することに原因になるものが諸法の有する「分別相」である。諸法の「遍計相」とは「分別相」により発生した諸法の自性である。このように、「弥勒請問章」の三相説は一切法を「自性」の観点で三つの様相で分析したものである⁹³。

⁹² 「分別相」は名称であり、「遍計相」は名称により指示されるものに想定される、名称に相応する自性である。したがって、「分別相」は「遍計相」が生じる原因である。このような意味の「分別相」は「行の因相である事物」とも表現される。兵藤[2010: pp. 321, 2-323, 13]と高橋[2012: pp. 91, 5-92, 17]は、「行の因相である事物」という表現は『解深密経』においてもみられ、依他起性に該当するものとして登場すると指摘している。

TJは「弥勒請問章」の本箇所を引用しているが、「行の因相である事物」という表現は窺われない。

TJ[208a1-a6]

'dir smras pa | de ni shes rab kyi pha rol tu phyin pa las kyang gsungs te| byams pa byang chub sems dpa' gzugs kyi bye brag gdags pa ni rnam pa gsum gyis khong du chud par bya ste| 'di lta ste| 'di ni kun brtags pa'i gzugs so || 'di ni rnam par brtags pa'i gzugs so || 'di ni chos nyid kyi gzugs so zhes bya bas so || de la kun brtags pa'i gzugs gang zhe na| gzugs zhes bya ba ni ming dang | 'du shes dang | gdags pa dang | tha snyad la brten nas gzugs kyi ngo bo nyid du rtog pa gang yin pa de | de ni rdzas su med do || de la rnam par brtags pa'i gzugs gang zhe na | rnam par rtog pa la brten nas gang la ming dang | 'du shes dang | gdags pa dang | tha snyad kyi gzugs zhes bya ba la sogs par mngon par brjod pa nyid de | 'di ni rnam par rtog pa rdzas su yod pa nyid la brten nas rdzas su yod pa yin gyi| rang dbang du 'jug pa las ni ma yin no || de la chos nyid kyi gzugs gang zhe na | kun brtags pa'i gzugs des rnam par brtags pa'i gzugs de la rtog tu ngo bo nyid med pa nyid dang| chos bdag med pa nyid dang | yang dag pa'i mtha' la sogs pa gang yin pa ste | de la rdzas su yod pa yang ma yin la | rdzas su med pa yang ma yin te | rnam par brtags pa'i don gyis stong pa nyid dang | rnam par shes pa yod pa'i phyir ro zhes gsungs so zhe na |

これに対して〔唯識学派は〕答える。それは「般若経」においても説かれている。「弥勒菩薩よ、色の区別の設定は三つの種類として理解されるべきである。すなわち、これは遍計された色である。これは分別された色である。これは法性としての色であるということによってである。そのうち、遍計された色とは何であるか。色というのは名、想、仮説、言葉によって色の自性として遍計される。これは実物（rdzas *dravya）としては存在しない。そのうち、分別された色は何であるか。分別によって、その中で、名、想、仮説、言葉の色等として言語的に表現されることである。これは分別が実物として存在することに基づいて、実物として存在するものであるが、自立的に生じることにより〔存在するもの〕ではない。そのうち、法性としての色は何であるか。その遍計された色がその分別された色において常に無自性であること、そして、法無我であること、実際であることである。それ（法性としての色）に関しては、実物として存在するのでもなく、実物として存在しないのでもない。分別された対象については空であり、識は存在するからである」と説かれていると言うならば...

⁹³ 兵藤[2010: pp. 321, 2-323, 13]は「弥勒請問章」の本箇所でも説かれている三相説と『解深密経』の三性説とが基本的に一致すると見る。

3-1-3. 三相説に対する二つの解釈

遍計、分別、法性の三相は、先にも触れたように、MAV 等の他の文献においても登場する。そして、三相が登場する文献の中でも MAV と AS とは無著に帰属する。。そのうち、MAV では三相が登場するものの、各々の定義は示されていない。一方で、AS の場合は、その定義が示されているが、「弥勒請問章」の定義とは異なっている。したがって、MAV と AS とにおいて登場する三相が「弥勒請問章」と同じ三相であるかに対しては定かではないが、無著が三相という概念を知っていたということは確かである。

さて、無著は MAV と AS とにおいて三相に対して異なる解釈を下している。そこで、ここでは、無著が MAV と AS とにおいて三相をどのように解釈しているのかを考察する。

① MAV における三相の解釈

MAV の第三章である「真実章」は初期仏教以来の四聖諦や二諦等の種々の真実を三性のなかに包摂させる意図で書かれたものである。「真実章」においては十種の真実が登場するが、このうち、根本真実という名前で最初に三性が挙げられる。そして、この三性のなかに残りの九つが包摂される⁹⁴。問題の三相は残りの九つのうちの、最後の善巧真実を論じる箇所が登場する。善巧真実とは十種の我執を対治する熟練知の真実を言う。MAV においては熟練知の対象である五蘊が三性に包摂されるから、熟練知の真実も三性に包摂されるのであるという論理で論旨を展開させ

⁹⁴ MAVBh は三性が根本真実である理由を次の通りに記述する。

MAVBh [37, 17-20]
tatra mūlatattvam |

svabhāvas trividhaḥ

parikalpitaḥ paratantraḥ pariniṣpannaś ca | tatrānyatattvavyavasthāpanāt |
そのうち、根本真実は

三種の自性である。

〔すなわち〕、遍計所執〔性〕、依他起〔性〕、円成実〔性〕である。この〔根本真実の〕なかで、他の真実が設定されるからである。

また、これに対する安慧の註釈は次のようである。

MAVṬ(Y) [111, 20-23]
yena kāraṇena svabhāvas trividho mūlatattvam ity ucyate tat pradarsayann āha | tatrānyatattvavyavasthāpanād iti |
tatrānyasya lakṣanāditattvasyāntargatatvam ity arthaḥ |
ある原因によって根本真実は三種の自性であると言われるが、それ（原因）を説明しようとして、この〔根本真実の〕なかで、他の真実が設定されるからであるという。この〔根本真実の〕なかに、他の相等の真実（第二-第十真実）が含まれるという意味である。

る⁹⁵。この際、熟練知の対象である五蘊を遍計、分別、法性の三種に区別する記述が登場する。世親の註釈とともに引用すれば次のようである。

MAVBh[44, 12-22]

katham idaṃ daśavidhaṃ kauśalyatattvaṃ mūlatatve 'ntarbhavati | yatas triṣu svabhāveṣu te skandhādayo 'ntarbhūtāḥ | katham antarbhūtāḥ |

parikalpavikalpārthadharmatārthena teṣu te || (k.16)

trividhaṃ rūpaṃ parikalpitaṃ rūpaṃ yo rūpasya parikalpitaḥ svabhāvaḥ | vikalpitaṃ rūpaṃ yo rūpasya paratantraḥ svabhāvas tatra hi rūpavikalpaḥ kriyate | dharmatārūpaṃ yo rūpasya pariniṣpannaḥ svabhāvaḥ | yathā rūpaṃ evaṃ vedanādayaḥ skandhāḥ dhātvāyatanādayaś ca yojyāḥ | evaṃ triṣu svabhāveṣu skandhādīnāṃ antarbhāvād daśavidhaṃ kauśalyatattvaṃ mūlatatva eva draṣṭavyaṃ |

どうしてこの十種の善巧真実は根本真実に含まれるのか。なぜならば、三性の中に、その五蘊等が含まれるからである。どのように含まれるのか。

**遍計と分別との意味と、法性の意味によって、それらは、その中に、
(k.16)**

色は三種である。遍計色は色にある遍計所執性である。分別色は色にある依他起性である。なぜならば、それにおいて（色の依他起性）、色であるとの分別が為されるからである。法性色は色にある円成実性である。色と同様に受等の諸蘊と界と処等も適用される。このように、三性の中に蘊等は含まれるから、十種類の善巧真実は根本真実の中に〔含まれると〕見るべきである。

熟練知の対象である色等の五蘊は三性に包摂される。なぜならば、五蘊は遍計、分別、法性の三相に区別されるからであり、この三相は根本真実である三性に各々対応するからである。すなわち、三相の遍計相は三性の遍計所執性に、分別相は依他起性に、法性相は円成実性に相応する。したがって、五蘊に遍計、分別、法性の三相があるということは五蘊に遍計所執性、依他起性、円成実性の三性があるということである。このように、三相は三性に包摂される。それゆえに、

⁹⁵ 我執は五蘊を間違って理解したとき生じることであり、その五蘊に対して正しく理解するのが善巧、熟練知である。それゆえに、熟練知の対象は五蘊である。安慧は善巧真実を根本真実に包摂させる仕方を次の通りに説明する。

MAVṬ(Y) [138, 7-14]

katham idaṃ daśavidhaṃ kauśalyatattvaṃ mūlatatve 'ntarbhavati | kauśalyam hi skandhādiṣu vaicakṣanyam | tat katham triṣu svabhāveṣu antarbhavati | *asaṃbhāvayataḥ prāśnaḥ | yatas triṣu svabhāveṣu te skandhādayo 'ntarbhūtā* iti kauśalyaviṣaya etatkauśalyam iti śabdenodbāvitam | na tu tasminn eva kauśalya iti | *ataḥ kauśalyatattvaṃ apy adhikāratas tatrāntarbhāvo na tu svarūpata iti veditavyam | tad yathā phalāhetutattvamārgasatyam triṣv antarbhūtam uktam iti* |

どうしてこの十種の善巧真実は根本真実に含まれるのかとは、善巧は五蘊等に対して熟知することである。それはどのように三性に含まれるのか〔というこれは、善巧真実が根本真実に含まれるのが〕ありえないと考える者の問いである。なぜならば、三性の中に、その五蘊等が含まれるからであるとは善巧の対象がこの善巧という語で示されている。その善巧自体を〔善巧という語で示しているの〕ではない。それゆえに、善巧真実も増上 (adhikāra) としてそれ（三性）に含まれる。しかし、本体として〔三性に含まれるの〕ではないと知るべきである。例えば、因果真実の道諦が三〔性〕に含まれると説かれたように。

三相を有する五蘊は三性に包摂され、五蘊を対象とする熟練知の真実、善巧真実も三性という根本真実に包摂されることになる。

以上のように、五蘊、そして、十二処と十八界を遍計、分別、法性の三相に区別し、一切法は三相を有するものとして理解する三相説は、唯識学派の三性説に包摂されるものである。さらに、このことより三相は唯識学派の三性説が確立される前からあった概念であったことがわかる。なぜならば、三相説を登場させる MAV の「真実章」は初期佛教以来の種々の既存の教説を三性という根本真実の中に包摂させる意図で書かれたものだからである。それゆえに、三相は三性の以前より成立していた概念である。そして、それを MAV は三性と解釈する⁹⁶。

三相を三性と解釈することは、無性の MSU、ハリバドラの AAA、ラトナーカラシャーンティの PPU においても確認できる。

まず、MSU においては「弥勒請問章」の三相説の箇所が二回引用される。第一は MS の冒頭部分において登場する増益と損減との二辺を説明する際である。この際、MSU は引用原文の遍計、

⁹⁶ 三相の概念が三性の概念の以前に存在したということが、すなわち、三性説の成立の前から「弥勒請問章」が成立していたということを意味するのではない。三相は MAVBh と AS とにおいても言及されるが、無著や世親はそれを引用の形で言及していないからであり、「弥勒請問章」は漢訳の「般若経」には収められておらず、より後代のものであるチベット訳の「般若経」にのみ収められているからである。したがって、MAVBh と AS が「般若経」の「弥勒請問章」から三相の概念を知るようになったとは断言できない。文字化され伝承されていなかった三相の概念が、後に、「弥勒請問章」が書かれた当時に文字化され「般若経」に挿入された可能性もある。

分別、法性を遍計所執性、依他起性、円成実性という三性で言い換える⁹⁷。第二は MS の三性説の定義箇所を註釈する際である。この際、MSU は三性の各々に対する註釈の後に「弥勒請問章」の三相説の箇所を引用しながら三性に対する註釈を総括する⁹⁸。つづいて、AAĀ においては五蘊を、MAV と同様に、遍計、分別、法性の三種で区別して、その各々に所取・能取と虚妄分別と空性とを対応させているが⁹⁹、所取・能取の二取と虚妄分別と空性とは三性の遍計所執性、依他起

⁹⁷ MSU[T31. 382c2-c10]においては「弥勒請問章」の (39) - (41) に該当する箇所が、原文そのままではなくより簡潔な形で引用されている。

MSU[T31. 399c2-c10]

又如大般若波羅蜜多經中說。慈氏。於汝意云何。諸遍計所執中非實有性。為色非色。不也世尊。諸依他起中唯有名想施設言說性。為色非色。不也世尊。諸圓成實中彼空無我性。為色非色。不也世尊。慈氏。由此門故應如是知。諸遍計所執性決定非有。諸依他起性唯有名想施設言說。諸圓成實空無我性是真實有。我依此故密意說言。彼無二數謂是色等如是解脫二邊過失。

引用原文は次のようである。

「弥勒請問章」[(47) - (60)]

(47) bhagavān āha: tat kiṃ manyase? maitreya yā parikalpīte rūpe 'dravyatā rūpaṃ vā tan na veti. (48) āha: no hīdaṃ bhagavan. (49) [bhagavān āha:] yā punas tatra nāmasaṃjñāprajñaptivyavahāramātratā rūpaṃ ity api nu tad rūpaṃ? (50) āha: no hīdaṃ bhagavan. (51) [bhagavān āha:] tad anena maitreya paryāyeṇaivaṃ veditavyaṃ, yat parikalpitaṃ rūpaṃ tan na rūpaṃ nārūpaṃ yat punā rūpaṃ nārūpaṃ tad advayaṃ, idaṃ ca saṃdhāyoktaṃ mayā advayasyaīṣā gaṇanā kṛtā yad idaṃ rūpaṃ iti. (52) tat kiṃ manyase? maitreya yā vikalpitasya rūpasya sadravatyā api nu tad rūpaṃ yad upādāya nāmasaṃjñāprajñaptivyavahāro bhavati rūpaṃ iti. (53) āha: no hīdaṃ bhagavan. (54) [bhagavān āha:] tat kiṃ manyase? maitreya yā nimittena parikalpitena rūpeṇa parikalpitasya rūpasya tat svabhāvatāsallakṣaṇatāpi nu tad (PSP_6-8:154) rūpaṃ. (55) āha: no hīdaṃ bhagavan. (56) [bhagavān āha:] tad anena te maitreya paryāyeṇaivaṃ veditavyaṃ, yad vikalpitaṃ rūpaṃ api na rūpaṃ nārūpaṃ yat punar na rūpaṃ nārūpaṃ tad advayaṃ, idaṃ ca saṃdhāyoktaṃ mayā advayasyaīṣā gaṇanā kṛtā yad idaṃ rūpaṃ iti. tat kiṃ manyase? maitreya yā dharmatā rūpasya nairātmyaprabhāvitatāpi nu tad rūpaṃ. (57) āha: no hīdaṃ bhagavan. (58) [bhagavān āha:] yā punas tathāivaṃ dharmatā rūpasya rūpadharmatā api nu tad rūpaṃ? (59) āha: no hīdaṃ bhagavan. (60) tad anena maitreya paryāyeṇaivaṃ veditavyaṃ, yad dharmatā rūpaṃ api na rūpaṃ nārūpaṃ yan na rūpaṃ nārūpaṃ tad advayaṃ, idaṃ ca saṃdhāyoktaṃ mayādvayasyaīṣā gaṇanā kṛtā yad idaṃ rūpaṃ iti vedanāyāṃ saṃjñāyāṃ saṃskāreṣu vijñāne yāvad buddhadharmeṣu peyālaṃ kartavyaṃ.

「弥勒請問章」の遍計、分別、法性が MSU の引用文では遍計所執性、依他起性、円成実性という三性の用語となっていることが確認できる。袴谷[1975a: p. 194. 脚注54]を参照。

⁹⁸ 「弥勒請問章」の (39) - (41) が引用されている。

MSU[T31. 399b28-c13]

如大般若波羅蜜多經中亦說。佛告慈氏。若於彼彼行相事中。遍計為色為受為想為行為識。乃至為一切佛法依止。名想施設言說遍計。以為諸色自性。乃至一切佛法自性是名遍計所執。色乃至遍計所執一切佛法。若復於彼行相事中。唯有分別法性安立。分別為緣起諸戲論。假立名想施設言說。謂之為色乃至謂為一切佛法。是名分別色乃至分別一切佛法。若諸如來出現於世。若不出世。法性安立法界安立。由彼遍計所執色故。此分別色於常常時。於恒恒時是真如性。無自性性。法無我性。實際之性。是名法性色。乃至由彼遍計所執一切佛法故。此分別一切佛法於常常時。於恒恒時。乃至是名法性一切佛法。廣說如經。

⁹⁹ AAĀ[47, 12-15]

tat punas trividham rūpaṃ. kalpitaṃ rūpaṃ grāhya-grāhaka-rūpeṇa kalpitatvāt. vikalpitaṃ rūpaṃ asad-bhūta-parikalpena jñānam eva tathā pratibhāsata iti vikalpitatvāt. dharmatā-rūpaṃ tattvato rūpaṃ eva śūnyatā-rūpeṇa pariniṣpannatvāt. evaṃ vedanā-ādayo 'pi vācayaḥ.

また、その色は三種である。遍計された色とは所取・能取のあり方として遍計されたものだからである。分別された色とは、虚妄分別により智がそのように顕現されると分別されたものだからである。法性としての色とは、真実として、色は空性のあり方として完成されたものだからである。同様に、受等も説かれるべきである。

性、円成実性に該当するものである。最後にPPUにおいては三性を密意として遍計、分別、法性の三相が説かれたと記述している¹⁰⁰。したがって、三相を三性と解釈することは MAV 以外の諸文献からも確認できる。

以上のように、遍計、分別、法性の三相は三性の前から存在した概念であり、MAV に至って三性として解釈され始めた。三相を三性と解釈することは、以降、MSU 等の文献にもそのまま採用され、三相に対する解釈として確立された。このように MAV を始めとする MSU 等の諸文献は三相を三性として解釈する。

② AS における三相の解釈

MAV を著した無著の他の著書、AS においても三相説は見られる。遍計、分別、法性の三相は、MAV と同様に、五蘊と十二処と十八界という一切法を三種に区別して説明する箇所が登場する。

AS(P)[31, 6-11]

api khalu samāsataḥ skandhadhātuvāyatanānāṃ prabhedas trividhaḥ | parikalpītalakṣaṇaprabhedāḥ
vikalpītalakṣaṇaprabhedāḥ dharmatālakṣaṇaprabhedas ca // tatra parikalpītalakṣaṇaprabhedāḥ katamaḥ |
skandhadhātuvāyatanāṃ ātmeti vā sattvo jīvo jantuh poṣo pugdalo manuḥ mānava iti vā yat parikalpyate ||
vikalpītalakṣaṇaprabhedāḥ katamaḥ | tāny eva skandhadhātuvāyatanāni // dharmatālakṣaṇaprabhedāḥ
katamaḥ | teṣv eva skandhadhātuvāyatanāṃ ātmābhāvaḥ sattvajīvajantupoṣapudgalamanujamānavānāṃ
abhāvaḥ nairātmyāstītā ||

また、簡略に、蘊・処・界には三種の差別がある。遍計相による差別、分別相による差別、法性相による差別である。そのうち、遍計相による差別は何か。蘊・処・界に対してアートマン、衆生、生命、生き物、養者、ブドガラ、人、人間が遍計されることである。分別相による差別は何であるか。まさしくその同じ蘊・処・界である。法性相による差別は何であるか。まさしくその同じ蘊・処・界においてのアートマンの無、衆生、生命、生き物、養者、ブドガラ、人、人間の無、無我性の有である。

MAV においては三相が三性として解釈された。しかし、AS は MAV とは異なる解釈を見せる。まず、遍計相はアートマン等の実在しない自性的存在と解釈される。つづいて、分別相はアートマン等と遍計するときにその対象になるもの、五蘊、十二処、十八界として解釈される。最後に、

¹⁰⁰ PPU[138a2-a3]

dgongs po nges par 'grel pa la sogs pa'i mdo las | kun tu brtags pa dang gzhan gyi dbang dang yongs su grub pa ste |
ngo bo nyid gsum gsungs la | de nyid bcom ldan 'das ma phyin ci ma log pa la dgongs las | kun brtags pa dang | rnam
par brtags pa dang | chos nyid kyi sgras gsungs te | kun brtags pa'i gzugs dang | rnam par brtags pa'i gzugs dang |
chos nyid kyi gzugs dang zhes bya ba nas | sangs rgyas kyi chos mams kyi bar du'o zhes bya ba'o ||

『解深密經』等の經において、遍計所執〔性〕と依他起〔性〕と円成実〔性〕が説かれており、その同じものを、世尊は不顛倒であることを密意として、遍計と分別と法性という語で説いた。「遍計された色と分別された色と法性としての色ということから諸々の仏法に至るまで」と。

法性相はその蘊・処・界におけるアートマン等の無、無我性の有として解釈される。このように AS においては三相が三性との関連で理解されない¹⁰¹。

一方、三相の各々が意味する、アートマン等の自性的存在とその対象となる蘊・処・界と、蘊・処・界に対するアートマン等の無とは AS の他のところで見られるものである。それは次の通りである。

AS(D) [76b3-b6]

stong pa'i mtsan nyid gang zhe na | gang la gang med pa de ni des stong par yang dag par rjes su mthong ba ste | 'di la lhag ma gang yin pa de ni 'dir yod pa'o zhes yang dag pa ji lta ba bzhin du rab tu shes so || 'di ni stong pa nyid la 'jug pa yang dag pa'i lta ba ste | phyin ci ma log pa zhes bya'o || gang na ci zhig med ce na | phung po dang khamdang skye mched rnam la rtog pa dang brtan pa dang ther zug pa dang mi 'gyur ba'i chos can dang bdag dang bdag gi med do || de lta bas na de dag ni des stong ngo || de la lhag ma yod pa ci zhig ce na | gang bdag med pa de nyid de | de lta bdag ni med kyi bdag med pa ni yod par stong pa nyid khong du chud par bya'o || 'di las dgongs nas bcom ldan 'das kyi yod pa yang yod par | med pa yang med par yang dag pa ji lta ba bzhin du rab tu shes so | | zhes gsungs so ||

空性の相は何であるか。あるもの (A) にあるもの (B) が存在しないなら、それ (A) はそれ (B) について空であると正しく見る。ここ (A) に余れるもの (C)、それ (C) はここ (A) に存在すると如実に知る。これが空性に入る正しい見解であって、無顛倒であると言う。そこ (A) に何 (B) が存在しないか。蘊・界・処において、常・堅固・不変・不壊の基体 (chos can) と我と我所とは存在しない。それゆえに、それらはそれらについて空である。そこ (A) に存在する余れるもの (C) とは何であるか。無我、まさに、それである。このように我は無であるが、無我は有であると空性を理解すべきである。それゆえに、世尊は密意して「有を有として如実に知る。無を無として如実に知る」と説いたのである。

この箇所は AS において空性の相を説明する箇所である。AS はいわゆる「空性の定型句」と呼ばれる定式化された表現で空性を定義する¹⁰²。「空性の定型句」とは「A は空である」ということは「A に B がないとき、A は B について空である。そして、A に余れるもの、C は存在する」ということを意味すると、空を A、B、C の三つの項の有無により解明したものである。

AS は A には蘊・界・処を、B には常・堅固・不変・不壊の基体と我と我所を、C には無我を配当する。これより、空性とは蘊・界・処の一切法に基体と我と我所が存在しないことであり、同時に、それらの無、すなわち、一切法の無我であることが存在することであると定義される。

¹⁰¹ しかし、ASBhはASの三相の箇所をMAVBhと同様に三性と解釈する。

ASBh(T) [45, 15-19]

samāsataḥ prabhedas trividhaḥ, trividhaṃ svabhāvaṃ adhikṛtya pudgalanairātmyanayena veditavyaḥ | tatra parikalpitaḥ svabhāvaḥ skandhādīny adhiṣṭhāyāvidyamāna ātmādisvabhāvo yaḥ parikalpitaḥ | paratantraḥ svabhāvas tāny eva skandhādīni yatrāsāv ātmādyabhūtavikalpaḥ pravṛttaḥ | pariniṣpannaḥ svabhāvo bhāvābhāvaviyuktalakṣaṇā hi tathatā, skandhādiṣv ātmādyabhāvanairātmyāstītā lakṣaṇatvāt ||

簡略に、差別は三種である。三種類の自性に関しては、プドガラの無我性によって、知られるべきである。そのうち、遍計所執性は、蘊等に対して存在していないアートマン等の自性が遍計されることである。依他起性は、まさしくその同じ蘊等である。そこで、このアートマン等の虚妄なるものに対する分別が生じる。円成実生は有と無とから離れた特徴を有する真如である。蘊等における我等の無と無我性の有を特徴とするものだからである。

¹⁰² 「空性の定型句」に関しては本稿の第一章第一節を参照。

このように、AS は蘊・界・処、基体と我と我所、無我という三つの項により諸法の空であることを表す。ところが、これら三つの項は AS の三相の解釈において登場した三つの概念と相応する。先に見たように、AS において遍計相はアートマン等の自性的存在と、分別相は蘊・処・界と、法性相は蘊・処・界におけるアートマン等の無、無我性の有と解釈された。したがって、「空性の定型句」に登場する三つの項目の A は三相の分別相に、B は遍計相に、C は法性相に相応すると言える。また、空性の定義において見られる三者間の関係、すなわち、蘊・界・処という A の項に基体と我と我所という B が存在しないことが C であるということは三相の場合にも見られる。三相において法性相は分別相に遍計相が存在しないことだからである。それゆえに、AS においては、三相と空性とが同一の方式で記述されていると言える。これは AS は三相を空性と解釈していることを意味する。このことにより、三相を三性と解釈する MAVBh とは違い、AS は三相を空性と解釈しているということが導き出される。

以上のように、遍計相、分別相、法性相によって一切法を区別する三相説は、無著によって二つの類型で解釈される。一つは三相を三性と解釈することであり、もう一つは空性と解釈することである。三相を三性として解釈する文献には MAV、MSU、AAĀ、PPU があり、空性として解釈する文献には AS がある。これらのうち、MSU、AAĀ、PPU は MAVBh と AS 以降に成立した文献である。MAVBh と AS との前後関係はまだ確定されていないが、三相に対する解釈を基準として考えてみれば AS が MAVBh の前に成立したと言える。

もし MAV が AS より先に成立したとすれば、三相の解釈が三性から空性に変化したことになる。しかし、この二つの文献より後代に成立したことが確実な MSU 等は三相を空性ではなく三性と解釈する。三相に対する解釈が三性から空性に変化した後に、再び三性に戻るということは不自然である。それゆえに、三相を三性と解釈する MAV が空性と解釈する AS より前に成立したとは考えがたい。AS が MAV に先行すると判断するのがより自然である。したがって、三相に対する二つの解釈のうち、AS においてなされた解釈、空性と解釈することが三性と解釈することに先行すると言える。

3-1-4. 小結

三相に対する解釈が空性と三性とに分けられ、空性より三性へ解釈の方式が変化したということは、三性が空性に代わるものとなったことを示す。空性を意味するものが三性を意味するものとして理解されるようになったからである。しかし、このことが三性の出現した原因が空性にあるということを意味するのではない。なぜならば、三相を空性と解釈している AS においても、遍

計所執性、依他起性、円成実性の三性が登場しているからである¹⁰³。それゆえに、空思想が三性説が出現するようになった原因であるとは言えない。ただ、唯識学派にとって三性説が既存の空思想に代わるものであったことが、三相説に対する解釈の変化から確認できる。

3-2. 三性説の変遷と空

3-2-1. 序論

三性説は最初から完成された形で存在したのではない。変遷の過程を経ている。三性説が初めて登場する『解深密経』と、それより後代に著された TrBh の間には差異が見られるからである。これは、三性のうち、「依他起性」の定義の変遷として確認できる。つまり、『解深密経』、『瑜伽論』『摂決択分』、『顕揚論』においては依他起性が縁起として定義される¹⁰⁴。一方、MAVBh、MSA、MS においては依他起性が虚妄分別として¹⁰⁵、また、TrBh においては分別として定義される¹⁰⁶。虚妄分別と分別とは識のことであるから、依他起性に対する定義の変遷から、三性説が識説と結合する方向で展開されたということがわかる。したがって、三性説が最初から固定された形で存在したとは言えない¹⁰⁷。

このように、三性説が変遷を経て形成されたものであるということは、依他起性のみではなく、円成実性の場合においても同じく確認できる。そこで、本節では『解深密経』から TrBh に至るまでの円成実性に対する定義を検討する。そして、円成実性の定義の変遷から、既存の空思想が三性説の形成にどのような形で影響を及んだのかを解明する。

3-2-2. 諸文献における円成実性の定義

¹⁰³ ASにおいて三性は自性空性、如性空性、本性空性という三種の空性を論じる際に登場する。

AS(D)[76b6-7]

yang stong pa nyid mams pa gsum ste| ngo bo nyid kyis stong pa nyid dang| de bzhin du yod pa ma yin pa'i stong pa nyid dang| rang bzhin gyi stong pa nyid do || dang po ni kun brtags pa'i ngo bo nyid nye bar gzung bar blta'o || gnyis pa ni gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid nye bar gzung ba'o || gsum pa ni yongs su grub pa'i ngo bo nyid nye bar gzung bar blta'o ||

また空性は、自性空性、如性空性、本性空性の三種類である。第一は遍計所執性であると見られるべきである。第二は依他起性であると見られるべきである。第三は円成実性であると見られるべきである。

¹⁰⁴ 『解深密経』[60, 25-30]、「摂決択分」[T30. 703b1-b2]、『顕揚論』[T31. 507b5]。

¹⁰⁵ MAVBh[19, 19-20]、MSA[64, 27-65, 5]、MS[13a3-b2]。

¹⁰⁶ TrBh[39, 21-26]。

¹⁰⁷ 三性説が最初から識説と結合した形で存在したのではないということは、高崎[1982: pp. 17, 16-18, 5]と勝呂[1982: p. 81, 14-18]とにより既に指摘されている。また、兵藤[2010]は『解深密経』等で見られる、まだ識説と結びついていない初期の三性説が唯識説と結合していく経緯を詳しく論じている。このように三性説が識説と結合する形で展開されたということは先行研究からも、そして、各文献における依他起性の定義からも確認できることである。一方、そのような変遷があっても、唯識学派にとって三性説の論理構造は一貫していると見る見解もある（竹村[1995]）。

円成実性の定義には「真如」と定義される類型と「遍計所執性の無」と定義される類型とがある。このうち、前者の類型は『解深密経』、「摂決択分」、『顕揚論』において窺われ、後者の類型は MAVBh、MSA、MS、TrBh において窺われる¹⁰⁸。

円成実性の定義を真如とする類型は『解深密経』、「摂決択分」、『顕揚論』において見られる。そして、遍計所執性の無とする類型は MAVBh、MSA、MS、TrBh において見られる。まず、『解深密経』、「摂決択分」、『顕揚論』は次のように円成実性を定義する。

『解深密経』 [61, 1-6]

yon tan 'byung gnas | chos rnams kyi yongs su grub pa'i mtshan nyid gang zhe na | chos rnams kyi de bzhin nyid gang yin pa ste | byang chub sems dpa' rnams kyi rtun pa'i rgyu dang | legs par tshul bzhin yid la byas pa'i rgyus de rtogs shing | de rtogs pa goms par byas pa yang dag par grub pas kyang bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub kyi bar du yang dag par 'grub pa gang yin pa'o ||
徳本よ、諸法の円成実相とは何であるか。諸法の真如である。諸菩薩は精進と真実な如理作意との因により、それを証得し、その証得を修習することを成就し、乃至、無上正等菩提を成就する。

「摂決択分」 [T30. 703b2-b5]

云何圓成實自性。謂諸法真如。聖智所行。聖智境界。聖智所緣。乃至能令證得清淨。能令解脫一切相縛及麤重縛。亦令引發一切功德。

円成実自性とは何であるか。すなわち、諸法の真如であり、聖者の智の対象であり、聖者の智の境界であり、聖者の智の所縁である。清浄にするから、一切の相と麤重との束縛から解放させるから、一切の功德を完成させるからである。

『顕揚論』 [T31. 507b5-b8]

圓成實自體者。謂諸法真如聖智所行聖智境界聖智所緣。爲欲證得極清淨故。爲令一切相及麤重二縛得解脫故。爲欲引發諸功德故。

円成実自体とは、諸法の真如であり、聖者の智の対象であり、聖者の智の境界であり、聖者の智の所縁である。清浄を証得しようとするからであり、一切の相と麤重という束縛をして解脱を得させるためのゆえにであり、諸功德を引き起こそうとするからである。

「摂決択分」には『解深密経』のほぼ全文が引用されており¹⁰⁹、『顕揚論』は『瑜伽師地論』の膨大な内容を組織的に要約したものである。したがって、以上の三つの文献は思想的な面で類似点がある場合が多い。円成実性に関しても三つの文献において同一に真如と定義されていることが確認できる。特に、『顕揚論』は「摂決択分」の記述をそのまま採用している。

これら三文献は皆、円成実性を真如と定義する。そして、円成実性は無上正等菩提を成就するための証得の対象や聖者の智に関係するものとして扱われている。これは円成実性が実践論的な観点で把握されていることを示していると言える。このように、『解深密経』、「摂決択分」、

¹⁰⁸ 円成実性の定義が「真如」と「遍計所執性の無」とに分けられるということは竹村[1995: pp. 448, 8-451, 8]において既に指摘されている。

¹⁰⁹ 「摂決択分」 [T30. 713c24-736c12]。

『顕揚論』は実践論的な観点に立って円成実性を記述し、円成実性を真如と定義する点で共通点がある。

つづいて、MAVBh、MSA、MS、TrBh は次のように円成実性を定義する。

MAVBh[19, 17-20]

**kalpitaḥ paratantraś ca pariniṣpanna eva ca |
arthād abhūtakalpāc ca dvayābhāvāc ca deśitaḥ || (k.5)**

arthaḥ parikalpitaḥ svabhāvaḥ | abhūtaparikalpaḥ paratantraḥ svabhāvaḥ | grāhyagrāhakābhāvaḥ
pariniṣpannaḥ svabhāvaḥ |

分別されたもの（遍計所執性）、他によるもの（依他起性）、完全に成就されたもの（円成実性）が、対象という点から、虚妄分別という点から、二つが存在しないという点から示される。(k.5)

対象は遍計所執性である。虚妄分別は依他起性である。所取と能取との存在しないことが円成実性である。

MSA[65, 6-13]

**abhāvabhāvatā yā ca bhāvābhāvasamānatā|
aśāntaśāntā 'kalpā ca pariniṣpannalakṣaṇam|| (k.41)**

pariniṣpannalakṣaṇam punas tathatā sā hy abhāvatā ca, sarvadharmāṇām parikalpitānām bhāvatā ca tadabhāvatvena bhāvāt | bhāvābhāvasamānatā ca tayoḥ bhāvābhāvayor abhinnatvāt| aśāntā cāgantukair upakleśaiḥ, śāntā ca prakṛtipariśuddhatvāt | avikalpā ca vikalpāgocaratvāt niṣprapañcatayā | etena trividham lakṣaṇam tathatāyāḥ paridīpitam svalakṣaṇam saṃkleśavyavadānalakṣaṇam avikalpalakṣaṇam ca uktam trividham lakṣaṇam|

無性と有性と、有と無との平等と、
非寂靜寂靜と無分別とが円成実相である。(k.41)

さらに、真如が円成実相である。それは遍計された一切法の無性である。それ（遍計所執相）の無性として有であるから、有性でもある。また、〔真如は〕有と無との平等である。その有と無とが区分されないからである。また、客塵煩惱によって非寂靜である。また、本性清浄であるから、寂靜である。また、無分別であるとは戲論がないから、分別の領域ではないからである。これらによって、真如の三種相、自相と清浄染汚相と無分別相とが明らかになった。三相が説かれた。

MS[13b2-b3]

de la kun brtags pa'i mtshan nyid gang zhe na | gang don med kyang nam par rig pa tsaṃ de don nyid du snang ba'o || de la yongs su grub pa'i mtshan nyid gang zhe na | gang gzhan gyi dbang gi mtshan nyid de nyid la don gyi mtshan nyid de gtan med pa nyid do ||

そのうち、遍計所執相は何であるか。対象がなく、ただ識のみであるのに、対象として顕現することである。そのうち、円成実相は何であるか。依他起相、それに対象の相が常でないことである。

TrBh[14, 13-14]

paratantrasvabhāvas tu vikalpaḥ pratyayodbhavaḥ |
niṣpannastasya pūrveṇa sadā rahitatā tu yā || (k.21)

依他起性は分別である。縁によって生起する。

それに前のものが常に離れていること、これが円成〔実性〕である。(k.21)

MAVBh は二取の無が円成実性であると定義する。二取は所取と能取とであり、識が対境、衆生、自我、表識として顕現したもの、認識過程において実在すると思ひ込む対象である¹¹⁰。上記の偈頌においては遍計所執性が「対象」として定義されているが、この対象とは二取のことを指しているのである。それゆえに、二取は対象、すなわち、遍計所執性であり、二取の無とは遍計所執性の無である。このように MAVBh は円成実性を遍計所執性の無と定義する。

MSA は円成実性を、無であり、有であり、有無が平等であり、非寂靜であり、寂靜であり、無分別のものであるという。世親の註釈によれば、このうち、前の三つが円成実性の自相に該当する。それゆえに、円成実性は無性、有性、有無の平等性により定義されるものである。このうち、無性とは遍計所執性が存在しないということであり、有性とは遍計所執性の無として円成実性は存在するということである。最後に、有無の平等性とは遍計所執性の無が、すなわち、円成実性の有であるということである。したがって、以上の三つの項目からみれば、円成実性は遍計所執性の無である。MSA は円成実性を遍計所執性の無と定義する。

また、世親は本箇所を註釈するに当たって、円成実性を真如とも定義しているが、このことより、円成実性を定義する二つの類型間の連続性が確認されると言える。真如である円成実性が遍計所執性の無として定義されているからである¹¹¹。真如という定義と遍計所執性の無という定義が互いに違うものを指しているのではない。皆、円成実性を指しているが、円成実性に対する定義が真如から遍計所執性の無へと変化したのである。

¹¹⁰ MAVBh 1. k3において、対象は四種に分けられ、その本質が識の顕現であることが述べられている。

MAVBh[18, 21-22]

arthasatvātmavijñaptipratibhāsaṃ prajāyate |
vijñānaṃ nāsti cāyārthas tadabhāvāt tad apy asat || (k.3)

対境、衆生、自我、表識として顕現する識が生起する。

それ（識）の対象は存在しない。それ（対象）が存在しないからそれ（識）も存在しない。

(k.3)

また、この四種の対象は、各々、次のように所取と能取とに割り当てられる。

MAV†(Y)[14, 1-3]

viśeṣatas tu grāhyagrāhakavikalpaḥ | tatra grāhyavikalpaḥ | arthasatvapratibhāsaṃ vijñānam | grāhakavikalpa
ātmavijñaptipratibhāsaṃ |

差別して〔虚妄分別を説明すると〕所取・能取の分別である。その内、所取の分別とは対境・衆生として顕現（pratibhāsa）する識であり、能取の分別とは自我・表識（vijñapti）として顕現（pratibhāsa）する識である。

¹¹¹ 世親は散文註釈の最初の文章で円成実性を真如と言い換え、円成実性を真如と定義する。しかし、記述内容においては『解深密経』等のような実践論的な観点は見当たらない。むしろ、MAVBh と同様に、遍計所執性の無と円成実性を定義している。

MS は依他起性に対象の相がないことが円成実性であると定義する。対象とは、ただ識の顕現にすぎないのに、識と別個に独立して存在すると誤って想定されているものを言う。これが MS においては遍計所執性に該当するものとして記述される。そして、円成実性は依他起性に対象の相がないことと定義される。それゆえに、円成実性は依他起性に遍計所執性がないことである。このように、MS においても円成実性は遍計所執性の無として定義される。

TrBh は、三性の各項目の名称を用いて円成実性を定義する。TrBh の k21cd において円成実性の定義がなされているが、「それに」とは依他起性を指し、「前のもの」とは遍計所執性を指す。それゆえに、依他起性に遍計所執性が常に離れていること、すなわち、依他起性における遍計所執性の無が円成実性を意味することになる。このように、TrBh も円成実性を遍計所執性の無と定義する。

これら MAVBh 等の四つの文献は円成実性を遍計所執性の無として定義する。このような定義は、『解深密経』のように実践論的な観点でなされたものではない。有や無という概念との関係から円成実性を定義しており、実践論的な観点というよりは存在論的な観点で捉えていると言える。このように、MAVBh、MSA、MS、TrBh は存在論的な観点に立って円成実性を記述しており、円成実性を遍計所執性の無と定義することに共通点がある。

以上、『解深密経』から TrBh までの円成実性の定義に対して検討した。その結果、円成実性には「真如」と定義される類型と「遍計所執性の無」と定義される類型とがあるということが確認された。すなわち、円成実性は『解深密経』、「摂決択分」、『顕揚論』においては真如と定義され、MAVBh、MSA、MS、TrBh においては遍計所執性の無と定義される¹¹²。

このことは、三性説は変遷の過程を経て成立したものであって、最初から完成された形で存在したのではないことを示す。依他起性と同様に、円成実性の定義においても明らかな変化が見られるからである。依他起性の定義が縁起から識へ移行したように、円成実性の定義も真如から遍計

¹¹² 『解深密経』と「摂決択分」にも円成実性を遍計所執性の無として記述する箇所が存在する。しかし、それを円成実性の定義として登場させるのは MAVBh 以後の文献からである。『解深密経』と「摂決択分」とにおいて遍計所執性の無が登場する箇所は次のようである。

『解深密経』[63, 11-17]

yon tan 'byung gnas | de la mtshan ma dang 'brel pa'i ming la brten nas ni kun brtags pa'i mtshan nyid rab tu shes so || gzhan gyi dbang gi mtshan nyid la kun brtags pa'i mtshan nyid du mngon por zhen pa la brten nas ni gzhan gyi dbang gi mtshan nyid rab tu shes so || gzhan gyi dbang gi mtshan nyid la kun brtags pa'i mtshan nyid du mngon par zhen pa med pa la brten nas ni yongs su grub pa'i mtshan nyid rab tu shes so ||

徳本よ、そのうち、相と結合した名前によって遍計所執相が知られる。依他起相を遍計所執相として執着することによって依他起相が知られる。依他起相を遍計所執相として執着することがないことによって円成実相が知られる。（をもって。によって）

「摂決択分」[T30. 703b5-b10]

問遍計所執自性縁何應知。答縁於相名相屬應知。問依他起自性縁何應知。答縁遍計所執自性執應知。問圓成實自性縁何應知。答縁遍計所執自性於依他起自性中畢竟不實應知。

{Jpn}

【問】遍計所執性は何によって知られるのか。【答】因相と名との結合によって知られる。【問】依他起性は何によって知られるのか。【答】遍計所執性に執着することによって知られる。【問】円成実性は何によって知られるのか。【答】依他起性に遍計所執性が常に成立しないことによって知られる。

所執性の無へと移行した。このように三性説の変遷は各文献における円成実性の定義からも確認できる。

3-2-3. 円成実性と空性

円成実性の定義は真如から遍計所執性の無へと変化した。それでは、この変化は何に起因して発生したのか。以下、円成実性を遍計所執性の無と定義する MAVBh 等の論書の記述内容を分析する。そして、その変化の原因が三性説と空思想との結合にあることを論証する¹¹³。

① MAVBh

MAV k.5は、遍計所執性は対象、すなわち、二取として、依他起性は虚妄分別として、円成実性は二取の無として、三性の各々を定義する。ところが、このうちの二取と虚妄分別とは MAV k.1においても登場する概念である。k.1は、虚妄分別と二取と空性という三つの概念間の関係と存在性とを弁別する箇所である。世親の散文註釈とともに引用すれば、次のようである。

MAVBh[17, 16-18, 7]

**abhūtaparikalpo 'sti dvayan tatra na vidyate |
śūnyatā vidyate tv atra tasyām api sa vidyate || (k.1)**

tatrābhūtaparikalpo grāhyagrāhakavikalpaḥ | dvayaṃ grāhyaṃ grāhakaṃ ca | śūnyatā
tasyābhūtaparikalpasya grāhyagrāhakabhāvena virahitatā | tasyām api sa vidyate ity abhūtaparikalpaḥ |
evaṃ yad yatra nāsti tat tena śūnyam iti yathābhūtaṃ samanupaśyati yat punar atrāvaśiṣṭaṃ bhavati tat
sad ihāstīti yathābhūtaṃ prajānātīty aviparītaṃ śūnyatālakṣaṇam udbhāviṭaṃ bhavati |

虚妄分別は存在する。そこにおいて二つは存在しない。しかし、空性はその中に
存在する。その（空性）中にも、またそれは（虚妄分別）存在する。(k.1)

ここでの虚妄分別とは所取と能取とを分別することである。二つとは所取と能取とである。空性とはその虚妄分別が所取・能取性から離れていることである。その中にも、またそれは存在するとは虚妄分別が「空性の中に存在するということ」である。このように、A (yatra) に B (yad) が存在しないとき、A (tat) は B (tena) について空であると如実に観察する。また、そこに余ったもの、それこそが今ここに実在するものであると如実に知るという不顛倒な空性の相が示された。

ここでは、虚妄分別と二取と空性という三つの概念が虚妄分別を中心として述べられている。虚妄分別とは所取・能取の二取を分別するものであり、二取とは虚妄分別という分別作用の対象になる虚妄なるものである。そして、空性はその虚妄分別が所取・能取の二取性から離れていることである。

113 竹村[1995]も円成実性の定義には「真如」と「遍計所執性の無」との二つの類型があり、このうち、後者の類型が前者より新しいものであると指摘する。しかし、竹村[1995]はこの両者の差異をただの説明の仕方の相違と見ている（竹村[1995: pp. 448, 8-451, 8]）。

この三つの概念は先に見た k.5 に述べられる三性の各々に対応する。まず、k.5 は遍計所執性を対象と定義したが、対象とは所取・能取のことである。それゆえに、遍計所執性は所取・能取の二取である。そして、依他起性は k.5 において虚妄分別と定義されていた。それゆえに、k.1 において登場する二取と虚妄分別とは各々三性の遍計所執性と依他起性に対応するものである。最後に、k.5 においては円成実性が二取の無と定義されており、k.1 においては空性が虚妄分別が所取・能取性から離れていることと定義されている。したがって、空性も円成実性も二取の無と定義されているから、空性は三性の円成実性に対応すると言える。

このように、虚妄分別、二取、空性は三性の依他起性、遍計所執性、円成実性に対応する。特に、空性と円成実性の場合を見れば、諸法において空性を導き出す論理が三性の円成実性を導き出す論理と一致する。このことより、円成実性を遍計所執性の無と定義することは唯識学派の空の理解を背景としていることが明らかとなる。

② MSA

MSA における円成実性の定義も、MAVBh の場合と同様に、唯識学派の空の理解に基盤していると言える。安慧は円成実性を定義する MSA の箇所を次のように註釈する。

SAVBh(D)[187b7-188a4]

yongs su grub pa'i mtshan nyid bstan pa'i phyir | **dnegos po med dang dnegos po yod** || ces bya ba la sogs pa smos te | chos kyi dbyings stong pa nyid de bzhin nyid kyi mtshan nyid la yong su grub pa zhes bya ste | yongs su grub pa de la gzung ba dang 'dzin pa'i dnegos po yod pa ma yin pas **dnegos po med pa zhes bya'o** || gzung 'dzin dang bral ba'i stong pa nyid med pa ma yin pas de **dnegos po yod pa zhes bya ste** | de bas na dbus dang mtha' nam par 'byed pa las kyang | **gnyis po de na yod pa ma yin | stong pa nyid ni de na yod** || ces bshad do || **dnegos dang dnegos med mnyam pa nyid** || ces bya ba la | stong pa nyid kyi dnegos po yod pa la gzung 'dzin gyi dnegos po med pa yang de na gnas la | gzung 'dzin gyi dnegos po med pa la stong pa nyid yod pa de na gnas pas dnegos po dang | dnegos po med pa mnyam pa zhes bya ste | dbus dang mtha' las kyang | stong pa nyid ni de na yod | de na yang ni de yod do || zhes bshad do || mdo sde rgyan 'di nyid kyi sangs rgyas kyi thabs la 'jug pa'i skabs las kyang | gang gzung ba dang 'dzin pa gnyis med pa de nyid yod pa'i mchog ste | yongs su grub pa'i mtshan nyid du yod pa'i phyir ro zhes bshad do ||

円成実相を説明するために、無 (**dnegos po med**, *abhāvatā) と有 (**dnegos po yod**, *bhāvatā,) 云々という。法界、空性、真如の相に対して円成実〔相〕という。その円成実〔相〕に所取・能取性 (gzung ba dang 'dzin pa'i dnegos po, *grāhyagrāhakabhāva) が存在するのではないから、無という。所取・能取から離れた空性が存在しないのではないから、有という。それゆえに、『中辺分別頌』 (MAV k.1bc) においても、「その中に二つは存在するのではない。空性はそれに存在する¹¹⁴」と述べられているのである。有と無との平等性とは、空性の有に、所取・能取の無も、そのとき存在し、所取・能取の無に、空性の有は、そのとき存在するから、有と無との平等性という。『中辺分別頌』 (MAV 1. k1 cd) においても、「空性は、それ (虚妄分別) に、存在する。その中 (空性) にも、また、それ (虚妄分別) は存在する¹¹⁵」と述べられている。

¹¹⁴ MAV k.1bc. dvayan tatra na vidyate | śūnyatā vidyate tv atra

¹¹⁵ MAV k.1cd. śūnyatā vidyate tv atra tasyām api sa vidyate ||

る。この MSA の「ブツダの方便に悟入する章」¹¹⁶においても、「所取・能取の二〔取〕の無、それは有の勝義である。円成実相として有だからである」と述べられている。

安慧は、MSA k.41 に述べられている円成実相の自相、すなわち、無性、有性、有無の平等性が MAV k.1 に基づいたものであると註釈する。そして、円成実相の無性を二取の無と説明し、円成実相の有性を二取が存在しない空性の有と説明する。円成実相と空性とが同一なものとして扱われているのである。したがって、MSA における円成実性の定義も空の理解を背景としていると言える。

また、MSA k.41 で提示されている円成実相の自相は MAVBh と AS と『顕揚論』とにおいて記述されている空性の相と類似している。MAVBh 等の三つの文献では空性の相が次のように述べられる。

MAVBh[22, 22-23, 11]
katham lakṣaṇam vijñeyam |

dvayābhāvo hy abhāvasya bhāvaḥ śūnyasya lakṣaṇam | (k.13ab)

dvayagrāhyagrāhakasyābhāvaḥ | tasya cābhāvasya bhāvaḥ śūnyatāyā lakṣaṇam ity
abhāvasvabhāvalakṣaṇatvam śūnyatāyāḥ paridīpitam bhavati | yaś cāsau tadabhāvasvabhāvaḥ sa |

na bhāvo nāpi cābhāvaḥ | (k.13c)

katham na bhāvo yasmāt dvayasyābhāvaḥ | katham nābhāvo yasmāt dvayābhāvasya bhāvaḥ | etac ca
śūnyatāyā lakṣaṇam | tasmād abhūtaparikalpān

na prthaktvaikalakṣaṇam || (k.13d)

prthaktve sati dharmād anyā dharmateti na yujyate | anityatāduḥkhatāvat | ekatve sati viśuddhyālabhanam
jñānam na syāt sāmānyalakṣaṇaṁ ca | etena tattvānyatvavinirmuktaṁ lakṣaṇam paridīpitam bhavati |
どのように〔空性の〕相は知られるべきであるか。

二の無と無の有とが空〔性〕の相である。 (k.13ab)

所取・能取の二の無、そして、その無の有が空性の相であるという、空性には無を自性とする

¹¹⁶ MSA の第九章の k.78-k.81。そのうち、直接関連する箇所は次のようである。

MSA[48, 13-16]

yā 'vidyamānatā saiva paramā vidyamānatā |
sarvathā 'nupalambhaś ca upalambhaḥ paro mataḥ || (k.78)

yā parikalpitena svabhāvenāvidyamānatā saiva paramā vidyamānatā pariniṣpannena svabhāvena | yaś ca sarvathā
'nupalambhaḥ parikalpitasya svabhāvasya sa eva parama upalambhaḥ pariniṣpannasvabhāvasya |

存在しないこと、まさにそれが真実が存在することである。

まったく得られないことが真実を得ることであると考えられる。 (k.78)

遍計所執性として存在しないこと、まさにそれが円成実性として真実が存在することである。また、遍計所執性がまったく得られないこと、まさにそれが円成実性の真実を得ることである。

相があるということが明らかになった。

そして、このそれ（所取・能取）の無を自性としているもの、それは

有ではなく無でもない。（k.13c）

どうして有ではないのか。なぜならば、二〔取〕は存在しないからである。どうして無でもないのか。なぜならば、二〔取〕が存在しないということは存在するからである。これが空性の相である。

それゆえに虚妄分別と

別異や同一という相がない。（k.13d）

〔空性が虚妄分別と〕別異であるとすれば、法性が法と異なるのは不合理である。無常性と苦性〔とが無常であり、苦である五蘊と異ならない〕ように。〔空性が虚妄分別と〕同一であるとすれば、清浄の所縁を有する智と共相（sāmānyalakṣaṇa）がなくなるであろう。これによって同一性・別異性から離れた〔空性の〕相が明らかになった。

AS(D)[76b3-b6]

stong pa'i mtsan nyid gang zhe na | gang la gang med pa de ni des stong par yang dag par rjes su mthong
ba ste | 'di la lhag ma gang yin pa de ni 'dir yod pa'o zhes yang dag pa ji lta ba bzhin du rab tu shes so || 'di
ni stong pa nyid la 'jug pa yang dag pa'i lta ba ste | phyin ci ma log pa zhes bya'o || gang na ci zhig med ce
na | phung po dang khamdang skye mched rnam la rtog pa dang brtan pa dang ther zug pa dang mi 'gyur
ba'i chos can dang bdag dang bdag gi med do || de lta bas na de dag ni des stong ngo || de la lhag ma yod
pa ci zhig ce na | gang bdag med pa de nyid de | de lta bdag ni med kyi bdag med pa ni yod par stong pa
nyid khong du chud par bya'o || 'di las dgongs nas bcom ldan 'das kyis yod pa yang yod par | med pa yang
med par yang dag pa ji lta ba bzhin du rab tu shes so || zhes gsungs so ||

空性の相は何であるか。あるもの（A）にあるもの（B）が存在しないなら、それ（A）はそれ（B）について空であると正しく見る。ここ（A）に余れるもの（C）、それ（C）はここ（A）に存在すると如実に知る。これが空性に入る正しい見解であって、無顛倒であると言う。そこ（A）に何（B）が存在しないか。蘊・界・処において、常・堅固・不変・不壊の属性を有するもの（chos can）と我と我所が存在しない。それゆえに、それらはそれらについて空なのである。そこ（A）に存在する余れるもの（C）とは何であるか。無我、まさにそれである。このように我は無であるが、無我は有であると空性を理解すべきである。それゆえに、世尊は密意して「有を有として、無を無として如実に知る」と説いたのである。

『顯揚論』 [T31. 553b18-c2]

云何成立空相。當知空相有三種。一自相。二甚深相。三差別相。云何自相。頌曰。

**若於此無有 及此餘所有
隨二種道理 說空相無二**

論曰。空自相者。非定有無。非定有者。謂於諸行中衆生自性及法自性畢竟無所有故。非定無者。謂於此中衆生無我及法無我有實性故。隨二種道理者。謂即於此中無二種我道理。及有二種無我道理。隨此二種故說空性無有二相。一非有相。二我無故。二非無相。二無我有故。何以故。此二我無即是二無我有。此二無我有即是二我無故。是故空性非定有相非定無相。

どのように空相は成立するのか。空相には三種があると知るべきである。第一は自相であり、第二は甚深相であり、第三は差別相である。何が自相であるか。偈頌に曰く。

もし、ここに無があり、また、ここに余るものがあれば、
二種の道理に従って、空相は無二であると説く

論じて曰く。空の自相は絶対的に有でもなく無でもない。絶対的に有ではないということは、諸行の中で、衆生自性と法自性とが畢竟して無だからである。絶対的に無ではないということは、これら（諸行）の中で衆生無我と法無我との実在性があるからである。二種の道理に従ってとは、すなわち、ここでは二種の我は無であるという道理と、二種の無我は有であるという道理とがある。この二種の〔道理に〕従うから、空性には二相がないと説く。一、有相ではない。二〔種〕の我（衆生自性・法自性）は無だからである。二、無相ではない。二〔種〕の無我（衆生無我・法無我）は有だからである。なぜであるか。この二種の我の無が、すなわち、二種の無我の有だからであり、この二種の無我の有が二種の我の無だからである。それゆえに、空性は絶対的に有を相とするのではなく、無を相とするのでもない。

以上の三つの文献においては空性の相が有と無という概念により説明される。そして、いずれも、空性には有の相も無の相もあり、したがって、空性は有でもなく無でもないと定義する。このような空性の相は MSA において述べられている円成実相の自相、すなわち、有性と無性、有無の平等性と同一な構造と内容とを見せる。両方、「無」に該当するものとして、遍計所執性、所取・能取の二取、我、衆生自性・法自性という自性的存在を挙げており、「有」に該当するものとしてはその自性的存在の無、それ自体を挙げているからである。以上のように、MSA の円成実相の自相は MAVBh 等が提示する空性の相と一致する。したがって、MSA における円成実性の定義は唯識学派により理解された空を背景としていると言える。

③ MS

円成実性と空性との関係は世親の註釈、*Mahāyānasamgrahabhāṣya*（『撰大乘論釈』、以下 MSBh と省略する）の註釈においてより直接的に現れる。世親は MS の円成実性の定義に対して次のように註釈する。

MSBh[144a5-a6]

yongs su grub pa'i mtshan nyid ni gang yod pa ma yin pa mi bden pa snang ba'i rgyu don de'i bdag nyid du snang ba gtan med par 'gyur ba ste | 'di ltar bdag tu snang ba gtan med par gyur pa nyid ni bdag med pa tsam yod par gyur ba nyid yin te |

円成実相は、非真実なる存在しないものが顕現する原因にその対象自体として顕現することが永遠になくなることである。我としての顕現が永遠になくなること（我の無）が、無我のみが存在するようになるということ（無我の有）であるように。

世親は例えを挙げて MS の円成実性の定義箇所を註釈するが、この際に挙げられるのが「我の無」と「無我の有」とである。これは、円成実性が「我の無」と「無我の有」と同一の意味を有するということを表す。この「我の無」と「無我の有」とは、先に触れた AS と『顕揚論』とにおいて提示された空性の定義であった。したがって、世親の註釈によれば、円成実性は空性と同一な概念であることになる。MS の円成実性は AS と『顕揚論』とにおける空性の定義を典拠として

遍計所執性の無と定義される。それゆえに、MS における円成実性の定義は唯識学派の空理解を背景としていると言える。

④ TrBh

安慧は TrBh において三性説を註釈する際に、MAVBh において登場した虚妄分別を依他起性に¹¹⁷、所取・能取の二取を遍計所執性に割り当てる。そして、この二つの概念の関係に基づいて円成実性を註釈する。次のようである。

TrBh[39, 27-40, 5]
pariniṣpannaḥ katham ity ata āha |

niṣpannas tasya pūrveṇa sadā rahitatā tu yā || (21cd)

avikārapariniṣpattyā sa pariniṣpannaḥ | **tasyeti** paratantrasya **pūrveṇeti** parikalpitenā tasmin vikalpe grāhyagrāhakabhāvaḥ parikalpitaḥ | tathā hi tasmin vikalpe grāhyagrāhakatvam avidyamānam eva parikalpyata iti parikalpitam ucyate | tena grāhyagrāhakeṇa paratantrasya **sadā** sarvakālam atyantarahitatā yā sa pariniṣpannasvabhāvaḥ ||

円成実〔性〕はどのようなかと問われるので、

それに前のものが常に離れていること、これが円成実〔性〕である。(21cd)

と言う。無変化を成就したから、それは円成実〔性〕である。それにとは依他起〔性〕にである。前のものがとは遍計所執〔性〕がである。その分別における所取・能取性が遍計所執〔性〕である。つまり、その分別において存在していない所取・能取が遍計執されるから遍計所執〔性〕であると言われる。依他起〔性〕がその所取・能取と常に、一切時において、完全に離れていること、これが円成実性である。

TrBh における円成実性の定義、すなわち、依他起性における遍計所執性の無を、安慧は依他起性における所取・能取の無と説明するが、依他起性とは虚妄分別のことである。それゆえに、円成実性とは虚妄分別における所取・能取の二取の無である。そして、MAVBh においては、虚妄分別における所取・能取の無が空性として定義されている。したがって、安慧の註釈によれば、円成実性は空性である。このように、TrBh においても、円成実性が空性と同一な概念として扱われていることが確認できる。

¹¹⁷ TrBhは依他起性を分別と定義する。その分別とは虚妄分別にほかならない。安慧は、次のように、MAVBh I.k8ab を引用しながら、分別を註釈する。

TrBh[39, 23-26]
tatra parikalpaḥ kuśalākuśalāvyākṛtabhedabhinnās traidhātukās cittacaittāḥ | yathoktam |

abhūtaparikalpas tu cittacaittās tridhātukā

iti |
そのうち分別は善不善無記の差別によって区別される、三界に属する諸心心所である。

虚妄分別は三界に属する諸心心所である。

と説かれている通りである。

以上、円成実性を遍計所執性の無と定義する MAVBh、MSA、MS、TrBh の該当箇所を、註釈とともに分析した。その結果、これらは皆、円成実性を空性と同一のものとして扱っていることが明らかとなった。空性が二取の無、あるいは、我の無であるように、円成実性は遍計所執性の無であり、遍計所執性の無として有でもある。このように、空性を導き出す論理と円成実性を導き出す論理が一致し、両者が有する定義も一致する。以上の分析で、MAVBh に始まる円成実性の定義の変化は、空性に対する唯識学派の理解を背景として起こっていることが明らかとなった。

3-2-4. 小結

唯識学派の三性説が、『解深密経』以来、変遷を経て形成されたということは、三性のうち依他起性の定義の変化から確認できることであった。しかし、このことは依他起性だけではなく円成実性からも確認できる。したがって、三性説は、依他起性の定義の変化からわかるように、識説と結合する方向に展開する。一方、円成実性の定義の変化からわかるように、空性と結合する方向にも展開したと言える。

三性説が空性と結合する方向に展開されたということは唯識学派の三性説が既存の空思想を取り組む形で形成されたということを意味する。これは AS 等における唯識学派の空性の定義が MAVBh 以降の文献において、そのまま円成実性の定義として採用されている点に現れている。したがって、MAVBh に至って、空思想が三性説のなかに組み込まれたと言える。以上のように、三性説の形成に空思想が影響を与えていたことが、円成実性の定義の変遷から確認された。

第4章. 翻訳批判

4-1. 虚妄分別という複合語に対する二つの解釈

4-1-1. 序論

日本の学界において虚妄分別 (abhūtaparikalpa) は一般的に「虚妄なる分別」と理解されている。このように虚妄分別を「虚妄なる分別」と理解することは虚妄 (abhūta) と分別 (parikalpa) とから構成されている虚妄分別を前者が後者を形容詞として修飾する、或は、両者を同一のものと見なす同格関係の同格限定複合語 (karmadhāraya) として見ていることを意味する。

このように虚妄分別を同格限定複合語として理解するのは長尾雅人 (1907-2005) に代表される¹¹⁸。氏はそれを裏付ける主な根拠として1)識、即ち、虚妄分別によって現れる対象が実在しない虚妄なものであるからということと、2)依他起的な存在である虚妄分別は、円成実性に比べたら虚妄なものであるからということとを挙げている¹¹⁹。しかし虚妄分別が同格限定複合語だということが直接的に記述されている文献資料を根拠として提示しているのではない。

これに反して、西洋の研究成果では虚妄分別を格限定複合語 (tatpuruṣa) として理解する傾向が見つけられる。Th. Stcherbatsky は虚妄 (abhūta) が「非存在 (unexistent)」ではなく「非真実 (unreal)」を意味するということに注目して、それを現象的様子 (phenomenal appearance) と理解する。そして分別 (parikalpa) を、分別されたもの (parikalpita) と区別して、造り出すものとして理解する。最終的に、この虚妄分別を「real creator of the unreal」、「Reality which creates Appearance」として理解し、「The Universal Constructor of phenomena」と訳する¹²⁰。また、Mario D'Amato は虚妄分別を「unreal imagination」と訳するが、これが「imagination」が「unreal」であるということの意味するのではなく、「unreal」なるものを「imagine」するということの意味するのであると述べている。そしてこのような理解の根拠として安慧の註釈を言及している¹²¹。

本稿では虚妄分別という複合語の構造を説明する文献資料を紹介する。そしてその資料の分析に基づいて、虚妄分別には二つの表現様式があるということと、その複合語の解釈においても二つの傾向があるということ結論として述べる。

¹¹⁸ 長尾雅人の MAVBh の和訳 (長尾[1976])。また、長尾[1937: p. 79]の「虚妄とは真実有 (bhūta) ならざること、所謂そらごとであり、分別がかく虚妄なりとせらるる點に就いては、」、長尾[1967: p.1] の「もちろんこの「虚妄」と形容せられた「分別」は、単なる感覚よりは進んだ段階にある分別であり、思惟や判断も含んでいる」、長尾[1988: p. 6]の「虚妄という形容詞が冠せられているが、「虚妄なる分別」は識と全く同義に扱われる」の記述から虚妄 (abhūta) が分別 (parikalpa) に直接的にかかる形容詞として理解されているということが確認される。

¹¹⁹ 第一の根拠は長尾雅人[1967: p.15,1968:p.23]で、第二の根拠は長尾雅人[1952: p.462]で論じられている。そして、長尾雅人[1982: p.280脚注1]では、この二つの根拠がともに論じられている。

¹²⁰ Th. Stcherbatsky[1977:p. 16, NOTES p.11].

¹²¹ Mario D'Amato[2012: p. 117脚注1]. Mario D'Amato が提示している安慧の註釈はMAVT(Y) [13, 18-19]である。

4-1-2. 格限定複合語 (tatpuruṣa) としての虚妄分別

虚妄分別という用語は大乘經典においても見られる概念であるが¹²²、それが特殊な意味を持つ概念として本格的に使われたのは彌勒系の論書からである。その中でも MAV では虚妄分別が具体的に論述されている。ここでは、その註釈書である MAVBh とそれに対する真諦と玄奘の漢訳、また、窺基の『弁中辺論述記』と安慧の MAVT とにおける虚妄分別の註釈部分を検討する。

① 真諦訳と『弁中辺論述記』における虚妄分別解釈

MAVBh において世親は MAV k.1a の 虚妄分別 (abhūtaparikalpa) を 所取能取分別 (grāhyagrāhakavikalpa) と言い換えて註釈している¹²³。即ち、虚妄分別を虚妄と分別とに分け、そのうち虚妄 (abhūta) を所取能取 (grāhyagrāhaka) に、分別 (parikalpa) を 分別 (vikalpa) に対応させている。従って、虚妄分別における虚妄と分別との関係は所取能取と分別との関係に換言されると言える。

MAVBh の真諦訳では、この箇所が「虚妄分別者。謂分別能執所執。」¹²⁴と訳されている。語順上、この文章は能執所執が分別の後ろに位置しているから、「虚妄分別とは能執と所執とを分別することである」との意味で理解することができる。即ち、真諦は所執能執分別を同格限定複合語ではなく所執能執が分別の対象になる関係を形成する格限定複合語として読んでいるのである。

一方、玄奘はこの文章を「虚妄分別有者。謂有所取能取分別。」¹²⁵と訳して grāhyagrāhakavikalpa をそのまま翻訳している。この訳では所取能取と分別との関係が直接的に現れていない。しかし、これに対する窺基の註釈を見れば、玄奘も真諦と同様に grāhyagrāhakavikalpa を格限定複合語と理解していたということがわかる。窺基は次のように註釈する。

『弁中辺論述記』[T44, 2b8-14]

論曰。虚妄分別有者至能取分別。(=論曰。虚妄分別有者。謂有所取能取分別。)

述曰。此中一段皆始牒文而後申義。能取所取遍計所執緣此分別乃是依他。以是能緣非所執故。非全無自性。故名爲有。即所取能取之分別。依土釋名。非二取即分別持業。立號然此但約染分說妄分別有即依他。非依他中唯妄分別。有淨分別爲依他故。

論に言う。虚妄分別はあるということは、乃至、能取の分別がある

註釈して言う。その中この部分すべてはまず文章を表し、後に意味を解説する。能取所取は遍計所執〔性〕であり、これを縁じた分別は、即ち、依他〔起性〕である。これは能縁であって

¹²² 横山[1971: p.30]参照。

¹²³ MAVBh [18, 1].

¹²⁴ 『中辺論』[T31, 451a18]

¹²⁵ 『弁中論』[T31, 464b18]

所執ではないから、全く自性がないのではない。それ故に〔虚妄分別は〕有であると言われる。即ち、所取能取の分別であって依止積である。二取が、即ち、分別である持業〔積〕ではない。〔このように〕名称を立てるが、これはただ染分に基いて妄分別は有であり、依他〔起性〕であると説くのである。依他〔起性〕には妄分別のみあるのではない。淨分別もあって依他〔起性〕となる。

窺基は「所取能取分別」が依止積（格限定複合語）であって、所取能取が即ち分別を意味する持業積（同格限定複合語）ではないと註釈する。そして、このような複合語解釈の根拠は、「所取・能取は遍計所執〔性〕であり、これを縁じた分別は、即ち、依他〔起性〕である」という一文で窺われる。即ち、所取・能取の二取と分別とは三性の観点で区別されるものである。それゆえに、「所取能取分別」は同格関係の同格限定複合語にはならない。もし「所取能取分別」が同格限定複合語であれば、依他起性である分別が遍計所執性である所取能取と同一なものになり、虚妄分別が有であると言えないようになってしまう。したがって、窺基の註釈に従えば、「所取能取分別」は同格限定複合語ではない。

また、上記の引用文の中で「所取能取は遍計所執〔性〕であり、これを縁じた分別は、即ち、依他〔起性〕である」との説示から分別は所取能取を自らの対象としているのがわかる。それゆえに、窺基の註釈に依拠すれば、所取能取と分別との間には前者が後者の対象となる関係が形成されていると言える。

以上のことから、虚妄分別の言い換えである所取能取分別が格限定複合語であるから、虚妄分別も格限定複合語でなければならないということがわかる。また、真諦訳と窺基の註釈によると所取能取と分別との間には前者が後者の対象になる関係が形成されているから、虚妄と分別との間にも前者が後者の対象になる関係が形成されていることがわかる。

② MAVṬ における虚妄分別解釈

安慧は MAVṬ において虚妄分別を註釈する際に、まず虚妄分別を全体的に説明し、それから虚妄分別を虚妄（abhūta）と分別（parikalpa）とに分けて各々説明する。

虚妄分別を分けずに全体的に説明する部分は次のようである。

MAVṬ(Y) [13, 18-19]

abhūtaṃ asmin dvayaṃ parikalpyate anena vety abhūtaparikalpaḥ |

それにおいて、或は、それによって虚妄なる二つが分別されるから「虚妄分別」である。

ここで「虚妄」は「二つ」を修飾する形容詞として登場しており、「分別」は「分別される」（parikalpyate）という動詞として登場している。「虚妄」が「二つ」、即ち、所取能取にかかっていることは、虚妄分別という複合語の中で、「虚妄」は「分別」にかかる形容詞ではないということを示す。従って、虚妄分別は虚妄なる分別とならない。虚妄なるものは所取能取の二取だからである。

次に「分別」が動詞として登場しているということは「分別」はある働きを持つものだということを意味する。そして「分別」は「分別される」という受け身の形で表現されているから、この

文章の中でその働きを受けているもの、つまり、働きの対象となるものはこの文章の主語である虚妄なる二つだということがわかる。また、虚妄なる二つは虚妄分別において、或は、虚妄分別によって分別されるから「分別」という働きの主体は虚妄分別であるということもわかる¹²⁶。

従って、この場合、虚妄分別を虚妄なる分別という同格限定複合語と読むことはできない。虚妄は二取を指しているからであり、その虚妄なる二取は分別の対象となっているからである。

次に、安慧は虚妄分別を虚妄 (abhūta) と分別 (parikalpa) とに分けて次のように一つずつ説明している。

MAVT(Y) [13, 19-22]

abhūtavacanena ca yathāyaṃ parikalpyate grāhyagrāhakatvena tathā nāstīti pradarśayati / parikalpavacanena tv artho yathā parikalpyate tathārtho na vidyate iti pradarśayati |

「虚妄」と言う語によって、それが所取・能取として分別されるように、そのように存在しないということが示される。一方「分別」と言う語によって、対象が分別されるように、そのように対象は存在しないということが示される。

まず「虚妄」の部分からみると、所取・能取の二取は分別されるものとして登場している。さらに、その分別されるもの、二取は分別されるそのようには存在しないものとして説かれている。そして、このような二取の存在の状態、即ち、分別されるもののようには存在しないということが「虚妄」が意味する所となっている。従って、このような安慧の註釈にもとづけば、「虚妄」というのは二取が持つ存在の状態を形容する語であるから、「虚妄」は二取を修飾するものだということがわかる。「分別される」(parikalpyate)と登場している「分別」(parikalpa)にかかるものではないのである。

次に「分別」の部分を見ると、「分別」は「分別される」という動詞の形で言い換えられて登場している。そして、その分別されるものは、分別されるようには存在しないものとして記述されている。従って、「分別」とは存在しないものを分別すること、存在しないものを対象とすることである。そして、この「分別」が自分の対象とするものは、分別されるように存在しないもの、即ち、虚妄なるものである。それゆえに、このような安慧の「分別」の註釈に依拠すれば、「虚妄」は分別の対象に関係するということがわかる。「分別」に直接的に関係するのではないのである。

以上、安慧の虚妄分別に対する二つの註釈を分析してみた。その結果、虚妄は二取にかかる修飾語だということと、その虚妄なる二取は分別されるもの、分別の対象になるものだということが導き出された。従って、安慧の註釈によれば 虚妄分別は同格限定複合語ではなく、虚妄なる二

¹²⁶ 前の引用文での asmin、anena が何を指す代名詞であるかに関しては、以下の、MAVT において空性の無という特徴を註釈する部分で確認できる。

MAVT[本書120, 2-3]

dvayasya grāhyasya grāhakasya ca abhūtaparikalpe 'bhūtaparikalpena vā parikalpitātmakatvād vasturūpenā**ābhāvaḥ** |
所取・能取の二は虚妄分別において、あるいは、虚妄分別によって分別された本質のものだから、実在

(vastu) のあり方として**無**である

取 (abhūta) が分別 (parikalpa) の対象となっている格限定複合語であると言える¹²⁷。

MAVBh に対する二種の漢訳と窺基の註釈書、そして MAVT に記述されている内容を分析してみた結果、虚妄分別は同格限定複合語ではないということが明らかになった。以上の文献に限っては、虚妄は二取を形容するものであり、虚妄によって形容される二取は分別の対象になるものである。従って、この場合、虚妄分別は「虚妄なるもの（二取）を分別すること」、或は、「虚妄なるもの（二取）に対する分別」という意味の格限定複合語だということが導き出される。

また、これに加えて、虚妄分別というものは、虚妄なるもの、即ち、実在しないものを作り出す機能をもつものだということが明らかになった。分別の対象は実在しない虚妄なるものであり、その虚妄なるものは分別されるものである。そして、分別されるものとは実在しないのに実在するように分別されるものである。それゆえに、分別とは実在しないものを実在するように作り出す機能を有すると言える。したがって、虚妄分別は実在しないものを作り出す機能を持つものだということが、虚妄分別は格限定複合語だということと共に導き出される¹²⁸。

4-1-3. 同格限定複合語 (karmadhāraya) としての虚妄分別

虚妄分別という用語は MSA と *Viṃśatikā* (『唯識二十論』、以下 VŚ と省略する) とにも登場する。そしてその各々の註釈書である SAVBh と *Prakaraṇaviṃśatikāṭīkā* (以下 PvT と省略する) には虚妄分別という複合語の構造を知り得る文章が見受けられる。以下、各々の文献に登場する虚妄分別が MAV における虚妄分別と同一なものでありながら、同格限定複合語として解釈されていることを分析する。

① MSA における虚妄分別解釈

¹²⁷ ここで引用した MAVT の箇所は既に伊藤[2010]において分析されている。伊藤[2010]はこの MAVT の箇所だけでなく安慧が挙げている幻術の喩例、そして、これと同一の喩例が登場する MSA とそれに対する世親と安慧との註釈とを分析して、虚妄分別と虚妄なるものである二取との間には因果関係が成立するということを論証した。ただ、虚妄分別がどのような種類の複合語であるかに関しては直接的に言及していない。ちなみに、虚妄分別という複合語で、虚妄を果、分別を因と解釈することは真諦訳『摂大乘論釈』の増広部分 (T31,181b28-c01) でも窺われる。

¹²⁸ VŚ の第十偈の kalpitātmanā を説明する散文部での parikalpita (Tib. kun brtags pa) を sgro btags pa (Skt. adhyāropita 増益) と言い変えて表記している。

PvT(D)[184a4-6]

brtags pa'i ngo bo de la yang ji lta bu snyam pa la gang byis pa rnam kyis zhes bya ba la sogs pa smos so ll gang so so'i skye bo rnam kyis chos rnam la gzung ba dang 'dzin pa'i mtshan nyid kyi ngo bo nyid du sgro btags pa ni gzung ba dang 'dzin pa'i mtshan nyid du sgro btags pa'i bdag nyid des de dag bdag med kyi | sangs rgyas rnam kyi yul brjod du med pa gang yin pa yang med pa ni ma yin no ll

その分別された体(རྟུགས་ཀྱི་ལོ་ཤང་)に対して何であるかと思っている人に対して、「愚かな者たちは」云々という。諸凡夫たちによって諸法に対して所取・能取の相の自性として増益されたものは、「その」所取・能取の相として増益された本質と言う点で、「それらは無我であるが、」諸「佛の対象である言語を離れているもの、それが無であるのではない」。

それ故に虚妄分別の分別というものは存在しないものを存在するように見せる機能、実在しないものを作り出す機能を有するものである。

MSA において虚妄分別が登場する数々の箇所の中で、虚妄分別という複合語の構造を知り得る箇所は一切所知を論じる部分、SAVBh の註釈によると世間法と出世間法とを論じる部分である。

MSA[62, 20 - 63, 1]

**abhūtakalpo na bhūto nābhūto 'kalpa eva ca |
na kalpo nāpi cākalpaḥ sarvaṃ jñeyam nirucyate || (k.31)**

abhūtakalpo yo na lokottarajñānānukūlaḥ kalpaḥ | **na bhūto nābhūto** yas tadanukūlo yāvan nirvedhabhāgiyaḥ | **akalpas** tathatā lokottaram ca jñānam | **na kalpo nāpi cākalpo** lokottaraprṣṭhalabdham laukikam jñānam | etāvac ca **sarvaṃ jñeyam** |

虚妄分別と虚妄で虚妄でもない〔分別〕と無〔分別〕と分別でなく無分別でもないものが一切の所知だと説かれた。(k.31)

虚妄分別とは、出世間智に随順しない分別である。虚妄で、虚妄でもないとは、それに随順するもの、乃至順決擇分〔の分別〕である。無分別とは、真如と出世間智である。分別でなく、無分別でもないとは、出世間智の後に得られた世間智である。一切の所知はこれだけである。

ここにおいて虚妄分別は一切所知を虚妄と分別との有無を基準として分類する脈絡で、虚妄と分別を皆備えているものとして定められており、出世間無分別智と出世間後所得清浄世間智との関係で捉えられている。これに対する SAVBh の註釈は次のようである。

SAVBh(H) [92, 1-93, 4]

shes bya'i yongs su tshol ba'i tshigs su bcad pa ste zhes bya ba la | shes bya'i nram pa gnyis te | 'jig rten gyi chos dang 'jig rten las 'das pa'i chos te | chos gang dag ni 'jig rten gyi chos | chos gang dag ni 'jig rten las 'das pa'i chos yin pa brtags pa la tshigs su bcad pa kyis bstan to zhes bya ba'i don to ||

yang dag min rtog zhes bya ba la | yang dag pa ma yin la kun du rtog pa ni gang chos kyi dbyings dang nram par mi rtog pa'i ye shes 'thob pa dang rjes su mthun ba ma yin pa'i rtog pa ste | 'dod pa'i kham nas srid pa'i rtse mo man chad kyi sems can rnam kyi gzung ba dang 'dzin par kun du rtog pa ni yang dag pa ma yin par kun du rtog pa zhes bya'o |

yang dag min yang yang dag min zhes bya ba la | yang dag pa yang ma yin yang dag pa ma yin pa yang ma yin pa'i rtog pa ni so so'i skye bo'i dus na dam pa'i chos nyan pa dang sems pa la sogs pa nas brtsams te mos pa spyod pa'i sa 'jig rten gyi chos mchog man chad kyi rtog pa la bya ste | de'i tshe na gzung ba dang 'dzin pa'i rtog pa yod pas na yang dag pa ma yin pa zhes bya'o || chos kyi dbyings dang 'jig rten las 'das pa'i ye shes rtogs par bya ba dang rjes su mthun zhing de'i rgyu lta bur gnas pas na yang dag pa ma yin pa yang ma yin pa zhes bya'o ||

mi rtog ces bya ba la mi rtog pa ni chos kyi dbyings de bzhin nyid dang | 'jig rten las 'das pa'i ye shes nram par mi rtog pa'i ye shes la bya ste | ci'i phyir zhe na/ de gnyis la | gzung ba dang 'dzin pa la sogs pa'i rtog pa med pas na mi rtog pa zhes bya'o ||

rtog min mi rtog pa ma yin || zhes bya ba la | rtog pa yang ma yin mi rtog pa yang ma yin pa ni nram par mi rtog pa'i rjes las thob pa'i dag pa'i 'jig rten pa'i ye shes la bya ste | ye shes de la gzung ba dang 'dzin pa lta bur rtog ba med pas na mi rtog pa zhes bya ste | ci'i phyir zhe na | nram par mi rtog pa'i ye shes kyis ni chos kyi dbyings la dmigs te | nram par mi rtog pa'i ye shes la ni dag pa'i 'jig rten pa'i ye shes kyis dmigs pas na gzung 'dzin du rtog pa med do || mi rtog pa yang ma yin pa ni chos rnam kyi rang dang spyi'i mtshan nyid ni chos thams cad la sgyu ma dang smig rgyu lta bur rtog pa yod pa'i phyir |

thams cad shes par bya ste brjod || ces bya ba la | bzhi po 'di thams cad ni shes par bya ba'i yul yin zhes brjod de | shes par bya ba yang de tsam las lhag pa med pa'i phyir ro || de yang dag pa ma yin par shes par bya'o ||

所知を求める偈頌というのは、所知の種類は二つである。世間法と出世間法である。或る法が世間法であり、或る法が出世間法であるかを区別することに対して、偈は説明するという意味である。

虚妄分別とは、虚妄であり、分別であるものは法界と無分別智とを得ることに随順するものではない分別である。〔すなわち〕欲界から有頂(srid pa'i rtse mo, *bhāvāgra)までの有情たちが所取・能取を分別することが虚妄分別ということである。

虚妄で、虚妄でもないとは、虚妄で、虚妄でもない分別は異生の時に、清浄な法に対する聞と思等から始めて、信解行地(mos pa spyod pa'i sa, *adhimukticaryābhūmi)と世第一法('jig rten gyi chos mchog, *laukikāgradharma)までの分別を言う。そのときに、所取・能取の分別が存在する場合、「虚妄で」という。法界と出世間智とを分別することに随順しながら、その原因のようにとどまる場合、「虚妄でもない」と言う。

無分別とは、無分別は真如法界と出世間無分別智という智とを言う。なぜか。その二つに所取・能取等の分別がない場合「無分別」という。

分別でなく、無分別でもないということに対して〔言え〕、分別でもなく無分別でもないとは、無分別の後に得られた清浄な世間智を言う。その智慧に所取・能取のような分別が無いことに依る場合、「無分別」という。なぜか。無分別智が法界を所縁とし、無分別智を清浄な世間智が所縁とする場合、所取・能取を分別することがないからである。「無分別でもない」とは、諸法の自共相が、一切法において、幻と幻影のように、分別は存在するからである。

一切の所知だと説かれたということに対して〔言え〕、この四つの「一切」が「所知」の対象であると「説かれた」。この所知以外にはないからである。それ（此の四つ）は虚妄であると知るべきである。

以上の引用文から見れば、虚妄分別は無分別智に随順しないもの、無分別智に反するものであって、修行体系からみれば結局否定されるべきものとして設定されている。そして虚妄分別は「所取と能取とを分別すること」と説明されているから、ここにおける虚妄分別は MAV の虚妄分別と同一なものである。しかし、SAVBh ではそれを「虚妄であり、分別である」と分解して書いているから、この場合の虚妄分別は同格限定複合語である。したがって、SAVBh では MAVṬ と異なる複合語の解釈を見せていると言える。

② VŚ における虚妄分別解釈

VŚ において虚妄分別は世親が有情の認識は夢での認識と異ならないということを主張する部分で発見される。該当部分を引用すると次のようである。

VŚ [9,11-16]
idam ajñāpakam | yasmāt |

svapnadṛgviśayābhāvaṃ nāprabuddho 'vagacchati || (k.17)

evam vitathavikalpābhyāsavāsanānidrayā prasupto lokaḥ svapna ivābhūtam arthaṃ paśyan na prabuddhas tadabhāvaṃ yathāvan nāvagacchati | yadā tu tatpratipakṣalokottaranirvikalpajñānalābhāt prabuddho bhavati tadā tat pṛṣṭhalabdhaśuddhalaūkikajñānasam mukhībhāvād viśayābhāvaṃ yathāvad avagacchatīti samānam etat |

これは論拠にならない。なぜならば、

夢で見る対象が存在しないということを目覚めていない者は悟らない。(k.17)

このように、虚妄分別を繰り返すことによる習氣という睡眠によって眠っている世間〔人〕は、夢においてのように、実在しない対象を見るが、目覚めた人はそれが実在しないということを実に悟らないのではない。しかし、それを對治する出世間無分別智を得ることによって目覚めるようになるとき、その後に得られた清浄な世間智が現前するようになることから、対象が存在しないことを如実に悟る。それ故に、それは〔夢での対象と〕等しいのである。

ここで注目されることは、VŚにおける虚妄分別は MAV と MSA とは違って、abhūtaparikalpa ではない vitathavikalpa として登場していることである¹²⁹。しかし真谛と玄奘との漢訳では vitathavikalpa が MAV での abhūtaparikalpa と同一に、虚妄分別と訳されている¹³⁰。このように VŚ において虚妄分別は vitathavikalpa という単語で表記されているが、次の三つの点から見れば vitathavikalpa は abhūtaparikalpa と同一なものだということがわかる。

第一は MAV での abhūtaparikalpa が実在しない対象を造り出す機能を持っているように、VŚ の vitathavikalpa も実在しない対象を造り出す機能を持っているものとして記述されている点である。それは vitathavikalpa が睡眠と譬喩され、実在しない対象は夢での対象と譬喩されていることからわかる。睡眠によって夢を見るように、vitathavikalpa によって実在しない対象を見るのである。それ故に vitathavikalpa は実在しない対象の原因であって、実在しない対象を造り出す機能を持っているとすることができる。

第二は VŚ の vitathavikalpa は MSA の abhūtaparikalpa と同一の脈絡で、同一の意味のものとして取り扱われている点である。VŚ で vitathavikalpa は MSA の abhūtaparikalpa と同一に出世間無分別智と出世間後所得清浄世間智との関係で記述されている。そして MSA の abhūtaparikalpa が無分別智に反するもの、修行体系で結局否定されるべきものとして理解されているように、VŚ での vitathavikalpa も出世間無分別智によって對治されるもの、対象を如実に見るためには否定されるべきものとして理解されている。それ故に VŚ の vitathavikalpa は、修行体系での脈絡で、MSA の abhūtaparikalpa と同一の意味のものと見なされていると言える。

第三は MAV と MSA との abhūtaparikalpa が所取・能取の二取分別と同一のものとして言い換えられているように、vitathavikalpa も二取分別を意味するものとして考えられている点である。PvT では VŚ のこの部分を次のように註釈している。

PvT(D) [191a6-191b4]

¹²⁹ VŚ(D)[8b4]においても虚妄分別はabhūtaparikalpa の訳語である yang dag pa ma yin pa kun tu rtog pa ではない log par mam par rtog pa と訳されている。

¹³⁰ 『大乘唯識論』[T31, 73a20]、『唯識二十論』[T31, 76c10]。

gzugs la sogs pa byis pa'i skye bos yongs su brtags pa dag ni 'jig rten las 'das pa'i ye shes kyi yul ma yin te/ gang dag de'i yul gyi dngos por ma gyur pa de dag gi rtog pa'i shes pa dag pa 'jig rten pa zhes bya ba rnams kyis sel to ll de bas na de ni mtshungs so ll

'jig rten las 'das pa rnam par mi rtog pa'i ye shes thob ces bya ba ni 'jig rten dang mi mthun pas 'jig rten las 'das pa'o ll gzung ba dang 'dzin pa'i rnam par rtog pa med pa'i phyir rnam par mi rtog pa'o ll

de'i rjes las thob pa dag pa 'jig rten pa'i ye shes mngon du gyur zhes bya ba na¹³¹ de'i rjes las thob pa ste l de zhes bya ba ni 'jig rten las 'das pa'i ye shes dang sbyar ro ll rjes zhes bya ba ni stobs la bya'o ll de ni de'i rjes las thob pa yang yin la dag pa 'jig rten pa'i ye shes kyang yin no zhes bsdu'o ll

gzung ba dang 'dzin par mngon par zhen pa'i bag chags spangs pa'i phyir dag pa'o ll mngon par zhen pa med kyang gzung ba dang 'dzin pa'i rnam par 'byung bas 'jig rten pa'o ll

'dir de'i spyi'i don ni spros pa'i bag chags nang na gnas pa yongs su smin pa'i dbang gis gzugs la sogs pa'i don snang pa'i shes pa rnams 'khor ba'i gnas su 'jug ste l gang gi tshe 'jig rten las 'das pa'i ye shes kyis bag chags de dag spangs par gyur pa de'i tshe dag pa 'jig rten pa'i ye shes byung nas yul med par rtogs so ll
愚かな者によって遍計執された色等は出世間智の対象ではない。それ(出世間智)の対象としての存在とならないそれら(遍計執された色等)の分別智は清浄な世間〔智〕というものによって除去される。それ故にそれは〔夢と〕等しいのである。

出世間無分別智を得るということは、世間と等しくないから「出世間」である。所取・能取の分別がないから「無分別」である。

その後に得られた清浄な世間智が現前するようになるということはその後に得られるのであって、それというのは、出世間智にかかる。後というのは力である。それ（出世間後所得清浄世間智）はそれ（出世間智）の後に得られるものであり、清浄な世間智でもあるというように〔この複合語は〕構成されている。

所取・能取を貪着することの習氣が除去されたから清浄である。貪着することはないけれども、所取・能取の行相として起こるから世間である。

ここにおける要義は、内に留まって構想する(spros pa)習氣が成熟する力によって、色等の対象として顕現する智が輪廻の所依として設定される〔ということである〕。出世間智によってその習氣が除去されたそのとき、清浄な世間智が生じて対象が存在しないことを了解する。

ここにおいて vitathavikalpa は清浄な世間智によって除去される世間智として記述されている。そして出世間無分別智は世間と等しくなく所取・能取の分別がないものとして、出世間後所得清浄世間智は所取・能取の行相として起こるが、所取・能取を貪着することの習氣は除去されているものとして註釈されている。つまり、vitathavikalpa の反対概念である無分別には所取・能取の分別がないということであり、vitathavikalpa と同様に世間智に属する出世間後所得清浄世間智には所取・能取に対する貪着はないが、所取・能取の行相はあるということである。

以上のことから見れば、世間智としての vitathavikalpa は、無分別智と比較すれば、所取・能取の分別があるものであり、出世間後所得清浄世間智と比較すれば、所取・能取の行相と所取・能取に対する貪着とも持っているものである。それ故に abhūtaparikalpa が二取分別と言い換えられるように、vitathavikalpa も二取分別を意味するものであるとすることができる。

¹³¹ PvT(P)[226b4]では ni となっている。PvT(P)に従って読んだ。

以上の三つの点から VS の vitathavikalpa は MAV・MSA の abhūtaparikalpa と別なものではないということが導き出された¹³²。次に、このような意味の vitathavikalpa が同格限定複合語として解釈されているのは、この複合語に対する PvT の註釈から確認できる。

PvT(D)[191a2-a4]

de ni log pa yang yin la rnam par rtog pa yang yin no zhes bsdu'o || ¹³³de la goms pa ni log par rnam par rtog pa la goms pa ste | yang dang yang mngon du gyur pa ni goms pa zhes bya'o || log par rnam par rtog pa de las byung ba'i bag chags gang yin pa de la de skad ces bya'o || gnyid dang 'dra ba'i bag chags rnam pa de lta bu de la gnyid ces bya'o ||

それは虚妄でもあり、分別でもあると〔この複合語は〕構成されている。それに対して繰り返すことが虚妄分別を繰り返すことである。常に現前することを繰り返すことと言う。その虚妄分別から起こる習氣、それ(習氣)に対してこのように言うのである。睡のような習氣、そのようにそれ(習氣)に対して睡眠と言う。

vitathavikalpa は「虚妄分別を繰り返すことによる習氣という睡眠によって (vitatha-vikalpa-abhyāsa-vāsanā-nidrayā)」という複合語を分析する部分で、「虚妄でもあり、分別でもある」という形で分解されている。それ故に VS において使われている虚妄分別 (vitathavikalpa) は PvT による場合、同格限定複合語である。

以上 MSA と VS とにおいて登場している虚妄分別を SAVBh と PvT との註釈内容に基づいて考察した。その結果、MSA と VS とでは虚妄分別を同格限定複合語として解釈している箇所が登場し

¹³² abhūtaparikalpa と vitathavikalpa を構成する各単語間の同一性に対しては、まず parikalpa と vikalpa とは abhūtaparikalpa が grāhyagrāhakavikalpa と言い換えられていることから、また、TrT(D)52b6-7での rnam par rtog pa zhes bya ba dang yongs su rtog pa zhes bya ba ni don gcig go || という文章からも確認できる。abhūta と vitatha との場合、abhūta は分別されたように存在しないという存在の状態を意味し、そのような状態のものである二取を指す表現として使われている(MAVT(Y)[13, 19-21])。そして今引用しているVSの箇所ではないが、VSの第二十偈の散文部で登場している vitathapratibhāsa の vitatha をPvTは次のように註釈する。

PvT(D)[194b7]

'di ltar de dag gi sems de ni gzung ba dang 'dzin pa'i rnam pas log pa'o || de ltar yang dag pa'i don du na de dag gi sems de ni gzung ba dang 'dzin pa dang bral ba yin na | gnyis su med pa'i ngo bo'i sems la gnyis kyi rnam pa ni log pa yin no ||

なぜならば彼らのその心は所取・能取の行相であるから「真実でない」のである。即ち、本来彼らのその心が所取・能取を離れているのに対して、二つとして無である本質の心に二つの行相が“真実でない”のである。

即ち、二取の行相、本来二取を有しない心に存在する二取の行相が vitatha と表現されているのである。abhūta と vitatha といずれも二取を指している。従って虚妄分別と漢訳される abhūtaparikalpa と vitathavikalpa とが同一な意味のものであることは、その複合語を構成している各々の単語の意味からも支持される。

¹³³ PvT(P) [226a5-6]ではこの文章が de ni log pa yang ma yin la rnam par rtog pa yang ma yin no || zhes bsdu pa'o || となっている。しかし、この文章はVSを註釈する順番からみると、VSの vitathavikalpābhyāsavāsanānidrayā という複合語を分解しながら註釈する部分であると考えられる。『世親唯識の原典解明』p.105,1ではこの文章をPvT(P)に従って訳し、この文章の主語である「de」は prabuddha (醒めたる)を指しているとしている。しかし、そうする場合、その次の文章で又出てくる代名詞「de」は prabuddha を意味するようになる。そしてこの文章で「de」が prabuddha を意味するとすれば、prabuddha を「繰り返すこと」が虚妄分別を「繰り返すこと」になってしまう。また bsdu pa という動詞は先の引用文の出世間後所得清浄世間智という複合語を分析する部分でも使われている。従って、今のこの文章も複合語を分析する文章であると言える。しかし prabuddha は複合語ではない。それ故に「de」が指すのは「繰り返すこと」の対象となっている虚妄分別という複合語である。そして虚妄分別が「虚妄でもなく、分別でもない」と分解される場合は有り得ないから、この文章はPvT(D)に従って読んだほうが正しいと思われる。

ているということと、VŚ では虚妄分別が abhūtaparikalpa ではなく vitathavikalpa と表現されているということが確認された¹³⁴。

4-1-4. 小結

MAV と MSA と VŚ とで登場している虚妄分別をその複合語解釈に焦点を当てて検討した。その結果、虚妄分別には二つの表現様式があるということと、その複合語の解釈においても二つの傾向があるということが確認された。すなわち、虚妄分別は MAV と MSA とにおいては abhūtaparikalpa として、VŚ においては vitathavikalpa として表記されている。それゆえに虚妄分別には abhūtaparikalpa と vitathavikalpa という二つの表現様式があると言える。そして、虚妄分別の複合語に対しては、MAV では格限定複合語として解釈されているが、MSA と VŚ とでは同格限定複合語として解釈されている。このように格限定複合語と同格限定複合語という二つの解釈を支持する文献的な根拠が各々発見されたので、虚妄分別という複合語には二つの解釈傾向があると言える。以上のように、虚妄分別という複合語には二つの表現様式と、二つの解釈傾向があるということがいえよう。

4-2. 『中辺分別論』における grāhyagrāhakabhāva の意味

4-2-1. 序論

MAVBh においては grāhyagrāhakabhāva (以下 ggbh と省略する) という語句が登場する¹³⁵。従来、この語句の bhāva は「体」、「もの」、「実物」等の語で訳されてきたが¹³⁶、最近、「関係」と訳する傾向にある¹³⁷。これに対して、北野氏は多数の論文で「関係」と訳するのは不適切であると批判した¹³⁸。本稿は、北野氏の見解に賛同する立場で、MAVBh における ggbh の bhāva は「関係」ではないことを MAVT に基づいて論証する。

¹³⁴ 虚妄分別という語は大乘経典においても登場する。松田[2018a]は大乘経典においても虚妄分別は格限定複合語として理解されているということを『菩薩藏経』を典拠として論証している。

¹³⁵ MAVBh[18, 2-3] śūnyatā tasyābhūtaparikalpasya grāhyagrāhakabhāvena virahitā. また、ggbh は TrBh においても登場する。TrBh[40, 1-2] tasyeti paratantrasya pūrveṇeti parikalpitena | tasmin vikalpe grāhyagrāhakabhāvaḥ parikalpitaḥ. 本稿では MAVBh の ggbh に考察の範囲を限定する。

¹³⁶ 順番通り、山口[1935: p.18, 14]、長尾[2005: p. 233, 1-2]、兵藤[2010: p. 361, 7-8]の翻訳。そのうち、山口訳は MAVBh ではなく MAVT で註釈のために引用する MAVBh の ggbh 箇所に対する翻訳である。また、小谷[2017]は当該の ggbh を「所取と能取であること」と訳している。

¹³⁷ 三穂野[2003: p.25, 21-22]、金[2007: p. 91, 10-11; p. 93, 23-24]、那須[2009: p.281, 7-8]。これら三つの研究は従来の訳語とは違って「関係」という訳語を採用しているが、その理由に関しては述べていない。

¹³⁸ 北野[2014; 2015; 2016a; 2016b; 2017]。北野の研究は MAVBh のみならず、TrBh の ggbh の訳に関しても検討する。本稿では、MAVBh の ggbh に検討の範囲を限定する。

4-2-2. grāhyagrāhakabhāva の登場文脈

ggbh は MAV I.k1 に対する世親の註釈において登場する¹³⁹。k.1 は「虚妄分別」、「所取・能取」、「空性」という三つの概念の有無について虚妄分別を中心に記述したものである¹⁴⁰。そして、k.2 では同一の内容が「空」を述語として、再び記述される¹⁴¹。世親の註釈によれば、この k.1 と k.2 は虚妄分別の有無相を述べる箇所である¹⁴²。このうち、有相とは虚妄分別が存在するというものであり、無相とは虚妄分別において所取・能取の二取が存在しないということである。このように、「虚妄分別」に有と無という二つの特性があるということ、「虚妄分別の有無相」を論じることが MAV k.1、k.2 の主題である。

さて、ggbh は MAV k.1 に対する世親の註釈の中でも、k.1 で挙げている三つの概念のうち、「空性」を定義する箇所で登場する。「空性」とは「虚妄分別」の空性である。「虚妄分別」は空であるからである。そして、「虚妄分別」が空であるということは「虚妄分別」が「所取・能取」について空であるということである。「所取・能取」が「虚妄分別」には存在しないからである。したがって、「空性」とは「虚妄分別」に「所取・能取」が存在しないことである。

このような空性の意味を、世親は ggbh という語句を用いて「śūnyatā tasyābhūtaparikalpasya grāhyagrāhakabhāvena virahitatā」と表す。「虚妄分別に二取が存在しない」ということが、ここでは「虚妄分別が ggbh から離れている」と言い換えられている。このように、問題の ggbh は「虚妄分別」に存在しないもの、虚妄分別の有無相の観点からみれば無相に相当するものである。これは ggbh が登場する文脈を示す。ggbh は虚妄分別という一つのものが有する二つの特性、有相と無相とを述べる際に、無相に相当するものを言及するとき登場する。

以下、虚妄分別の有無相に対する安慧の註釈において、虚妄分別の無相に関する表現を収集し、ggbh の bhāva が何を意味するのかを考察する。

4-2-3. 安慧註釈の検討

¹³⁹ MAVBh[18, 2-3]. MAVBh において ggbh が登場するのはこの箇所だけである。

¹⁴⁰ MAVBh[17, 16-17]

abhūtaparikalpo 'sti dvayan tatra na vidyate |
śūnyatā vidyate tv atra tasyām api sa vidyate || (k.1)
虚妄分別は存在する。そこに二は存在しない。しかし、そこ（虚妄分別）に空性は存在する。また、そこ（空性）にもそれ（虚妄分別）は存在する。(k.1)

¹⁴¹ MAVBh[18, 8-9]

na śūnyam nāpi cāśūnyam tasmāt sarvvaṃ vidhīyate |
satvād asatvāt satvac ca madhyamā pratipac ca sā || (k.2)
それゆえに、一切は空ではなく、空でないのでもないと言われる。
有であるから、無であるから、また、有であるからである。そして、それが中道である。
(k.2)

¹⁴² MAVBh[18, 19-20; 22, 12]

兵藤[2010]は ggbh の bhāva が安慧の註釈で「自性 (svabhāva)」と言い換えられていることを根拠として、ggbh を「所取と能取の実物」と訳する¹⁴³。このことより、bhāva は「自性・実体」と意味が同様であると結論づける。さらに、安慧の註釈では、所取・能取に bhāva、svarūpa、ātman が付加された表現が登場していることも指摘する¹⁴⁴。したがって、兵藤説によれば、bhāva は「関係」ではない。

しかし、兵藤[2010]は ggbh の翻訳の問題を主題としたものではないので、ggbh の言い換えに関して詳細に論じてはいない。そこで、本稿では兵藤[2010]が指摘する諸箇所、虚妄分別に存在しない二取に関する表現を、一つ一つ検討しながら、ggbh に適切な訳語を考察することにする¹⁴⁵。

① svabhāva

MAVBh の ggbh 箇所に対する MAVṬ の註釈においては bhāva を svabhāva と言い換えている。次のようである。

MAVṬ(Y)[14, 4-7]

grāhyagrāhakabhāvena virahitā¹⁴⁶ viviktatā hy abhūtaparikalpasya śūnyatā | na tv abhūtaparikalpo 'py abhāvaḥ / yathā śūnyā rajjuḥ sarpasvabhāvenātatsvabhāvatvāt sarvakālaṃ śūnyā na tu rajjusvabhāvena¹⁴⁷ | tatthehāpi |

ggbh から離れていること¹⁴⁸とは、分離性が虚妄分別の空性である。しかし、虚妄分別も存在しないのではない。例えば、縄は蛇の自性については空である。それ（蛇の自性）を自性とするものではないから、常に空である。しかし、縄の自性については〔空では〕ない。この場合もそれと同様である。

まず、虚妄分別が ggbh から離れていることが虚妄分別の空性になるが、これが虚妄分別の無を意味するのではないと、虚妄分別には無相と有相とがあること述べる。つづいて、虚妄分別と所取・能取とを、それぞれ、縄と蛇とに喩え、虚妄分別の有無相を説明する。

縄は蛇の自性 (svabhāva) については空であるが、縄の自性 (svabhāva) については空ではない。すなわち、縄には縄の自性 (svabhāva) は存在するが、蛇の自性 (svabhāva) は存在しない。この譬喩からみれば、虚妄分別には虚妄分別の自性は存在するが、所取・能取の自性 (svabhāva) は存在しない。この二つの自性は各々虚妄分別の有相と無相に相応するものである。したがって、MAVBh において虚妄分別の無相として提示される ggbh が、ここでは、所取・能取の自性

¹⁴³ 兵藤[2010: p. 361, 7-8]

¹⁴⁴ 兵藤[2010: p. 362, 9-18; p. 392, 13-33(脚注70)]

¹⁴⁵ 北野[2015: pp. 46, 3-50, 13]も兵藤説を検討して ggbh を「所取・能取関係」と訳するのは不適切であると結論付ける。北野[2014]は兵藤[2010]で提示された言い換えのうち、svarūpa と svabhāva を検討している。本稿は、それに加え、ātman と言い換えられる場合も検討し、各々の言い換えの意味に基づいて ggbh の適切な訳語を考察する。

¹⁴⁶ MAVṬ(Y), rahitā. MAVBh, MAVṬ(Mi), MAVṬ(O) に従い virahitā と校訂した。

¹⁴⁷ MAVṬ(Y), Ms, rajjuḥ svabhāvena. Tib, MAVṬ(Bh/T), MAVṬ(Pa), MAVṬ(Mi), MAVṬ(O) に従い校訂した。

¹⁴⁸ 三穂野[2003: p. 104, 19]は「所取と能取の関係を欠いていること」と訳する。

(svabhāva) と言い換えられているから、このことより、ggbh の bhāva は「自性 (svabhāva)」と意味を共有していることが確認される。

② ātman

MAV I.k.3 からは、議論の主題が虚妄分別の自相が変わる。MAVBh では、それ (k.3) に先立ち、虚妄分別の有無相をまとめる。そして MAVṬ は、これに従い、虚妄分別の有相と無相とを要約的に註釈する。ggbh は、この際、虚妄分別の無相に対する註釈において、再び登場する。その際に、安慧も、世親と同様に、虚妄分別の有無相のうち、無相を表すために ggbh という語を用いる。次のようである。

MAVṬ(Y)[16, 5-11]

*evam abhūtaparikalpasya sallakṣaṇam asallakṣaṇam ca khyāpayitveti*¹⁴⁹ *sattvena lakṣyata iti sattvam eva sallakṣaṇam | abhūtaparikalpo 'stīty tenābhūtaparikalpasya*¹⁵⁰ *sattvam*¹⁵¹ *pradarśayatīty arthaḥ / evam asattvena lakṣyata iti | asattvam evāsallakṣaṇam | tat punar yad grāhyagrāhakabhāvenāsattvam | yasmād abhūtaparikalpe dvayaṃ nāsti | tasmād abhūtaparikalpo 'pi dvayātmanā nāstīty uktam bhavati ||*

このように虚妄分別の有相と無相を説明しおわってからとは、〔虚妄分別は〕有として特徴づけられるから有こそが有相である。虚妄分別は存在するということ、これによって虚妄分別の有が示されたという意味である。同様に、無として特徴づけられるから無こそが無相である。実に ggbh として無である¹⁵²。虚妄分別に二〔取〕は存在しないから、虚妄分別も二〔取〕の本質 (ātman) として存在しないと説かれたことになる。

上記の引用文では、ggbh とともに、所取・能取、および、所取・能取の本質 (ātman) が虚妄分別に存在しないものとして登場する。安慧はこれら三つを一つに連結させる。すなわち、虚妄分別の無相は虚妄分別が ggbh として無であることである。そして、虚妄分別が ggbh として無であるのは虚妄分別に所取・能取が存在しないからである。それゆえに、虚妄分別は所取・能取の本質 (ātman) として存在しないのである。このように、三つの表現は互いに同一の意味として連結される。この註釈に基づけば、「ggbh として無」とは、所取・能取の本質 (ātman) として存在しない」ことである。したがって、ggbh の bhāva が「本質 (ātman)」に言い換えられているから、このことより、ggbh の bhāva は「本質 (ātman)」と意味を共有していることが確認される。

「本質 (ātman)」という言い換えは、MAVṬ の他の箇所においても窺われる。k.1 と同様に虚妄分別の有無相を論じる k.2 には「一切法は空ではなく空でないのでもない」という語句が登場する¹⁵³。世親は一切法が空でないのは空性と虚妄分別とが存在するからであり、空でないのでもないのは二取は存在しないからであると註釈する。さらに、一切法とは有為法と無為法のことであ

¹⁴⁹ MAVṬ(Y). *khyāpayitveti*dam. Ms, MAVṬ(Bh/T), MAVṬ(O) に従い校訂した。

¹⁵⁰ MAVṬ(Y). *vidyata ity anenābhūtaparikalpasya*. MAVṬ(Bh/T), MAVṬ(O) に従い校訂した。

¹⁵¹ MAVṬ(Y). *sat*. MAVṬ(Bh/T), MAVṬ(Pa), MAVṬ(Mi), MAVṬ(O) に従い校訂した。

¹⁵² 三穂野[2003: p. 118, 19]は「さらにそれ（無という特相）は所取・能取関係という点でも非存在である」と訳する。

¹⁵³ MAVBh[18, 8-9]

て、有為法に当たるのが虚妄分別であり、無為法に当たるのは空性であると k1 で登場した三つの概念と一切法を連結付ける。

安慧は、以下の註釈を通じて、一切法を構成する有為法と無為法とが、各々、空ではなく、空でないのでもないことを説明する。

MAVṬ(Y)[15, 15-21]

*sattvād abhūtaparikalpasya*¹⁵⁴ *na saṃskṛtam abhūtaparikalpātmanā śūnyam*¹⁵⁵ / *asattvād dvayasya*¹⁵⁶
grāhyagrāhakātmanā śūnyam | *śūnyatāyās tu sattvam*¹⁵⁷ *abhūtaparikalpe taddharmateti kṛtvā śūnyatāyām*
apy abhūtaparikalpo dharmmirūpeṇa vidyate | *evam asaṃskṛtam api dharmmatārūpeṇa na śūnyam* |
abhāvasaṃjñakena dvayrūpeṇa śūnyam |¹⁵⁸

虚妄分別が有であるからとは、有為法は虚妄分別の本質について空ではない〔という意味である〕。「二つが無であるから」とは、〔有為法は〕所取・能取の本質 (ātman) について、空である〔という意味である〕。〔「空性の中には虚妄分別が、虚妄分別の中には空性があるから」とは、〕しかし、空性は虚妄分別において有である。それ（虚妄分別）の法性であるからである。また、虚妄分別も空性において有法のあり方で存在する。このように無為〔法〕は法性というあり方について空ではない。無という二〔取〕のあり方については空である。

有為法を註釈する箇所において虚妄分別の有無相が論じられている。虚妄分別の有相は、虚妄分別である有為法が虚妄分別の「本質 (ātman)」については空ではないということである。そして、虚妄分別の無相は、有為法は所取・能取の「本質 (ātman)」については空であるということである。

このうち、無相として登場するものが問題の ggbh に相当するものであって、ここでは、所取・能取の「本質 (ātman)」と表現されている。これは、前の場合と同様に、ggbh の bhāva が「本質 (ātman)」と言い換えられるものであることを示す。したがって、ggbh の bhāva が「本質 (ātman)」と意味を共有していることがこの引用文からも確認できると言える¹⁵⁹。

また、ここで用いられている「本質 (ātman)」という語は「あり方 (rūpa)」とも意味を共有する。なぜならば、無為法の非空・非不空を論じるときに、有為法の場合に用いられた「本質 (ātman)」という語が無為法の註釈では「あり方 (rūpa)」という語で登場しているからである。このように、「本質 (ātman)」と「あり方 (rūpa)」とは同一の構造で同一の機能を行う。したがって、「本質 (ātman)」は「あり方 (rūpa)」と意味を共有する。

¹⁵⁴ MAVṬ(Y). *sattvād ity abhūtaparikalpasya*. N, MAVṬ(Pa), MAVṬ(Mi), MAVṬ(O) に従い校訂した。

¹⁵⁵ MAVṬ(Y). *na saṃskṛtam śūnyam abhūtaparikalpātmatvena*. Tib, MAVṬ(Mi) に従い校訂した。また、MAVṬ(O) は *na saṃskṛtam śūnyam abhūtaparikalpātmanā* と校訂している。

¹⁵⁶ MAVṬ(Y). *asattvād iti dvayasya*. MAVBh, MAVṬ(Pa), MAVṬ(Mi), MAVṬ(O) に従い校訂した。

¹⁵⁷ MAVṬ(Y). *sarvam*. Tib, MAVṬ(O) に従い校訂した。

¹⁵⁸ MAVṬ(Y). *abhāvasaṃjñakena dvayena rūpaśūnyam*. Tib (dngos po med ces bya ba gnyis kyi ngo bos stong pa'o) に従い校訂した。

¹⁵⁹ 北野[2015: pp. 53, 4-54, 10] は、MAVṬ の当箇所ではなく、MAVṬ 第三章の一箇所 (MAVṬ(Y)[114, 20-115, 6]) を引用して、ggbh の bhāva が ātman に言い換えられていることを指摘する。

③ rūpa¹⁶⁰

先の検討では、ggbh の bhāva が「本質 (ātman)」の言い換えであることを確認した。それゆえに、「本質 (ātman)」は「あり方 (rūpa)」に言い換えられるものであるから、bhāva も「あり方 (rūpa)」と意味を共有すると言えるであろう。

実際に ggbh を所取・能取の「あり方 (rūpa)」と表現する箇所が MAVṬ において認められる。次のようである。

MAVṬ(Y)[10, 12-17]

nanv evaṃ sūtravirodhaḥ sarvadharmāḥ śūnyā iti sūtre vacanāt | nāsti virodhaḥ | yasmā

dvayaṃ tatra na vidyate |

abhūtaparikalpo hi grāhyagrāhakarūparahitataḥ¹⁶¹ śūnya ucyate na tu sarvathā svabhāvo nāsti¹⁶² / ato na sūtravirodhaḥ /

【問】そうであれば（虚妄分別が存在するとすれば）、経と矛盾するのではないか。「一切法は空である」と経に説かれているからである。【答】矛盾しない。なぜならば、

そこに二つは存在しない

からである。虚妄分別は、実に、所取・能取のあり方から離れているから、空であると言われる。しかし、まったく自性がないのではない。それ故に、経と矛盾しない。

この箇所では「虚妄分別が存在する」という文句が「一切法空」と矛盾しないことを論じる。虚妄分別が存在するという事実と、一切法が空であるということは矛盾しない。虚妄分別も空であるからである。そして、虚妄分別が空であるということが虚妄分別が有であるということと矛盾するのでもない。「空」はあるものの無のみならず別のあるものの有も意味するからである¹⁶³。そして、虚妄分別が空であるということは虚妄分別が二取について空であるということである。それゆえに、「虚妄分別が空である」ということは虚妄分別の有と二取の無を意味する。

このように空によって現れる虚妄分別の有と二取の無は、各々、虚妄分別の有相と無相とに相応する。安慧は有相に相応するものを虚妄分別の自性 (svabhāva) と表現し、無相に相応するものを所取・能取の「あり方 (rūpa)」と表現する。このうち、無相として挙げられる所取・能取の「あり方 (rūpa)」は MAVBh の ggbh に相応すると言える。MAVBh において ggbh は虚妄分別に存在しないものとして登場するからである。このように、ggbh の bhāva は「あり方 (rūpa)」と言

¹⁶⁰ 兵藤[2010: p. 392,13-15]は以下の引用文で登場する grāhyagrāhakarūparahitataḥ の rūpa を MAVṬ(Y) の校訂に従って svarūpa と還梵し、svarūpa が ggbh の bhāva の言い換えであると指摘する。しかし、この箇所に対応するチベット語は ngo bo である。MAVṬ 第一章に限って言えば、チベット語 ngo bo は rūpa に、rang gi ngo bo は svarūpa に対応する。そこで、本稿では MAVṬ(Y) の校訂に従わず、rūpa と還梵した。

¹⁶¹ MAVṬ(Y). grāhyagrāhakasvarūparahitataḥ. Tib に従い校訂した。

¹⁶² MAVṬ(Y). sarvathā niḥsvabhāvaḥ. Tib, MAVṬ(O) に従い校訂した。

¹⁶³ 「空」により現れる有と無との意味は「A に B がいないとき、A は B について空である。そして、A に余れるもの、C は存在する」という「空性の定型句」から確認される。ここで、無として否定されるのは B のみであって、A と C とは有である。

い換えられている。このことより、ggbh の bhāva は「あり方 (rūpa)」と意味を共有していることが確認される。

以上、MAVBh の ggbh が虚妄分別に存在しないものを意味することに着目し、MAVṬ で登場する虚妄分別に存在しないものに関する表現を検討した。その結果、ggbh の bhāva は svabhāva、ātman、rūpa という語に言い換えられていることが確認できた。これは、bhāva の意味が svabhāva、ātman、rūpa の意味に限定されることを示す。

そして、MAVṬ における svabhāva 等の言い換えは虚妄分別の無相を有相と一緒に論じるときに登場していることが確認できる。すなわち、MAVṬ においては虚妄分別の無相のみを論じるときには、虚妄分別に存在しないものがただ所取・能取と表現される¹⁶⁴。これに反して、虚妄分別に存在する有相と無相を相互対比しながら述べる時、すなわち、今まで引用文として提示した箇所においては、所取・能取に svabhāva 等の語が付加されて表現される。この場合、虚妄分別にないものは所取・能取の svabhāva 等として提示される。同様に、虚妄分別にあるものも虚妄分別の svabhāva 等として提示される。これは、svabhāva 等の語が虚妄分別という一つの対象に存在する、あるいは、存在しない性質や状態を意味することを示す。

それゆえに、bhāva には svabhāva 等の語と同様に、性質や状態の意味もあるから、ggbh は「所取・能取の関係」ではなく「所取・能取性」と訳される方が適切であると考えられる¹⁶⁵。

4-2-4. ggbh の bhāva は関係か

MAVṬ より収集される ggbh の言い換えに鑑みたとき、MAVBh の ggbh は「所取・能取の関係」ではない。しかし、これが唯識学派にとって「所取・能取の関係」が認められないことを意味するのではない。そして、「所取・能取の関係」が認められるということが ggbh が「所取・能取の関係」と訳されなければならないことを意味するのでもない。

まず、唯識学派にとって「所取・能取の関係」は認められる。なぜならば、もし、「所取・能取の関係」が認められないならば、「入無相方便」は成り立たなくなるからである。「入無相方便」とは所取・能取の無に入るための方便である。これは次のように四つの段階で構成される。

①一切が唯識であると知る。②そして、一切はただ識が顕現したものにすぎないから、認識の対象になる客観的存在、所取は無であると知る。③そして、認識の対象になる客観的存在、所取が無であるから、ただ識のみであって所取は存在しないと認識する主観的存在、能取もまた無であると知る。④所取と能取とがともに無であると知ることに入る。

¹⁶⁴ 虚妄分別の無相、虚妄分別に存在しないもののみを論じるときには、grāhyagrāhakarāhitatā (MAVṬ(Y)[11, 2]) , grāhyagrāhakarāhitam (MAVṬ(Y)[11, 17]) , grāhyagrāhakarāhitatā (MAVṬ(Y)[12, 3]) , grāhyagrāhakavinirmuktaṃ (MAVṬ(Y)[13, 22]) と表現される。

¹⁶⁵ 片岡[2017: pp. 34, 14-35, 17]も ggbh を所取性・能取性と訳する。そして、所取は能取との関係において初めて成立するものであるから、所取性・能取性とは実質的に所取・能取の関係を意味すると述べ、所取性・能取性という語のなかには所取・能取の関係が含まれていることを指摘している。

このうち、③の段階において、能取の否定がなされているが、そのとき、根拠になるのが所取が存在しないとき、能取は存在しないという相互依存関係である。それゆえに、唯識学派にとって「所取・能取の関係」が認められないとは言えない。所取・能取の関係は、所取・能取を否定する過程において、用いられているからである。

また、所取・能取の関係を認めることが両者を識の顕現として理解する唯識の教義と矛盾するのではない。所取・能取の関係による能取の否定は、所取の否定を前提とし、所取の否定は一切が識の顕現であるということを前提とするからである。

そして、所取と能取との間に成立する相互依存関係は二取の無を論証するときに限って用いられる。存在するよう見えるが実際には存在しない二取の存在を説明するときには、両者間の相互依存関係ではなく虚妄分別の構想機能や識の顕現が用いられる。すなわち、二取の関係は、あくまでも、二取の無を容易に納得させる目的に限って用いられるのである¹⁶⁶。それゆえに、所取・能取の関係を認めることが所取・能取の存在を認めることに、あるいは、識の顕現を否定することにはならない。したがって、唯識学派においても「所取・能取の関係」は認められる。

しかし、「所取・能取の関係」が認められるとあって MAVBh の ggbh が「関係」と訳されなければならないのではない。文脈に合わないからである。ggbh が登場する「虚妄分別の有無相」の箇所は「虚妄分別」を「二取」と「空性」との関係で扱う。もし、「所取・能取の関係」と訳すれば、「虚妄分別」が「二取」との関係ではなく、「二取の関係」との関係で記述されるようになる。しかし、「虚妄分別」を「二取の関係」と関連して記述することはできない。「二取の関係」は所取・能取の二つの間で成立する関係だからである。

虚妄分別に「二取の関係」がないという文章自体が間違っているのではない。虚妄分別は二取ではないから、二取の間で成立する関係が虚妄分別にあるわけがないからである。しかし、このような記述は、二取を虚妄分別によって分別された虚妄なるもの、識の顕現にすぎないものと把握して、その存在性を否定する MAVBh の全体的な文脈において、いかなる意味も有しない¹⁶⁷。したがって、「所取・能取の関係」が認められるということが ggbh の bhāva が「関係」と訳されなければならないことを意味するのではない¹⁶⁸。

¹⁶⁶

MAVṬ(Y)[27, 2-6]

kim arthaṃ punaḥ prathamata eva vijñaptimātrasyaivābhāvaṃ na vibhāvayati | grāhyapratibaddhatvād dhi grāhakasyopalabhyārthābhāve sukhaṃ praveśaḥ syād ālambanasvabhāvavināśāt / anyathā vastuno 'pavādam eva kuryāt grāhyagrāhakayoḥ parasparanirapekṣatvāt |

ところで、何のために、最初から唯識であるという〔認識〕が存在しないと設定しないのであるか。能取は所取に縛られているものだから、認識される対象が存在しないとき、所縁を自性とするものは滅するから、容易に、〔所取・能取の無に〕悟入するであろう。しかし、そうでなければ、事物を損滅することだけになるであろう。所取と能取との相互依存がなくなるからである。

¹⁶⁷ 北野[2015: p. 45, 10-15]は、ggbh の bhāva が「関係」であれば、「空性の定型句」が、「或る場所に、或る関係がない」ということになり、世親がこのようなことを言わんとしているのであるかと、「関係」と訳することに疑問を表している。

¹⁶⁸ もし、世親が ggbh をもって所取・能取の関係を表そうとしたとすれば、ggbh にもっとも相応しい文脈は「入無相方便」を説くときであろう。しかし、「入無相方便」を説く MAVBh、MAVṬ の箇所において、ggbh という語は認められない。

4-2-5. 小結

以上の考察をまとめれば、MAVBh で登場する ggbh は「所取・能取の関係」ではなく「所取・能取性」である。ggbh の bhāva が、MAVṬ で svabhāva、ātman、rūpa と言い換えられているからである。しかし、これが唯識学派が「所取・能取の関係」を認めないことを意味するのではない。また、「所取・能取の関係」が認められるということが、ggbh の bhāva が「所取・能取の関係」と訳されなければならないことを意味するのでもない。「関係」という訳語は MAVṬ から収集される言い換えと MAVBh の文脈に鑑みて適切ではない。そこで、ggbh は「所取・能取性」と訳される方がより適切であると考えられる。

結論

以上、唯識学派の空の理解を解明することを目的として、四章に渡り考察を行った。結論を述べるにあたって、先ずは章ごとに内容を整理したい。次の通りである。

第一章においては第一のテーマ、「無の有」という概念の意味を解明した。

第一章の第一節においては「空性の定型句」との関係から「無の有」の意味を解明した。

「空性の定型句」とは唯識学派の空理解を代表するものである。これは「AにBがないとき、AはBについて空である。そして、Aに余れるもの、Cは存在する」と何かが空であるという意味を有と無との概念をもって記述する。このことは空が有や無のうち、ある一方だけを意味するのではなく、有と無との両方の意味を有するということを示す。そして、このような「空性の定型句」による空理解は、BoBh、AS、『顕揚論』、MAVBhといった文献に認められる。

また、これらは「空性の定型句」を構成する三つの項のうち、「余れるもの」であるCの規定をめぐって二つに分けることができる。BoBhはCを事物(vastu)と規定するが、その一方で、AS等の残りの三つは、無我性や空性、すなわち、Bの否定そのものを抽象化したものと規定する。このような文献間の差異はBとCの関係においても確認できる。BoBhではCがBの原因である。それゆえに、CがあるときBがあり、CがないときにはBがない。一方、AS等の残りの三つの文献においては、CはBの否定自体であるから、CがあるということがBがないということである。したがって、BoBhとは反対に、CがあるときにBがないようになり、CがないときにはBがあるようになる。つまり、これら四つの文献は皆「空性の定型句」に基づいた空理解を共有するが、Cをどう規定するかをめぐって、BoBhとAS、『顕揚論』、MAVBhとに二分されると言える。

MAVにおける「無の有」は、両者のうち、AS等の空理解を継承する。なぜならば、「無の有」は「二取の無」という二取の否定そのものを抽象化したものと定義されるからである。このような「無の有」の定義はASが規定するCと一致する。また、MAVBhは「無の有」と定義される空性を「空性の定型句」を通じて註釈するが、MAVBhの「空性の定型句」はAS、『顕揚論』と同じ理解を見せているからである。したがって、MAVにおける「無の有」はASの系列に属する「空性の定型句」を継承するものである。

第一章の第二節においては「無の有」に対する清弁の批判と安慧の擁護を通じて「無の有」が意図するところを解明した。

清弁はPPrとMHKとにおいて「無の有」に対する批判を行う。まず、PPrにおいては、「無の有」の「無」がもつ意味の分析をもって批判を展開する。清弁は二取の無というときの「無」を「非定立的否定」と「定立的否定」とに分ける。「非定立的否定」とは、ある対象を否定することに意味が限定される否定である。一方、「定立的否定」とは、ある対象の否定とともに、他のある対象の肯定を行う否定である。清弁はこれら二種の否定のうち「無の有」は後者の「定立的否定」に該当すると判断する。「無の有」は「二取」を「無」として否定するとともに「二取の

無」というものを「有」として肯定するからである。しかし、これは「二取の無」という「無」を勝義的実在として認めることとして、「無」に執着する見解である。したがって、このような見解は、「損減」や「断見」でもある。このように清弁は PPr において、「無の有」は「無」を「定立的否定」と理解したときに生じる余計なものであると批判する。つづいて、MHK においては、「無の有」が有する言葉自体の矛盾性をもって批判を展開する。「無」と「有」とは相互矛盾する概念だからである。さらに、清弁は、この批判に対する唯識学派の反論を想定し、それを反駁しながら、「無の有」は「自語相違」の誤謬を犯しているから成立しないと批判する。

その一方で、安慧は MAVT において「無の有」は余計なものではないと、空性の相としての「無の有」を擁護する。擁護は二つに分けられる。一つは「無の有」は空性が諸法の本性として存在することを表しているからである。もし「二取の無」のみが空性の相として提示されれば、空性の意味は「兎の角は存在しない」というときの無の意味に限定される。苦であり無常である一切法が有する苦性や無常性のような、諸法に存在する本性としての空性の意味が現れない。したがって、「無の有」は諸法の本性としての空性を表しているから、余計なものではない。もう一つは、「無の有」は二取が絶対的に無であることを表しているからである。二取が絶対的に無であるためには、その無が本性の次元で存在しなければならない。ところで、「無の有」は「二取の無」が本性として存在することを表している概念である。それゆえに、「無の有」は二取が絶対的に無であることを表しているから、余計なものではない。

安慧の説に基づく場合、「無の有」という空性の相は、二取の無が有する絶対性を知らしめる意図で提示されたものとなる。二取の無が本性として存在するということが、二取がいかなる場合でも無であるということである。したがって「無の有」は一切法が絶対的に空であることを存在論的に確立させる概念である。空の絶対性を確立させること、これが「無の有」が意図するところである。

第二章においては第二のテーマ、唯識学派の空と「般若経」の空との関係を「無の有」を中心として解明した。

第二章の第一節においては、「無の有」という概念の起源が「増広般若経」の abhāvasvabhāva にあることを明らかにした。

「無の有」という概念は「二取の無」という本性、空性を諸法の自性として肯定する、自性肯定的な考え方を基礎とするが、このような自性肯定的な考え方は「般若経」においても窺える。「般若経」は増広される過程において空に対する記述様式の変化を見せる。すなわち、従来は「一切法は空である」とのみ記述されていたが、増広される過程で「一切法には自性がない」、「一切法は無を自性とする」というように記述様式が変化する。そして、「無を自性とする (abhāvasvabhāva)」ということは、一切法は自性がないということ自性とするという意味として、「自性の無」という自性を認める表現である。それゆえに、MAV の「無の有」と般若経の「無を自性とする (abhāvasvabhāva)」は、両者ともに、自性肯定的な考え方を見せると言えよう。このことは、MAV の「無の有」という語を MAVBh と MAVT が「無を自性とする (abhāvasvabhāva)」という語を用いて註釈していることから確認できる。

そして、abhāvasvabhāva は無着（5世紀）の著作より以前に成立した『光讚経』（A.D. 286）においても自性肯定の意味として用いられる概念である。それゆえに、「無の有」は「増広般若経」の abhāvasvabhāva の影響を受けてできた概念であると言える。このように、「無の有」と代表される唯識学派の自性肯定的な空理解は「増広般若経」（増広された「般若経」？）の abhāvasvabhāva を起源としていることが明らかとなった。

第二章の第二節においては、唯識学派が「般若経」の空を自性肯定的に理解したということを『七十頌』と『頌釈』を通じて確認した。

MAVBh と同じような過程で著述されたと考えられる文献として『頌釈』がある。この文献は『金剛般若経』に対する無着の釈偈である『七十頌』、そしてそれに対する世親の散文註釈からなる書物であるが、ここにおいても、唯識学派の自性肯定的空理解が確認できる。

『金剛般若経』には空という語が登場しない。しかし、そのかわりに、逆説という否定論法が繰り返して述べられている。そして、この逆説は、一切法には自性がないことを表している。それゆえに、一切法が自性がないということは一切法が空であるということであるから、『金剛般若経』は空なしに空を説いていると言える。このように逆説によって表現される存在するもののあり方は「無自性」である。そして、これは存在するものである法を「非法非非法」と表現することからも見て取れる。

『七十頌』と『頌釈』は『金剛般若経』において「非法非非法」として、法に自性がないことを「無」と「無の有」という語で註釈する。ここで、特徴的なことは「自性がない」ということを「自性のないことを自性とする」と言い換えて表現していることである。すなわち、「一切法には自性がない」ということが「一切法には無自性という自性がある」として表現される。これは一切法に、無自性という自性を認める表現である。『七十頌』と『頌釈』はこのような自性肯定的な考え方を「無の有」という語を用いて註釈している。以上、唯識学派は自性肯定的な考え方をもって般若経の空を理解したことが、『金剛般若経』の逆説に対する『七十頌』と『頌釈』との註釈から確認できる。

第三章においては第三のテーマ、唯識学派の三性説と空との関係を解明した。

第三章の第一節においては、遍計・分別・法性の三相に対する解釈を手がかりとして空と三性との関係を論じた。

遍計・分別・法性という三相によって一切法を分析する三相説に対する唯識学派の解釈には二つが存在する。一つは三相を三性として理解する、MAVBh、MSU、AAĀ、PPU で用いられる解釈である。もう一つは三相を空性として理解する、ASで用いられる解釈である。

まず前者のMSU、AAĀ、PPU は AS と MAVBh より後代に成立したものである。MAVBh と AS の前後関係は先行研究では未だ確定されていない。しかし、三相に対する解釈に基づくのであれば、AS が MAVBh に先行すると言える。なぜならば、もし MAVBh が AS より以前に成立したとすれば、三相の解釈が三性から空性へ変化した後に、再び三性に戻る形となるが、これは不自然だからである。それゆえ、三相に対する解釈に基づけば、AS は MAVBh に先行すると理解できる。つまり、三相に対する解釈は空性より三性へ変化したのである。

空性より三性へ解釈の方式が変化したということは、三性が空性と無関係なものではないということを示す。それは、空性を意味すると理解されていたものが三性を意味するものとして理解されるようになったからである。しかし、このことは三性の出現した原因が空性にあるということの意味するのではない。なぜならば、三相を空性と解釈しているASにおいても遍計所執性、依他起性、円成実性の三性は登場しているからである。ただ、唯識学派にとって三性説は既存の空思想に代わるものであったことが、三相説に対する解釈の変化から確認できる。

第三章の第二節においては、円成実性の定義の変遷から空性がどのように三性説の形成に影響を及んだのかを解明した。

唯識学派にとって三性説は最初から完成された形で存在したものではない。変遷の過程を経て形成されたものである。このことは諸文献における円成実性の定義の変化から確認できる。『解深密経』、「摂決択分」、『顕揚論』においては円性実性が真如と定義される反面、MAVBh、MSA、MS、TrBh においては円実性性が遍計所執性の無と定義される。そして、このような定義の変化は唯識学派の空に対する理解に起因すると言える。なぜならば、遍計所執性の無という円実実性の定義は AS、『顕揚論』、MAVBh 等における空性の定義と一致するからである。この点から、唯識学派の三性説は空性と結合する形で展開したことが読み取れる。そして、三性が空性と結合する形で展開したということは、唯識学派の三性説が既存の空思想を取り組む形で展開したということの意味する。以上のように、円成実性の定義の変遷から三性説の形成における空思想の影響が読み取れる。

第四章においては、MAV の主要概念である abhūtaparikalpa という複合語、そして、MAVBh において空性を定義するとき登場する grāhyagrāhakabhāva という語句に対する既存の翻訳を検討した。

第四章の第一節においては、虚妄分別という複合語の構造を知り得る文献資料を紹介し、その資料の分析に基づいて、虚妄分別には二つの表現様式があるということと、その複合語の解釈においても二つの傾向があるということを導き出した。

まず、表現様式に関しては、MAVBh とMSA とにおいては虚妄分別が abhūtaparikalpa と表記されているが、その同じ意味の虚妄分別がVSにおいてはvitathavikalpa と表記されていることを確認した。

次に、複合語の解釈に関しては、MAVBh においては虚妄分別が格限定複合語として解釈されていることを、真諦の漢訳と窺基と安慧との註釈から論証した。したがって、MAVBh において登場する虚妄分別は「虚妄なるものに対する分別」という意味の格限定複合語である。一方、MSA とVSとにおいては虚妄分別が同格限定複合語として解釈されていることが認められる。SAVBh とPvTにおいて、虚妄分別が「虚妄であり、分別である」と分析されているからである。このように、MSA とVSは、MAVBh とは異なり、虚妄分別を同格限定複合語として理解する。

このことから、虚妄分別という複合語には二つの表現様式と、二つの解釈傾向があるということが結論として導き出される。

第四章の第二節においては MAVbh において空性を定義する際に登場する grāhyagrāhakabhāva (=ggbh) という語句の適切な訳語について考察した。

MAVBh においては ggbh が虚妄分別に存在しないものという意味で登場する。従来、この文句の bhāva は「体」、「もの」、「実物」等の語で訳されてきたが、近年の研究においては、「関係」と訳する傾向にあった。これに対して、MAVBh における ggbh の bhāva は「関係」ではないことを MAVT の註釈に基づいて論証する。

兵藤一夫により指摘されているように、MAVBh で登場する ggbh の bhāva は MAVT で svabhāva、ātman、rūpa と言い換えられている。これは bhāva の意味が svabhāva、ātman、rūpa の意味に限定されることを示す。そして、虚妄分別に所取・能取がないということを所取・能取の bhāva や svabhāva 等がないと言い換える表現は虚妄分別の有相と無相とを一緒に言及する文脈に限定される。このことから、bhāva 等の語は虚妄分別という一つの対象に存在する、あるいは、存在しない性質や状態を指示する機能のものであることがわかる。したがって、ggbh は「所取・能取の関係」ではなく「所取・能取性」と訳す方が適切であると考えられる。

ただ、この結論は唯識学派が「所取・能取の関係」を認めないことを意味するのではない。「入無相方便」は所取・能取の相互依存関係を前提としているからである。しかし、「所取・能取の関係」が認められるということが、ggbh を「所取・能取の関係」と訳さなければならないことを意味するのでもない。「関係」という訳語は MAVT から収集される言い換えと MAVBh の文脈に鑑みて適切ではないからである。故に、ggbh に対する訳語として「所取・能取性」の方がより適切であると考えられる。

以上が本研究における各章の内容である。

本稿の序論において、本研究は 1) 「無の有」という概念の解明、2) 唯識学派の空と「般若経」との関係、3) 唯識学派の三性と空との関係という三つのテーマに分けられると述べた。これに従い、本研究の結論も次の三つに要約される。

1) 「無の有」は「二取の無」という本性が存在し、それが空性であるという意味の概念である。したがって、「無の有」を相とする空性は、諸法に普遍的に存在する本性であり、法性である。このように、唯識学派は諸法に「空性」という自性が存在すると認めているが、「無の有」を通じて空性を定義する空理解は「自性肯定的」とあると言える。そして、諸法が自性とするものは「二取の無」という本性、つまり「空性」である。それゆえに、二取の無、自性の無は絶対的な無である。なぜなら、その二取の無は本性に根拠しているからである。このように、唯識学派が空性の相として挙げる「無の有」は、「二取の無」、あるいは、「自性の無」の絶対性を存在論的に確立させる概念である。

2) 「無の有」は AS、『顕揚論』、MAVBh において登場する「空性の定型句」の空の理解を継承しており、「空性の定型句」は『中阿含』『小空経』に起源をおいている。それゆえに、空性に「無の有」という相を付与する唯識学派の空理解は初期經典に基づいていると言える。ところで、「無の有」は「増広般若経」の「無を自性とする (abhāvasvabhāva)」という概念から影響を

受けてできた概念でもある。したがって、唯識学派の空理解は初期経典のみならず「般若経」にも基づいていると言える。

3) 空思想が唯識学派の三性説の起源であるとは言えないが、すくなくとも、三性説の形成に影響を与えたとは言える。まず、遍計・分別・法性の三相に関する唯識学派の解釈から見れば、三相は AS において空性と解釈されていたが、MAVBh においては三性と解釈されるに至った。このことは空性を意味するものが三性を意味するものとして変遷したこと、つまり、空性が三性に代替されたことを示す。このことから、唯識学派にとって三性説は既存の空思想に代わりものであったことが導き出される。また、円成実性の定義の変遷から見れば、三性説は空と結合する形で形成されたということが導き出される。なぜならば AS 等において登場した空性に対する定義が MAVBh に至っては三性のうち円成実性の定義として登場するからである。したがって、唯識学派の三性説が既存の空思想を取り組む形で展開されたと言える。また、以上のことから、MAVBh が有する思想史的重要性も見出すことができる。唯識学派は MAVBh の段階に至って三相を三性に解釈し始め、三性説を空と結合し始めた。それゆえに、唯識思想史において MAVBh は、唯識学派が空より三性へ思想的に転換する起点になるものであると言える。

テキストと翻訳

凡例

1. MAVBh は長尾雅人の校訂本 (N) を、MAVT は山口益の校訂本 (Y) を底本と使用した。
2. MAVT の文中のイタリック体は写本の欠損部分に対する山口本の還梵文である。MAVT のテキストは山口本 (Y) を底本とするが、問題があると判断した箇所に限って、写本と二種の蔵訳と既刊の校訂本とを参照して改めて校訂した。
3. MAVT のサンスクリット文と翻訳とにおいて下線部は MAVBh を示し、ボールド体は MAV を示す。また、MAVBh の場合においても、ボールド体は MAV を示す。
4. MAVT のサンスクリット文において [] はチベット訳に基づいた補いを示し、() は該当文の写本箇所を示す。
5. 本付録のサンスクリット文において、異読や訂正は適宜注記したが、写本特有の綴り字や連声の標準化、アヴァグラハの追加、及び分節の添削については煩雑を避けるため逐一報告しない。
6. テキストの校訂と翻訳に使用された諸校訂本と翻訳を略語で示せば次の通りである。

- Bh/T : V. Bhattacharya & G. Tucci ed., *Madhyāntavibhāgasūtrabhāṣyāṭīkā of Sthiramati*, Luzac & London, 1932.
- E : 山口益 編『漢藏對照辯中邊論：附中邊分別論釋疏梵本索引』, 破塵閣書房, repr. 鈴木学術財団, 1966.
- Fri : D. L. Friedmann, *Madhyantavibhagatika : analysis of the middle path and the extremes*, Utrecht, 1937.
- MAVBh(D) : *dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i 'grel pa ; sDe dge edition of madhyāntavibhāga-bhāṣya* (Vasubandhu ; dbyig gnyen), D No. 4027, bi 1b1-27a7.
- MAVBh(P) : *dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i 'grel pa ; Peking edition of madhyāntavibhāga-bhāṣya* (Vasubandhu ; dbyig gnyen), P No. 5528, bi 1a1-32b7 (vol.108, p.119-133).
- MAVT(D) : *dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i 'grel bshad ; sDe dge edition of Madhyāntavibhāga-ṭīkā* (Sthiramati ; Blo brtan), D No. 4032, bi, 189b2-318a7.
- MAVT(P) : *dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i 'grel bshad ; Peking edition of Madhyāntavibhāga-ṭīkā* (Sthiramati ; Blo brtan), P No. 5534, tshi, 19b7-170b8.
- N : G. M. Nagao ed., *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, 鈴木学術財団, 1964.
- NC : 長尾雅人, 「『中辺分別論安慧釈』の梵文写本との照合一その第一章 相品について」, 『鈴木学術財団研究年報』 15号, 1978.

- O : 小谷信千代, 『虚妄分別とは何か : 唯識説における言葉と世界』 第3部 校訂テキスト, 法藏館, 2017.
- Pa : R. Pandeya ed., *Madhyānta-vibhāga-śāstra, Containing the Kārikās of Maitreya, Bhāṣya of Vasubandhu and Ṭīkā by Sthiramati*, Delhi, 1971.
- St : Richard Stanley, *A STUDY OF THE MADHYĀNTAVIBHAGĀ-BHĀṢYA-ṬĪKĀ*, The Austrarian National University, 1988
- Stc : Th. Stcherbatsky, *Madhyānta-vibhanga : discourse on discrimination between middle and extremes / ascribed to Bodhisattva Maitreya and commented by Vasubandhu and Sthiramati* ; Bibliotheca Buddhica 30; Neudruck, 1936, Biblio Verlag 1970, Motilal Banarsidass Publishers, 1992.
- Ta : Nathmal Tatia & Anantalal Thakur ed., *Madhyānta-vibhāga-bhāṣya*, K.P.Jayaswal Research Institute, Patna, 1967.
- Y : S. Yamaguchi ed., *Madhyāntavibhāgaṭīkā : exposition systématique du Yogācāravijñaptivāda*, 破塵閣, 1934 ; repr. 鈴木学術財団, 1966.
- 『中辺論』 : 『中辺分別論』 (大正No. 1599 天親造 真谛訳) in Vol. 31.
- 『弁中論』 : 『弁中辺論』 (大正No. 1600 世親造 玄奘譯) in Vol. 31.
- 『述記』 : 『弁中辺論述記』 (大正No. 1835 窺基造) in Vol. 44.

1. 『中辺分別論』 「空性章」 の梵文テキスト

[Śūnyatā]

[N 22, 16; Ta 5, 13; MAVBh(D) 4a4; MAVBh(P) 5a2; 『中辺論』 T31.452b05; 『弁中論』 T31.465b26]

evam abhūtaparikalpaṃ khyāpayitvā yathā śūnyatā vi(4a3)jñeyā tan nirdiśati |

**lakṣaṇaṃ cātha paryāyas tadartha bheda eva ca |
sādhanaṃ ceti vijñeyaṃ śūnyatāyāḥ samāsataḥ || (k.12)**

[a. Śūnyatālakṣaṇa]

[N 22, 21; Ta 5, 16; MAVBh(D) 4a5; MAVBh(P) 5a3; 『中辺論』 T31. 452b09 ; 『弁中論』 T31. 465c02]

kathaṃ lakṣaṇaṃ vijñeyaṃ |

dvayābhāvo hy abhāvasya bhāvaḥ śūnyasya lakṣaṇaṃ | (k.13ab)

dvaya(4a4)grāhyagrāhakasyābhāvaḥ¹⁶⁹ | tasya cābhāvasya bhāvaḥ śūnyatāyā lakṣaṇaṃ ity
abhāvasvabhāvalakṣaṇatvaṃ śūnyatāyāḥ paridīpitaṃ bhavati |
yaś cāsau tadabhāvasvabhāvaḥ sa |

na bhāvo nāpi cābhāva(4a5)ḥ¹⁷⁰ | (k.13c)

kathaṃ **na bhāvo** yasmāt dvayasyābhāvaḥ | kathaṃ **nābhāvo** yasmāt dvayābhāvasya bhāvaḥ | etac ca
śūnyatāyā lakṣaṇaṃ |
tasmād abhūtaparikalpān

na prthaktvaikalakṣaṇaṃ || (k.13d)

prthaktve (4a6) sati dharmād anyā dharmateti na yujyate | anityatāduḥkhatāvat | ekatve sati
viśuddhyālabhanam jñānaṃ¹⁷¹ na syāt sāmānyalakṣaṇaṃ ca | etena tattvānyatvavinirmuktaṃ lakṣaṇaṃ
paridīpitaṃ bhava(4b1)ti |

[b. Śūnyatāparyāya]

[N 23, 12; Ta 6, 7; MAVBh(D) 4b1; MAVBh(P) 5a8; 『中辺論』 T31. 452b23 ; 『弁中論』 T31. 465c11]

kathaṃ paryāyo vijñeyaḥ |

**tathatā bhūtaakoṭiś cānimittaṃ paramārthatā |
dharmadhātus ca paryāyāḥ śūnyatāyāḥ samāsataḥ || (k.14)**

[c. Śūnyatāparyāyārtha]

[N 23, 16; Ta 6, 10; MAVBh(D) 4b1; MAVBh(P) 5b1; 『中辺論』 T31. 452b26; 『弁中論』 T31. 465c15]

¹⁶⁹ MAVT, hyasya grāhakasya ca.

¹⁷⁰ Ta, vābhāvaḥ.

¹⁷¹ MAVBh(D, P), MAVT, omit jñānaṃ.

katham paryāyārtho vijñeyah |

ananyathāviparyāsatannirodhāryagocaraiḥ |
(4b2)hetutvāc cāryadharmāṇaṃ paryāyārtho yathākramaṃ || (k.15)

ananyathārthena tathātā nityan tathaiyeti kṛtvā | **aviparyāsārthena** bhūtakotiḥ viparyāsāvastutvāt |
nimittanirodhārthenānīmī(4b3)ttam sarvanimittābhāvāt | **āryajñānagocaratvāt** paramārthaḥ
paramajñānaviṣayatvād |¹⁷² **āryadharmahetutvād** dharmadhātuh āryadharmāṇān tadāmbanaprabhavitvāt |
hetvartho hy atra dhā(4b4)tvartah |

[d. Śūnyatāprabheda]

[N 24, 3; Ta 6, 17; MAVBh(D) 4b4; MAVBh(P) 5b4; 『中辺論』 T31. 452c06; 『弁中論』 T31. 465c25]

katham śūnyatāyāḥ prabheda jñeyah¹⁷³ |

saṃkṣiptā ca viśuddhā ca | (k.16a)

ity asyāḥ prabhedaḥ | kasyām avasthāyām **saṃkṣiptā** kasyām **viśuddhā** |

samālā nirmalā ca sā | (k.16b)

yadā saha malena vartate (4b5)tadā **saṃkṣiptā** | yadā prahīṇamalā tadā **viśuddhā** |
yadi samālā bhūtvā nirmalā bhavati katham vikāradharminītvād anityā na bhavati | yasmād asyāḥ

abdhātukanakākāśasuddhivac chuddhi(4b6)r iṣyate || (k.16cd)

āgantukamalāpagamān na tu tasyāḥ svabhāvānyatvaṃ bhavati¹⁷⁴ |

[Śoḍaśavidhā śūnyatā]

[N 24, 14; Ta 7, 7; MAVBh(D) 4b6; MAVBh(P) 5b8; 『中辺論』 T31. 452c15; 『弁中論』 T31. 466a03]

ayam aparaḥ prabhedaḥ śoḍaśavidhā śūnyatā | adhyātmaśūnyatā | bahirdhāśūnyatā |
adhyātmabahirdhāśūnyatā | mahāśūnyatā | śūnyatāśūnyatā | paramārthaśūnyatā | saṃskṛtaśūnyatā |
asaṃskṛtaśūnya(5a2)tā | atyantaśūnyatā | anavarāgrasūnyatā | anavakāraśūnyatā | prakṛtiśūnyatā |
lakṣaṇaśūnyatā | sarvadharmāśūnyatā | abhāvaśūnyatā | abhāvasvabhāvaśūnyatā ca | saiṣā samāsato veditavyā
|

bhokṛbhojanatad(5a3)dehapraṭiṣṭhāvastuśūnyatā |
tac ca yena yathā dṛṣṭam yadartham tasya śūnyatā || (k.17)

tatra **bhokṛśūnyatā** ādhyātmikāny āyatanāny ārabdhā¹⁷⁵ **bhojanaśūnyatā** bāhyāni | **taddehas** tayor
bhokṛ(5a4)bhojanayor yad adhiṣṭhānaṃ śārīraṃ tasya śūnyatādhyātmabahirdhāśūnyatety ucyate¹⁷⁶ |

¹⁷² MAVT, paramajñānagocaravād.

¹⁷³ MAVT, vijñeya.

¹⁷⁴ Ta, svabhāvānyatā.

¹⁷⁵ Ta, ārabhya; Ms, ārabdhā

¹⁷⁶ MAVT, tacchūnyatādhyātmab

pratiṣṭhāvastu bhājanalokaḥ tasya vistīrṇatvāc chūnyatā mahāśūnyatety ucyate¹⁷⁷ | **tac** cādhyātmikā(5a5)yatanādi **yena** śūnyam **drṣṭam** śūnyatājñānena **tasya śūnyatā** śūnyatāśūnyatā¹⁷⁸ | **yathā** ca **drṣṭam** paramārthākāreṇa **tasya śūnyatā** paramārthaśūnyatā | **yadartham** ca bodhisatvaḥ prapadyate¹⁷⁹ **tasya** ca (5a6)**śūnyatā** | kimarthañ ca prapadyate¹⁸⁰ |

śubhadvayasya prāptyarthaṃ | (k.18a)

kuśalasya saṃskṛtasyāsaṃskṛtasya ca |

sadā satvahitāya ca | (k.18b)

atyantasatvahitārthaṃ |¹⁸¹

saṃsārātyajanārthañ ca | (k.18c)

anavarāgrasya hi saṃsāra(5b1)sya śūnyatām apaśyan khinnaḥ saṃsāram parityajeta¹⁸² |

kuśalasyākṣayāya ca || (k.18d)

nirupadhiśeṣe nirvāṇe 'pi yan nāvakirati notsrjati tasya śūnyatā anavakāraśūnyatety ucyate |

gotrasya ca viśuddhya(5b2)rthaṃ | (k.19a)

gotraṃ hi prakṛtiḥ svābhāvikatvāt |

lakṣaṇavyaṅjanāptaye | (k.19b)

mahāpuruṣalakṣaṇānām sānuvyāṅjanānām¹⁸³ prāptaye |

śuddhaye buddhadharmāṇām bodhisatvaḥ prapadyate || (k.19cd)

balavaiśāradyāve(5b3)ṇikādīnām | evan tāvac caturdaśānām śūnyatānām vyavasthānam veditavyam |
kā punar atra śūnyatā |

pudgalasyātha dharmāṇām abhāvaḥ śūnyatātra hi |
tadabhāvasya sadbhāvas tasmin (5b4)sā śūnyatāparā || (k.20)

pudgaladharmābhāvaś ca śūnyatā | tadabhāvasya ca sadbhāvaḥ tasmin yathokte bhoktrādaḥ **sānyā**¹⁸⁴
śūnyateti | śūnyatālakṣaṇakhyāpanārthaṃ dvividhām ante śūnyatām vyavasthā(5b5)payati | abhāvaśūnyatām

¹⁷⁷ MAVT, tasya vistīrṇatvāt tacchūnyatā | mahāśūnyatocyate.

¹⁷⁸ Ta, Ms, tasya śūnyatāśūnyatā.

¹⁷⁹ MAVT, pratipadyate.

¹⁸⁰ MAVT, pratipadyate .

¹⁸¹ MAVBh(P) omits atyantasatvahitārthaṃ.

¹⁸² Ta, parityajet.

¹⁸³ MAVT, sānuvyāṅjanānām mahāpuruṣalakṣaṇānām.

¹⁸⁴ Ta, Ms, nānyā.

abhāvasvabhāvasūnyatām ca | pudgaladharmasamāropasya tacchūnyatāpavādasya ca parihārārtham
yathākramam | evam sūnyatāyāḥ prabhedo vijñeyah |

[e. Śūnyatāsādhana]

[N 26, 17; Ta 9, 7; MAVBh(D) 5b3; MAVBh(P) 6b8; 『中辺論』 T31. 453a21; 『弁中論』 T31. 466b10]

katham sādhanam vijñeyam¹⁸⁵ |

saṃkliṣṭā ced bhaven nāsau muktāḥ syuḥ sarvadehinaḥ |
viśuddhā ced bhaven nāsau vyāyāmo¹⁸⁶ niṣphalo bhavet || (k.21)

yadi dharmāṇām sūnyatā āgantukair upakleśair anutpanne 'pi pratipakṣe **na saṃkliṣṭā bhavet**
saṃkleśābhāvād ayatnata eva **muktāḥ sarvasatvā bhaveyuh** | athotpanne 'pi pratipakṣe **na viśuddhā**
bhavet mokṣārtham¹⁸⁷ ārambho **niṣphalo bhavet** |
evam ca kṛtvā |

(6a1) na kliṣṭā nāpi vākliṣṭā¹⁸⁸ śuddhāśuddhā na caiva sā | (k.22a)

katham na kliṣṭā nāpi cāśuddhā | prakṛtyaiva

prabhāsvaratvāc cittasya | (k.22c)

katham nākliṣṭā na śuddhā¹⁸⁹ |

kleśasyāgantukatvataḥ || (k.22d)

evam sūnyatāyā uddiṣṭaḥ prabhedaḥ (6a2)sādhito bhavati |

[Śūnyatāpiṇḍārtha]

[N 27, 11; Ta 9, 21; MAVBh(D) 5b7; MAVBh(P) 7a4; 『中辺論』 T31. 453b03; 『弁中論』 T31. 466b20]

tatra sūnyatāyāḥ piṇḍārthaḥ | lakṣaṇato vyavasthānataś ca veditavyaḥ | tatra lakṣaṇato 'bhāvalakṣaṇato
bhāvalakṣaṇataś ca | bhāvalakṣaṇam punar bhāvābhāvavinirmuktala(6a3)kṣaṇataś ca |
tatvānyatvavinirmuktalakṣaṇataś ca | vyavasthānam punaḥ paryāyādivyavasthānato veditavyam | tatraitayā
catuḥprakāradeśanayā sūnyatāyāḥ svalakṣaṇam | karmalakṣaṇam | saṃkle(6a4)śavyavadānalakṣaṇam |
yuktilakṣaṇam codbhāvitam bhavati | vikalpatrāsakauśīdyā¹⁹⁰vicikitsopaśāntaye¹⁹¹ |

madhyāntavibhāge lakṣaṇaparicchedaḥ prathamah || ||

¹⁸⁵ MAVT, jñeyam.

¹⁸⁶ Ta, hyāyāso; Ms, vyāyātmā.

¹⁸⁷ MAVT, mokṣārtha.

¹⁸⁸ Ta, cākliṣṭā.

¹⁸⁹ MAVT, viśuddhā.

¹⁹⁰ Ta, "kausīdyā"

¹⁹¹ MAVBh(D, P), omit tatraitayā...vicikitsopaśāntaye.

2. 『中辺分別論』 「空性章」 の翻訳

[2. 空性]

以上のように虚妄分別を説いてから、空性がどのように知られるべきかを詳説する。

簡略に、相・同義語・それ（同義語）の意味・部類・論証が空性に関して知られるべきものである。（k.12）

[a. 空性の相]

どのように〔空性の〕相は知られるべきであるか。

二の無と無の有とが空〔性〕の相である。（k.13ab）

所取・能取の二の無、そして、その無の有が空性の相であるという、空性には無を自性とする相があるということが明らかになった。

そして、このそれ（所取・能取）の無を自性としているもの、それは

有ではなく無でもない。（k.13c）

どうして有ではないのか。なぜならば、二〔取〕は存在しないからである。どうして無でもないのか。なぜならば、二〔取〕が存在しないということは存在するからである。これが空性の相である。

それゆえに虚妄分別と

別異や同一という相がない。（k.13d）

〔空性が虚妄分別と〕別異であるとすれば、法性が法と異なるということは理に適わない。無常性と苦性〔とが無常であり、苦である五蘊と異ならない〕ように。〔空性が虚妄分別と〕同一であるとすれば、清浄の所縁を有する智と共相（sāmānyalakṣaṇa）がなくなるであろう。これによって同一性・別異性から離れた〔空性の〕相が明らかになった。

[b. 空性の同義語]

どのように〔空性の〕同義語は知られるべきであるか。

簡略に、真如と實際と無因相と勝義と法界が空性の同義語である¹⁹²。(k.14)

[c. 空性の同義語の意味]

どのように同義語の意味は知られるべきであるか。

無変異と、無顛倒と、それ（因相）の消滅と、聖者の〔智の〕領域であることにより、また、聖者の法の原因であることにより、順番通りに、同義語の意味は〔知られるべきである〕。(k.15)

①無変異という意味で、〔空性は〕真如である。常にそのままであるからである。②不顛倒という意味で、〔空性は〕實際である。顛倒の基体 (vastu) になるものではないからである。③因相の消滅という意味で、〔空性は〕無因相である。一切の因相が存在しないからである。④聖者の智の領域であることにより、〔空性は〕勝義である。殊勝な智の対象であるからである。⑤聖者の法の原因であることにより、法界である。聖者の法はそれ（空性）を所縁として生じるからである。ここにおける界 (dhātu) の意味は「原因」の意味である¹⁹³。

[d. 空性の部類]

どのように空性の部類は知られるべきであるか。

汚染された〔空性〕と清浄にされた〔空性〕 (k.16a)

ということがこれ（空性）の部類である。どのような場合に汚染された〔空性であり〕、どのような場合に清浄にされた〔空性である〕か。

それ（空性）は垢を伴うものであり、垢から離れたものである。(k.16b)

¹⁹² 『中辺論』は法界の次に法身を追加し、空性の同義語として六つを登場されている。

『中辺論』 [T31.452b24-b25]

如如及實際	無相與真實
法界法身等	略說空眾名

『弁中論』においては法界が法界等となっている。

『弁中論』 [T31.465c13-c14]

略說空異門	謂真如實際
無相勝義性	法界等應知

¹⁹³ 『中辺論』 k14 においては法界の次に「法身」が空性の同義語として挙げられる。法身に対しては「攝持法身為義故說法身」（『中辺論』 [T31.452c5]）という註釈がなされる。また、『弁中論』においては法界が「法界等」となっており、「等」に対する註釈として「無我等義如理應知」（『弁中論』 [T31.465c24-c25]）が述べられている。

垢を伴って存在するとき、そのときには汚染された〔空性〕である。垢が断じられたとき、そのときには清浄にされた〔空性〕である。

【問】もし〔空性が〕垢を伴って存在した後に、垢から離れたものになるとすれば、〔この場合、空性というものは〕変化の性質を有するものであるから、どうして〔その空性は〕無常ではないのか。【答】なぜならば、それは（空性）

水界・黄金・虚空の清浄さのように、〔空性は〕清浄であると認められる。（k.16cd）

外来的な垢から離れることによって〔空性は清浄にされるの〕である。しかし、それ（空性）の自性が変化するのではない。

[十六種の空性]

また、もう一つの部類は十六種の空性である。①内空性、②外空性、③内外空性、④大空性、⑤空性空性¹⁹⁴、⑥勝義空性、⑦有為空性、⑧無為空性、⑨畢竟空性、⑩無始無終空性、⑪無散空性、⑫本性空性、⑬相空性、⑭一切法空性¹⁹⁵、⑮無性空性、⑯無性自性空性である。これは、簡略に、次のように知られるべきである。

享受者、享受物、その身体、住処としての事柄の空性がある。また、それ（以上の四つ）は、あるものによって、ある様態のように、ある目的をもって〔空であると〕見られる。それに空性がある。（k.17）

そのうち、享受者の空性は内処に関する〔空性〕であり、享受物の空性は外〔処に関する空性である〕。その身体（deha）はその享受者と享受物との両方の所依である肉体（śarīra）を言う。その空性が内外の空性であると言われる。住処としての事柄は器世間である。〔その器世間は〕広大なものであるから、その空性が大空性であると言われる。また、それ、すなわち、内処等（＝享受者、享受物、その身体、住所としての事柄）があるものによって、〔すなわち〕空性の智によって空であると見られる。それに空性空性の空性がある。また、ある様態のように、〔すなわち〕勝義の行相として見られる。それに勝義空性の空性がある。菩薩はある目的をもって修行する。それにもまた空性がある。それでは〔菩薩は〕何のために修行するのか。

二つの善を得るために（k.18a）

善なる有為と善なる無為とを〔得るために〕である。

また、常に、有情の利益のために（k.18b）

¹⁹⁴ MAVBh(P)においては4)大空性、5)空性空性の順番が逆になっている。

¹⁹⁵ MAVBh(P)においては13)相空性、14)一切法空性の順番が逆になっている。

究極的に有情の利益のために、である。

また、輪廻を捨てないために、(k.18c)

無終無始の輪廻の空性を見ないものは疲れて輪廻を捨てるであろう。

また、善が尽くされないようにするために (k.18d)

無余依涅槃においても、〔善を〕散失させなく、捨てない。その空性が無散空性と言われる。

また、種性の清浄のために (k.19a)

種性は、自性的なものであるから、本性である。

相と好とを得るためにである。 (k.19b)

偉大な人の〔三十二〕相と〔八十種〕好とを獲得するために、である。

諸々のブッダの特性(dharma)の清浄のために、菩薩は修行する。 (k.19cd)

〔十〕力と〔四〕無畏〔と十八〕不共〔法〕等が〔清浄にされるためになる〕、である。まず、以上のように、まず、十四個の空性が設定されると知られるべきである。

さらに、それら（十四空性）において何が空性であるか。

人と諸法の無がここにおける空性である。それらの無の有、これがここにおけるもう一つの空性である。 (k.20)

人と諸法との無が空性である。そしてそれらの無の有、これがここにおける、〔すなわち〕享受者等として説かれたものにおける、もう一つの空性である。空性の相を説明するために最後に、無性空性と無性自性空性との二種の空性を設定する。順番通りに人法の増益と、それら（人法）の空性の損減とを取り除くためにである。空性の部類は以上のように知られるべきである。

[e. 空性の論証]

どのように〔空性の部類に対する〕論証は知られるべきであるか。

もしそれ（空性）が染汚にならないならば、一切の人たちは既に解脱したものになるであろう。

もしそれ（空性）が清浄にされないならば、〔人々の〕努力は無用なもの

になるであろう¹⁹⁶。(k.21)

もし諸法の空性が、まだ対治が生じていないときにも、外来的な煩惱によって染汚にならないならば、染汚が存在しないから、努力することなく、一切の人たちは既に解脱したものになるであろう。また、対治が生じているときにも、清浄にされないならば、解脱のために〔修行に〕着手することは無用なものになるであろう。

そして、そのように考えるならば、

それは染汚されたものではない。また、染汚されていないものでもない。
また、清浄にされたものでもない。また、清浄にされていないものでもない。(k.22ab)

どうして染汚されたものではなく、清浄にされていないものでもないのか。本性的に

心は明浄なものであるからである。(k.22c)

どうして染汚されていないものではなく、清浄にされたものでないであるか。

煩惱は外来的なものであるから (k.22d)

このように〔k.16において〕略述した空性の部類が論証されたことになる。

[空性の要義]

ここにおいて空性の要義は相から、また、設定から知られるべきである。そのうち、相からとは、無の相 (k.13a) と有の相 (k.13ab) から〔知られるべきである〕。さらに、有の相は、有無を超越した相 (k.13c) と同異を超越した相 (k.13d) から〔知られるべきである〕。また、設定とは、同義語等の設定から知られるべきである。そのうち、これら四種の教え（同義語・同義語の意味、区別、論証）によって空性の自相・業相・汚染と清浄の相が、また、道理の相が、分別、恐怖、怠慢、疑惑を終息するために、語られたことになる。

『中辺分別〔論〕』における第一の相の章

¹⁹⁶ 『中辺論』の k21 は ab 句と cd 句の順番が逆になっており、使用する論理も他の諸本と異なる。

『中辺論』[T31. 453a22-a23]

若言不淨者 眾生無解脱

若言無垢者 功用無所施

もし清浄にされないと言え、衆生には解脱がない。

もし垢がないと言え、努力は無用である。

3. 『中辺分別論釈疏』 「空性章」の梵文テキスト

(Śūnyatā)

[Y 45, 14; Bh/T 38, 1; Pa 35, 30; O 42, 24; Ms 13a1]

evam abhūtaparikalpalakṣaṇaṃ navaprakāraṃ khyāpayitvā yathā śūṇyatā vijñeyā tan nirdiśati¹⁹⁷(13a2)ti¹⁹⁸ ko 'trābhisaṃbandhaḥ | dvayam anena¹⁹⁹ pratijñātam abhūtaparikalpaḥ śūnyatā ca | saṃkleśapūrvakaṃ ca vyavadānam dharmāvabodhāśrayaṃ ca dharmatāvadhāraṇam ity ato 'bhūtaparikalpanirdeśānantaraṃ yathā śūnyatā vijñeyā tathā nirdiśati |

lakṣaṇam cātha paryāya²⁰⁰ (12a)

iti vistaraḥ /

tatra lakṣaṇaṃ hi bhāvābhāvapratiṣedhātmatā²⁰¹ | sarvatra śū(13a3)nyatāprabhedavyāpakatvāt²⁰² nāmāntaraṃ²⁰³ paryāyaḥ | paryāyanuṅgaṃ²⁰⁴ paryāyapravṛttinimittaṃ paryāyārthaḥ | ākāśavad abhinnalakṣaṇatvān nirvikalpatve 'pi | āgantukopakleśasaṃyoga²⁰⁵viyogāvasthābhedād bhedah²⁰⁶ anyac ca pudgaladharmasamāropabhedād²⁰⁷ bhedah²⁰⁶ ṣoḍaśavidhaḥ / sādhanam śūnyatāprabhedapradarśane(13a4) yuktiḥ |

kiṃ punaḥ kāraṇaṃ yad ebhiḥ prakāraiḥ śūnyatā vijñātavyā | viśuddhyālabhanatvād viśuddhyarthibhir lakṣaṇato vijñeyā | sūtrāntareṣu paryāyanirdeśeṣv asaṃmohārthaṃ paryāyataḥ | paryāyārthāvabodhāc²⁰⁸ chūnyatāyā viśuddhyālabhanatvena niścitatvāt paryāyārthataḥ / saṃkleśe nirākṛte sā viśuddheti tatsaṃ²⁰⁹(13a5)kleśaprahāṇāya yatnotpādanārthaṃ²¹⁰ bhedataḥ | bhedasāadhanāvabodhād vikārabhāve saty api bhedam sukhaṃ pratipadyata iti bhedasāadhanato 'pi vijñeyeti ||

(a. Śūnyatālakṣaṇam)

[Y 46, 16; Bh/T 38, 20; Pa 36, 25; O 44, 5; Ms 13a5]

katham laksanam vijñeyam iti lakṣaṇaṃ hi prāg uddiṣṭam ity atas tad eva prathamataḥ prṣṭam /

¹⁹⁷ Bh/T, *evam abhūtaparikalpasya navavidhalakṣaṇābhidhānena śūnyatā yathā vijñeyā tathā nirdiśati*.

¹⁹⁸ Y, *evam abhūtaparikalpalakṣaṇaṃ navaprakāraṃ uktvā yathā śūṇyatā jñāyate tat khyāpayatīti*, corrected acc. to O. N, *evam abhūtaparikalpaṃ khyāpayitvā yathā śūnyatā vijñeyā tan nirdiśati*.

¹⁹⁹ Bh/T, *etena*.

²⁰⁰ Y, Bh/T, *lakṣaṇam atha paryāya*, corrected acc. to N, Pa, O.

²⁰¹ Bh/T, O, *ātmakā*.

²⁰² Bh/T, °*lakṣaṇam atha paryāya iti vistaraḥ / tatra lakṣaṇaṃ bhāvābhāvapratiṣedhātmatam śū*.

²⁰³ Ms, *nāmānantaraṃ*.

²⁰⁴ Bh/T, *yathārthānuṅgaṃ*.

²⁰⁵ Ms, °*āgantukopakleśasaṃkleśa*°.

²⁰⁶ Bh/T, °*bhedena bheda iti* |.

²⁰⁷ Bh/T, °*bhedena*.

²⁰⁸ *bhedasāadhanatas* を説明する箇所、*bhedasāadhanāvabodhād* と述べていることに従い、*paryāyārthāvabodhāc* と校訂した。Cf. Y, Pa, *paryāyārthāvabodhārthāc*; Ms, *paryāyārthāvabodhārth*; St, *paryāyārthāvabodhe*; O, *paryāyārthāvabodhau*.

²⁰⁹ Bh/T, *śūnyatāyāṃ viśuddhyālabhanatvānyamāya paryāyārthataḥ / saṃkleśāpanaye tadviśuddhiriti saṃ*.

²¹⁰ Ms. *kleśaprahāṇāyādanotpādanārthaṃ* ; Bh/T. *kleśaprahāṇāya prayatnotpādanārthaṃ*; St, *kleśaprahāṇāyādarotpādanārthaṃ*.

***dvayābhāvo hy abhāvasya bhāvaḥ śūnyasya lakṣaṇam*²¹¹ / (13ab)**

*iti vijñeyam / dvayasya grā(13a6)hyasya grāhakasya ca*²¹² *abhūtaparikalpe 'bhūtaparikalpena vā parikalpitātmakatvād vasturūpenābhāvaḥ | tasya ca dvayābhāvasya yo bhāva etac chūnyatāyā lakṣaṇam | kārīkānugūṇyāc cātra bhāvapratyayo luptanirdeśo draṣṭavyaḥ /*

*abhāvasya bhāva iti kim etat | abhāvasyātmā vidyamāna eva*²¹³ */ anyathā dvayabhāvasyāstitvam*²¹⁴ (13a7) *eva syāt | tadabhāvasya bhāvato 'vidyamānatvāt*²¹⁵ *| ata evāha ity abhāvasvabhāvalakṣaṇatvam*²¹⁶ *śūnyatāyāh paridīpitam bhavati na bhāvarūpalakṣaṇam iti |*

bhāvapratīṣedhavācakatvād abhāvaśabdasya bhāvaśabdābhāve 'py eṣo artho 'vagamyata iti bhāvaśabdo 'trādhikaḥ /

*nādhikaḥ | dvayābhāvaḥ*²¹⁷ (13a8) *śūnyatālakṣaṇam itīyati nirdeśyamāne*²¹⁸ *dvayābhāvasya svāntantryam evāvagamyate*²¹⁹ *śaśaviṣṇābhāvavāt | na duḥkhatādivad dharmatārūpatā | tasmād evam ucyate dvayābhāvaḥ śūnyatā tasya cābhāvasyābhūtaparikalpe bhāvaḥ śūnyatety*²²⁰ */ abhāvasya bhāvalakṣaṇaparigrhītāt*²²¹ *dharmatārūpatā paridīpitam*²²² */*

*atha vā dvayā*²²³ (13b1) *bhāvaḥ śūnyatety abhāvaśabdasya sāmānyavācītvān na vijñāyate katamo 'trābhāvo 'bhipreta iti | atyantābhāvapradarśanārtham ucyate | abhūtaparikalpe dvayābhāvasya bhāva iti | na hi prāgabhāvapradhvamsābhāvau svopādānād anyatra ākhyātuṃ yuktau*²²⁴ */ anyonyābhāvaś caikāśrayatvaṃ na yuktaṃ*²²⁵ *ubhayāśrītiatvāt / tasmād bhāvasyā*²²⁶ (13b2) *bhāvalakṣaṇopādānād grāhyagrāhakayor atyantābhāva eva śūnyatety etaj jñāpitam bhavati |*

yady abhāvātmikā śūnyatā katham paramārtha ucyate | paramajñānaviṣayatvād anityatāvat | na tu vastutvāt | api cābhāvasvabhāvo naiṣaḥ / yasmād yas cāsau tadabhāvasvabhāvaḥ sa

***na bhāvo nāpi cābhāvaḥ*²²⁷ / (13c)**

²¹¹ Y, *dvayābhāvo hy abhāvasya ca bhāvaḥ śūnyalakṣaṇam* corrected acc. to N, O.

²¹² O, *dvayagrāhyagrāhakasya*; N, *dvayagrāhyagrāhakasya*.

²¹³ Y, Pa, *abhāvasyātmā astitvam*, corrected acc. to Bh/T, O, *abhāvasyātmā vidyamāna eva*.

²¹⁴ Bh/T, *luptanirdeśo draṣṭavyaḥ / abhāvasya bhāvaś ceti kim etau / abhāvasyātmā vidyamāna eva / anyathā dvasya bhāvo vidyamāna*

²¹⁵ E, *tadabhāvasya bhāvaḥ śūnyato 'vidyamānatvāt*. corrected acc. to Ms, Bh/T, St, O; NC, *tadabhāvasya bhāvaḥ śūnyato 'vidyamānatvāt*.

²¹⁶ Y, °*abhāvasvabhāvo lakṣaṇatvam*. corrected acc. to N, Ms, Bh/T, St, O.

²¹⁷ Bh/T. *śabdābhāve 'pi tadarthābabodhād bhāvaśabdo 'trādhikaḥ | nādhikaḥ | dvayabhāvaḥ*

²¹⁸ Ms. *itīyati nirdeśyamāne*, Bh/T. *iti pratinirdeśyamāne*.

²¹⁹ Ms, Bh/T, Pa, Tib, *evātra gamyate*.

²²⁰ Y, Pa, *śūnyatety ucyate*. corrected acc. to Bh/T, O.

²²¹ Y, Bh/T, P, O, *abhāvasya bhāvalakṣaṇaparigrhītāt*. corrected acc. Tib(dngos po med pa'i mtshan nyid yongs su gzung ba'i phyir)

²²² E, Pa, O, *pradarśitā*. corrected acc. to Bh/T.

²²³ Bh/T. *śūnyatety abhāvasya bhāvalakṣaṇaparigrhītāt dharmatāsvarūpaṃ paridīpitam / aha vā dvayā*

²²⁴ Y, Pa, *yujyate*. corrected acc. to Bh/T, O.

²²⁵ Y, Pa, *yujyate*. corrected acc. to O.

²²⁶ Bh/T. *ākhyātuṃ yuktau | anyonyābhāvasyāpy ubhayāśrītiatvād ekāśrayatvaṃ na yuktaṃ / ato bhāvā*

²²⁷ E. *yas tad abhāvasvabhāvaḥ sa na bhāvo nāpi cābhāvaḥ*. corrected acc. to N, St, O

katham na bhāvaḥ |²²⁸ (13b3) yasmād dvayasyābhāvaḥ | bhāvatve hi na dvayasyātyantābhāvaḥ²²⁹ syāt |
nābhūtaparikalpadharmatā | katham nābhāvaḥ | yasmād dvayābhāvasya bhāvaḥ | [na hi dvayābhāvo
dvayābhāvarūpeṇābhāvaḥ²³⁰ / so 'bhāvaś²³¹ ced dvayasyāstitvaṃ syān na ca syād abhūtaparikalpasya
dharmatā yathānityaduḥkhatā / sattvasya viparyāsatvena samāropitasya
nityasukhabhāvasyābhāvasvabhāvatvān²³² na bhāvo nāpy cābhāva²³³ ity ucyate /

yadi punar abhūtaparikalpasya śūnyatā dharmatāsti]²³⁴ kim asau tasmād anyā vaktavyotānanyety ato
bravīti²³⁵ | etac ca śūnyatāyā²³⁶ lakṣaṇam iti / abhāvasvabhāva eva²³⁷ | atha vā bhāva
evābhāvapratiṣedhātmaka eva²³⁸ | tasmād abhūtaparikalpān

na prthaktvai²³⁹(13b4)kalakṣaṇam || (13d)

prthaktve sati dharmād anyā dharmateti na yujyate | kaḥ punar ayogaḥ | dharmād vibhinnalakṣaṇatvād
dharmatā dharmāntaram eva bhavati tadanyadharmavat | na ca dharmāntaraṃ dharmāntarasya dharmatā
bhavitum arhati | tatra punar dharmāntaram anveṣṭavyam ity anavasthāprasaṅgaḥ / anityatāduḥkhatāvad
i²⁴⁰(13b5)ti | yathānityatānityebhyo nānyā duḥkhatā ca duḥkhād²⁴¹ evaṃ śūnyatāpi na śūnyād anyeti |

ekatve sati viśuddhyā lambanam²⁴² na syāt sāmānyalakṣaṇam ceti | viśudhyate 'neneti viśuddhir mārگاḥ²⁴³
| dharmasvalakṣaṇād ananyatvān mārگا lambanam na syād dharmasvalakṣaṇavat | tasmāc ca na
sāmānyalakṣaṇam yujyate | svala²⁴⁴(13b6)kṣaṇād ananyatvād | tasyāpi dharmasvarūpavat parasparato bheda
iti sāmānyatā hīyate | atha vā svalakṣaṇasya tasmād ananyatvād bhāvasvarūpabhedābhāvaḥ²⁴⁵ | tataś ca

²²⁸ Bh/T. o 'pi na bhavaty evam api tasya yadabhāvarūpatvaṃ sa naiva bhāvo na vābhāvaḥ | katham na bhāva iti.

²²⁹ Y, dvayabhāvasyātyantābhāvaḥ. corrected acc. to Ms, NC.

²³⁰ Y, Pa, O, dvayābhāvasvarūpeṇābhāvaḥ. corrected acc. to Tib(gnyis kyi dngos po med pa'i ngo bor med pa). MAVT 第一章に限って言えば、チベット語 ngo bo は rūpa に、rang gi ngo bo は svarūpa に、ngo bo nyid と rang bzhin とは svabhāva に対応する。

²³¹ Y, O, so 'bhāvaḥ syāc. corrected acc. to Pa.

²³² Y, Pa, O, °svarūpatvān. corrected acc. to Tib(ngo bo nyid).

²³³ Y, na bhāvo nāpi vābhāvaḥ corrected acc. to E, N, Pa, O.; Bh/T, naiva bhāvo na vābhāvaḥ.

²³⁴ [] 内の文章は Ms に抜け落ちられている。Tib からの還梵は Y. p. 263, 5-11 においてなされている。Bh/T による還梵は次の通りである。

Bh/T [39, 23-40, 3]

dvayābhāve hi dvayābhāvasvabhāvo nābhāvo bhavati / tena vinā ca dvayabhāva eva syād annābhūta[parikalpa]dharmatā
yathānityatā duḥkhatā ca / sattvānām hi viparyāsāt samāropitanityasukhavastusvarūpaṃ bhāvo 'pi na bhavaty abhāvo 'pi na bhavati
/ yady abhūtaparikalpasya śūnyatādharmāḥ /

²³⁵ Ms, Y, Bh/T, Pa, kim asau tasmād anyo vaktavya utānanya ity ato bravīti. corrected acc. to O.

²³⁶ Y, etac chūnyatāyā. corrected acc. to Ms, Bh/T, Pa, N, NC, St, O.

²³⁷ Y, P, abhāvasya svarūpaṃ eva.corrected acc. to Tib(ngo bo nyid kho na'o), St. ; Bh/T, abhāvasya svarūpataiva ; O, abhāvasvarūpaṃ eva .

²³⁸ Bh/T, P, omit eva.

²³⁹ Bh/T, lakṣaṇam iti / abhāvasvarūpataiva / atha vā bhāva evābhāvapratiṣedhātmakaḥ / tasmād abhūtaparikalpān na prthaktvai.

²⁴⁰ Bh/T, tum arhati / tasyāpi dharmāntaraprayatnaprayojanādanavasthā / yathānityatā duḥkhatā ce.

²⁴¹ Y read duḥkhabhāvaduhkhād and corrected duḥkhatā ca duḥkhād. But Ms, duḥkhatā ca duḥkhād (St, O); Bh/T, duḥkhtāpi duḥkhād.

²⁴² N, O, viśuddhyā lambanam jñānam.

²⁴³ Y read viśuddhimārگاḥ and corrected viśuddhir mārگاḥ. But Ms, viśuddhir mārگاḥ (St, O).

²⁴⁴ Bh/T, dananyatvād dharmasvalakṣaṇavanmārgasya nālambanam / ataḥ sāmānyalakṣaṇam api na yujyate svala.

²⁴⁵ Ms, Y, Pa, bhāvasvarūpavad bhedābhāvaḥ. corrected acc. Tib, Bh/T, O.

sāmānyasyāpy²⁴⁶ abhāvaḥ | bhedāpekṣatvāt sāmānyalakṣaṇasya / atha vā viśodhyārtham²⁴⁷ ālambanaṁ viśuddhyālambanam / na bhāvasvalakṣaṇam ā²⁴⁸lambyamānaṁ viśuddhim āvahati | sarvasattvaviśuddhiprasaṅgāt |

yady anyānanyatvenāvaktavyā²⁴⁹ katham nirgranthavādo nālambito bhavati | yo hi bhāvasya satas tattvānyatve na vyākaroti²⁵⁰ tena nirgranthavāda ālambyate | śūnyatā tu na bhāva iti nāsty ayaṁ doṣaḥ /

evam eṣā śūnyatāśallakṣaṇā abhāvasvabhāvalakṣaṇā²⁵¹ advayalakṣaṇā ca²⁵² | tat²⁵³(13b8)tvānyatvavinirmuktalakṣaṇā ca paridīpitā | uktam śūnyatālakṣaṇam ||

(b. Śūnyatāparyāyaḥ)

[Y 49, 15; Bh/T 41, 1; Pa 38, 23; O 46, 12; Ms 13b8]

paryāya idānīm ucyate |

**tathatā bhūtaakoṭīś cānimittam²⁵⁴ paramārthatā²⁵⁵
dharmadhātus ca paryāyāḥ śūnyatāyāḥ samāsataḥ || (14)**

iti | paryāyo nāmaikasyārthasya²⁵⁶ bhinnāśabdatvaṁ pratyāyayati²⁵⁷ | paryāyārthābhīdhānam iti paryāya ucyate | tais cābhīdhātaiḥ sūtrā²⁵⁸(14a1)ntareṣu śūnyataiva nirdiśyate²⁵⁹ | etac ca paryāyapañcakam yathā²⁶⁰ pradhānam gāthāyām uktam evam anye 'pi paryāyā ihānuktāḥ | pravacanād upadhāryāḥ | tadyathā | advayatā | avikalpadhātuḥ | dharmatā | anabhilāpyatā²⁶¹ | anirodhaḥ²⁶² | asaṃskṛtam nirvāṇādi |

(c. Śūnyatāparyāyārthaḥ)

[Y 50, 3; Bh/T 41, 9; Pa 39, 11; O 47, 6; Ms 14a2]

²⁴⁶ Ms, Bh/T, E, sāmānyasyāpy; Y, sāmānya[lakṣaṇa]syāpy; P, O, sāmānyalakṣaṇasyāpy; Tib(D), spyi yang; Tib(P), spyi mtshan yang.

²⁴⁷ Pa, viśuddhyārtham.

²⁴⁸ Bh/T, āpekṣatvāt sāmānyalakṣaṇasya / atha vā viśodhayitavyatvādālambanam viśudhyālambanam / na bhāvasvalakṣam ā.

²⁴⁹ Bh/T, °āvatavyam.

²⁵⁰ Y, Pa, tattvānyatvena [na] vyākaroti. corrected acc. NC, St, O; Bh/T, tattvānyatvena vyākaroti.

²⁵¹ Y, Bh/T, P, O, abhāvasvarūpalakṣaṇā. corrected acc. to Tib(dngos po med pa'i ngo bo nyid kyi mtshan nyid).

²⁵² Bh/T, P, omit ca.

²⁵³ Bh/T, m doṣaḥ / evam ca śūnyate yam abhāvalakṣaṇāniḥsvabhāvasvarūpalakṣaṇādvayalakṣaṇā ta.

²⁵⁴ Bh/T, cānimittam.

²⁵⁵ Bh/T, pa[ramārthakaḥ] |

²⁵⁶ Bh/T, nāmaikārthasya

²⁵⁷ Bh. T, bhinnāśabdakīrttanam; Pa, bhinnāśabdaiḥ pratyāyanam; St, bhinnāśabdatvena prasiddhaḥ

²⁵⁸ Bh/T, nnaśabdakīrttanam / paryāyeṇārthābhīdhānātparyāyāḥ / tais cābhīdhātaiḥ sūtrā

²⁵⁹ Y, Pa, tāny abhīdhānāni sūtrāntareṣu śūnyataiva nirdiśyante. corrected acc. to Ms(ntareṣu śūnyataiva nirdiśyate), Bh/T, O.

²⁶⁰ Bh/T. omit yathā

²⁶¹ Y, Pa, Ms, anabhilāpyatā. corrected acc. to Bh/T, O.

²⁶² Bh/T. nirodhaḥ.

*katham paryāyārtho vijñeya*²⁶³ ity etad da(14a2)rsayati | naite śabdā gaṇāḥ |²⁶⁴ kiṃ tarhy anvarthā iti

**ananyathāviparyāsatannirodhāryagocaraiḥ |
hetutvāc cāryadharmāṇaṃ paryāyārtho yathākramam || (15)**

iti |

[tatra]²⁶⁵ ananyathārthena tathateti | avikārārthenety arthaḥ | tad eva pradarśayann²⁶⁶ āha nityam tathātvād iti²⁶⁷ | nityam sarvadāsaṃskṛta²⁶⁸(14a3)tvān na vikriyata ity arthaḥ |

aviparyāsārthena bhūtakotiḥ²⁶⁹ | bhūtaṃ satyam aviparītam²⁷⁰ ity arthaḥ | koṭiḥ paryanto yataḥ pareṇānyaj jñeyam nāstīty ato bhūtakotiḥ *bhūtaparyanta ucyate* / *katham tathatā jñeyaparyanta*²⁷¹ *ucyate* / *jñeyāvaraṇaviśodhanajñānagocaratvāt*²⁷² / ²⁷³(14a4)aviparyāsārthenety anadhyāropānapavādārthena²⁷⁴ | atraiva kāraṇam āha | viparyāsāvastutvād iti | viparyāso hi vikalpaḥ | vikalpānālambanatvān na viparyāsavastu²⁷⁵ | nimittanirodhārthenānimittam²⁷⁶ iti | *atrānimittatvaṃ nimittanirodha ucyate* / *etad eva pradarśayann*²⁷⁷ *āha sarva*²⁷⁸(14a5)nimittābhāvād iti | sarvair eva saṃskṛtāsaṃskṛtanimittaiḥ śūnyatā śūnyety animittam ucyate | sarvanimittābhāvād animittaḥ | animittam²⁷⁹ evānimittaḥ | āryajñānagocaratvāt paramārtha iti²⁸⁰ | *paramaṃ hi lokottarajñānam* | *tadārthaḥ paramārthaḥ* / ²⁸¹(14a6) *etad eva pradarśayann āha* | paramajñānagocaratvād²⁸² iti²⁸³ | āryadharmahetutvād dharmadhātuh |

²⁶³ Y, *jñāyata*. corrected acc. to N, St, O.

²⁶⁴ Bh/T, *paryāyārthaḥ katham jñeya iti / tannirdiśyate / na te śabdāḥ kalpitāḥ* |.

²⁶⁵ Bh/T. tatra

²⁶⁶ āryajñānagocaratvāt paramārtha を説明する箇所における pradarśayann という表現に従い、そして、āryadharmahetutvād dharmadhātuhを説明する箇所における vibhāvayann という表現に従い、現在分詞形の pradarśayann と校訂した。Cf. Y, Pa, O, *pradarśanārtham*.

²⁶⁷ Bh/T, *nityam tathātvād ity uktam*; Pa, *nityam tathaiveti kṛtvā*; O, *nityam tathaiveti*. N, nityam tathaiveti kṛtvā.

²⁶⁸ Bh/T, *rthaḥ / tattvākhyānānnityam tathātvādityuktam / nityam sarvasminkāle 'saṃskṛta*.

²⁶⁹ Bh/T, *bhūtakotiḥ* iti | .

²⁷⁰ Ms, aviparītam

²⁷¹ Y, jñeyam. corrected acc. to E, Bh/T, O.

²⁷² Bh/T, *jñeyāvaraṇaviśuddher jñānagocaratvāt*.

²⁷³ Bh/T, *r bhūtaparyanta iti / katham tathatā jñeyaparyanta iti / jñeyāvaraṇaviśuddher jñānagocaratvāt*.

²⁷⁴ Bh/T. *asamāropānapavādārthena*.

²⁷⁵ Tib omits vastu.

²⁷⁶ Y, Bh/T, *nimittanirodhād animittam*. corrected acc. to N, Pa, O.

²⁷⁷ Y, Pa, O, *pradarśanārtham*. 脚注265参照。

²⁷⁸ Bh/T, *d nimitta* iti / *atrānimitto nimittavirodha iti / etatpradarśanārtham āha sarva*.

²⁷⁹ Ms, animitta.

²⁸⁰ Y, *paramārthateti*. corrected acc. to N, Bh/T, Pa, St, O.

²⁸¹ Bh/T. *tvātparamārtha* iti *paramaṃ lokottaram jñānam tasyārthaḥ paramārthaḥ* /

²⁸² N, O, *paramajñānaviśayatvād*.

²⁸³ Tib omits etad eva pradarśayann āha | *paramajñānagocaratvād* iti.

dharmasabdenātrāryadharmāḥ samyagdr̥ṣṭyādayaḥ samyagvimuktijñānaparyantāḥ²⁸⁴ / *taddhetutvād dhātuh* / *tad e*²⁸⁵ (14a7) va vibhāvayann²⁸⁶ āha | āryadharmānām tadālbhanaprabhavadvād iti | svalakṣaṇopādāyarūpadhāraṇe²⁸⁷ 'py ayam dhātusabdo vartata ity āha | hetvartho hy atra dhātvarthah | tad yathā suvarṇadhātus tāmradhātū raupyadhātuh²⁸⁸ / *sūtrāntareṣv anye paryāyā uktā apy anenaiva nyāyena svārthena nirdeṣṭavyāḥ* // ²⁸⁹

(d. Śūnyatāprabhedah)

[Y 51, 6; Bh/T 42, 11; Pa 40, 13; O 48, 15; Ms 14b1]

(14b1) śūnyatāyā grāhyagrāhakābhāvarūpatvād bhedaṁ asambhāvayan pr̥cchati | atha vā paryāyārthānantaram bhedo vijñeya ity uktam atas tannirdeśānantaram pr̥cchati | katham śūnyatāyāḥ prabhedo vijñeya²⁹⁰ iti |

*abhūtaparikalpo hi saṁkleśaḥ / tasmin prahīṇe viśuddhir ucyate / saṁkleśaviśuddhikālayoś*²⁹¹ *ca śūnyatāvyatirekeṇānyan nāsti*²⁹² (14b2) yat saṁkliśyate viśudhyate vā | tasmāt saṁkleśaviśuddhikālayoḥ śūnyataiva saṁkliśyate viśudhyate ceti²⁹³ pradarśanārtham āha |

saṁkliṣṭā ca viśuddhā ca | (16a)

ity asyāḥ prabhedah |

kadā saṁkliṣṭā kadā *nirmalety*²⁹⁴ *anavabodhāt pr̥cchati* | . *kasyām avasthāyām saṁkliṣṭā kasyām viśuddheti*²⁹⁵ |

samālā nī²⁹⁶(14b3) rmalā ca [sā]²⁹⁷ | (16b)

iti vistaraḥ | āśrayāparāvṛttiparāvṛttyapekṣayā samālā²⁹⁸ ²⁹⁹ prahīṇamalā ca vyavasthāpyate | yeṣāṁ aviduṣāṁ grāhyagrāhakābhiniṣeṣārāgādikleśamalinānām cittasaṁtānānām apratipativipratipattidoṣāc chūnyatā na

²⁸⁴ Y, Pa, O, *samyagvimuktijñānaparyantāś ceti*. corrected acc. to Bh/T.

²⁸⁵ Bh/T, *dayaḥ samyagvimuktijñānaparyantāḥ / teṣāṁ hetur iti dhātuh* | *tad e*.

²⁸⁶ Stc, pradarśayan.

²⁸⁷ Y, svalakṣaṇopādāya rūpadhāraṇe. corrected acc. to Tib(rang gi mtshan nyid dang rgyur byas pa'i gzugs 'dzin pa la), Pa, St, O; Bh/T. svalakṣaṇopādāya rūpadhāraṇo.

²⁸⁸ Bh/T, St, tāmradhātur iti | ; Tib omits raupyadhātuh.

²⁸⁹ Bh/T, *sūtrāntareṣūktāni paryāyāntarāṇy apy anena krameṇa svārthena nirdeṣṭavyāni* /.

²⁹⁰ N, jñeyaḥ.

²⁹¹ Y, Pa, *saṁkleśaviśuddhikāle*. corrected acc. to St, O.

²⁹² Bh/T, *abhūtaparikalpaḥ saṁkleśastatprahāṇe viśuddhir iti saṁkleśaviśuddhikālayor api śūnyatāvinirmuktaḥ nānyad*.

²⁹³ Bh/T. viśuddhata iti; MS. viśudhyate veti.

²⁹⁴ Bh/T, *vimalā* [iti].

²⁹⁵ Y, *kadā saṁkliśyate kadā viśudhyata* iti. corrected acc. to N, St, O; Bh/T, *kadā saṁkliṣṭā kadā viśuddheti*; Pa, *kasyām avasthāyām saṁkliṣṭā kasyām ca viśuddheti*.

²⁹⁶ Bh/T. *malā* [iti] *anavagamya pr̥cchati kadā saṁkliṣṭā kadā viśuddheti* / *samālā vi*.

²⁹⁷ supplied acc. to N(samālā nirmalā ca sā).

²⁹⁸ Y, Pa, samālā. corrected acc. to Ms, Bh/T, St, O.

²⁹⁹ Y, Pa, O, insert ca. corrected acc. to Ms, Bh/T, St.

*prakhyāti tāt prati samalā vyavasthā*³⁰⁰(14b4)pyate | yeṣām āryāṇām tattvajñānād aviparītacetāsām śūnyatā nirantaram ākāśavad virajaskā prakhyāti tāt prati prahīṇamalety ucyate | evaṃ śūnyatāyā āpekṣikī³⁰¹ saṃkleśaviśuddhyor³⁰² draṣṭavyā | *na malinasvabhāvatvena*³⁰³ *prakṛtyā prabhāsvaratvāt* /

*yadi samalā bhūtvē*³⁰⁴*ti vistara*³⁰⁵(14b5)ḥ | na hy avasthābhedo vikāram antareṇa drṣṭaḥ | vikāras cotpādavinaśābhyām anusyūta iti | ata āha *katham vikāradharminītvād anityā na bhavatīti* | na hi³⁰⁶ saṃkliṣṭāvasthātaḥ *śūnyatāyā viśuddhāvasthāyām*³⁰⁷ *anyo vikāraḥ* / *tattvasthititā*³⁰⁸ *tu svabhā*³⁰⁹(14b6)vāntaram anāpadyamānā³¹⁰ | āgantukamalāpagamāt | *yasmād*

abdhātukanakākāśāsuddhivac chuddhir iṣyate || (16cd)

tasmād anityā na bhavatīti | yathaiva hy abdhātukanakākāśānām atatsvabhāvatvān malasvabhāvasyāsato 'py āgantukamalena malavaty evāgantukamalāpagame ca³¹¹ *viśuddhaiva*³¹² | ³¹³(14b7) svabhāvāntarapratipattim³¹⁴ antareṇāpi | evaṃ śūnyatāpy āgantukair malaiḥ³¹⁵ saṃkliṣyate avikṛtasvarūpāpi tadvigamāc³¹⁶ ca viśudhyatīti³¹⁷ |

yo hi tam eva bhāvaṃ pūrvam saṃkleśalakṣaṇam paścād viśuddhisvabhāvam³¹⁸ *vyavasthāpayati tasya vikāradharmanivṛttir na bhavati svabhāvavikāratvāt*³¹⁹ / *na tu yatrāpy āgantu*³²⁰(15a1)kaṃ tadubhayam | ³²¹tasmān nāsau vikāradharmatām sprṣatīti ||

(Śoḍaśavidhā śūnyatā)

[Y 52, 18; Bh/T 43, 19; Pa 42, 4; O 51, 7; Ms 15a1]

³⁰⁰ Bh/T. *cittasantānānām apratipattivipratipattidoṣeṇa śūnyatā na prakhyāti tātprati samaleti vyavasthā.*

³⁰¹ Y, Pa, āpekṣikā. corrected acc. to MS, Bh/T, St, O.

³⁰² Y, O, saṃkleśaviśuddhyor. corrected acc. to Bh/T; Pa, saṃkleśaviśuddhir.

³⁰³ Y, Pa, O, °svarūpatvena. corrected acc. to Tib(ngo bo nyid).

³⁰⁴ Y, *yadi samalā syād.* corrected acc. to N, P, St, O; Bh/T, *yadi samalā vikāreti.*

³⁰⁵ Bh/T. *śuddhyor drṣṭiḥ prakṛtiprabhāsvaratvena na svarūpeṇa samalā* / *yadi samalā vikāreti vistara.*

³⁰⁶ Bh/T omits na hi.

³⁰⁷ Y, *śūnyatāviśuddhāvasthāyām.* corrected acc. to Bh/T, St, O.

³⁰⁸ St, *tattvasthitāyā.*

³⁰⁹ Bh/T. *śūnyatāyā viśuddhyavasthāyām nānyo vikāraḥ* / *tattvato* 'vasthāyāḥ svabhā.

³¹⁰ Ms, Bh/T, Pa, St, anāpadyamānāyā.

³¹¹ Y, malasvabhāvasyābhavato 'py āgantukamalavatyāgantukamalāpagame ca. corrected acc. to E, O.

³¹² Pa, *te viśuddhā eva.*

³¹³ Bh/T, *tve* 'bhūte 'py āgantukamalavattvam āgantukamalāpagame ca prakṛtiviśuddhatvam.

³¹⁴ Ms. °pratipattim,

³¹⁵ Ms. āgantukair malaiḥ, Bh/T. āgantukamalaiḥ

³¹⁶ Bh/T, tadvigame.

³¹⁷ Bh/T, viśudhyate.

³¹⁸ Bh/T, viśuddhasvabhāvam

³¹⁹ Pa, *vikārasvabhāvatvāt.*

³²⁰ Bh/T, *ṃ vyavasthāpayati [tasya] sa svabhāvāntareṇa vikāradharmī viparīto yatrānāgantu.*

³²¹ Sth, *tasya svabhāvāntaravikāravikāridharmanivṛttir nāsti yasya tv āgantukam tadubhayam tasyāpi nāsti.*

prabhedanirdeśādhikāre sarve śūnyatāprabhedā³²² vaktavyā ity ata āha ayam aparāh prabheda iti
³²³sodaśavidhā śūnyateti | vastubhedena *ṣoḍaśavidhā bhavati* | *dvayābhāvasvarūpe tu bhedo nāsti* / *sā*
*ṣoḍaśavidhā śū*³²⁴(15a2)nyatā Prajñāpāramitāyām paṭhyate | adhyātmaśūnyatā yāvad
 abhāvasvabhāvaśūnyateti |
saiśa samāsato veditavyā |

bhoktrbhojanataddehapratiṣṭhāvastuśūnyatā | (17ab)

ity evamādi | sāmānyalakṣaṇam śūnyatā³²⁵ | *sarvadharmasyādvayasvabhāvatvāt*³²⁶ / *anyathā hi tasyā*
*nānātvam*³²⁷ *na śakyate darśayī*³²⁸(15a3)tum ity ato vastunānātvena tannānātvam darśayati |³²⁹

pūrvam tāvad bhoktā vibhāvayitavyaḥ | tatsnehābhīniveśatyājanārtham | tatsnehābhīniveśo hi
 buddhatvavimokṣapṛāptipratibandho³³⁰ bhavati / *tadanantaram tadbhojanam* | *tadanantaram taylor*
adhiṣṭhānam śārīram | *tadanantaram tada*³³¹(15a4)dhiṣṭhānasya śārīrasya pratiṣṭhā bhājanaloko
 vibhāvayitavyaḥ | bhoktur upakāraikatvād ātmīyasnehagrāhavyāvartanārtham | etac caturvidham vastu
 tacchūnyatā **vastuśūnyatety** ucyate |

tatra bhoktrśūnyatādhyātmikāny āyatanāny ārabdheti³³² | *tāni ca cakṣurādīni yāvan*
*manahparyantāni*³³³(15a5) | tadanyasya bhoktur abhāvāt | cakṣurādīnām ca viśayopabhogapravṛttidarśanāl
 lokasya cakṣurādīṣv eva bhoktrabhimāna ity ataś cakṣurādīyātanaśūnyatā bhoktrśūnyatety ucyate |

bhojanaśūnyatā bāhyāni³³⁴ti | *rūpādīni yāvad dharmaparyantāni* / *tāni viśayabhāvatvena*
*bhu*³³⁵(15a6)jyanta ³³⁶iti bhojanam ato³³⁷ bāhyāyatanaśūnyatā bhojanaśūnyatety ucyate |

taylor bhoktrbhojanayoh śārīre parasparāvinirbhāgenāvasthānāt³³⁸ taddehah śārīram ity atas
 tacchūnyatādhyātmabāhyaśūnyatety ucyate³³⁹ /

³²² Bh/T. sarvaśūnyatāprabhedā

³²³ N, Bh/T omit iti.

³²⁴ Bh/T, *na ṣoḍaśavidhā* / *na hi dvayābhāvasvarūpe bhedaḥ* / *sā ṣoḍaśavidhāśū*.

³²⁵ Y, Bh/T, Pa, *śūnyatāyāḥ*. corrected acc. to E, O.

³²⁶ Y, O. *sarvadharmasyādvayasvarūpatvāt*. corrected acc. to. Tib(chos thams cad gnyis med pa'i ngo bo nyid kyi phyir). E, *sarvadharmādvayasvarūpatvāt*; Bh/T, *sarvadharmānām advayarūpatvāt*; Pa, *sarvadharmasyādvayasvarūpatvam*.

³²⁷ Pa, *nānyathā tannānātvam*.

³²⁸ Bh/T, *nam śūnyatāyāḥ sarvadharmānām advayarūpatvāt* / *anyathā na tadbhedo śakyate darśayi*.

³²⁹ Y, ato vastunānātvena tannānātvam darśayati | *nānyathā tannānātvam śakyate darśayitum* iti. corrected acc. to E, O.

³³⁰ Pa, °*pratibandhako*.

³³¹ Bh/T, *ptipratibandho bhavati* / *tadanantaram tadbhojanam* / *tadanantaram tadubhayādhiṣṭhānam śārīram* / *tada*.

³³² Y, tatra bhoktrśūnyatā hy ādhyātmikāyatanair ārabdheti. corrected acc. to N, St, O; Bh/T, tatra bhoktrśūnyatādhyātmikāyatanārabdheti; Pa, tatra bhoktrśūnyatā ādhyātmikāyatanārabhyeti.

³³³ Bh/T, *ktśūnyatādhyātmikāyatanārabdheti* / *tāni ca cakṣurādīmanah paryantāni* /

³³⁴ Y, Pa, bhojanaśūnyatā bāhyair. corrected acc. to N, Pa, St, O.

³³⁵ Bh/T. janaśūnyatā bāhyair iti / *[tāni ca] rūpādidharmaparyantāni* / *teṣu viśayavastūni bhu*.

³³⁶ Bh/T, *bhujanta*.

³³⁷ Bh/T, *tasmād*.

³³⁸ Y, Pa, °*vinibhāgena*°. corrected acc. to Ms, Bh/T, St, O.

³³⁹ Y, tacchūnyatādhyātmabāhyaśūnyatety ucyate. corrected acc. to N, Pa, St, O; Bh/T, tacchūnyatā. Tib omits tādhyātmabāhyaśūnyatā.

pratiṣṭhāvastu bhājanalokaḥ / sarvathā sattvānām³⁴⁰ pratiṣṭhāvastutvena³⁴¹ (15a7) prajñānāt | ata evāha tasya vistīrnatvāt tacchūnyatā mahāśūnyatocyata³⁴² iti | vastuśabdaḥ³⁴³ pratyekam abhisambadhyate |

tasyaivam yogino bodhisattvasya caturvidhajñeyavastuśūnyatāyām savitarkena yonīśomanaskāreṇa manaskriyamānāyām ayam anyo nimittagrāha upatiṣṭha³⁴⁴ (15b1) te | **yene** daṃ śūnyatājñānenādhyātmikabāhyāyatanādi śūnyam³⁴⁵ **drṣṭam** tatra yo grāhyagrāhakābhīniveśo 'yam eva cātra paramārthākāro **yathā** tacchūnyatājñānena **drṣṭam** iti vikalpaḥ |³⁴⁶ tasya dviprakārasya yogibhūmibhrāntinimittasya vikalpasya vibhāvanārthaṃ śūnyatāśūnyatā paramārthaśū³⁴⁷ (15b2) nyatā ca yathākramam | jñānakāralopaṃ kṛtvā nirdiṣṭe³⁴⁸ | śūnyatāviśayatvād³⁴⁹ vā tajjñānam³⁵⁰ śūnyatety uktam | tasya³⁵¹ grāhyagrāhakabhāvena śūnyatā śūnyatāśūnyatā | ādhyātmikāyatanādikaṃ ca tena śūnyatājñānena **yathā drṣṭam**³⁵² so 'tra paramārtha ity tenākāreṇa śūnyatā paramārthaśūnyatā³⁵³ / kiṃ³⁵⁴ (15b3) kāraṇam | paramārtho hi śūnyaḥ parikalpitenā svabhāveneti |

ayam anyo 'pi nimittagrāhaḥ śūnyatābhāvanopaplavabhūtaḥ³⁵⁵ | **yadārthaṃ** bodhisattvaḥ³⁵⁶ śūnyatām pratipadyate³⁵⁷ tasya bhāvarūpatvaṃ³⁵⁸ samāropyate | tad vibhāvanārthaṃ saṃskṛtaśūnyatādayaḥ sarvadharmaśūnyatāparya³⁵⁹ (15b4) ntāḥ śūnyatā nirdiṣṭāḥ | kimārthaṃ ca pratipadyate³⁶⁰ |

śubhadvayasya prāptyarthaṃ | (18a)

yāvad buddhadharmāṇāṃ viśuddhyarthaṃ³⁶¹ | śūnyatām pratipadyate | śūnyatām prabhāvayatīty arthaḥ |

³⁴⁰ Y, Pa, O, sarvatra sattvānām. corrected acc. to Sth, S.Bh/T, sarvasattvānām.

³⁴¹ Bh/T, pratiṣṭhāvastu bhājanalokaḥ / sarvasattvānām āśrayavastu.

³⁴² N, O, tasya vistīrnatvāt chūnyatā mahāśūnyatety ucyate; Bh/T, tasya (ātivistīrṇa) tvāt tacchūnyatā mahāśūnyatety ucyate; Pa, asya vistīrnatvāt chūnyatā mahāśūnyatetocyate.

³⁴³ Bh/T, vastuśabdena.

³⁴⁴ Bh/T, yām savikalpamanaskāreṇa manaskāre 'nyo 'yam nimittagrāha upatiṣṭha.

³⁴⁵ Y, °ādi śūnyam. corrected acc. to Bh/T, Pa, St, O.

³⁴⁶ Bh/T, °veśo yathā ca tacchūnyatājñānena drṣṭam ity ayam evātra paramārthākāro vikalpaḥ.

³⁴⁷ Bh/T, sya yogabhūmibhrāntinimittasya vikalpasya vibhāvanācchūnyatāśūnyatā paramārtha.

³⁴⁸ Y, Bh/T, Pa, O, nirdiṣṭā. corrected acc. to Ms, St.

³⁴⁹ Y, śūnyatā viśayatvād. corrected acc. to Bh/T, Pa, O.

³⁵⁰ Bh/T, tatra jñānam.

³⁵¹ Bh/T omits tasya.

³⁵² N, O, **yathā** ca **drṣṭam**.

³⁵³ Y, etasyākārasya śūnyatā paramārthaśūnyatā. corrected acc. to Bh/T, O; Pa, paramārthākāreṇa tasya śūnyatā paramārthaśūnyatā.

³⁵⁴ Bh/T, yādṛśaṃ drṣṭam so 'tra paramārtha ity tenākāreṇa śūnyatā paramārthaśūnyatā / kiṃ.

³⁵⁵ Bh/T, śūnyatābhāvanopadravabhūto.

³⁵⁶ N, **yadārthaṃ** ca bodhisattvaḥ.

³⁵⁷ N, prapadyate.

³⁵⁸ Y, Bh/T, Pa, O, °svarūpatvaṃ. corrected acc to Tib(ngo bo).

³⁵⁹ Bh/T, vasvarūpaṃ samāropyate / tad vibhāvanārthaṃ saṃskṛtaśūnyatādayaḥ sarvadharmaśūnyatāparya.

³⁶⁰ N, prapadyate.

³⁶¹ k.19c

mārgo nirvāṇaṃ ca kuśalasya saṃskṛtasyāsamskṛtasya ca³⁶² | *tayoḥ sambadhyate yathākramam*³⁶³
(15b5)samskṛtaśūnyatā 'saṃskṛtaśūnyatā ca |

sadā sattvahitāya ca | (18b)

iti sarvākāraṃ sarvakālaṃ ca mayā sattvahitaṃ³⁶⁴ kartavyam iti tacchūnyatā 'tyantaśūnyatā |

samsārātyajanārthaṃ ca | (18c)

sattvārthaṃ³⁶⁵ mayā saṃsāro na parityājyaḥ / saṃsāre hi parityakte 'labdhvā bodhisatt³⁶⁶(15b6)vabodhiṃ
śrāvakabodhau vyavatiṣṭhate³⁶⁷ | tasya śūnyatā anavarāgraśūnyatā | kimarthaṃ punas tasya śūnyatā deśyata³⁶⁸
ity ata āha | anavarāgrasya hi³⁶⁹ samsārasya śūnyatām apaśyan khinnah samsāram parityajeteti³⁷⁰

kuśalasyākṣayāya ca | ³⁷¹(18d)

iti mayā kuśalamūlāni³⁷² na kṣīyan(15b7)te³⁷³ nirupadhiśese nirvāṇe 'pīti³⁷⁴ | nāvakiratīty etad evācāṣṭe
notsrjatīti | yady evaṃ kathaṃ tarhi³⁷⁵ nirupadhiśeṣo nirvāṇadhātuḥ³⁷⁶ sidhyati |
sāsrava³⁷⁷dharmavipākakāyābhāvāt³⁷⁸ | *anāsravabhāvadharmakāyasya tu buddhānāṃ bhagavatām*³⁷⁹

³⁶² Y, Pa, *śubhadvayaṃ hi saṃskṛtam asaṃskṛtam ca* | mārgo nirvāṇaṃ ca. corrected acc. to. N, St, O; Bh/T, mārgo nirvāṇaṃ ca
śubhaṃ saṃskṛtam asaṃskṛtam ca; NC, mārgo nirvāṇaṃ ca *śubhadvayaṃ saṃskṛtam asaṃskṛtam ca*.

³⁶³ Bh/T, *śubhaṃ saṃskṛtam asaṃskṛtam ca / tadubhayasya yathākramam yogaḥ*.

³⁶⁴ Bh/T. sarvasattvahitaṃ

³⁶⁵ Y, Pa, O, iti *sattvārthaṃ*. corrected acc. to Ms, Bh/T.

³⁶⁶ Bh/T, *ārthaṃ na mayā saṃsāraḥ parityājyaḥ / na khalu labhate saṃsāraparityāga e*.

³⁶⁷ Bh/T, śrāvakabhūmāv avatiṣṭhate.

³⁶⁸ Y, deśyatā corrected acc. to Bh/T, St, O; Ms, Pa, deśyata.

³⁶⁹ Bh/T. omits hi.

³⁷⁰ Y, Bh/T, *parityajati*. corrected acc. to N, Pa, St, O.

³⁷¹ Y, Bh/T, *akṣayāya śubhāya ca*. corrected acc. to N, Pa, St, O.

³⁷² Y, *kuśalamūlā*. corrected acc. to NC, Pa, O.

³⁷³ Bh/T, *tyajati akṣayāya śubhāya ca nirupadhiśeṣanirvāṇa* iti / *kuśalamūlam akṣayaṃ svato*.

³⁷⁴ Ms, Bh/T, NC, nirvāṇe 'pi. corrected acc. to Y, Pa, O.

³⁷⁵ Bh/T, omits tarhi.

³⁷⁶ Ms, nirupadhiśo nirvāṇadhātuḥ; Bh/T. nirupadhiśeṣanirvāṇadhātuḥ.

³⁷⁷ Y, Bh/T, Pa, O, sāsrava°. corrected acc. Ms, Nc.

³⁷⁸ Bh/T, vipākakāyasyābhāvāt.

³⁷⁹ Bh/T, O, *bhagavatām buddhānāṃ*; Pa, *buddhaysa bhagavato*.

*nirupadhiśeṣe nirvāṇadhātāv apy avyuparamād*³⁸⁰ *iti*³⁸¹ (16a1) *siddhāntaḥ* | *atas*³⁸² *tacchūnyatā*³⁸³ *anavakāraśūnyatety ucyate* |

gotrasya ca viśuddhyartham | (19a)

tasya śūnyatā prakṛtiśūnyatā | *atraiva kāraṇam āha* | *gotram hi prakṛtir* *iti* | *kuta etat* | *ata āha* *svābhāvikatād*³⁸⁴ *iti* / *svābhāvikam anādikālikam* | *nākasmikam*³⁸⁵ *ity arthaḥ* / *yathānādisaṃsāre*³⁸⁶ *kiñcic sacetanaṃ*³⁸⁷ (16a2) *kiñcid acetanaṃ evam ihāpi kiñcit śaḍāyatanaṃ buddhagotraṃ kiñcic chrāvakādigotraṃ iti* | *na cākasmikatvaṃ gotrasyānādiparamparāgatatvāc cetanācetanaviśeṣavad iti* | *sarvasattvasya tathāgatagotrikatvād atra gotram iti tathā jñeyam*³⁸⁸ *ity anye* /

***lakṣaṇavyañjanāptaye* | (19b)**

*ity ataḥ*³⁸⁹ (16a3) *sānuvyañjanānām mahāpuruṣalakṣaṇānām*³⁹⁰ *śūnyatā lakṣaṇaśūnyatety*³⁹¹ *ucyate* | *kimca*

śuddhaye buddhadharmānām bodhisattvaḥ prapadyate | (19cd)

ante **prapadyata** *ity abhidhānāt* | *sarvatra śubhadvayasya prāptyarthaṃ*³⁹² *bodhisattvaḥ prapadyate* | *sadā sattvahitāya ca*³⁹³ *bodhisattvaḥ prapadyata iti yojyam* |³⁹⁴

³⁸⁰ Y, Pa, O, *na vyuparamād*. *vyuparama* の品詞に従い、*na* を名詞否定接頭語である *a* と校訂した。Cf. Bh/T, *na santānoccheda*.

³⁸¹ Bh/T, *śravabhāvasya dharmakāyasyātītānām bhagavatām buddhānām nirupadhiśeṣanirvāṇadhātāv api na santānoccheda iti*.

³⁸² Bh/T, *tasmāt*.

³⁸³ N, *tasya śūnyatā*.

³⁸⁴ Y, *svābhāvikatād*. corrected acc. to N, Pa, St, O; Bh/T, *svābhāvikam*.

³⁸⁵ Y, Pa, *anāgantukam*. corrected acc. to Bh/T, O.

³⁸⁶ Pa, *yathānādaḥ saṃsāre*.

³⁸⁷ Y, Pa, *cetanaṃ*. corrected acc. to Bh/T, O. Bh/T. *m iti* / *svābhāvikamanādikālikam nākasmikam ity arthaḥ* / *kathaṃ* / *anādaḥ saṃsāre kiñcit sacetanaṃ*.

³⁸⁸ Y, Pa, *tathātvaṃ jñeyam*. corrected acc. to Bh/T, Sth, St, O.

³⁸⁹ Bh/T, *śarve sattvāstathāgatagotra itīha gotraṃ nāma tathā jñeyam ity apare* / ***lakṣaṇavyañjanāptaye*** *iti* /

³⁹⁰ N, *mahāpuruṣalakṣaṇānām sānuvyañjanānām*.

³⁹¹ Bh/T, *śūnyatālakṣaṇaṃ śūnyatety*.

³⁹² k.18a.

³⁹³ k.18b.

³⁹⁴ Bh/T, *ndhaḥ* / *śubhadvayasya prāptyarthaṃ bodhisattvaḥ prapadyate* / *sadāsattvahitāya ca bodhisattvaḥ prapadyate* / *iti* /

(16a4)katareṣāṃ buddhadharmāṇāṃ ity ato bravīti | balavaiśāradyāvenikādīnām iti | saṃkṣepataḥ sarvabuddhadharmāṇāṃ prāptaye mayā prayatitavyam³⁹⁵ iti pratipadyate / *tasmād vibhāvanocyate* | *tasya*³⁹⁶ *śūnyatā sarvadharmasūnyatocyate* /³⁹⁷ *kīḍṣīha vibhāvaneti* | *jñeye jñānasyāvyavahita*(16a5)pravṛttiḥ³⁹⁸ |³⁹⁹ evam tāvac caturdaśānām adhyātmasūnyatādīnām sarvadharmasūnyatāparyantānām⁴⁰⁰ vyavasthānam veditavyam |

kā punar atra bhoktrāḍau śūnyatā | [*katamaḥ svabhāva*⁴⁰¹ *ity ata āha*

***pudgalasyātha dharmāṇāṃ abhāvaḥ śūnyatātra /
tadabhāvasya sadbhāvas tasmīn sā śūnyatāpāra // (20)***⁴⁰²

*iti / tatra yathoktabhoktrādīnām*⁴⁰³ *pudgaladharmābhāvaḥ ca śūnyatā* / *tadabhāvasya ca sadbhāvaḥ śūnyatā*⁴⁰⁴ | *tatra pudgaladharmayor asadbhāvo*⁴⁰⁵ *'bhāvasūnyatā* / *tadabhāvasya sadbhāvo 'bhāvasvabhāvasūnyatā*]⁴⁰⁶

kimarthaṃ punar eṣāṃ⁴⁰⁷ dvividhā śūnyatānte vyavasthāpyate | *ata āha śūnyatālakṣaṇakhyāpanārtham*⁴⁰⁸ *iti / kimarthaṃ punaḥ śūnyatākhyāpanārtha*⁴⁰⁹(16a6)m⁴¹⁰ *ata āha* | *pudgaladharmasamāropasya tacchūnyatāpavādasya ca parihārārtham yathākramam* |⁴¹¹ *pudgaladharmasamāropasya parihārārtham abhāvasūnyatāṃ vyavasthāpayati* | *tacchūnyatāpavādaparihārārtham cābhāvasvabhāvasūnyatām /*

³⁹⁵ Ms, pratitavyam.

³⁹⁶ O. tasyāḥ.

³⁹⁷ Ms, tasmāt śūnya. Bh/T, tasmād (vibhāvayatīti tasya) śūnyatāṃ sarvadharmasūnyatām iti ; Pa, tasmāc cchūnyatā vibhāvanayo sarvadharmasūnyatocyate; St, tasmāc cchūnyatāṃ prabhāvayatīty ucyate°.

³⁹⁸ Ms, napravṛttiḥ. St, avibandhanappravṛttiḥ

³⁹⁹ Bh/T, [*vibhāvayatīti tasya*] śūnyatāṃ sarvadharmasūnyatām iti / *kīḍṣīha vibhāvaneti* / *jñeye jñānasyāvyavahitappravṛttiḥ* |.

⁴⁰⁰ Ms, °paryandhānām.

⁴⁰¹ Y, Pa, O, *svarūpam*. corrected acc. to Tib(ngo bo nyid).

⁴⁰² Y, *pudgalasya ca dharmāṇāṃ asadbhāvo 'ra śūnyatā / tadabhāvasya sadbhāvas tadanyā tatra śūnyatā* //. corrected acc. to N, Pa, O.

⁴⁰³ Pa, *yathoktānām bhoktrādīnām*.

⁴⁰⁴ Y, *pudgaladharmāṇāṃ asadbhāvaḥ śūnyatā / tadabhāvasya ca sadbhāvaḥ śūnyatā*. corrected acc. to N, Pa, O.

⁴⁰⁵ Y, Pa, asadbhāvo. corrected acc. to Bh/T, O.

⁴⁰⁶ [] 内の文章は Ms に抜け落ちられている。Tib からの還梵は Y. p. 263,13-19 においてなされている。Bh/T による還梵は次の通りである。

⁴⁰⁷ Ms, St, eṣā.

⁴⁰⁸ Y, *śūnyatālakṣaṇapradarśanārtham*. corrected acc. to N, Pa, St, O .

⁴⁰⁹ *ata āha / pudgalasya ca dharmāṇāṃ abhāvastatra śūnyatā / tadabhāvasya sadbhāvaḥ sā tataḥ śūnyatāparā* // *iti / tatra yathoktabhoktrāḍau pudgaladharmābhāvaḥ śūnyatā / tasyābhāvasya sadbhāvo 'pi śūnyatā / tatrapudgaladharmābhāvo 'bhāvasūnyatā / tasyābhāvasya sadbhāvo 'bhāvasvabhāvasūnyatā / taylor dvividhādhyātmasūnyatā katham ante vyavasthāpyata ity ata āha śūnyatālakṣaṇanirdeśād iti / śūnyatālakṣaṇanirdeśo 'pi kimartha*.

⁴¹⁰ Y, *śūnyatāpradarśanam*. corrected acc. to Pa, O.

⁴¹¹ Bh/T, *yathākramam* iti.

*yady abhāvaśūnyatā nocyeta parikalpitarūpayor*⁴¹² *dharmapudgalayor bhāva*⁴¹³ (16a7)eva prasajyeta⁴¹⁴ | yady abhāvasvabhāvaśūnyatā nocyeta⁴¹⁵ śūnyatāyā abhāva eva prasajyeta | tadabhāvāc ca pudgaladharmayoḥ pūrvavad bhāvaḥ syāt |

tatrādhyātmikeṣv āyataneṣu vipākavijñānasvabhāveṣu *bālānām bhokṛtsammateṣu bhokṛtpudgalasya kalpitalakṣaṇānām ca cakṣurādīnām abhāvas* | *tadabhā*⁴¹⁶(16b1)vasya ca sadbhāvo 'dhyātmaśūnyatā | bāhyeṣv āyataneṣu rūpādivijñāptyābhāsasvabhāveṣu *bālānām bhogyasammateṣu bhojanasyātmīyasya parikalpitalakṣaṇānām ca rūpādīnām abhāvas* | *tadabhāvasya ca sadbhāvo bahirdhāśūnyatā / taddehe śarīre bhokṛtpudgalasya bālajanaparikalpitānām rūpā*⁴¹⁷(16b2)dīnām dehasya cābhāvas | *tadabhāvasya ca sadbhāvo*⁴¹⁸ 'dhyātmabahirdhāśūnyatā | bhājanaloke sattvalokābhāvas⁴¹⁹ tatparikalpitasvarūpābhāvas⁴²⁰ | *tadabhāvasadbhāvas ca mahāśūnyatā | śūnyatājñāne*⁴²¹ *paramārthākāre ca jñātur ākāragrahūtpudgalasya*⁴²² *parikalpitalakṣaṇaśūnyatājñānasya* ⁴²³*paramārthākārasya*⁴²⁴ (16b3) cābhāvas | *tadabhāvasya ca sadbhāvo yathākramam śūnyatāśūnyatā paramārthaśūnyatā ca | idānīm*⁴²⁵ yadartham bodhisattvaḥ pratipadyate teṣu *samskr̥tādiṣu sarvabuddhadharmaparyanteṣu bodhisattvapratipattavyeṣu*⁴²⁶ *pudgalasya parikalpitalakṣaṇānām ca dharmānām abhāvas* | *tadabhā*⁴²⁷(16b4)vasya ca sadbhāvo⁴²⁸ yathākramam samskr̥taśūnyatā yāvat sarvadharmāśūnyateti |

tathā hi nāsti samskr̥tasya svāmī vā prayoktā vā pudgalo | nāpi samskr̥tam⁴²⁹ *bālajanaparikalpitenātmatvena | samkṣepataḥ sarvavikalpagrāhapratipakṣārtham sarvasūtrāntābhisaṃdhivyākaraṇā*⁴³⁰(16b5)rtham caitā bodhisattvānām śrāvakair asādhāraṇāḥ ṣoḍaśaśūnyatā nirdiṣṭāḥ |

⁴¹² Y, Pa, O, °svarūpayor. corrected acc. Tib(ngo bo), Bh/T.

⁴¹³ Y, Pa, O, astitvam. corrected acc. to Bh/T.

⁴¹⁴ Bh/T, *hārārtham abhāvasvabhāvaśūnyatām / yadyabhāvaśūnyatā nocyate parikalpitarūpayor dharmapudgalayor bhāva* eva prasajyeta.

⁴¹⁵ Bh/T, nocyate.

⁴¹⁶ Bh/T, *eṣu bālānām bhokṛtsammateṣu bhoktuḥ pudgalasya kalpitalakṣaṇānām cakṣurādīnām cābhāvastasyābhāva*.

⁴¹⁷ Bh/T, *bhāvas tasyābhāvasya ca sadbhāvo bāhyśūnyatā | tasya dehābhāvyantare bhoktuḥ pudgalasya bālajanaparikalpitānām ca rūpā*.

⁴¹⁸ Ms, Y, Pa, bhāvo. corrected acc. Bh/T, O.

⁴¹⁹ Bh/T, sattvalokasyābhāvas.

⁴²⁰ Bh/T, °svabhāvābhāvas.

⁴²¹ Ms, śūnyajñāne.

⁴²² St, *ākāragrhūtpudgalasya ca*.

⁴²³ Pa, *parikalpitalakṣaṇaśūnyatā*.

⁴²⁴ Bh/T, *śūnyatājñānasya paramārthākārasyāpi jñātrākāragrāhakasya pudgalasya parikalpitalakṣaṇasya śūnyatājñānasya paramārthākārasya*; Sth, *śūnyatājñāne paramārthākāre cāpi jñātrā ākāragrāhakaḥ pudgalena ca parikalpitalakṣaṇayoḥ śūnyatājñānasya paramārthākārasya*.

⁴²⁵ Y, [idānīm]. corrected acc. to Ms, Bh/T, NC.

⁴²⁶ Sth, St, *bodhisattvasādhanaḥ prayojaneṣu*.

⁴²⁷ Bh/T, *eṣu bodhisattvasiddhiprayojaneṣu / pudgalasya parikalpitalakṣaṇānām ca dharmānām abhāvas tadabhā*.

⁴²⁸ Ms, bhāṣā; Bh/T, bhāvo.

⁴²⁹ Bh/T, pudgalaḥ samskr̥tam vā.

⁴³⁰ Bh/T, *nātmanā / samkṣepeṇa sarvavikalpagrāhapratipakṣārtham sarvasūtrābhīprāvyākaraṇā*.

atra ca⁴³¹ bhagavatā śūnyatāviṣayaḥ śūnyatāsvabhāvaḥ śūnyatābhāvanāprayojanaḥ ca darśitam | *tatra śūnyatāviṣayo bhoktrādyartha yāvad buddhadharmaparyantaḥ / tatpradarśanaṁ punaḥ śūnyatāyā*⁴³²(16b6)ḥ sarvadharmavyāpakatvajñāpanārtham | śūnyatāsvabhāvo 'bhāvasvabhāvo 'bhāvabhāvasvabhāvaś ca⁴³³ | śūnyatāsvabhāvapradarśanaṁ punar adhyāropāpavādapratipakṣeṇa sarvadr̥ṣṭiṇihsaraṇātmakatvajñāpanārtham⁴³⁴ / śūnyatābhāvanāprayojanaṁ śubhadvayasya prāptyartham⁴³⁵ ity ārabhya buddhadharmāṇāṁ prāptaya⁴³⁶ iti paryantaṁ / tatpra⁴³⁷(16b7)darśanaṁ punaḥ svaparātmano rūpadharmakāyasampratkarṣaḥ⁴³⁸ śūnyatābhāvanāyāḥ prāpya iti⁴³⁹ pradarśanārtham iti |

evam śūnyatāyāḥ prabhedo vijñeya iti samalāvasthāyāṁ samkṣiptā nirmalāvasthāyāṁ viśuddheti | *adhyātmaśūnyatādayaś ca ṣoḍaśānantaroktabhedaprakārā iti ve*⁴⁴⁰(17a1)ditavyaḥ ||

(e. Śūnyatāsādhanaṁ)

[Y 59, 10; Bh/T 48, 23; Pa 47, 22; O 56, 11; Ms 17a1]

bhedoddeśānantaraṁ tatsādhanaṁ uddiṣṭam ity atas tannirdeśānantaraṁ prcchati | katham sādhanam vijñeyam⁴⁴¹iti | *atra kiṁ sādhyate* |⁴⁴² āgantukopakleśasamkṣiptatā svabhāvaviśuddhatā ca |⁴⁴³ tatra samkṣiptatāsādhanaṁ *adhikṛtyāha* |

samkṣiptā ced bhaven nāsau muktāḥ syuḥ sarvadehinaḥ / ⁴⁴⁴ (21ab)

iti / *vimokṣaḥ sam*⁴⁴⁵(17a2)kleśaprahāṇam | tatsamkleśaprahāṇam ca mārgabhāvanātaḥ | tatra yadi dharmāṇāṁ śūnyatā āgantukair upakleśair anutpanne 'pi pratipakṣe 'piśabdād utpanna iva na samkṣiptā bhaved evaṁ sati samkleśābhāvād ayatnata eva muktāḥ sarvasattvā bhaveyuh⁴⁴⁶ / *ayatnata eve*⁴⁴⁷ti *pratipakṣam antareṇaiva / na tu*⁴⁴⁸ (17a3) pratipakṣam antareṇa prāṇināṁ asti mokṣa ity avaśyaṁ

⁴³¹ Bh/T omits ca.

⁴³² Bh/T, *tatra śūnyatāviṣayo bhoktrāder arthād buddhadharmaparyantaḥ / tatpradarśanaṁ punaḥ śūnyatāyā*.

⁴³³ Ms. śūnyatāsvabhāvo abhāvo abhāvasvabhāvaś ca.

⁴³⁴ Stc, °nihsaraṇātmakajñānotpādanārtham.

⁴³⁵ k.18a.

⁴³⁶ k.19c. N, śuddhaye buddhadharmāṇāṁ.

⁴³⁷ Bh/T, *ātmakatvajñāpanārtham / śūnyatābhāvanāprayojanaṁ śubhadvayasya prāptyartham ity ārabhya śuddhye buddhadharmāṇāṁ iti paryantaṁ / tatpra*.

⁴³⁸ Stc, svaparārtharūpadharmakāyasampratkarṣaḥ.

⁴³⁹ Ms, Bh/T, St, śūnyatābhāvanād eveti.

⁴⁴⁰ Bh/T. *vimalāvasthāyāṁ ca viśuddhetyadhyātmaśūnyatādiṣoḍaśabhedakathanānantaramākāro ve*.

⁴⁴¹ Y, Pa, jñeyam. corrected acc. to N, St, O; Bh/T, *veditavyam*.

⁴⁴² Bh/T. *m veditavyam* iti / *atra kiṁ sādhyam* iti /.

⁴⁴³ Bh/T. āgantukopakleśasamkṣiptatāsvabhāvaviśuddhabhāvaḥ |

⁴⁴⁴ Y, *yadi na syāt sa samkleśo muktāḥ syuḥ sarvadehinaḥ*. corrected acc. to N, Pa, St, O; Bh/T, *yadyayaṁ na bhavet kleśo muktāḥ syuḥ sarvadehinaḥ*.

⁴⁴⁵ Bh/T, *m adhikṛtyāha yadyayaṁ na bhavet kleśo muktāḥ syuḥ sarvadehinaḥ* / iti / *kimuktiḥ sam*.

⁴⁴⁶ Y, *samkleśābhāvāt prayatnam antareṇa sarve sattvā muktāḥ syuḥ*. corrected acc. to N, O; Pa, *samkleśābhāvād atyanta eva muktāḥ sarvasattvā bhaveyuh*.

⁴⁴⁷ Y, Bh/T, *prayatnam antareṇa*. corrected acc. to N, Pa, St, O, *ayatnata*.

⁴⁴⁸ Bh/T, *tprayatnamantareṇa sarvasattvā muktāḥ syuḥ / prayatnam antareṇeti* pratipakṣam antareṇa / na ca.

prthagjanāvasthāyām tathatāyā⁴⁴⁹ āgantukair malaiḥ saṃkliṣṭatābhyupagantavyeti | evaṃ śūnyatāyāḥ saṃkliṣṭaḥ prabhedaḥ⁴⁵⁰ sādrito bhavati /
idānīm viśuddhiprabhedaṃ sādhitayann āha |

yadi na sā viśuddhiḥ syāt prayatnam aphalaṃ⁴⁵¹ (17a4)bhavet ||⁴⁵² (21cd)

iti⁴⁵³ | dehinām iti saṃbadhyate | athotpanne 'pi pratipakse 'piśabdād anutpanna iva **na⁴⁵⁴ viśuddhā bhaved** evaṃ sati **mokṣārtha⁴⁵⁵ ārambho niṣphalo bhavet** | pratipakṣabhāvanayāpi tanmalavigatānāptāt samalasya ca vimokṣānupapattitvāt / na tu mokṣārtha [ārambho]⁴⁵⁶ niṣphala⁴⁵⁷ (17a5) iṣyate | tasmād avaśyaṃ pratipakṣābhyāsād āgantukopakleśavigamāc chūnyatāyā viśuddhir abhyupagantavyeti | evaṃ śūnyatāyā viśuddhiprabhedaḥ sādrito bhavati |

atra saṃkleśadharmopādānād saṃkleśo viśuddhadharmagrahaṇād viśuddhiḥ | na tu śūnyatāyā⁴⁵⁸ sād⁴⁵⁹(17a6)kṣāt saṃkleśo viśuddhir veśyate | dharmaparatantratvād dharmatāyāḥ | ata evāha⁴⁶⁰ |

muktāḥ syuḥ sarvadehināḥ | (21b)

iti | atra hi⁴⁶¹ dehina iti tadupādānam evoktam | anyathā vā⁴⁶² yadi śūnyatāyāḥ sākṣāt saṃkleśo viśuddhir vā bhavet tataḥ kaḥ saṃbandho dehibhir bhaved yasmāc chūnyatāviśuddheś⁴⁶³ ca⁴⁶⁴ (17a7)dehinām viśuddhiḥ śūnyatāsaṃkleśāc ca saṃkleśa ucyate |

yadā⁴⁶⁵ ca śūnyatā⁴⁶⁶ kliṣṭā prthagjanāvasthāyām śuddhā cāryāvasthāyām bhavati | ata⁴⁶⁷ evedam api⁴⁶⁸ siddham bhavati |

⁴⁴⁹ Y, Pa, tathatāyām. acc. Ms, St, O.

⁴⁵⁰ Bh/T. saṃkliṣṭaprabhedaḥ

⁴⁵¹ Bh/T. °bhavati | *tatra prabhedaḥkāram sādhitum āha viśuddhā yadi sā na syāṭ prayanto niṣphalo*

⁴⁵² MAVBh(N). **viśuddhā ced bhaven nāsau vyāyāmo niṣphalo bhavet** |

⁴⁵³ Ms, Y, Bh/T, omit iti. corrected acc. to Pa, O.

⁴⁵⁴ Ms, ivāviśuddhā.

⁴⁵⁵ N, mokṣārtham.

⁴⁵⁶ Y, ārambho. corrected acc. to E.

⁴⁵⁷ Bh/T, *lavigamo na bhavet / na ca samalasya muktir upapadyate / nāpi mokṣārtha [ārambho] niṣphala*.

⁴⁵⁸ Y, Pa, O, *śūnyatāyām*. corrected acc. to Bh/T, St,.

⁴⁵⁹ Bh/T. °saṃkleśadharmagrahaṇāt saṃkliṣṭā viśuddhidharmagrahaṇāc ca viśuddhā / na khalu śūnyatāyāḥ sā.

⁴⁶⁰ Bh/T, evāhuḥ.

⁴⁶¹ Bh/T omit hi.

⁴⁶² Bh/T omits vā.

⁴⁶³ Pa, *yena śūnyatāviśuddhiś*.

⁴⁶⁴ Bh/T, *sākṣāt saṃkleśo viśuddhir vā bhavet tataḥ kaḥ saṃbandho dehibhiḥ syāt / evaṃ hi śūnyatāviśuddhyā dehinām*.

⁴⁶⁵ Bh/T, yadi.

⁴⁶⁶ Ms, Y, Pa, *śūnyatā ca*. corrected acc. to Bh/T, O.

⁴⁶⁷ Y, Pa, ata. corrected acc. to Ms, Bh/Y, St, O.

⁴⁶⁸ Bh/T, Pa omit api.

na kliṣṭā nāpi vākliṣṭā⁴⁶⁹ śuddhāśuddhā na caiva sā / ⁴⁷⁰ (22ab)

iti / *katham na kliṣṭā nāpy cāśuddhā*⁴⁷¹ | *śuddhaiva pratiṣedhadvayena*⁴⁷² *pra*⁴⁷³(17b1)kṛtagamakativāt | atraivāgamam āha | *prakṛtyaiva*

prabhāsvaratvāc cittasya (22c)

iti | atra ca cittadharmataiva cittaśabdenoktā cittasyaiva malalakṣaṇatvāt⁴⁷⁴ | *katham nākliṣṭā na viśuddhā*⁴⁷⁵ kim tarhi⁴⁷⁶ | kliṣṭaiveti pratiṣedhadvayāt *pratipādayati*⁴⁷⁷ | *sā cāgantukakleśena kliṣṭā na tu prakṛtyeti darśayati / sā cāgantukair upa*⁴⁷⁸(17b2)kleśair upakliṣyata ity atrāpy āgamah |

saṃkliṣṭaviśuddhatayā dvidhā bheda ukte kimartham punaś caturdhā bheda ucyate | laukikāl lokottarāc ca mārḡd⁴⁷⁹ viśeṣ[apradarśan]ārtham⁴⁸⁰ ity eke⁴⁸¹ | laukiko hi mārḡḥ svabhūmikair *malaiḥ kliṣṭo na tv adharais tatpratipakṣatvāt / lokottara mārḡo*⁴⁸² *mṛdumadhyā*⁴⁸³(17b3)dibhedād aśuddho 'nāsravatvāt⁴⁸⁴ tu śuddhaḥ | naivaṃ śūnyateti | na kliṣṭety uktvā punaś cakṣurādibhyo viśeṣārtham⁴⁸⁵ ucyate nāśuddhety anye | cakṣurādayo hy anivṛttāvyākṛtatvān⁴⁸⁶ na kliṣṭā na ca teṣāṃ sāsṛavatvāt *prakṛtaviśuddhir ity aśuddhety / evaṃ nākliṣṭety uktvā na viśuddhety*⁴⁸⁷ (17b4) kuśalasāsṛavād⁴⁸⁸ viśeṣanārtham⁴⁸⁹ āha | kuśalasāsṛavaṃ⁴⁹⁰ hi

⁴⁶⁹ Ms, Y, Bh/T, Pa, *cākliṣṭā*. corrected acc. to N, St, O.

⁴⁷⁰ Y, Bh/T, *śuddhāśuddhāpi naiva sā /*. corrected acc. to N, Pa St, O.

⁴⁷¹ Y, *nāpy aśuddhā*. corrected acc. to N, Pa, St, O; Bh/T, *nāpy cāśuddhety*.

⁴⁷² Y, *dvayaśuddheḥ* corrected acc. to E, O; Bh/T, *śuddhidvayasya*; Pa, *śuddhaiva dvayaśuddhayā*.

⁴⁷³ Bh/T. *śuddhāśuddhāpi naiva sā // iti // katham na kliṣṭā nāpy aśuddhety / śuddhidvayasya pra*

⁴⁷⁴ Ms, Pa, cittasyaivaṃ lakṣaṇatvāt; Bh/T. cittasyaiva lakṣaṇatvāt.

⁴⁷⁵ N, O, *katham nākliṣṭā na śuddhā*; Bh/T, *katham nākliṣṭā na viśuddhety*.

⁴⁷⁶ Bh/T omits kim tarhi.

⁴⁷⁷ Bh/T, *pratiṣedhadvayenāvagamya*.

⁴⁷⁸ Bh/T, *enāvagamya / sā cāgantukaiḥ kleśaiḥ kliṣyate na svabhāveteti nirdiṣṭam / sā cāgantukair upa*.

⁴⁷⁹ Bh/T, laukikāl lokottaramārḡa .

⁴⁸⁰ Bh/T, Pa, viśeṣārtham.

⁴⁸¹ Y, Pa, O, ity ekaḥ. corrected acc. Ms, Bh/T.

⁴⁸² Y, Pa, *lokottaras tu mārḡo*. corrected acc. to O.

⁴⁸³ Bh/T, *bhūmimalaiḥ kliṣṭaḥ / tatpratipakṣatvāt tu na nikṛṣṭaḥ / lokottaramārḡas tu mṛdumadhyā*.

⁴⁸⁴ Ms, anāsravatvāt.

⁴⁸⁵ Bh/T. na kliṣṭety uktā | cakṣurādiviśeṣārtham.

⁴⁸⁶ Bh/T, anāvṛttāvyākṛtatvān.

⁴⁸⁷ Y, *evaṃ nāpi sā kliṣṭeti cet | ucyate | na śuddhety. uktvā na viśuddhety*. corrected acc. to E, O; Bh/T, *evaṃ sāpi na kliṣṭety ukte 'śuddhety*. Sth, *evaṃ saiva nākliṣṭety ukte 'śuddhety*; Pa, *evaṃ nāpi sā kliṣṭeti ced ucyate*.

⁴⁸⁸ Bh/T, kuśalasāsṛavatvād.

⁴⁸⁹ Bh/T, viśeṣārtham.

⁴⁹⁰ Bh/T. kuśalaṃ sāsṛavaṃ

samsāraparyāpannatvān nākliṣṭam | iṣṭavipākatvāc ca śuddham | naivam⁴⁹¹ dharmatā | sā hi kliṣṭāvasthāyām
kliṣṭāśuddhaiveti⁴⁹² |

evam śūnyatāyā uddiṣṭaḥ prabhedah saṃkleśaviśuddher 'yaṃ sādrito bhavati //⁴⁹³

(Śūnyatāpiṇḍārthaḥ)

[Y 61, 21; Bh/T 50, 21; Pa 50, 9; O 58, 15; Ms 17b5]

śūnyatāyāḥ⁴⁹⁴(17b5)pindārtho⁴⁹⁵ laksanato vyavasthānataś ca⁴⁹⁶ veditavyaḥ | tatra laksanato
'bhāvalaksanato bhāvalaksanataś ceti | dvayābhāvo hī⁴⁹⁷ti vacanād abhāvalakṣaṇataḥ | abhāvasya ca bhāva⁴⁹⁸
iti vacanād bhāvalakṣaṇataḥ / bhāvalakṣaṇam punar⁴⁹⁹ (17b6) na bhāvo nāpi cābhāva⁵⁰⁰ iti vacanāt
[bhāvābhāvavinirmuktalakṣaṇatas]⁵⁰¹ tattvānyatvavinirmuktalakṣaṇataś ceti⁵⁰² | etac ca śūnyatāyā lakṣaṇam |
tasmād abhūtaparikalpān na pṛthaktvaikalakṣaṇam iti vacanāt | evaṃ lakṣaṇataḥ piṇḍārthaḥ /

katham vyavasthānataḥ piṇḍārtho veditavya ity ato vyavasthānam punaḥ⁵⁰³
paryāyā⁵⁰⁴(17b7)divyavasthānato veditavyam |⁵⁰⁵ paryāyas tadarthas tadbhedas tatsādhanaṃ cety arthaḥ |
etayā⁵⁰⁶ ca⁵⁰⁷ catuḥprakāralakṣaṇādidesānāyā⁵⁰⁸ caturvidhopakleśapratipakṣeṇa svalakṣaṇam karmalakṣaṇam
saṃkleśavyavadānalakṣaṇam [yuktilakṣaṇam codbhāvitam bhavati⁵⁰⁹ / tatra svalakṣaṇam vikalpasya
pratipakṣeṇa tasya hi bhāvābhāvobhayapṛthagekatva⁵¹⁰ grāhātmakatvam / karmalakṣaṇam anadhimuktānām
śūnyatālakṣaṇam śrutvā⁵¹¹ trāsasya⁵¹² pratipakṣeṇa / abhrāntitathatākarmāviparyāsakarma⁵¹³

⁴⁹¹ Y, P, naiva. corrected acc. Ms, Tib, Bh/T, St, O.

⁴⁹² Ms. aśuddhaiveti, Bh/T. [sakleṣeti] na śuddhaiveti, Sth, sāhi klistāvasthāyām kliṣṭā satīna śuddhaivety uktā.

⁴⁹³ Y, evam śūnyatāprabhedasya saṃkleśaviśuddher nirdeśo 'yaṃ sādrito bhavati. corrected acc. N, St, O.

⁴⁹⁴ Bh/T, prabhede saṃkleśaviśuddhinirdeśoyam sādrito bhavati / śūnyatāyāḥ.

⁴⁹⁵ Y, Pa, śūnyatāpiṇḍārtho. corrected acc. to N, Bh/T, St, O.

⁴⁹⁶ Ms, Y, Pa, ceti. corrected acc. to N, Bh/T, O.

⁴⁹⁷ k.13a

⁴⁹⁸ k.13ab

⁴⁹⁹ Y, Bh/T, Pa, bhāvalakṣaṇatas ca. corrected acc. to N, O; Stc, bhāva-lakṣaṇasyāpi.

⁵⁰⁰ k.13c

⁵⁰¹ Y. [sadbhāvābhāvavinirmuktalakṣaṇatas]. corrected acc. to N, Bh/T, Pa, St, O.

⁵⁰² Bh/T omits ca.

⁵⁰³ Y, vyavasthānatas tu. corrected acc. to N, Pa, St, O; Bh/T, vyavasthānataḥ.

⁵⁰⁴ Bh/T, ḥ / vyavasthānataḥ piṇḍārthaḥ katham veditavya ity āha vyavasthānataḥ paryāyā.

⁵⁰⁵ Bh/T, veditavyaḥ.

⁵⁰⁶ Y. etam. corrected acc. to Ms, N, Stc, Pa, St, O; Bh/T, etesām.

⁵⁰⁷ Pa omits ca.

⁵⁰⁸ Y. lakṣaṇādicatuprakāram nirdiṣṭvā. corrected acc. to N, St, O; Bh/T, catuḥprakāralakṣaṇādīnām nirdeśāc; Sth, etayā ca catuḥ-
prakāra-lakṣaṇādi-nirdiṣṭyā; Pa, catuḥprakāradeśanāyā.

⁵⁰⁹ Y. vidyālakṣaṇam cākhyāyate. corrected acc. to N, Pa, St, O; Bh/T, gotralakṣaṇam coktam.

⁵¹⁰ Pa, pṛthaktvaikatva.

⁵¹¹ Y. śūnyatālakṣaṇaśrūtyā. corrected acc. to Bh/T; Pa, °śratyā: O, °śrutyā.

⁵¹² Y. bhāvasya. corrected acc. to N, Pa, O.

⁵¹³ Stc, ananyathā-tathatā-karma.

*sarvanimittaprahāṇakarma*⁵¹⁴ *sarvalokottarajñānaviṣayatvāvasthānakarma*⁵¹⁵
*pratilabdhyāryadharmahetubhāvakarma ca / evaṃ śūnyatāsvarūpakarma śrutamātreṇa saṃtuṣṭānām*⁵¹⁶
kusīdīnām kausīdyāpanayārthaṃ prabhedalakṣaṇam / katham sā saṃkleṣo bhavati vyavadānaṃ veti
*saṃśayinām*⁵¹⁷ *vicikitso*⁵¹⁸ *panayārthaṃ yuktilakṣaṇam*⁵¹⁹ //

*Madhyāntavibhāgaśāstre Lakṣaṇaparicchedasya prathamasya ṭikā //*⁵²⁰

⁵¹⁴ Stc, *sarva-nimitta-nirodha-karma*.

⁵¹⁵ Stc, *sarva-lokottara-jñāna-gocaratvena sthiti-karma*.

⁵¹⁶ Y, *paryāptatvaṃ grahānām*. corrected acc. to O; Stc, *paryāpta-grāhakānam*; Pa, *paryāptagrahānam*.

⁵¹⁷ Sth, *samdigdhānām*

⁵¹⁸ Y, Pa, O, *saṃśayā*. corrected acc. to N.

⁵¹⁹ Y, *vidyālakṣaṇam*. corrected acc. to N, Sth, Pa, O.

⁵²⁰ [] 内の文章は Ms に抜け落ちられている。Tib からの還梵は Y. pp. 263. 21-264.11 においてなされている。Bh/T による還梵は次の通りである。

Bh/T [51. 10-24]
gotralakṣaṇam cokaṃ / tatra vikalpapratipakṣeṇa svalakṣaṇaḥ / tac ca bhāvābhāvobhayaprthagekatvagrahaṇātmakam /
śūnyatālakṣaṇam śrutvānadhimuktānām uttrāso bhavati / tatpratipakṣeṇa karmalakṣaṇam / nimittatathātkarmāviparītakarma
sarvanimittaprahāṇakarma lokottarasarvajñānaviṣayatvasthitikarmāmbane cāryadharmahetubhāvakarma / evaṃ
śūnyatāsvabhāvakarmaśravaṇamātreṇa vikalpagrāhakānām alasānāmālasypākaraṇārthaṃ prabhedalakṣaṇam / tatkatham
saṃkleṣo bhavati viśuddhir bhavatīty upabhoktṛiṇām sandehāpākaraṇārthaṃ gotralakṣaṇam /

4. 『中辺分別論釈疏』 「空性章」の蔵文テキスト

(Śūnyatā)

[MAVṬ(D) 211b3; MAVṬ(P) 46a5]

de ltar yang dag pa ma yin pa kun rtog pa'i mtshan nyid rnam pa dgur brjod nas stong pa nyid ji ltar shes par bya ba de ston te zhes bya ba 'dir ji ltar sbyar zhe na | 'dis yang dag pa ma yin pa kun rtog pa dang | stong pa nyid dang| sngar kun nas nyon mongs pa la rnam par byang ba dang | chos khong du⁵²¹ chud pa la brten⁵²² nas chos nyid nges par 'dzin par 'gyur ba gnyis dam bcas pa yin te | de'i phyir yang dag pa ma yin pa kun rtog pa bshad pa'i 'og tu | stong pa nyid ji ltar shes par bya ba de ltar 'chad de |

mtshan nyid dang ni rnam grangs dang |⁵²³ (k.12a)

zhes rgya cher ro ||

de la **mtshan nyid** ni dngos po dang dngos po med pa dgag pa'i bdag nyid de | stong pa nyid kyis rab tu dbye ba thams cad la khyab pa'i phyir ro || ming gzhan ni **rnam grangs** so || rnam grangs dang mthun pa rnam grangs 'jug pa'i rgyu ni **rnam grangs kyid don** to || nam mkha' [P. 46b] ltar tha mi dad pa'i mtshan nyid kyid phyir | rnam par mi rtog kyang glo bur gyi nye ba'i nyon mongs pa dang phrad pa dang⁵²⁴ bral ba'i dus tha dad pas **dbye ba'o** || gzhan yang gang zag dang chos su sgro 'dogs pa tha dad pas **dbye ba** rnam pa bcu drug go || **sgrub pa** ni stong pa nyid kyid rab tu dbye ba ston par byed pa'i rigs⁵²⁵ pa'o ||

ci'i phyir rnam pa de dag gis stong pa nyid shes par bya zhe na | rnam par dag pa'i dmigs pa yin pas na | rnam par dag pa 'dod pa rnams kyid⁵²⁶ mtshan nyid shes par bya'o || mdo gzhan dag las rnam grangs bshad pa rnams la mi rmongs par bya ba'i phyir rnam grangs so | rnam [D.212a] grangs kyid don khong du chud par gyur na stong pa nyid la rnam par dag pa'i dmigs pa nyid du nges pa'i phyir rnam grangs kyid don to || kun nas nyon mongs pa bsal na | de rnam par dag go zhes kun nas nyon mongs pa de spangs⁵²⁷ pa'i phyir 'bad pa skyed⁵²⁸ pa'i don du dbye ba'o || dbye ba'i sgrub pa khong du chud na | 'gyur ba med kyang dbye ba bde blag tu rig pa'i phyir dbye ba'i sgrub pa yang shes par bya'o ||

(a. Śūnyatālakṣaṇam)

[MAVṬ(D) 212a2; MAVṬ(P) 46b5]

mtshan nyid ji ltar shes par bya zhe na zhes bya ba ni| mtshan nyid sngar smos pas de'i phyir de nyid dang por 'dri ste |

gnyis dngos med pa'i dngos po yi || dngos po stong pa'i mtshan nyid do |
⁵²⁹ (k.13ab)

⁵²¹ P. khongs su

⁵²² P. rten

⁵²³ P. omit ||

⁵²⁴ D. inserts |

⁵²⁵ P. rig

⁵²⁶ P. 'dod chags kyis

⁵²⁷ P. spang.

⁵²⁸ P. bskyed.

⁵²⁹ P. omit |

zhes bya bar shes par bya'o || gnyis ni gzung ba dang 'dzin pa'o zhes bya ba la | yang dag pa ma yin pa kun rtog pa la'am | yang dag pa ma yin pa kun rtog pas kun brtags pa'i bdag nyid yin pas dngos po'i ngo bor med do || gnyis pa dngos po med pa de'i dngos po gang yin pa de ni stong pa nyid kyi mtshan nyid do || tshig le'ur byas pa dang mthun par byas pa'i phyir 'dir yang dngos po'i rkyen ma smos par bstan par lta ba'o ||

dngos po med pa'i dngos po zhes bya ba de dag gang yin | dngos po med pa'i bdag nyid ni yod pa nyid do || gzhan du na de'i dngos po med pa'i dngos po⁵³⁰ stong pa med pa'i [P. 47a] phyir ro || gnyis kyi dngos po yod pa nyid du 'gyur ro || de'i phyir de ltar dngos po med pa'i ngo bo nyid stong pa nyid kyi mtshan nyid du yongs su bstan pa yin no zhes bya ba smos te | dngos po'i ngo bo'i mtshan nyid du ni ma yin no ||

dngos po med pa'i sgra ni dngos po dgag pa'i tshig yin na | dngos po'i sgra med kyang don 'di khong du chud par 'gyur bas | dngos po'i sgra ni 'dir lhag go ||

lhag ma ma yin te gnyis kyi⁵³¹ dngos po med pa stong pa'i mtshan nyid do zhes de tizam zhig bshad na | gtzor gnyis kyi⁵³² dngos po med pa nyid du ri bong gi rva dngos po med pa dang 'dra bar khong du chud de | sdug bsngal nyid la sogs pa ltar chos nyid kyi ngo bor mi rung ngo || de lta bas na 'di skad ces bya ste | gnyis kyi⁵³³ dngos po med pa ni stong pa nyid do || ⁵³⁴ dngos po med pa de ni yang dag pa ma yin pa kun rtog pa la yod de | stong pa nyid ces bya ba ste dngos po med pa'i dngos po'i mtshan nyid [D.212b] yongs su gzung⁵³⁵ ba'i phyir chos nyid kyi ngo bor bstan pa yin no ||

yang na gnyis kyi dngos po med pa stong pa nyid ces⁵³⁶ bya ba la | med pa'i sgra ni thun mong yin pas 'dir med pa zhes bya ba gang las⁵³⁷ dgongs pa mi shes pas | ⁵³⁸ gtan med par rab tu bstan pa'i phyir yang dag pa ma yin pa kun rtog pa la | gnyis po'i dngos po med pa'i dngos po zhes bya ba brjod do || snga na med pa dang zhig nas med pa gnyis ni rang gi nye bar len pa las gzhan du bshad par mi rigs so || gcig la gcig med pa yang gnyi ga gnas yin pa'i phyir | gcig tu gnas par mi rigs so || de'i phyir dngos po'i dngos po med pa'i mtshan nyid nye bar bzung bas | gzung ba dang 'dzin pa dag gtan dngos po med pa nyid stong pa nyid⁵³⁹ ces bya bar de shes par byas pa yin no ||

gal te med pa'i bdag nyid stong pa nyid yin na | don dam pa zhes ji skad du bya zhe na | ye shes dam pa'i yul yin pas [P.47b] mi rtag pa nyid bzhin du ste | dngos po'i phyir ni ma yin no || de lta mod kyi de ni⁵⁴⁰ dngos po med pa'i ngo bo nyid kyang ma yin te | 'di ltar de'i dngos po med pa'i ngo bo nyid gang yin pa de ni |

yod pa ma yin med pa'ang min || (k.13c)

ji ltar yod pa⁵⁴¹ ma yin zhe na | 'di ltar gnyis po'i dngos po med pa ste | yod pa ni gnyis kyi⁵⁴² dngos po gtan med par yang mi 'gyur la | yang dag pa ma yin pa kun rtog pa'i chos nyid du yang mi 'gyur ro || ji ltar

⁵³⁰ P. omits med pa'i dngos po.

⁵³¹ P. kyis

⁵³² P. kyis

⁵³³ P. kyis

⁵³⁴ P. omit ||

⁵³⁵ P. bzung

⁵³⁶ P. kyis

⁵³⁷ P. la

⁵³⁸ P. omit |

⁵³⁹ P. inserts ||

⁵⁴⁰ P. omit ni

⁵⁴¹ P. med pa

⁵⁴² P. kyis

med pa'ang ma yin zhe na | 'di ltar gnyis po'i dngos po med pa'i dngos po ste | gnyis kyi⁵⁴³ dngos po med pa ni gnyis kyi dngos po med pa'i ngo bor med pa ma yin te | de med du zin na gnyis yod pa nyid du 'gyur zhing| yang dag pa ma yin pa kun rtog pa⁵⁴⁴ i chos nyid du yang mi 'gyur te | dper na mi rtag pa nyid dang sdug bsngal ba nyid bzhin no || sems can phyin ci log tu gyur pas sgro btags pa'i rtag pa dang | bde ba'i dngos po'i dngos po med pa'i⁵⁴⁵ ngo bo nyid yin pas | **yod pa yang ma yin med pa yang ma yin** zhes bya'o ||

gal te yang dag pa ma yin pa kun rtog pa'i stong pa nyid chos nyid yin na | ci ste de las gzhan zhes bya ba'am | 'on te gzhan ma yin zhe na | de'i phyir de ni stong pa nyid kyi mtshan nyid do zhes bya ba smos te⁵⁴⁶ | dngos po med pa'i ngo bo nyid kho na'o || [D.213a] yang na dngos po kho na dngos po med pa dgag pa'i bdag nyid kho na'o || de lta bas na yang dag pa ma yin pa kun rtog pa dang

tha dad gcig pa'i mtshan nyid min | (k.13d)

tha dad pa yin na ni chos nyid las chos nyid gzhan yin pa mi rung ste | ji ltar mi rung zhe na chos las mtshan nyid tha dad pas chos nyid chos gzhan nyid du 'gyur te | de las gzhan pa'i chos bzhin no || chos gzhan ni chos gzhan gyi chos nyid du mi rung ste | de la yang chos gzhan btzal dgos pas thug pa med par 'gyur ro || mi rtag pa nyid dang sdug [P.48a] bsngal ba nyid bzhin no zhes bya ba ni | ji ltar mi rtag pa nyid mi rtag pa rnams las gzhan ma yin pa dang | sdug bsngal ba nyid kyang sdug bsngal ba las gzhan ma yin pa de ltar stong pa nyid kyang stong pa las gzhan ma yin pa zhes bya'o ||

gcig pa yin du zin na ni rnam par dag pa'i dmigs pa dang | spyi'i mtshan nyid du mi 'gyur ro || 'dis rnam par dag par byed pas rnam par dag pa ni lam mo || chos kyi rang gi mtshan nyid las gzhan ma yin pa'i phyir ro⁵⁴⁷ || chos kyi rang gi mtshan nyid bzhin du lam gyi dmigs par mi 'gyur ro || de'i phyir rang gi mtshan nyid las gzhan ma yin pa'i phyir || spyi'i mtshan nyid du yang mi rung ngo || de yang chos kyi rang gi ngo bo dang 'dra bar phan tshun tha dad pas mnyam pa nyid nyams par 'gyur ro || yang na rang gi mtshan nyid de las gzhan ma yin pas dngos po'i rang gi ngo bo tha dad pa med do || de'i phyir spyi yang⁵⁴⁸ med par 'gyur te| spyi'i mtshan nyid ni tha dad pa la ltos⁵⁴⁹ pa'i phyir ro ||⁵⁵⁰ yang na rnam par dag par bya ba'i phyir dmigs pa ni⁵⁵¹ rnam par dag pa'i dmigs pa'o || dngos po'i⁵⁵² rang gi mtshan nyid la dmigs pas rnam par dag pa thob pa med de | sems can thams cad rnam par dag par thal bar 'gyur ro ||

⁵⁴³ P. kyis

⁵⁴⁴ P. omits kun rtog pa

⁵⁴⁵ P. omits dngos po med pa'i

⁵⁴⁶ P. so

⁵⁴⁷ P. omits ro

⁵⁴⁸ P. spyi mtshan yang

⁵⁴⁹ P. bstos

⁵⁵⁰ P. omits ||

⁵⁵¹ P. inserts |

⁵⁵² D. ni

gal te gzhan dang gzhan ma yin par mi brjod na | gcer bu ba⁵⁵³ smra ba la⁵⁵⁴ 'chel bar ji⁵⁵⁵ ltar mi 'gyur |
 dngos po yod pa la de nyid dam gzhan du lung mi ston pa gang yin⁵⁵⁶ pa de gcer bu pa'i smra ba la 'chel⁵⁵⁷
 bar 'gyur ro || stong pa nyid ni⁵⁵⁸ dngos po med pas skyon du 'gyur ba 'di med do ||

de ltar stong pa nyid 'di ni med pa'i mtshan nyid dang dngos po med pa'i ngo bo nyid kyi mtshan nyid
 dang | mi gnyis [D.213b] pa'i mtshan nyid de | de nyid dang gzhan las rnam par grol ba'i mtshan nyid yongs
 su bstan pa yin no || stong pa nyid kyi mtshan nyid bshad zin to ||

(b. Śūnyatāparyāyah)

[MAVṬ(D) 213b1; MAVṬ(P) 48b1]

[P.48b]da⁵⁵⁹ ni rnam grangs brjod par bya'o ||

stong pa nyid ni mdor bsdu na || de bzhin nyid dang yang dag mtha' ||
mtshan ma med dang don dam dang || chos kyi dbyings ni rnam grangs so ||
⁵⁶⁰ (k.14)

zhes bya ba la | rnam grangs zhes bya ba ni don gcig la sgra tha dad par grag pa ste⁵⁶¹ rnam grangs kyi don
 brjod pas rnam grangs zhes bya'o || brjod pa de rnam ni mdo gzhan dag las stong pa nyid du ston to || rnam
 grangs lnga po de dag gtzo bo yin par tshigs su bcad pa las ji skad smos pa de bzhin du rnam grangs gzhan
 'dir ma smos te | gsung rab las khong du chud par bya ba ni 'di lta ste | mi gnyis pa nyid dang |⁵⁶² rnam par
 mi rtog pa'i dbyings dang |⁵⁶³ chos nyid dang |⁵⁶⁴ brjod du med pa nyid dang | mi 'gag pa nyid dang |⁵⁶⁵ 'dus
 ma byas pa⁵⁶⁶ dang |⁵⁶⁷ mya ngan las 'das pa la sogs pa'o ||

(c. Śūnyatāparyāyārthah)

[MAVṬ(D) 213b4; MAVṬ(P) 48b4]

rnam grangs kyi don ji ltar shes par bya zhe na | de ston te sgra de dag ni brtags pa ma yin gyi | don dang
 ldan pa rnam zhes bya ste |

⁵⁵³ P. gcer pu pa la

⁵⁵⁴ P. 'i

⁵⁵⁵ D. de

⁵⁵⁶ P. lin

⁵⁵⁷ P. 'cher

⁵⁵⁸ P. la ni

⁵⁵⁹ D. de

⁵⁶⁰ P. omits ||

⁵⁶¹ P. grags te |

⁵⁶² P. omits |

⁵⁶³ P. omits |

⁵⁶⁴ P. omits |

⁵⁶⁵ P. omits |

⁵⁶⁶ P. omits pa

⁵⁶⁷ P. omits |

gzhan min phyin ci log ma yin || de 'gag 'phags pa'i spyod yul dang ||
 'phags pa'i chos kyi rgyu yi phyir || rnam grangs don de go rims bzhin ||⁵⁶⁸
 (k.15)

zhes bya'o ||

de la gzhan ma yin pa'i phyir de bzhin nyid de zhes bya ba ni mi 'gyur ba'i don to zhes bya ba'i tha tshig go || de nyid bstan pa'i phyir rtag tu de bzhin pa'i phyir ro zhes bya ba smos te | rtag par dus thams cad 'dus ma byas pa yin pas mi 'gyur zhes bya ba'i tha tshig go || phyin ci log ma yin pa'i phyir yang dag pa'i mtha' ste zhes bya ba la⁵⁶⁹ yang dag pa ni bden pa dang ma nor ba zhes bya ba'i tha tshig go || mtha' zhes bya ba ni mu⁵⁷⁰ ste | gang phan chad nas shes par bya ba gzhan med pa'i phyir yang dag pa'i mtha' ste | yang dag pa'i mu zhes bya'o || ji ltar de bzhin nyid shes par [P.49a] bya ba mu zhes bya zhe na | shes bya'i sgrib pa rnam par dag pa'i ye shes kyi spyod yul yin pa'i phyir ro || phyin ci log ma yin pa'i phyir zhes bya ba ni | sgro 'dogs pa dang skur ba 'debs pa med pa'i phyir ro || 'dir rgyu smos pa phyin ci log gi gzhi ma yin pa'i phyir ro zhes bya ba ste | phyin ci log ni rnam par [D.214a] rtog pa'o || rnam par rtog pa'i dmigs pa ma yin pas phyin ci ma log pa'o || mtshan ma 'gog pa'i phyir mtshan ma med pa ste zhes bya ba ni | 'dir mtshan ma med pa la mtshan ma 'gog pa zhes bya'o⁵⁷¹ || 'dir rab tu bstan pa'i phyir mtshan ma thams cad med pa'i phyir ro zhes bya ba smos te | 'dus byas dang 'dus ma byas kyi mtshan ma thams cad kyi stong pa nyid stong pas mtshan ma med pa zhes bya'o || mtshan ma thams cad med pa'i phyir mtshan ma med pa ste | mtshan ma med pa nyid mtshan ma med pa'o || 'phags pa'i ye shes kyi spyod yul yin pas don dam pa ste zhes bya ba la | dam pa ni 'jig rten las 'das pa'i ye shes te | de'i don ni don dam pa'o || 'phags pa'i chos kyi rgyu yin pas chos kyi dbyings te zhes bya ba la | chos kyi sgra ni 'dir 'phags pa'i chos rnams te | yang dag par lta ba la sogs pa dang | yang dag par rnam par grol ba dang | ye shes la thug pa rnams la bya ste | de dag gi rgyu yin pas dbyings so | de nyid bstan pa'i phyir 'phags pa'i chos rnams ni de la dmigs pas byung ba'i phyir ro zhes bya ba smos so || rang gi mtshan nyid dang rgyur byas pa'i gzugs 'dzin pa la yang kham kyi sgra 'di 'jug pa de'i phyir | 'dir dbyings kyi don ni rgyu'i don to zhes bya ba smos te | dper na gser khung dang zangs khung bzhin no ||

mdo gzhan las rnam grangs gsungs pa gzhan dag kyang 'di'i tshul du don bdag [P.49b] gis bstan⁵⁷² par bya'o ||

(d. Śūnyatāprabhedah)

[MAVṬ(D) 214a5; MAVṬ(P) 49b1]

stong pa nyid ni gzung ba dang 'dzin pa med pa'i ngo bo yin pas tha dad pa mi srid de | 'dri ba'am yang na rnam grangs kyi don gyi 'og tu dbye ba shes par bya bar bstan pas | de'i phyir de bshad pa'i 'og tu stong pa nyid kyi⁵⁷³ rab tu dbye ba ji ltar shes par bya zhe na zhes dris so ||

yang dag pa ma yin pa kun rtog pa ni kun nas nyon mongs pa'o || de spangs na rnam par dag pa zhes bya ste | kun nas nyon mongs pa dang rnam par dag pa'i dus na yang stong pa nyid ma gtogs⁵⁷⁴ par gang kun nas nyon mongs par 'gyur ba'am | rnam par byang bar 'gyur ba gzhan med do || de lta bas na kun nas nyon

⁵⁶⁸ P. omits ||

⁵⁶⁹ P. inserts yang dag pa'i mtha' ste zhes bya ba la

⁵⁷⁰ D. mu med pa

⁵⁷¹ D. bya ba'o

⁵⁷² D. brtag.

⁵⁷³ P. kyis

⁵⁷⁴ D. rtogs

mongs pa dang rnam par dag pa gnyis kyi dus na yang | stong pa nyid kun nas nyon mongs pa dang rnam par dag pa'o zhes rab tu bstan pa'i phyir ro ||

kun nas nyon [D.214b] mongs rnam par dang⁵⁷⁵ | ⁵⁷⁶ (k.16a)

ces bya ba ste | de'i rab tu dbye'o zhes bya ba smos so ||

gang gi tshe nyon mongs la | gang gi tshe dri ma med pa khong du ma chud nas | gang gi tshe kun nas nyon mongs la | gang gi tshe rnam par dag ce na zhes dris pa dang |

de ni drir bcas dri ma med | ⁵⁷⁷ (k.16b)

ces rgya cher ro || gnas gyur pa dang ma gyur pa la ltos⁵⁷⁸ pas | dri ma dang bcas pa dang dri ma spangs par⁵⁷⁹ rnam par gzhas go || ma rtogs pa dang log par rtogs pa'i nyes pas mi mkhas pa gang dag gzung ba dang 'dzin pa la mngon par zhen cing | 'dod chags la sogs pa'i nyon mongs pas⁵⁸⁰ sems kyi rgyud dri ma can du gyur pa la |⁵⁸¹ stong pa nyid mi snang ba de dag dri ma dang bcas pa'o⁵⁸² zhes rnam par gzhas⁵⁸³ go || 'phags pa gang dag de kho na mkhyen pas phyin ci log gi sems med pa la stong pa nyid nam mkha' ltar rdul med pa ste⁵⁸⁴ rgyun mi 'chad par snang ba de dag ni dri ma spangs pa zhes bya'o || de ltar stong pa nyid ni nyon mongs pa dang rnam par dag pa la ltos⁵⁸⁵ pa can [P.50a] yin par blta ste | rang bzhin gyis 'od gsal ba'i phyir ngo bo nyid dri ma can du ni ma yin no ||

gal te dri ma dang bcas par gyur⁵⁸⁶ la zhes bya ba rgya cher 'byung ba ni | 'gyur ba med par gnas skabs tha dad pa ma mthong la |⁵⁸⁷ 'gyur ba ni skye ba dang 'jig pa dang rjes su 'brel ba ste | de'i phyir 'gyur ba'i chos can yin pas ji ltar mi rtag par mi 'gyur zhe na zhes bya ba ⁵⁸⁸ smos so || kun nas nyon mongs pa'i gnas skabs las stong pa nyid rnam par dag pa'i gnas skabs su 'gyur ba gzhan med⁵⁸⁹ kyi | de kho na nyid du gnas par⁵⁹⁰ rang bzhin gzhan du 'gyur ba med pa ste | glo bur gyi dri ma dang bral pa'i phyir 'di ltar |

chu kham sger dang nam mkha' rnam | | dag pa bzhin du dag par 'dod | (k. 16cd)

⁵⁷⁵ P. dag

⁵⁷⁶ P. omits ||

⁵⁷⁷ P. omits ||

⁵⁷⁸ P. bltos

⁵⁷⁹ P. spang bar

⁵⁸⁰ P. inserts |

⁵⁸¹ P. omits |

⁵⁸² P. inserts ||

⁵⁸³ P. bzhas

⁵⁸⁴ P. inserts |

⁵⁸⁵ P. bltos

⁵⁸⁶ P. 'gyur

⁵⁸⁷ P. omits |

⁵⁸⁸ D. inserts la sogs pa

⁵⁸⁹ P. mod

⁵⁹⁰ P. pa

de'i phyir mi rtag par mi 'gyur ro || dper na chu'i khams dang gser dang | nam mkha' rnam de'i rang bzhin ma yin pa'i phyir | dri ma'i ngo bo nyid yin par ma gyur kyang | glo bur gyi dri mas⁵⁹¹ dri ma can kho na dang glo bur gyi dri ma dang bral na yang rang bzhin gzhan du 'gyur ba med bzhin du rnam par dag pa nyid do ||

de bzhin du stong pa'i glo bur gyi dri ma rnam kyis kun nas nyon mongs par gyur⁵⁹² yang | 'gyur pa med pa'i rang gi⁵⁹³ ngo bo yin la | de dang [D.215a] bral na rnam par dag pa zhes bya'o ||

dnegos po de nyid sngar kun nas nyon mongs pa'i mtshan nyid dang | phyis rnam par dag pa'i rang bzhin du gang rnam par 'jog pa de ni | rang bzhin gzhan du gyur bas 'gyur ba'i chos bzlog par ma gyur gyi | gang la de gnyi ga yang glo bur yin pa la ni ma yin te | de lta bas na de 'gyur ba'i chos nyid la reg pa med do ||

(Śoḍaśavidhā śūnyatā)

[MAVṬ(D) 215a2; MAVṬ(P) 50a8]

rab tu dbye ba'i skabs yin pas stong pa nyid kyis⁵⁹⁴ rab tu dbye ba thams cad brjod dgos te | de'i phyir gzhan yang rab tu dbye ba ni stong pa nyid rnam pa bcu drug po 'di lta⁵⁹⁵ ste zhes bya ba smos so || dnegos [P. 50b] po tha dad pas rnam pa bcu drug tu 'gyur te | gnyis kyis⁵⁹⁶ dnegos po med pa'i rang gi ngo bo la ni tha dad pa med do || nang stong pa nyid ces bya ba nas dnegos po med pa'i ngo bo nyid ces bya ba'i bar du stong pa nyid rnam pa bcu drug po de ni⁵⁹⁷ shes rab kyis pha rol tu phyin pa las byung ngo ||

de yang mdor bsdu ba zhes bya bar rig par bya'o ||

za ba bza' dang de yi⁵⁹⁸ lus || gnas kyis gzhi yi stong pa nyid ||⁵⁹⁹ (k.17ab)

ces bya ba la sogs pa⁶⁰⁰ la | chos thams cad gnyis med pa'i ngo bo nyid kyis phyir stong pa nyid ni spyi'i mtshan nyid do⁶⁰¹ || gzhan du na de ni tha dad par bstan par mi nus te |⁶⁰² de'i phyir gzhi tha dad pas de tha dad par ston to || gzhan du na de ni tha dad par bstan par mi nus so ||

de la chags pa dang mngon par zhen pa de spangs pa'i phyir | thog mar zab gzhi par bya'o || de la chags pa dang mngon par zhen pa de ni sangs rgyas su 'grub pa dang | rnam par thar pa thob pa'i bgegs su gyur pa'o || de'i 'og tu de'i bza' ba'o || de'i 'og tu de gnyis kyis gnas te lus so || de'i 'og tu za ba la phan 'dogs pa'i phyir | bdag gir chags pa dang 'dzin pa bzlog pa'i phyir | de'i gnas te lus kyis rten snod kyis 'jig rten gzhi par bya'o || gzhi rnam pa bzhi po 'di'i stong pa nyid de ni **gzhi stong pa nyid** ces bya'o ||

de la za ba stong pa nyid ni nang gi skye mched rnam las brtzams so zhes bya ba ni | de dag kyang mig la sogs pa nas yid la thug pa'i bar du'o || za ba de las gzhan med pas mig la sogs pa yul la nye bar spyod par

⁵⁹¹ P. omit dri mas

⁵⁹² P. 'gyur

⁵⁹³ D. omits rang gi

⁵⁹⁴ P. kyis

⁵⁹⁵ P. omits lta

⁵⁹⁶ P. kyis

⁵⁹⁷ P. inserts |

⁵⁹⁸ P. 'i

⁵⁹⁹ P. omits ||

⁶⁰⁰ P. omits pa

⁶⁰¹ P. de

⁶⁰² P. omits gzhan du na de ni tha dad par bstan par mi nus te

'jug par mthong nas mig la sogs pa nyid kyis za bar [D.215b] 'jig rten mngon pa'i nga rgyal byed pas de'i phyir | mig la sogs pa'i skyed mched stong pa nyid la za ba stong pa nyid ces bshad do ||

bza' ba stong pa nyid ni phyi rol gyi rnams so zhes bya ba la ⁶⁰³gzugs la sogs pa nas chos la thug pa'i bar du'o || de dag la yul gyi dngos [P. 51a] por bza' bar bya bas na bza' ba ste | de'i phyir phyi rol gyi skyed mched stong pa nyid ni bza' ba stong pa nyid ces bshad do ||

za ba dang bza' ba de gnyis ni lus dang phan tshun tha dad du mi 'jug par gnas | **de'i lus** ni khog pa'o zhes bya ste | de bas na de'i stong pa nyid ces bya'o ||

gnas kyi gzhi ni snod kyi 'jig rten te | thams cad du sems can rnams kyi gnas kyi gzhi rab tu 'dogs⁶⁰⁴ pas | de nyid kyi phyir de rgya che ba'i phyir de stong pa nyid ni chen po stong pa nyid ces bya'o zhes bya ba smos so || gzhi'i sgra ni re re dang yang sbyar bar bya'o ||

de ltar shes bya'i dngos po rnams gzhi'i stong pa nyid la rtog pa dang bcas pa'i tshul⁶⁰⁵ bzhin yid la byed pas yid la byed pa na | byang chub sems dpa' rnal 'byor ba de la mtshan mar 'dzin pa gzhan 'di nye bar gnas par 'gyur ro || stong pa nyid shes bya'⁶⁰⁶ **gang gis nang dang phyi'i skyed mched la sogs pa 'di stong par mthong ba** de la | gang gzung ba dang 'dzin par mngon par zhen pa dang | **ji ltar** de'i stong pa nyid shes pas **mthong ba** 'di nyid kyang 'dir don dam pa'i rnam pa'o snyam du rnam par rtog pa la rnal 'byor gyi sa'i 'khrul pa'i mtshan ma'i rnam par rtog pa rnam pa de gnyis gzhi pa'i phyir | stong pa nyid stong pa nyid dang don dam pa stong pa nyid de go rims bzhin no || shes pa dang rnam pa ni ma smos par byas te bshad do || yang na stong pa nyid yul yin pas shes de yang⁶⁰⁷ stong pa zhes bshad pa yin no || gzung ba dang 'dzin pa'i dngos pos⁶⁰⁸ de stong pa nyid ni stong pa nyid do || nang gi skyed mched la sogs pa yang stong pa nyid shes pa des **ji ltar mthong ba** de | 'dir don dam pa'o snyam pa'i rnam pa des stong pa nyid ni don dam pa stong pa nyid do || ci'i phyir zhe na | stong pa nyid⁶⁰⁹ ni don dam pa ste kun brtags pa'i rang bzhin gyis stong pa zhes bya'o ||

mtshan mar 'dzin pa gzhan 'di ni stong pa nyid [P. 51b] bsgom pa'i nyes par gyur pa ste | **gang gi phyir byang** [D.216a] chub sems dpa' stong pa nyid sgrub pa de yang dngos po'i ngo bor sgro btags pa ste | de gzhi pa'i phyir 'dus byas stong pa nyid ces bya ba nas chos thams cad stong pa nyid ces bya ba la thug pa'i bar gyi stong pa nyid bshad do || ci'i phyir sgrub par byed ce na |

dge ba gnyis thob par bya ba⁶¹⁰'i phyir (k.18a)

zhes bya ba nas | sangs rgyas chos rnams dag bya'i phyir | ⁶¹¹zhes bya ba'i bar dag gis stong pa nyid la sgrub par byed de | stong pa nyid bsgom mo zhes bya ba'i tha tshig go ||

dge ba ni 'dus byas dang 'dus ma byas te lam dang mya ngan las 'das pa'o || de gnyis ni 'dus byas stong pa nyid dang | 'dus ma byas stong pa nyid dang go rims bzhin du sbyar ro ||

rtag tu sems can phan bya'i phyir | ⁶¹²(k.18b)

⁶⁰³ P. omits |

⁶⁰⁴ P. 'dog

⁶⁰⁵ P. omits tshul

⁶⁰⁶ P. omits bya

⁶⁰⁷ D. pa dang.

⁶⁰⁸ P. po

⁶⁰⁹ P. omits nyid

⁶¹⁰ P. byed pa

⁶¹¹ P. omits ||

⁶¹² P. omits ||

zhes bya ba la | nram pa thams cad du rtag par bdag gis sems can la phan par bya'o snyam pa de'i stong pa nyid ni mtha' las 'das pa stong pa nyid do ||

'khor ba mi gtang bya ba'i phyir | ⁶¹³ (k.18c)

zhes bya ba ni sems can gyi don du bdag gis 'khor ba yongs su gtang⁶¹⁴ bar mi bya ste | 'khor ba yongs su btang na byang chub ma rnyed par | nyan thos kyi sar gnas par 'gyur bas| de'i stong pa nyid ni thog ma dang tha ma med pa stong pa nyid do || ci'i phyir de'i stong pa nyid bshad ce na | de'i phyir 'khor ba thog ma dang tha ma med pa stong pa nyid du ma mthong na skyo ste | 'khor ba yongs su gtong ngo zhes bya ba smos so ||

dge ba mi zad bya ba'i phyir | ⁶¹⁵ (k.18d)

zhes bya ba ni | phung po lhag ma med pa'i mya ngan las 'das pa na yang bdag gis dge ba'i rtza ba rnams mi zad par bya'o snyam pa ste | mi gtong zhes bya ba ni de⁶¹⁶ mi 'dor bar bshad pa'o || gal te de lta na ji ltar phung po'i lhag ma med pa'i mya ngan las 'das pa'i dbyings grub par [P. 52a] 'gyur zhe na | zag pa dang bcas pa'i chos kyi nram par smin pa'i lus ni med kyi sangs rgyas bcom ldan 'das rnams kyi zag pa med pa'i dngos po'i chos kyi sku ni phung po'i lhag ma med pa'i mya ngan las 'das pa'i dbyings na yang rgyun chad par mi 'gyur ro zhes grub pa'i mtha' las 'byung ngo || de'i phyir de'i stong pa nyid ni dor ba med pa stong pa⁶¹⁷ nyid ces bya'o ||

rigs kyang nram par dag bya'i phyir | ⁶¹⁸ (k.19a)

zhes bya ba la | de'i stong pa nyid ni rang bzhin stong pa nyid de | de nyid kyi phyir rigs ni [D.216b] rang bzhin zhes bshad do || 'di ji lta bu zhe na de'i phyir ngo bo nyid kyi phyir ro zhes bya ba smos so || ngo bo nyid ni thog ma med pa'i dus can te | glo bur du byung ba ma yin no zhes bya ba'i tha tshig go || ji ltar thog ma med pa can gyi 'khor ba na la la ni sems dang bcas | la la ni sems med pa de bzhin du 'dir yang skye mched drug po kha cig ni sangs rgyas kyi rigs | kha cig ni⁶¹⁹ nyan thos la sogs pa'i rigs zhes bya'o || rigs ni grog⁶²⁰ ma med pa nas gcig nas gcig tu 'ongs pas sems dang sems med pa'i bye brag bzhin te | glo bur du byung ba ma yin no || gzhan dag na re sems can thams cad de bzhin gshegs pa'i rigs yin pas | 'dir rigs zhes bya ba ni de bzhin du shes par bya'o zhe'o ||

mtshan dang dpe byad thob bya'i phyir || (k.19b)

zhes bya ba ni ⁶²¹ de'i phyir skyes bu chen po'i mtshan rnams dpe byad bzang po rnams dang bcas pa'i stong pa nyid ni mtshan nyid stong pa nyid stong pa nyid ces bya'o ||

⁶¹³ P. 'khor ba mi btang ba'i phyir ro

⁶¹⁴ P. btang

⁶¹⁵ P. omit ||

⁶¹⁶ P. omits de

⁶¹⁷ P. omits stong pa.

⁶¹⁸ P. omit ||

⁶¹⁹ P. omit ni

⁶²⁰ P. thog

⁶²¹ P. omits |

**sangs rgyas chos rnams dag bya'i phyir | | byang chub sems dpa' sgrub par
byed | | (19cd)**

sgrub par byed pa tha mar brjod | | dge gnyis thob par bya ba'i phyir | | byang chub sems dpa' sgrub par
byed | | rtag tu sems can phan bya'i phyir | | byang chub sems [P. 52b] dpa' sgrub par byed | | ces thams cad
dang sbyar ro |

sangs rgyas kyi chos de gang dag yin⁶²³ zhe na | de'i phyir stobs dang mi 'jigs pa dang ma 'dres pa la sogs
pa'o zhes bya ba smos so | | mdor na sangs rgyas kyi chos thams cad thob par bya ba'i phyir bdag gis 'bad
par bya'o zhes sgrub par byed pas de'i phyir rnam par bsgom pa zhes bya ste | de'i stong pa nyid ni chos
thams cad stong pa nyid ces bya'o | | 'dir rnam par bsgom pa zhes bya ba ji lta bu zhe na | shes par bya ba la
shes pa bar chad med par 'jug pa ste |

de ltar re zhig nang⁶²⁴ stong pa nyid la sogs pa nas | chos thams cad stong pa nyid la thug gi bar du stong
pa nyid bcu bzhi rnam par gzahag⁶²⁵ par shes par bya'o | |

za ba po la sogs pa 'di la stong pa nyid gang yin |⁶²⁶ ngo bo nyid ni ji lta bu zhe na | de'i phyir |⁶²⁷

**gang zag dang ni chos rnams kyi | | dngos po med 'dir stong pa nyid | |
de dngos po⁶²⁸ med pa'i dngos yod pa⁶²⁹ | | de la de nyid stong nyid⁶³⁰ gzhan | |
⁶³¹ (k.20)**

zhes bya ba gsungs so | | [D.217a]de la ji skad de⁶³² bshad pa'i zab po la sogs pa la gang zag dang chos kyi
dngos po med pa ni stong pa nyid do | | dngos po med pa de'i dngos po yod pa yang stong pa nyid do | | de⁶³³
la gang zag dang chos dngos po med pa ni dngos po med pa stong pa nyid do | | dngos po med pa de'i dngos
po yod pa ni dngos po med pa'i ngo bo nyid stong pa nyid do | |

'di dag gi nang nas stong pa nyid rnam pa gnyis ci'i phyir tha mar rnam par gzahag⁶³⁴ ce na | de'i phyir
stong pa nyid kyi mtshan nyid bstan pa'i phyir⁶³⁵ zhes bya ba smos so | | stong pa nyid bstan pa yang ci'i
phyir zhe na | de'i phyir gang zag dang chos su sgro 'dogs pa dang | de'i stong pa nyid la skur pa 'debs pa
bsal ba'i phyir go rims bzhin zhes bya ba smos te | gang zag dang chos su sgro 'dogs pa bsal ba'i don du

⁶²² P. omits |

⁶²³ P. la

⁶²⁴ P. omits nang

⁶²⁵ P. bzhag

⁶²⁶ P. omits |

⁶²⁷ P. omits |

⁶²⁸ P. omits po

⁶²⁹ P. la

⁶³⁰ P. omits stong nyid

⁶³¹ P. omits ||

⁶³² P. du

⁶³³ D. da

⁶³⁴ P. bzhag

⁶³⁵ P. omits 'phyir

dnegos po med pa stong pa nyid rnam par gzahag⁶³⁶ go || de'i stong pa nyid la skur pa 'debs pa bsal ba'i phyir |
dnegos po med pa'i ngo bo nyid [P. 53a] stong pa nyid do ||

gal te dnegos po med pa stong pa nyid ma brjod na | kun brtags pa'i ngo bo chos dang gang zag gnyis yod
par 'gyur ro || gal te dnegos po med pa'i ngo bo nyid stong pa nyid ma bshad na | stong pa nyid kyi dnegos po
med par 'gyur ro || de med na yang gang zag⁶³⁷ chos gnyis snga ma bzhin du dnegos por 'gyur ro ||

de la rnam par smin pa'i rnam par shes pa'i rang bzhin nang gi skye mched byis pa rnams kyis za bar
bsams pa rnams la | za ba'i gang zag dang |⁶³⁸ brtags pa'i mtshan nyid mig la sogs pa rnams med pa dang de'i
dnegos po med pa'i dnegos po yod pa ni nang stong pa nyid do || phyi'i skye mched gzugs la sogs pa rnam par
rig pa snang ba'i ngo bo nyid byis pa rnams kyis spyad par bya bar bsams pa rnams la bdag gis za ba dang |
yongs su brtags pa'i mtshan nyid gzugs la sogs pa'i dnegos po med pa dang | de'i dnegos po med pa'i dnegos po
yod pa ni phyir stong pa nyid do || de'i lus te khog pa la za ba'i gang zag dang | byis pa'i skye bos kun brtags
pa'i gzugs la sogs pa dang | lus kyi dnegos po med pa dang | de'i dnegos po med pa'i dnegos po yod pa ni phyi
nang stong pa nyid do || snad kyi 'jig rten la sems can gyi 'jig rten gyi dnegos po med pa dang | kun brtags pa
[D.217b] de rang gi ngo bos dnegos po med pa dang | de'i dnegos po med pa'i dnegos po yod pa ni chen po
stong pa nyid do || stong pa nyid shes pa dang don dam pa'i rnam pa la yang | shes pa po dang rnam pa 'dzin
pa po'i gang zag dang | kun brtags⁶³⁹ pa'i mtshan nyid stong pa nyid shes pa dang | don dam pa'i rnam pa'i
dnegos po med pa dang | de'i dnegos po med pa'i dnegos po yod pa ni stong pa nyid stong pa nyid dang | [P.
53b] don dam pa stong pa nyid de go rims bzhin no || de ni⁶⁴⁰ gang gi phyir byang chub sems dpa' sgrub par
byed pa 'dus byas la sogs pa nas | sangs rgyas kyi chos thams cad la thug gi bar du byang chub sems dpa'
bsgrub dgos pa rnams la | gang zag dang kun brtags pa'i mtshan nyid chos rnams kyi⁶⁴¹ dnegos po med pa
dang | de'i dnegos po⁶⁴² med pa'i dnegos po yod pa ni 'dus pas⁶⁴³ stong pa nyid nas | chos thams cad stong pa
nyid ces bya ba'i bar du go rims bzhin te |

'di ltar 'dus byas la bdag po'am sbyor ba po'i gang zag kyang med de | 'dus byas kyang byis pa'i skye bos
kun brtags pa'i bdag nyid du⁶⁴⁴ med do || mdor bsdus na rnam par rtog pa'i 'dzin pa thams cad kyi gnyen po
dang | mdo sde'i dgongs pa thams cad lung bstan pa'i phyir | nyan thos dang thun mong ma yin pa | byang
chub sems dpa' rnams kyi stong pa nyid bcu drug po 'di dag bshad do ||

'dir ni bcom ldan 'das kyis stong pa nyid kyi yul dang | stong pa nyid kyi rang bzhin dang stong pa nyid
bsgom pa'i dgos pa yang rab tu bstan to || de la stong pa nyid kyi yul ni za ba la sogs pa'i don nas sangs
rgyas kyi chos la thug gi bar du'o || de rab tu bstan pa yang stong pa nyid kyis chos thams cad la khyab par
shes par byed pa'i phyir ro || stong pa nyid kyi rang bzhin ni dnegos po med pa'i ngo bo nyid dang | dnegos po
med pa'i dnegos po'i ngo bo nyid do || stong pa nyid kyi rang bzhin rab tu bstan pa yang sgro 'dogs pa dang
skur pa 'debs pa'i gnyen por lta ba thams cad las nges par 'byung ba'i bdag nyid du shes par byed pa'i phyir
ro || stong pa nyid bsgom pa'i dgos pa ni dge ba gnyis thob par bya ba nas brtzams te | sangs rgyas kyi chos
[P. 54a] thob par bya ba'i bar du'o || de bstan pa yang bdag dang gzhan gyi gzugs dang | chos kyi sku phun
sum tshogs pa'i mchog ni stong pa nyid [D.218a] bsgom pa las 'thob po zhes rab tu bstan pa'i tha tshig go⁶⁴⁵
||

⁶³⁶ P. bzhag

⁶³⁷ P. inserts dang

⁶³⁸ P. omits |

⁶³⁹ P. btags

⁶⁴⁰ P. da na

⁶⁴¹ P. kyis

⁶⁴² P. inserts med pa

⁶⁴³ P. byas

⁶⁴⁴ P. omits du

⁶⁴⁵ P. ge

de ltar stong pa nyid kyi⁶⁴⁶ rab tu dbye ba shes par bya'o zhes bya ba ni dri ma dang bcas pa'i dus na kun nas nyon mongs pa dang | dri ma med pa'i dus na rnam par dag go⁶⁴⁷ zhes bya ba dang | nang stong pa nyid la sogs pa bcu drug tu gyur pa'i⁶⁴⁸ dbye ba bshad ma thag pa'i rnam pa yin par shes par bya'o |

(e. śūnyatāsādhanaṃ)
[MAVṬ(D) 218a2; MAVṬ(P) 54a3]

dbye ba smos pa'i 'og tu de sgrub pa smos pas dbye ba bshad pa'i 'og tu | sgrub pa ji ltar shes par bya zhe na⁶⁴⁹ zhes dris so | | 'dir ci zhig pa sgrub⁶⁵⁰ par bya zhe na | glo bur gyi nye ba'i nyon mongs pas kun nas nyon mongs pa nyid dang |⁶⁵¹ rang bzhin gyis⁶⁵² rnam par dag pa nyid do⁶⁵³ | |
de la kun nas nyon mongs pa nyid bsgrub pa'i dbang du mdzad de |

gal te nyon mongs de ma gyur | | lus can thams cad grol bar 'gyur | |⁶⁵⁴ (k. 21ab)

zhes bya ba gsungs so | |
rnam par grol ba ni kun nas nyon mongs pa spangs pa'o | | kun nas nyon mongs pa spangs pa de yang lam bsgoms pas so | | de la gal te gnyen po ma skyes par yang chos rnams kyi stong pa nyid glo bur gyi nye ba'i nyon mongs pa rnams kyis zhes bya ba la | yang gi sgra ni skyes pa dang 'dra bar kun nas nyon mongs par mi 'gyur na | de ltar gyur na ni kun nas nyon mongs pa med pas 'bad pa med par⁶⁵⁵ sems can thams cad grol bar 'gyur ro | | 'bad pa med par zhes bya ba ni gnyen po med pa nyid du ste | gnyen po med par ni srog chags rnams thar pa med do | | de'i phyir so so'i skye bo'i dus na | de bzhin nyid la glo bur gyi dri ma rnams kyis kun nas nyon mongs pa nyid du gdon mi za bar khas blang dgos te | de ltar stong [P. 54b] pa nyid kyi⁶⁵⁶ rab tu dbye ba kun nas nyon mongs pa bsgrubs⁶⁵⁷ pa yin no | |
da ni rab tu dbye ba rnam par dag pa sgrub pa'i phyir |⁶⁵⁸

gal te rnam dag de ma gyur | | 'bad pa 'bras bu med par 'gyur | |⁶⁵⁹ (k.21cd)

zhes bya ba gsungs so | | lus can rnams dang sbyar bar bya'o | | ci ste gnyen po skyes kyang zhes bya ba la | kyang gi sgra ni ma skyes pa dang 'dra bar rnam par dag par mi 'gyur na | de ltar gyur na ni thar par bya ba'i phyir rtzom pa 'bras bu med par 'gyur te | gnyen po bsgoms kyang dri ma de dang bral bar mi 'gyur ba dang |

⁶⁴⁶ P. kyis

⁶⁴⁷ P. inserts ||

⁶⁴⁸ P. omits tu gyur pa'i.

⁶⁴⁹ P. inserts ||

⁶⁵⁰ P. zhig bsgrub.

⁶⁵¹ P. omits |

⁶⁵² P. gyi

⁶⁵³ P. de

⁶⁵⁴ P. omits ||

⁶⁵⁵ P. 'bad pa nyid du.

⁶⁵⁶ P. kyis

⁶⁵⁷ P. bsgrub

⁶⁵⁸ P. omits |

⁶⁵⁹ P. omits ||

dri ma dang bcas pa ni grol bar mi 'thad pa'i [D.218b] phyir ro || thar par bya ba'i phyir 'bras bu med par mi 'dod pas | de'i phyir gnyen po goms par byas na | glo bur gyi nye ba'i nyon mongs pa dang bral bas | stong pa nyid kyi⁶⁶⁰ rnam par dag pa gdon mi za bar khas blang dgos te | de ltar stong pa nyid kyi rab tu dbye ba rnam par dag pa bsgrubs pa yin no ||

'dir kun nas nyon mongs pa'i chos nye bar bzung bas kun nas nyon mongs pa⁶⁶¹ la | rnam par dag pa'i chos nye bar bzung ba rnam par dag gi | stong pa nyid la mngon du kun nas nyon mongs pa 'am | rnam par dag par mi⁶⁶² mi 'dod de || chos nyid ni chos kyi kha na⁶⁶³ las pas | de'i phyir |⁶⁶⁴

lus can thams cad grol bar 'gyur | |⁶⁶⁵ (k.21b)

zhes gsungs te | 'dir lus can zhes bya ba ni de'i rgyu nyid du bshad pa yin no | |⁶⁶⁶ gzhan du na gal te stong pa nyid la mngon du kun nas nyon mongs pa'am | rnam par dag par gyur du zin na ni | de'i phyir lus can rnams dang 'brel pa ci yod na |⁶⁶⁷ 'di ltar stong pa nyid rnam par dag pas lus can rnams rnam par dag pa dang | stong pa nyid kun nas nyon mongs pas kyang | kun nas nyon mongs pa zhes bya|

gal te so so'i skye bo'i dus na |⁶⁶⁸ stong pa⁶⁶⁹ nyid nyon mongs la| 'phags pa'i dus na [P. 55a] dag pa yin na ni| de'i phyir|

nyon mongs ma yin mi mongs min || de ni dag dang ma dag min | |⁶⁷⁰ (k.22ab)

zhes bya ba 'di grub pa yin no ||

ji ltar nyon mongs par gyur pa ma yin la ma dag pa yang ma yin zhe na| dgag pa⁶⁷¹ gnyis kyis skabs su⁶⁷² khong du chud par byed pas dag pa nyid de | 'dir lus dang

sems rang bzhin gyis 'do gsal ba'i phyir ro (k.22c)

zhes 'byung ngo || 'dir ni sems kyi chos nyid la sems kyi sgar bshad de | sems nyid ni dri ma'i mtshan nyid kyi phyir ro || ji ltar nyon mongs par ma gyur pa ma yin pa yang ma yin la rnam par dag pa yang ma yin zhe na | nyon mongs pa nyid yin par dgag pa gnyis kyis khong du chud par byed do || de yang glo bur gyi nyon mongs pas nyon mongs pa yin gyi rang bzhin gyis ni ma yin zhes ston to || de yang lung las glo bur gyi nye ba'i nyon mongs pa rnams kyis⁶⁷³ nye bar nyon mongs so zhes 'byung ngo ||

⁶⁶⁰ P. kyis

⁶⁶¹ P. omits pa

⁶⁶² P. ni

⁶⁶³ P. nas

⁶⁶⁴ P. omits |

⁶⁶⁵ P. omits ||

⁶⁶⁶ P. inserts da

⁶⁶⁷ P. omits |

⁶⁶⁸ P. omits |

⁶⁶⁹ P. dag pa

⁶⁷⁰ P. omit ||

⁶⁷¹ P. dag pa

⁶⁷² P. omits su

⁶⁷³ P. kyis

kun nas nyon mongs pa dang rnam par dag pa gnyis su bye ste bshad na | ci'i phyir dbye ba rnam pa bzhir bshad ce na | [D.219a] kha cig na re 'jig rten pa dang 'jig rten las 'das pa'i lam las khyad par du bstan pa'i phyir te | 'jig rten gyi lam ni rang gi sa'i dri ma rnams kyi nyon mongs kyi | de'i gnyen po'i phyir 'og mas ni ma yin no | | 'jig rten las 'das pa'i lam ni chung ngu dang | 'bring po la sogs pa'i bye brag gis ni ma dag gi | zag pa med pas ni dag pa ste| stong pa nyid ni de lta ma yin no zhe'o | | kun nas nyon mongs pa ma yin no zhes bshad pa la | gzhan dag na re mig la sogs pa dang bye brag yod pas ma dag pa yin no | | mig la sogs pa ni ma bsgribs pa'i lung du ma bstan pa yin pas⁶⁷⁴ nyon mongs pa ma yin la | de dag gi⁶⁷⁵ zag pa dang bcas pas rang bzhin gyis rnam par dag pa ma yin pas| ma dag pa yang ma⁶⁷⁶ yin zhes bshad do | | de bzhin du nyon mongs pa [P. 55b] med pa⁶⁷⁷ yang ma yin zhes⁶⁷⁸ bshad pa la | dag pa ma yin no zhes bya ba ni zag pa dang bcas pa'i dge ba dang bye brag yod pa'i phyir te | zag pa dang bcas pa'i dge ba ni 'khor bar gtogs pas nyon mongs pa med pa ma yin la | rnam par smin pa yid du 'ong bas dag pa ste | chos nyid ni de lta ma yin no | | de ni nyon mongs pa'i dus na nyon mongs pa can yin la ma dag pa nyid ces bshad do | |

de ltar stong pa nyid kyi⁶⁷⁹ rab tu dbye ba kun nas nyon mongs pa dang | rnam par dag pa⁶⁸⁰ bstan pa 'di bsgrubs pa yin no | |

(śūnyatāpiṇḍārthaḥ)

[MAVṬ(D) 219a5; MAVṬ(P) 55b3]

stong pa nyid kyi don bsdus pa ni ⁶⁸¹ mtshan nyid dang rnam par gzhas⁶⁸² par rig par bya'o | | de la mtshan nyid ni dngos po med pa'i mtshan nyid dang dngos po'i mtshan nyid do⁶⁸³ zhes bya ba la gnyis kyi⁶⁸⁴ dngos po med do zhes bshad pas⁶⁸⁵ dngos po med pa'i mtshan nyid do | | dngos po med pa'i dngos po zhes bshad pas dngos po'i mtshan nyid do | | dngos po'i mtshan nyid kyang yod pa ma yin med pa'ang ma yin zhes bshad pas | dngos po yod pa dang dngos po med pa las rnam par grol ba'i mtshan nyid dang | de nyid dang gzhan la rnam par grol ba'i mtshan nyid de ⁶⁸⁶ 'di ni stong pa nyid kyi mtshan nyid do | | de bas na yang dag pa ma yin pa kun rtog pa dang tha dad gcig pa'i mtshan nyid min zhes bshad do⁶⁸⁷ | | de ltar na mtshan [D.219b] nyid kyi⁶⁸⁸ don bsdus pa'o | |

⁶⁷⁴ P. pa

⁶⁷⁵ P. gis

⁶⁷⁶ P. omits yang ma

⁶⁷⁷ P. de.

⁶⁷⁸ P. zhe na |

⁶⁷⁹ P. kyis

⁶⁸⁰ P. pa'i

⁶⁸¹ P. omits |

⁶⁸² P. bzhag

⁶⁸³ P. inserts ||

⁶⁸⁴ P. kyis

⁶⁸⁵ P. inserts |

⁶⁸⁶ D. omits |

⁶⁸⁷ P. de

⁶⁸⁸ P. kyis

rnam par gzahag pa'i don bsdus pa ji ltar shes⁶⁸⁹ par bya zhe na | de'i phyir rnam par gzahag⁶⁹⁰ pa ni rnam grangs la sogs pa rnam par gzahag⁶⁹¹ par rig par bya'o zhes bya ba smos te | rnam grangs dang de'i don dang de'i dbye ba dang de sgrub pa zhes bya ba'i tha tshig go || mtshan nyid la sogs pa rnam pa bzhi po 'di dag bstan pas nye ba'i nyon mongs pa rnam pa bzhi'i gnyen por⁶⁹² rang gi mtshan nyid dang⁶⁹³ las kyi mtshan nyid dang | kun nas nyon [P. 56a] mongs pa dang | rnam par byang ba'i mtshan nyid dang | rigs pa'i mtshan nyid brjod pa yin no || de la rnam par rtog ba'i gnyen por rang gi mtshan nyid de | de ni dngos po dang⁶⁹⁴ dngos po med pa dang gnyi ga dang⁶⁹⁵ tha dad gcig pa nyid du 'dzin pa'i bdag nyid do || stong pa nyid kyi mtshan nyid thos nas ma mos pa rnams kyis skrag par 'gyur ba de'i gnyen por las kyi mtshan nyid de | ma nor bde⁶⁹⁶ bzhin nyid kyi las dang | phyin ci ma log pa'i las dang | mtshan ma thams cad spangs pa⁶⁹⁷ i las dang | 'jig rten las 'das pa'i ye shes thams cad kyi yul nyid du gnas pa'i las dang | dmigs pa⁶⁹⁸ na 'phags pa'i chos kyi rgyu'i dngos po'i las so || de ltar stong pa nyid kyi rang gi ngo bo dang las thos pa tzam gyis chog par 'dzin pa le lo can rnams kyi le lo bsal ba'i phyir || rab tu dbye ba'i mtshan nyid do ||

de ji ltar kun nas nyon mongs par 'gyur rnam par dag par 'gyur snyam pa'i som nyi za ba rnams kyi the tshom bsal ba'i phyir rigs pa'i mtshan nyid do ||

bstan bcos dbus dang mtha' rnam par 'byed pas⁶⁹⁹ mtshan nyid kyi le'ur⁷⁰⁰ bcad pa ste⁷⁰¹ dang por⁷⁰² 'grel bshad do|| ||

⁶⁸⁹ D. gzahag.

⁶⁹⁰ P. bzhag

⁶⁹¹ P. bzhag

⁶⁹² P. omits |

⁶⁹³ P. omits |

⁶⁹⁴ P. omits |

⁶⁹⁵ P. omits |

⁶⁹⁶ P. ma nor pa de

⁶⁹⁷ P. spong ba

⁶⁹⁸ P. omits pa

⁶⁹⁹ P. pa la

⁷⁰⁰ P. le'u

⁷⁰¹ P. inserts |

⁷⁰² P. bo'i

5. 『中辺分別論釈疏』 「空性章」の翻訳

空性

以上のように九種の相を有する虚妄分別を説いてから、空性がどのように知られるべきかを詳説するというが、ここにおいて〔前の虚妄分別を説いた部分と今の部分は〕どのような関係があるのであるか。これによって、虚妄分別と空性という二つが確言された（pratijñāta）。清浄は染汚を先とし、法性の確定は法の理解を所依とする。それゆえに、虚妄分別の説示の直後に空性が知られるべき通りに、その通りに詳説される。

相と同義語と（k.12a）

云々と。

そのうち、相とは有と無とが否定されている本質である。一切処に、種々の空性は遍満するからである。同義語とは異名である。同義語の意味とは、〔各々の〕同義語に相応して、〔その各々の〕同義語が〔空性の同義語として〕現れた原因である。〔空性は、〕虚空のように、分割されない特徴のものであるから分別性から離れているものであるけれども、外来的な煩惱との結合や分離の状態の区別によって部類がある。また、自我と法を増益する区別によって十六種の部類がある。論証とは空性の分類を説示する論理である。

また、どうしてこの諸々の項目（prakāra）によって空性は知られるべきであるか。1）〔空性は〕清浄の所縁であるから、清浄を求める者たちによって、相から〔空性は〕知られるべきである。2）同義語を説いている他の経典に対して混乱しないようにするために、同義語から〔空性は知られるべきである。〕3）同義語の意味を理解することから、空性は清浄の所縁として決定される。それゆえに同義語の意味から〔空性は知られるべきである。〕4）染汚が消滅したとき、それ（空性）は清浄にされると、その染汚の断滅のための努力を起こすために、分類から〔空性は知られるべきである。〕5）分類の論証を理解することから、〔空性には〕変異が存在しないけれども、分類があるということがよく理解される。それゆえに、分類の論証からも〔空性は〕知られるべきである。

a. 空性の相

どのように〔空性の〕相は知られるべきであるかとは、相が〔知られるべきの項目の中で〕先に略説されたから、それゆえに、それ（空性の相）が最初に問われるのである。

二の無と無の有とが空〔性〕の相である。（k.13ab）

と知られるべきである。所取・能取の二は虚妄分別において、あるいは、虚妄分別によって分別された本質のものだから、實在（vastu）のあり方として無である。そしてその二つの無の有、それが空性の相である。偈〔の韻律〕に従っているから、ここ（k.13b の śūnyasya）に、〔tā という〕抽象接尾辞（bhāvapratyaya）が省略されて述べられていると見られるべきである。

無の有というこれは何であるか。無という本質が存在するということである。そうでなければ、二〔取〕の有が存在することになってしまうであろう。それ（二取）の無が、本性として（bhāvatas）、存在しないからである。それゆえに、空性には有をあり方（rūpa）とする相ではなく、無を自性とする相があるということが明らかになった。

【反論】〔無の有のうち、〕無という語は有を否定する語であるから、有という語がなくても、その意味は理解される。それゆえに、有という語は余計なものである。

【答1】余計なものではない。二の無が空性の相だということのみが示される場合、兎角の無のように、二の無の独在相（svātantrya）のみが理解される。苦性等のように、〔空性の〕法性というあり方は〔理解され〕ない。それゆえに、二の無が空性であり、そして、その無が、虚妄分別の中で、有であることが空性であると説かれる。無が有の相に包摂されることから、〔空性の〕法性としてのあり方が明らかになった。

【答2】あるいは、二の無が空性だというのは、無という語は〔未生無等の他の無と〕共有される語だから、ここにおいての無の意味が〔それら無の中で〕何れであるのかが知られない。それゆえに〔二取の無が〕畢竟無（atyantābhāva）であることを示すために虚妄分別に二の無が有であると言われる。未生無（prāgabhāva）と已滅無（pradhvaṃsābhāva）とが自体の取得なしに語られることは不合理である。相互無（anyonyābhāva）が一つに依りかかるのも不合理である。二つに依りかかるからである。それゆえに、有は無の相を取るから、所取・能取の畢竟無こそ空性であるとこれが示されたことになる。

【問】もし空性が無を本質とするものであれば、どうして勝義と言われるのか。【答】無常性のように、〔空性は〕勝義智の対象であるからである。しかし〔空性が〕事物（vastu）であるからではない。またそれは無を自性とするのでもない。なぜならば、このそれ（所取・能取）の無を自性としているもの、それは

有ではなく無でもない (k.13c)

からである。

どうして有ではないのか。なぜならば、二〔取〕は存在しないからである。実に、〔二取が〕存在する場合には二つが畢竟無にならないであろう。〔また、空性は〕虚妄分別の法性にならないであろう。どうして無でもないのか。なぜならば、二〔取〕が存在しないということは存在するからである。二の無が二の無というあり方として無であるのではない。それ（二の無というあり方）が無であれば、二の有になり、虚妄分別の法性にもならないであろう。例えば、無常性と苦性のようである。有情の顛倒されたことによって増益された常・喜びのものは無を自性とするから、有ではなく、無でもないと言われる。

もし虚妄分別の空性が法性であれば、これ（空性）はそれ（虚妄分別）と異なると言われるべきであるか、それとも、異ならないと言われるべきであるかというので、これが空性の相であると言う。無を自性とする〔ということである〕。あるいは、有は無の否定を本質とする〔ということである〕。それゆえに虚妄分別と

別異や同一であるという相がない。(k.13d)

〔空性が虚妄分別と〕別異であるとすれば、法性が法と異なるということは理に適わない。何が不合理であるのか。〔もし別異であるとすれば、法性は〕法と区別される相のものだから、法性が、それと異なる法のように、別の法 (dharmāntara) になる。しかし、ある一つの法がもう一つの法の法性になることはできない。その場合、〔法性としての〕別の法が再び求められるから、無限遡及の過失に陥る。無常性と苦性のようにとは、例えば無常性が無常なるものと異ならないように、また、苦性が苦なるものと異ならないように、同様に、空性も空なるものと異ならないと〔いうことである〕。

〔空性が虚妄分別と〕同一であるとすれば、清浄の所縁と共相 (sāmānyalakṣaṇa) がなくなるであらうとは、それによって清浄にされるから、道〔諦〕は清浄である。〔もし空性が虚妄分別と同一であるとすれば、空性というものは〕法の自相と異ならないから、法の自相のように、道〔諦〕の所縁にならないであらう。また、それゆえに、〔空性が法の〕自相と異ならないから、共相も成立しないことになる。それ（空性）にも、法の自性と同様に相互差別があるから、共性が否定されるのである。あるいは、自相がそれ（共相）と異ならないから、存在するものの自性 (svarūpa) には差別がない。それゆえに、共〔相〕も存在しない。共相は差別に依存するものだからである。あるいは、清浄にされるための所縁が清浄の所縁である。存在するものの自相を所縁としながらは、清浄にされることをもたらさない。一切有情が清浄にされているという過失に陥るからである。

【問】もし〔空性が〕同一・別異だと言うべきではないとすれば、どうしてジャイナ教 (nirgrantha) の説⁷⁰³を支持することにならないのか。【答】有に関して同一であると、あるいは、別異であると明記しない者、彼はジャイナ教の説を支持する。しかし空性は有ではないから、この過失は存在しない。

以上のように、この空性は 1) 無相・2) 無を自性とする相・3) 無二の相、4) 同一と別異とを離れた相を有することが明らかになった。空性の相が説かれた。

b. 空性の同義語

次に、同義語が

簡略に、真如と実際と無因相と勝義と
法界が空性の同義語である。(k.14)

と説かれる。同義語というのは一つの意味に関する種々の表現を知らしめる。同義の意味を表すから、同義語と言われる。他の經典においてはこれらの表現によってまさにこの空性が示されてい

⁷⁰³ ジャイナ教は、ものの「有」、「無」、「同」、「異」、「常」、「無常」であることを「ある点では (syāt)」肯定し、また「ある点では (syāt)」否定する。本文のジャイナ教 (nirgrantha) の説とは「syād-vāda」と呼ばれるこのようなジャイナ教の相対主義を指す。

る。そして、これら五つの同義語が偈で主要なものとして説かれているように他の同義語も今ここで説かれているのではない。〔五つの同義語以外の他の同義語は別の〕教説（pravacana）から確認されるべきである。即ち、無二・無分別界・法性・離言性・不滅・無為・涅槃等である⁷⁰⁴。

c. 空性の同義語の意味

どのように同義語の意味が知られるべきであるか〔ということに対して〕次のことを説示する。これらの語は附属的なもの（gaṇa）ではない。それではどうか。〔空性の〕意味と一致するもの（anvārtha）である。

無変異と、無顛倒と、それ（因相）の消滅と、聖者の〔智の〕領域であることにより、また、聖者の法の原因であることにより、順番通りに、同義語の意味は〔知られるべきである〕。（k.15）

そのうち、無変異という意味で、〔空性は〕真如であるとは、不変化という意味でという意味である。その同じことを説明しようとして常にそのままであるからであると言う。常に、一切時において無為であるから、変化しないという意味である。不顛倒という意味で、〔空性は〕実際であるとは、「実」（bhūta）は真実、顛倒されていないという意味である。「際（koṭi）」は究極（paryanta）である。それを超えて他の知られるべきもの（所知）は存在しない。それゆえに、実際は真実の究極と言われる。どうして真如は所知の究極と言われるのか。所知障を清浄にする智の領域（gocara）だからである。不顛倒という意味でということは、増益と損減とがないという意味で〔という意味である〕。この同じことについて理由として顛倒の基体（vastu）になるものではないからであると説く。「顛倒」は分別である。分別の所縁でないから顛倒の基体（vastu）ではない。因相の消滅という意味で、〔空性は〕無因相であるということは、ここにおいて、因相がないのが因相の消滅である。この同じことを説明しようとして一切の因相が存在しないからであると言う。空性は一切の有為無為の相について空であるから無因相と言われる。一切の因相が存在しないから無因相であり、無因相こそ無因相である。聖者の智の領域であることにより、〔空性は〕勝義であるとは、「勝」は出世間智である。その対象が「勝義」である。この同じことを説明しようとして、殊勝な智の対象であるからであるという。聖者の法の原因であ

⁷⁰⁴ AS(D)[54a1-a3]では、八種の無為法が説かれているが、そのうち、第一の無為法である善法真如を無我生、空性、無相、實際、勝義、法界と説明する。空性と MAV で提示する空性の同義語に無我性が追加されている。また、MS[19a2-a3]では、円成実性は四種清浄により知られ、その四種清浄法のうち、第一の自性清浄とは真如、空性、實際、無相、勝義、法界であると述べている。ここで、自性清浄の同義語として提示されるものは空性を含めて MAV で提示する五種の空性の同義語と一致する。TK においても、円成実性の同義語に対する言及がある。k. 25abc では円成実性が勝義、真如であると述べられている。TrBh[41, 19-42, 1] は勝義と真如の以外に、法界に至るまでが円成実性の同義語であると註釈し、TrT[57a4-a6] は、これを空性、實際、無相、不二性、無分別界、不可言性、不滅不生、無為、涅槃と註釈する。

『述記』[T44. 7a15-a21]は、先に触れた AS における同義語とともに『般若経』における十二個の同義語、つまり、真如、法界、法性、不虛妄性、不變異性、平等性、離生性、法定、法住、實際、虚空界、不思議界を空性の同義語として言及している。

ることにより、法界であるとは、ここにおいて、「法」という語によって、正見を初めとして正解脱と〔正〕智⁷⁰⁵を最後とする諸々の聖法が、〔表現される〕。それらの原因であるから「界」である。この同じことを明示しようとして、聖者の法はそれ（空性）を所縁として生じるからであると言う。この「界」という語は自相と所造色を保持する場合にも用いられる。それゆえに、ここにおける界（dhātu）の意味は「原因」の意味であると言う。例えば金鉢・銅鉢・銀鉢のようである。

他の經典で説かれた他の同義語も、この方法によって、本来の意味として説明されるべきである。

d. 空性の部類

空性は所取・能取のないあり方（rūpa）のものであるから、区別は有り得ないので〔どのように空性の部類は知られるべきであるか〕と問う。あるいは、〔空性の〕同義語の意味の直後に〔空性の〕区別が知られるべきだと説かれたから、それ（同義語の意味）の説明の直後にどのように空性の部類は知られるべきであるかと問う。

実に虚妄分別は染汚である。それが滅したとき、清浄と言われる。染汚と清浄とのとき、染汚されたり、清浄にされたりするものとして、空性以外に他のものがあるのではない。それゆえに染汚と清浄とのとき、まさに空性が染汚され、清浄にされるということを明らかにするために

汚染された〔空性〕と清浄にされた〔空性〕（k.16a）

ということがこれ（空性）の部類であると言う。

いつ染汚され、いつ垢から離れるのかを理解していないから、どのような場合に汚染された〔空性であり〕、どのような場合に清浄にされた〔空性である〕かと問う。

それ（空性）は垢を伴うものであり、垢から離れたものである。（k.16b）

云々。転依と非転依に基いて有垢と垢の滅とが設定される。所取・能取に対する執着と愛着等の煩惱によって汚された心相続の愚かな者たちには、無理解と誤解という過失があるから、空性は顕現しない。彼らに対しては、有垢が設定される。無顛倒心を持っている聖者たちには、真実智があるから、虚空のように無垢である空性が直ちに現れる。彼らに対しては、垢の滅〔が設定される〕と言われる。このように空性は染汚と清浄とに相対的であると見られるべきである。本性的に清浄なものであるから、垢を有する自性のものとしては〔見られるべき〕ではない。

もし〔空性が〕垢を伴って存在した後に云々とは、実に、変化なしに状態の区別は認められなく、変化は生と滅と結び付けられている。それゆえに〔空性は〕変化の性質を有するものであるから、どうして〔その空性は〕無常ではないのかと言う。空性に、染汚された状態から清浄な

⁷⁰⁵ チベット訳に従えば、samyagvimuktijñānaは並列複合語（dvandva）である。そこで、samyagvimuktiとjñānaが無学の十支のうち最後の二支である正解脱（samyagvimukti）と正智（samyagjñāna）を指すと理解し、翻訳した。

状態へと以外に変化があるのではない。しかし、真実に住するもの（空性）が、異なる自性になることはない。外来的な垢から離れるからである。なぜならば、

水界・黄金・虚空の清浄さのように、〔空性は〕清浄であると認められる。（k.16cd）

それゆえに、〔空性は〕無常ではない。例えば、水界・黄金・虚空はそれ（垢）を自性としなから、垢を自性とするものにならないけれども、外来的な垢によって垢を有し、外来的な垢から離れたときには、別の自性を得ることなくとも、清浄にされる。同様に、空性も無変化を自生とするものであるけれども、外来的な垢によって染汚され、それ（垢）を離れることによって清浄にされる。

先に染汚相を有したものの、その同じものが後に清浄の自性を有すると主張する者、彼には、自性に変化するものであるから、〔それを自性とする〕変化する法（染汚法・清浄法）が減することがない。しかし、その二つ（染汚法・清浄法）が〔自性のように本来的ではなく〕外来的である場合には〔染汚法・清浄法が減することがないの〕ではない。それゆえに、それ（空性）は変化する法性に至らない。

（十六種の空性）

〔空性の〕部類を示す説（adhikāra）において、すべての空性の部類が説かれるべきであるから、また、もう一つの部類は十六種の空性であると言う。事柄（vsatu）の区別によって〔空性は〕十六種となる。しかし、〔所取・能取の〕二つが存在しないという本質においては区別がない。内空、乃至、無性自性空性というその十六種類の空性は『般若波羅蜜多』において暗誦されている⁷⁰⁶。

これは、簡略に、次のように知られるべきである。

享受者、享受物、その身体、住处としての事柄の空性がある。（k.17ab）

云々というのは、一切法は無二〔取〕を自性とするから、空性は共相である。別の仕方ではそれ（空性）の差別性を示すことができない。それゆえに、事柄（vastu）の差別性によってそれ（空性）の差別性を示す。

まず、最初に、それ（享受者）に対する愛着と執着とを捨てるために、享受者が考察されるべきである。それ（享受者）に対する愛着と執着とは、ブッダになること（buddhatva）と解脱とを得ることに障碍になる。その直後にその享受物が〔考察されるべきであり〕、その直後にその二つ（享受者・享受者）の拠り所（adhiṣṭhāna）である身体が〔考察されるべきであり〕、その直後にそれ（享受者・享受者）の拠り所である身体を支えるもの、器世間が考察されるべきで

⁷⁰⁶ 『大般若波羅蜜多經』[T7. 430c4-c7; 437b25-b29; 480b8-481a1]において十六空性は説かれる。しかし、『大般若波羅蜜多經』では十六空性以外にも、十八空性、十九空性、二十空性等の空性の分類が登場する。「般若經」における空性の分類に関しては宮本[1943: pp. 556, 1-572, 11]渡辺[1983a]を参照。

ある。〔器世間は〕享受者に利益を与えるものであるから、〔享受者の〕我所に対する愛着と執着とを取り除くためである。この四種の事柄、その空性が**事柄の空性**と言われる。

そのうち、享受者の空性は内処に関する〔空性〕であるとは、その眼〔処〕等から意〔処〕までである。それ以外の享受者は存在しないから、また、眼〔処〕等は対象を享受するために活動すると見られるから、世間人は眼等に対してのみ享受者だと間違って考える (abhimāna)。それゆえに、眼等の①〔内〕処の空性が享受者の空性と言われる。

享受物の空性は外〔処に関する空性である〕とは、色〔処〕等から法〔処〕までである。それらは対象のものとして享受されるから、享受物である。それゆえに②外空性が享受物の空性と言われる。

その享受者と享受物との両方は、身体において相互不可分のものとして住するから、**その身体 (deha)** が身体 (śarīra) である。それゆえに**その空性が③内外空性である**と言われる。

住処としての事柄は器世間である。あらゆる方面で、〔器世間は〕有情たちの住処の事柄として認識されるからである。それゆえに、〔その器世間は〕広大なものであるから、その空性が④大空性であると言われる。事柄という語はそれぞれ（享受者・享受物・その身体）に結合される。

このように四種所知の事柄の空性を有尋の如理作意によって作意しつつあるとき、瑜伽行者であるその菩薩には、この別の相に対する執着が生じる。空性の智によってこの内処と外処等が空であると見られる。それにおいて、所取・能取の執着〔という分別〕と、その空性の智によってある様態のように見られるこれこそがこれ（享受者等）に対する勝義の行相であるという分別、その二種の、修行者の段階においての迷乱の相を有する分別を取り除くために、順番通りに⑤空性空性と⑥勝義空性が〔説かれる〕。智と行相とが省略されて〔空性空性と勝義空性とが〕示されている。あるいは、空性を対象とするから、その智は空性であると言われる。それ（空性智）の所取・能取性としての空性が⑤空性空性である。また、その空性の智によって、内処等がある様態のように見られる。それがこれに対して「勝義」であるというこの行相としての空性が⑥勝義空性である。【問】なぜであるか。【答】なぜならば勝義は遍計所執性について空であるからである。

この別の相に対する執着が、また、空性を修習することに障碍になる。菩薩はある目的をもって空性を修行する。それ（菩薩修習の目的）に有としてのあり方が増益される。それを取り除くために、有為空性を始めとして一切法空性を終わりとする空性が説示される。〔菩薩は〕何のために修行するのか。

二つの善を得るために (k.18a)

乃至、「諸々のブッダの特性 (dharma) の清浄のために」⁷⁰⁷〔菩薩は〕空性を修行する (pratipadyate)。空性を修習する (prabhāvayati) という意味である。

⁷⁰⁷ k.19c

善なる有為と善なる無為とは、道と涅槃とである。順番通りに、その二つに⑦有為空性と⑧無為空性とがつながる。

また、常に、有情の利益のために (k.18b)

というのは、「一切のあり方で、一切時にわたって、私は有情の利益を為すべきである」というその空性が⑨畢竟空性である。

また、輪廻を捨てないために (k.18c)

「有情のために、私は輪廻は捨てるべきではない」〔と菩薩は思う〕。なぜならば、輪廻が捨てられる場合、菩薩の菩提を得ず、声聞の菩提に安住するようになるからである。その空性が⑩無始無終の空性である。何のためにその空性が示されたのかというので、それゆえに、無始無終の輪廻の空性を見ない者は、疲れて輪廻を捨てるであろうと言う。

また、善が尽くされないようにするために (k.18d)

というのは、無余依涅槃のにおいても私は善根を尽くさない〔という意味である〕。散失させないとは、これ（善根）を捨てないということを使う。【問】もしそうであれば、どのようにして無餘依涅槃の界が成立するのであるか。【答】有漏法の異熟身は存在しないが、諸佛世尊の無漏の存在である法身は、無餘依涅槃の界においても滅することがないからであるというのが定説である。それゆえにその空性が⑪無散空性と言われる。

また、種性の清浄のために (k.19a)

その空性が⑫本性空性である。それに対して、理由として種性は本性であると言う。これはなぜかというので自性的なものであるからと言う。自性的なものは無始以来のものである。偶発的なものではないという意味である。無始の輪廻において、あるものは有心であり、あるものは無心であるように、このように、ここにおいても、ある六処は仏種性を持ち、あるもの（六処）は声聞等の種性を持つ。種性は無始以来に順次に連続してきたものであるから、有心無心の差別と同様に、偶発的なものではない。他の者たちは、一切有情は如来種性のものであるから、ここで種性というのはそのように〔如来種性として〕知られるべきであると言う。

相と好とを得るためにである。 (k.19b)

と言う。それゆえに、〔八十種〕好と偉大な人の〔三十二〕相との空性が⑬相空性と言われる。

また、

諸々のブッダの特性 (dharma) の清浄のために、菩薩は修行する。 (k.19cd)

最後に、修行すると述べているから、「二つの善を得るために」⁷⁰⁸菩薩は修行する、「常に有情の利益のために」⁷⁰⁹菩薩は修行すると、すべて〔の項目〕に結び付けられるべきである。

どのような諸々のブツダの特性の〔清浄のために菩薩は修行する〕かというので、それゆえに〔十〕力と〔四〕無畏〔と十八〕不共〔法〕等のと言う。簡略に、「一切仏法を得るために、私は努力するべきである」と修行する (pratipadyate)。それゆえに修習 (vibhāvanā) と言われる。その空性が⑭一切法空性と言われる。ここにおいて修習というものはいかなる種類のものであるか。所知に対する障碍のない智の働きである。

以上のように、まず、内空性を初めとして一切法空性を終わりとする十四個の〔空性〕が設定されると知られるべきである。

さらに、それらの享受者等において何が空性であるか。何が〔その空性の〕自性であるかというので

人と諸法の無がここにおける空性である。それらの無の有、これがここにおけるもう一つの空性である。(k.20)

と言う。そこにおいて、説かれたとおりの享受者等の人と諸法との無が空性である。そしてそれらの無の有が空性である。そのうち、人法の無が⑮無空性である。その無の有が⑯無性自性空性である。

何のために、これら（十六空性）の中で、二種類の空性が最後に設定されるのかというので、空性の相を説明するためと言う。また、何のために空性の相を説明するのかというので、順番通りに、人法の増益とそれらの空性の損減を取り除くためと言う。人法の増益を避けるために⑮無空性を設定し、そして、その空性の損減を避けるために⑯無性自性空性を設定する。

もし無空性が説かれなかったら、遍計所執性を有する法と人とが存在することになる過失に陥るであろう。もし無性自性空性が説かれなかったら、空性が存在しないことになる過失に陥るであろう。また、それ（空性）が存在しないから、人法が、以前のように、存在するであろう。

そのうち、愚かな人たちにとって異熟識を自性とする〔六〕内処が享受者として考えられるとき、享受者という人と分別された相の眼等との無、そしてその無の有が①内空性である。愚かな人たちにとって色等の表象 (vijñapti) としての似現を自性とする〔六〕外処が享受されるものとして考えられるとき、我所である享受物と遍計所執された相の色等との無、そしてその無の有が②外空性である。その身体 (deha) である肉体 (śarīra) の中の享受者である人と愚夫によって遍計所執された色等と身体との無、そしてその無の有が③内外空性である。器世間において、有情世間の無と彼ら（愚夫）によって遍計所執された自性の無、そしてその無の有が④大空性である。空性の智と勝義の行相において、知る者と行相を取る者と遍計所執された相の空性智と勝義の行相の無、そしてその無の有が、順番通りに、⑤空性空性と⑤勝義空性である。今菩薩が修行する目的、その有為を始めとして一切仏法を最後とする菩薩が修行すべき事柄において、人と遍

⁷⁰⁸ k.18a

⁷⁰⁹ k.18b

計所執された相の諸法の無、そしてその無の有が、順番通り、⑦有為空性、乃至、⑭一切法空性である。

即ち、有為には所有者や行為者である人が存在しない。有為も愚夫によって遍計所執された本質としては存在しない。まとめれば、一切の分別を取ることに對する對治のために、また、一切の經の密議を解説するために、聲聞たちと共通ではない、諸菩薩のこれらの十六空性が説示された。

また、ここにおいて、世尊によって、空性の対象・空性の自性・空性修習の目的が示された。そのうち、「空性の対象」は享受者等の対象から仏法を最後とする。またそれ（空性の対象）を説示することは、空性が一切法に遍満していることを知らせるためである。「空性の自性」は「無」の自性と「無の有」の自性とである。また空性の自性を説示することは、増益と損減とに對する對治として一切の見より離れる体性を知らせるためである。「空性修習の目的」は「清浄な二つを得るために」⁷¹⁰から始まって「仏法を得るために」⁷¹¹までである。またそれを説示することは、自他の色と法との身体の卓越した成就是空性の修習から得られると説示するためである。

空性の部類は以上のように知られるべきであるとは、1) 垢を有する状態においては染汚であり、垢がない状態においては清浄であるということと、2) 内空性等の十六〔種〕として直前に説かれた区別の種類として知られるべきである。

e. 空性の論証

〔空性の〕区別を略説した直後にその論証が略説されているから、それ（空性の部類）の広説の直後にどのように〔空性の部類に對する〕論証は知られるべきであるのかと問う。ここにおいて何が論証されるのか。外来的な煩惱による染汚性と自性としての清浄性とが〔論証される〕

そのうち、染汚性の論証に関して

もしそれ（空性）が染汚にならないならば、一切の人たちは既に解脱したものになるであろう。（k.21ab）

と言う。

解脱とは煩惱の断滅であり、その煩惱の断滅は道の修習による。その場合（解脱の場合）、もし諸法の空性が、まだ對治が生じていないときにも、外来的な煩惱によって〔という文章の〕「も（api）」という語から、〔空性が〕あたかも〔對治が〕生じているように、染汚にならないならば〔の場合が假定され〕、そうであれば、染汚が存在しないから、努力することなく、一切の人たちは既に解脱したものになるであろう。努力することなくとは對治することなくである。しかし對治することなくでは諸々の生き物には解脱はない。それゆえに、必然的に、異生の状態においては、如性が外来的な垢によって染汚された性質のものであると理解されるべきである。このように空性の染汚された部分が論証されたことになる。

⁷¹⁰ k.18a

⁷¹¹ k.19c

次は〔空性の〕清浄の部分を論証しようとして

もしそれ（空性）が清浄にされないならば、〔人たちの〕努力は無用なものになるであろう。（k.21cd）

と言う。「人たちの」と〔いう語が〕結合される。また、対治が生じているときにも〔という文章の〕「も（api）」という語から、〔空性が〕あたかも〔対治が〕生じていないように、清浄にされないならば〔の場合が仮定され〕、そうであれば、解脱のために〔修行に〕着手することは無用なものになるであろう。対治の修習によってもその垢から離れることが得られないから、また、垢を有する者に解脱は生じないからである。しかし解脱のために〔修行に〕着手することが無用であるとは認められない。それゆえに、対治の反復によって外来的な煩惱から離れるから、必然的に、空性の清浄は理解されるべきである。このように空性の清浄の部分が論証されたことになる。

この場合、〔人が〕染汚法を取るから染汚であり、清浄法を取るから清浄である。しかし空性に、直接的に、染汚や清浄が認められるわけではない。法性は法と相互依存しているからである。それゆえに、

一切の人たちは既に解脱したものになるであろう。（k.21b）

と言う。ここにおいて人がまさにそれ（染汚法や清浄法）を取る者として説かれている。そうではなく、もし空性に、直接的に、染汚や清浄があるならば、そのことから、〔染汚や清浄は〕人たちといかなる関係があるのか。なぜならば、空性の清浄から人たちの清浄が、空性の染汚から〔人たちの〕染汚が言われるからである。

また、異生の状態において空性は染汚され、聖者の状態においては〔空性は〕清浄になる。それゆえに、次のことも成立する。

それは染汚されたものではない。また、染汚されていないものでもない。また、清浄にされたものでもない。また、清浄にされていないものでもない。
（k.22ab）

と。

どうして染汚されたものではなく、清浄にされていないものでもないのか。二つの否定によって〔今議論中の〕論題（空性の清浄性）を理解させるから、〔空性は〕清浄である。これに対しては聖教（āgama）は本性的に

心は明浄なものだからである。（k.22c）

と言う。ここにおいて「心」という語によって「心の法性」が言われる。心は垢を相とするからである。どうして染汚されていないものではなく、清浄にされたものでないであるかとは何か。二つ

の否定によって「空性が」染汚されているということを理解させる。そして、それは外来的な煩惱によって染汚されている。しかし、本性として「染汚されているの」ではないということを示している。また、これに対してもそれは外来的な煩惱によって染汚されているという聖教 (āgama) がある。

【問】 染汚性と清浄性として二種類に区別が説かれたのに、何のためにまた四種類に「区別が」説かれるのか。【答1】 ある人たちは言う。「『空性の』世間道と出世間道とからの区別を明らかにするためであるとある。世間道は自地の垢によって染汚されている。しかし、下「地の垢」によっては「染汚されてい」ない。それ（下地の垢）の対治になるものだからである。出世間道は中下等の区別からは清浄ではない。しかし、無漏だから清浄である。空性はそうではない」。【答2】 また、他の人たちは言う。「『空性は』「染汚されたものではない」といって、さらに、「清浄でないものではない」というのは眼等と区別するためである。眼等は無覆無記であるから染汚されたものではない。そして、それら（眼等）は有漏であるから本性清浄ではない。それゆえに「眼等は」清浄ではない。このように「染汚されたものではないのではない」と言ってから「清浄でもない」というのは有漏善と区別するために言うのである。なぜならば、有漏善は輪廻に属するから染汚されていないのでない。また「有漏善は」好ましい異熟を有するから清浄である。法性はそうではない。それ（法性）は染汚された状態においては染汚され、清浄ではない」。

このように略説された染汚と清浄という点からの空性の分類が論証されたことになる。

空性の要義

ここにおいて空性の要義は相から、また、設定から知られるべきである。そのうち、相からとは、無の相と有の相からであるとは、「二の無 (k.13a)」と説かれているから、無の相から「空性の要義は知られるべきである」、「無の有 (k.13ab)」と説かれているから、有の相から「空性の要義は知られるべきである」。さらに、有の相は「有でもなく無でもない (k.13c)」と説かれているから、有無を超越した相と、同異を超越した相から「知られるべきである」。これが空性の相である。それゆえに「空性は」虚妄分別と「別異とも同一ともいう相はない (k.13d)」と説かれているから、以上のような点で、相から「空性の」要義がある。

設定から要義はどのように知られるべきであるかというから、また設定とは、同義語等の設定から知られるべきであるという。同義語とその意味とその分類とその論証という意味である。これら相等の四種の教えによって、四つの随煩惱（分別、恐怖、怠慢、疑惑）の対治として空性の自相・業相・汚染と清浄の相が、また、道理の相が語られたことになる。そのうち、分別の対治として自相が「語られた」。それ（分別）には有・無・「有無の」二・同異として把握する本質がある。空性の相を聞いてから信じない者たちにある恐怖の対治として、迷乱のない真如の業と、顛倒されていない業と、一切相を断じる業と、一切出世間智の境地に安住する業と、獲得するときに聖者の法の原因になるものの業との業相が「語られた」。このように、空性の自性と業とを聞くだけで達成したと把握する怠ける者たちの怠慢を取り除くために、分類の相が「語られた」。どうしてそれ（空性）は染汚となり、清浄となるのかと疑う者たちの「疑い」を取り除くために道理の相が「語られた」。

『中辺分別論』における第一の相の章に対する註釈

略号

- AAĀ : *Abhisamayālaṃkāṛāloka* (Haribhadra), ed. by U. Wogihara, *Abhisamayālaṃkāṛālokā Prajñāpāramitāvyākhyā, The Works of Haribhadra*, 東洋文庫, 1932.
- AS(D) : *Chos mngon pa kun las btus pa ; sDe dge edition of Abhidharmasamuccaya*, D4049, ri 44b1-120a7.
- AS(P) : *Abhidharmasamuccaya* (Asaṅga), ed. by P. Pradan, *Abhidharma samuccaya of Asanga*, Santiniketan : Visva-Bharati, 1950.
- ASBh(T) : *Abhidharmasamuccaya-bhāṣya*, ed. by N. Tatia, *Abhidharmasamuccayabhāṣyam*, Tibetan Sanskrit Works Series vol.17, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Patna, 1976.
- BoBh: *Bodhisattvabhūmi*, ed. by U. Wogihara, *Bodhisattvabhūmi : a statement of whole course of the Bodhisattva*, Seigo Kenkyukai, 1936; repr. Sankibo Buddhist Book Store, Tokyo, 1971.
- MAV : *Madhyāntavibhāga-kārikā*. See MAVBh
- MAVBh : *Madhyāntavibhāgabhāṣya* (Vasubandhu), ed. by Gadjin Nagao, *Madhyāntavibhāga-bhāṣya : a Buddhist philosophical treatise*, 鈴木学術財団, 1964.
- MAVṬ(Bh/T) : *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (Sthiramati) ed. by V. Bhattacharya & G. Tucci, *Madhyāntavibhāgasūtrabhaṣyāṭīkā of Sthiramati*, Luzac & London, 1932.
- MAVṬ(Mi) : *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (Sthiramati) ed. by 三穂野英彦, 『Madhyantavibhaga 第一章相品における理論と実践』 (広島大学博士論文) , 2003,
- MAVṬ(O) : *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (Sthiramati) ed. by 小谷信千代, 『虚妄分別とは何か : 唯識説における言葉と世界』 第3部 校訂テキスト, 法蔵館, 2017.
- MAVṬ(Pa) : *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (Sthiramati) ed. by R. Pandeya, *Madhyānta-vubhāga-śāstra, Containing the Kārikās of Maitreya, Bhāṣya of Vasubandhu and Ṭīkā by Sthiramati*, Delhi, 1971.
- MAVṬ(Y) : *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (Sthiramati) ed. by Susumu Yamaguchi, *Madhyāntavibhāgaṭīkā : exposition systématique du Yogācāravijñaptivāda*, 破塵閣, 1934 ; repr. 鈴木学術財団, 1966.
- MAU : *dBu ma rgyan gyi man ngag ; sDe dge edition of Madhyamālaṃkāropadeśa* (Ratnākaraśānti), D4085, hi 223b2-231a7.
- MHK : 「『中観心論』 *Madhyamakahrdayakārikā* 及び『論理炎論』 *Tarkajvālā*, 第5章「瑜伽行派の真実〔説〕の〔批判的〕確定」 (*Yogācāratattvaviniścaya*) 試訳」、『大乘仏教の起源と実体に関する総合的研究—最新の研究成果を踏まえて— (科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書) 』 .
- MSA : *Mahāyānasūtrālaṃkāra*, ed. by Sylvain Lévi, *Mahāyāna-sūtrālaṃkāra : expose de la doctrine du grand vehicule*, Tome I Texte, Paris, 1907.
- MS : *Theg pa chen po bsdus pa ; sDe dge edition of Mahāyānasamgraha* (Asaṅga), D 4048, ri 1b1-43a7.
- MSBh : *Theg pa chen po bsdus pa'i 'grel pa ; sDe dge edition of Mahāyānasamgrahabhāṣya* (Vasubandhu), D 4050, ri 121b1-190a7.

- MSU : 攝大乘論釋 (大正No. 1598 無性造 玄奘譯) in Vol. 31
- MŚV : *Mīmāṃsāslokavārttika* (Śrī Kumārila Bhaṭṭa), ed. by Svāmī Dvārikādāsa Śāstrī, *Ślokavārttika of Śrī Kumārila Bhaṭṭa*, Tara Publications, 1978.
- NP : *Nyāyapraveśa* (Śaṅkarasvāmin), ed. by Tachikawa Musasashi, *A SIXTH-CENTURY MANUAL OF INDIAN LOGIC*, Journal of Indian Philosophy 1: pp. 111-145, 1971
- PP : *Mūlamadhyamakavṛttiprasannapadā* (Candrakīrti), ed. by Louis de la Vallée Poussin, *Madhyamakavṛttiḥ : Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā commentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica 4, St.-Petersbourg, 1907.
- PPU : *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag ; sDe dge edition of Prajñāpāramitopadeśa* (Ratnākaraśānti), D4079, hi 133b7-162b1.
- PPr : *dBu ma'i rtsa ba'i 'grel pa shes rab sgron ma ; sDe dge edition of Prajñāpradīpamūlamadhyamakavṛtti* (Bhāvaviveka), D3853, tsha 45b4-259b3.
- PPrT : *shes rab sgron ma rgya cher 'grel pa ; sDe dge edition of prajñāpradīpaṭīkā* (Avalokitavrata) D 3859 wa 1b1-287a7; zha 1b1-338a7; za 1b1-341a7
- PSP : *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*
- PSP I-1 : *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, Part 1-1, ed by Takayasu Kimura, Sankibo Busshorin, Tokyo, 2007.
- PSP I-2 : *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, Part 1-2, ed by Takayasu Kimura, Sankibo Busshorin, Tokyo, 2006.
- PSP II–III : *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, Part 2-3, ed by Takayasu Kimura, Sankibo Busshorin, Tokyo, 1986.
- PSP IV : *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, Part 4, ed by Takayasu Kimura, Sankibo Busshorin, Tokyo, 1990.
- PSP V : *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, Part 5, ed by Takayasu Kimura, Sankibo Busshorin, Tokyo, 1992.
- PSP VI–VIII : *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, Part 6-8, ed by Takayasu Kimura, Sankibo Busshorin, Tokyo, 2006.
- PvT(D) : *Rab tu byed pa nyi shu pa'i 'grel bshad ; sDe dge edition of Prakaraṇaviṃśatikāṭīkā* (Vinītadeva), D No.4065, shi, 171b7-195b5.
- PvT(P) : *Rab tu byed pa nyi shu pa'i 'grel bshad ; Peking edition of Prakaraṇaviṃśatikāṭīkā* (Vinītadeva), P No.5566, si, 201b8-232a8.
- SAVBh(D) : *mDo sde rgyan gyi 'grel bshad ; sDe dge edition of Sūtrālamkāra-vṛttibhāṣya* (Sthiramati), D4034, mi 1b1-283a7; tsi 1b1-266a7.
- SAVBh(H): *Sūtrālamkāravṛttibhāṣya* (Sthiramati), ed. by Osamu Hayashima, *Chos yongs su tshol ba'i skabs or Dharmaparyeṣṭy adhikāra the XIth Chapter of the Sūtrālamkāravṛttibhāṣya, Subcommentary on the Māhāyānasūtrālamkāra Part II*, 『長崎大学教育学部人文科学研究報告』 27, pp.73-119, 1978.
- TJ : *dbu ma'i snying po'i 'grel pa rtog ge 'bar ba ; sDe dge edition of Madhyamakahrdayavṛttitarkajvālā* (Bhāvaviveka), D 3856, dza 40b7-329b4.
- TK : *Triṃśikā* (Vasubandhu), ed. by Sylvain Lévi, *Vijñāptimātrāsiddhi, Deux Traités de Vasubandhu, Viṃśatikā (la Vingtaine) accompagnée d'une Explication en Prose et Triṃśikā (la Trentaine) avec la commentaire de Sthiramati*, ed. by S. Lévi, Paris, 1925.

- TrBh : *Triṃśikā-bhāṣya* (Sthiramati), ed. by Sylvain Lévi, *Vijñāptimātrāsiddhi, Deux Traités de Vasubandhu, Viṃśatikā (la Vingtaine) accompagnée d'une Explication en Prose et Triṃśikā (la Trentaine) avec la commentaire de Sthiramati*, ed. by S. Lévi, Paris, 1925.
- TrṬ(D) : *Sum cu pa'i 'grel bshad ; sDe dge edition of Triṃśikāṭīkā* (Vinītadeva), D No.4070, hi, 1b1-63a7.
- VŚ : *Viṃśatikā* (Vasubandhu), ed. by Sylvain Lévi, *Vijñāptimātrāsiddhi, Deux Traités de Vasubandhu, Viṃśatikā (la Vingtaine) accompagnée d'une Explication en Prose et Triṃśikā (la Trentaine) avec la commentaire de Sthiramati*, ed. by S. Lévi, Paris, 1925.
- VŚ(D) : *Nyi shu pa'i 'grel pa ; sDe dge edition of Viṃśatikā* (Vasubandhu ; dbyig gnyen), D No.4057, shi 4a3-10a2.
- P: Tibetan Tripiṭaka, Peking edition
- D: Tibetan Tripiṭaka, sDe dge edition
- T: 大正新修大藏經
- 『金剛般若經』 : *Vajracchedikā-prajñāpāramitā-sūtra*, ed. by E. Conze, Serie Orientale Roma 13, Roma: IsMEO, 1957. Revised Second Edition in 1974.
- 『七十頌』 : *Minor Buddhist Texts Part I*, ed. by Giuseppe Tucci, Serie Orientale Roma 9, IsME.O, Roma, 1956, pp. 53-92.
- 『頌釈』 : 『能斷金剛般若波羅蜜多經論釋』 (大正No. 1513 無著造頌 義淨訳 世親釈) in Vol. 25
- 「撰決択分」 : 『瑜伽師地論』 「撰決択分」 (大正No. 1579 彌勒説 玄奘訳) in Vol. 30
- 「弥勒請問章」 : ed. by Edwar Conze and Iida Shotaro, ““Maitreya’s Question” in the *Prajñāpāramitā*”, *Mélanges d’indianisme a la mémoire de Louis Renou*, Paris, 1968.
- 『中辺論』 : 『中辺分別論』 (大正No. 1599 天親造 真谛訳) in Vol. 31.
- 『弁中論』 : 『弁中辺論』 (大正No. 1600 世親造 玄奘訳) in Vol. 31.
- 『述記』 : 『弁中辺論述記』 (大正No. 1835 窺基造) in Vol. 44.
- 『解深密經』 : *Samdhinirmocana Sūtra*, ed. by Étienne Lamotte, *Samdhinirmocana Sūtra: L'Explication des mystères*, Louvain, Paris, 1935.

参考文献

Christian Lindtner

- [1984] “Bhavya's Controversy with Yogācāra in the Appendix to Prajñāpradīpa, Chapter XXV”, *Bibliotheca orientalis Hungarica* 29; *Tibetan and Buddhist studies: commemorating the 200th anniversary of the birth of Alexander Csoma de Kőrös* vol. 2, ed. by Louis Ligeti, Budapest, pp. 77-97.

Edwar Conze and Iida Shotaro

- [1968] ““Maitreya's Question” in the *Prajñāpāramitā*”, *Mélanges d'indianisme a la mémoire de Louis Renou*, Paris.

M. David Eckel

- [1985] “Bhāvaviveka's Critique of Yogācāra Philosophy in Chapter XXV of the Prajñāpradīpa”, *Indiske Studier 5: Mischellanea Buddhica*, ed. by Chr. Lindtner, Copenhagen, pp. 25-75.

Mario D'Amato

- [2012] *Maitreya's Distinguishing the middle from the extremes (Madhyāntavibhāga) along with Vasubandhu's commentary (Madhyāntavibhāga-bhāṣya) : a study and annotated translation*, New York : American Institute of Buddhist Studies.

Paul Hoornaert

- [1994] 「「空性」の理解をめぐる中観と唯識の対立」, 『印度学仏教学研究』43-1, pp. 358-361.
- [1999] “An Annotated Translation of *Madhyamakahrdayakarika/Tarkajvala* V. 1-7”, 『金沢大学文学部論集. 行動科学・哲学篇』19, pp. 127-159.
- [2000] “An Annotated Translation of *Madhyamakahrdayakarika/Tarkajvala* V. 8-26”, 『金沢大学文学部論集. 行動科学・哲学篇』20, pp. 75-111.

Shotaro Iida

- [1966] “Agama (Scripture) and Yukti (Reason) in Bhāvaviveka”, 『印度学仏教学論集：金倉博士古希記念』, pp. 79-96.

Stefan Anacker

- [1984] *Seven Works of Vasubandhu: The Buddhist Psychological Doctor*, Motilal Banarsidass, Delhi.

Th. Stcherbasky

- [1977] *Madhyābta-vibhāga Discourse on Discrimination between Middle and Extremes ascribed to Bodhisattva Maitreya and commented by Vasubandhu and Sthiramati* ; *Bibliotheca Buddhica* 30 ; Neudruck der Ausgabe, 1936 ; repr. Tokyo : Meicho-Fukyu-kai.

荒牧典俊

- [2002] 「弥勒論書における「虚妄分別」の起源について」, 『仏教学セミナー』75, pp. 1-28.

薊法明

- [2006] 「唯識三性説における系譜」, 『佛教文化研究』50, pp. 19-38.
- [2009] 「唯識の諸経論における三性説（2）」, 『佛教文化研究』53, pp. 1-11.

池田道浩

- [1996a] 「三性説の構造的変化(1)」, 『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』29, pp. 1-15.
- [1996b] 「三性説の構造的変化(2)」, 『曹洞宗研究員研究紀要』27, pp. 47-62.

伊藤康裕

- [2010] 「安慧の唯識説の一考察-虚妄分別と二取との関係を中心に」, 『東洋の思想と宗教』 27, pp.46-63.

井上 ウィマラ

- [2010] 「『小空経』における空の実践構造について」, 『印度学仏教学研究』 58-2, pp. 201-206.

海野孝憲

- [1966] 「弥勒の唯識説にみられる空性(sūnyatā)の用例とその意味について」, 『印度学仏教学研究』 15-1, pp. 98-104.
- [1970] 「Ratnākaraśāntiと「中辺分別論」」, 『宗教研究』 43-3, pp.66-68.
- [1984] 「Madhyamakālamkāropadeśaの和訳解説」, 『名城大学人文紀要』 20-1, pp. 1-22.
- [1983] 「Prajñāpāramitopadeśaの和訳解説」, 『名城大学人文紀要』 29-1, pp.1-24.

大竹晋

- [2009] 『能断金剛般若波羅蜜多経論釈他』, 新国訳大蔵経 14, 大蔵出版.
- [2013] 『元魏漢訳ヴァスバンドゥ釈経論群の研究』, 大蔵出版.

小谷信千代

- [2017] 『虚妄分別とは何か：唯識説における言葉と世界』, 法蔵館.

大谷光義

- [2012] 「『中観心論』第5章における「無の有」批判」, 『インド論理学研究』 5, pp. 221-241.

片岡啓

- [2017] 「パラフレーズによるabhūtaparikalpaの構造分析」 『インド論理学研究』 10, pp. 25-41

片野道雄

- [1992] 「「弥勒請問章」の三相所説に対するツォンカパの解明」 『仏教学セミナー』 56, pp. 1-13.

北野新太郎

- [2014] 「初期唯識文献におけるgrāhya-grāhaka-bhāvaの適切な訳語についての一考察」, 『印度学仏教学研究』, 63-1, pp. 141-146.
- [2015] 「初期唯識文献と認識論・論理学におけるgrāhya-grāhaka-bhāvaという語の意味の違いについて」, 『仏教大学仏教学会紀要』, 20, pp. 39-66.
- [2016a] 「『唯識三十頌』第21偈cd句の安慧釈の竹村訳は本当に「誤訳」なのか?」, 『印度学仏教学研究』, 64-2, pp. 151-156.
- [2016b] 「初期唯識文献におけるgrāhya-grāhaka-bhāvaの問題点」, 『仏教大学仏教学会紀要』, 21, pp.341-75.
- [2017] 「初期唯識思想における「外のアートマン」についての一考察」, 『印度学仏教学研究』, 65-2, pp. 168-173.

金才權

- [2007] 『『中辺分別論』における三性説の研究—三性説の形成とその思想史的展開を中心として』（龍谷大学博士論文）

工藤成樹

- [1982] 「中観と唯識-空、一乗・三乗、二諦をめぐって」, 『講座大乘仏教 8: 唯識思想』, 春秋社, pp. 211-233.

小峰彌彦・勝崎裕彦・渡辺章悟 編

- [2015] 『般若経大全』, 春秋社.

近藤 徹称

- [1956] 「虚妄分別に内在する契機」, 『印度学仏教学研究』 4-1, pp. 120-121.
[1957] 「虚妄分別の有無相」, 『大谷学報』 133, pp. 67-80.

三枝充恵

- [1984] 「般若経の成立史覚書」, 『東洋学術研究』 23-1, pp. 194-211.

斎藤明

- [1998] “Bhāvivēka and the Madhya(anta)vibhāga/-bhāṣya”, 『印度学仏教学研究』 46-2, pp. 201-206.
[2004] 「空・唯識・仏性」, 『根源へ: 思索の冒険』, 岩波書店, pp. 77-104.
[2007] 「『中観心論』 Madhyamakahrdayakārikā 及び『論理炎論』 Tarkajvālā, 第5章「瑜伽行派の真実〔説〕の〔批判的〕確定」(Yogācāratattvaviniścaya) 試訳」, 『大乘仏教の起源と実体に関する総合的研究—最新の研究成果を踏まえて—(平成15～18年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(B)(2) 研究成果報告書)』, pp. 201-269.
[2010] 「二諦と三性」, 『印度哲学仏教学』 25, pp. 1-14.

島義徳

- [1976] 「Jayantaのabhāva論II」, 『印度学仏教学研究』 24-2, pp. 72-75.
[1978] 「abhāvaについて」, 『仏教学研究』 34, pp. 13-21.

末本文美士

- [1994] 「〈即非の論理〉再考」, 『禅文化研究所紀要』 20, pp. 43-69.

勝呂信静

- [2010] 『唯識思想の形成と展開』, 山喜房佛書林.

鈴木大拙

- [1981] 『鈴木大拙全集』第5巻, 岩波書店.

鈴木広隆

- [1984] 「『二万五千頌般若』における空の一考察」, 『印度学仏教学研究』 33-1, pp. 282-285.
[1987a] 「『二万五千頌般若』 I, 2, 1における空の教説」, 『印度学仏教学研究』 35-2, pp. 92-95.

- [1987b] 「般若經における空の教説」, 『印度哲学仏教学』 2, pp. 125-140.
- [1988] 「『般若經』の系統について」, 『印度哲学仏教学』 3, pp. 104-116.
- [1989] 「大品系般若經における空の教説の成立について」, 『印度学仏教学研究』 37-2, pp. 52-56.
- [1990] 「般若經の空思想」, 『印度哲学仏教学』 5, pp. 143-155.
- 相馬一意
- [1986] 「『菩薩地』 真実義章試訳」, 『南都仏教』 55, pp. 105-126.
- 立川 武蔵
- [1993] 「『金剛般若經』に見られる「即非の論理」批判」, 『印度学仏教学研究』 41-2, pp. 176-179.
- 高崎直道
- [1982] 「瑜伽行派の形成」, 『講座・大乘仏教』 8, 春秋社, pp. 1-42.
- 高橋晃一
- [2005] 『菩薩地』 「真実義品」から「摂決択分中菩薩地」への思想展開: vastu概念を中心として』 インド学仏教学叢書12, 山喜房佛書林.
- [2012] 「初期瑜伽行派の思想 - 『瑜伽師地論』を中心に - 」, 『唯識と瑜伽行』, 春秋社, pp. 73-109.
- 竹村牧男
- [1995] 『唯識三性説の研究』, 春秋社.
- 谷口富士夫
- [1991] 「『金剛般若經』における言語と対象」, 『仏教学』 30, pp. 29-46.
- ツルティム・ケサン
- [1992] 「中観プラーサンギカの「弥勒請問章」受容」, 『大谷学報』 273, pp. 13-25.
- [1999] 「『弥勒請問章』と初期唯識文献の三性説」, 『印度学仏教学研究』 48-1, pp. 180-186.
- 長尾雅人
- [1937] 「空義より三性説へ」 『哲学研究』 250, pp.61-96.
- [1952] 「転換の論理」, 『哲学研究』 405号, pp. 449-476.
- [1967] 「唯識義の基盤としての三性説」, 『鈴木学術財団研究年報』, 4号, pp. 1-22.
- [1968] 「余れるもの」, 『印度学仏教学研究』 16-2号. pp. 23-27.
- [1972] 「金剛般若經に対する無着の釈偈」, 『東方學論集: 東方學會創立二十五周年記念』, 東方学会, pp. 551-572.
- [1973] 「金剛般若經」, 『大乘仏典1 般若部經典』, 中央公論社, pp. 5-303.
- [1978a] 「『中辺分別論安慧釈』の梵文写本との照合—その第一章 相品について—」, 『鈴木学術財団研究年報』 15号, pp. 16-22.
- [1978b] 「空性における「余れるもの」」, 『中観と唯識』, 岩波書店, pp. 542-560.
- [1982] 『摂大乘論—和訳と注解: 上巻—』, 講談社.

長尾雅人・梶山雄一・荒牧典俊 訳

[2005] 『大乘仏典15：世親論集』, 中央公論社.

那須円照

[2009] 『アビダルマ仏教の研究：時間・空間・涅槃』, 永田文昌堂.

袴谷憲昭

[1975a] 「弥勒請問章和訳」, 『駒沢大学仏教学部論集』, 6, pp. 1-21.

[1975b] “A consideration on the Byams śus kyi leḥu from the historical point of view”, 『印度学仏教学研究』, 24-1, pp. 20-30

[1984] 「空性理解の問題点」, 『理想』 610, pp. 50-64.

早島理

[2003] 「弥勒菩薩と兜率天伝承」, 『古典学の再構築—20世紀後半の研究成果総括と文化横断的研究による将来的展望—（平成10～14年度 文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究(A)(118) 研究成果報告書）』 pp. 1-7.

早島慧

[2014] 『中観・瑜伽行両派における二諦説解釈の研究：『大乘莊嚴經論』第VI章「真実品」を中心として』（龍谷大学博士論文）

[2015] 「『大乘莊嚴經論』「真実品」におけるadvayaの一考察」, 『印度学仏教学研究』 64-1, pp. 114-118.

阿理生

[1981] 「瑜伽行派(Yogācārah)の問題点」, 『哲学年報』 41, pp. 25-53.

[1984] 「瑜伽行派の空性と実践」, 『哲学年報』 43, pp. 55-90.

[1987] 「虚妄分別(abhūtaparikalpa)の意味するもの」, 『宗教研究』 60-4, pp. 274-275.

[1989] 「『中辺分別論』の識説について」, 『宗教研究』 62-4, pp. 194-196.

平川彰

[1975] 「空観の性格」, 『講座大乘仏教 第三巻「論理学・教育学」』, 理想社, pp. 165-202.

[1979] 『インド仏教史 下巻』, 講談社.

藤丸智雄・鈴木健太

[2007] 『「般若経典」を読む』, 角川学芸出版.

兵藤一夫

[2010] 『初期唯識思想の研究：唯識無境と三性説』, 文栄堂.

松岡寛子

[2006] 「スティラマティ著『中辺分別論釈疏～<帰敬偈>のテキスト校訂及び和訳」, 『比較論理学研究』 第4号, pp. 101-136.

松田和信

[2001] 「唯識の祖師たち」, 『大法輪』 68-5, pp. 82-87.

- [2018a] “A Short Note on the Compound Abhūtaparikalpa in the Bodhisattvapiṭakasūtra”, *Reading: A Festschrift for Jens E. Braarvig*, edited by Lutz Edzard, Jens W. Borgland, Ute Husken, Wiesbaden : Harrassowitz Verlag, pp. 333-339.
- [2018b] 「弥勒菩薩と二人の兄弟」, 『仏教通信』 41, pp. 26-38.
- 水尾寂芳
- [1983a] 「瑜伽行学派における「余れるもの」の展開」, 『印度学仏教学研究』 32-1, pp. 182-183.
- [1983b] 「瑜伽行学派における空性説の展開」, 『待兼山論叢』 17, pp. 21-37.
- 三穂野英彦
- [2003] 『Madhyantavibhaga 第一章相品における理論と実践』 (広島大学博士論文)
- 宮本正尊
- [1943] 『根本中と空』, 第一書房.
- 宮本浩尊
- [2011] 『中観学派と瑜伽行学派の対論とその意義 : 『般若灯論』 第25章を中心として』 (大谷大学博士論文) .
- 向井亮
- [1974] 「『瑜伽論』の空性説」, 『印度学仏教学研究』 22-2, pp. 368-375.
- [1983] 「阿含の〈空〉に対する大乘の解釈とその展開」, 『印度学仏教学研究』 31-2, pp. 300-303.
- [2000] 「〈空〉の二面性について」, 『印度哲学仏教学』 15, pp. 1-20.
- 森山清徹
- [1977] 「般若経における「空とその同類語」について」, 『印度学仏教学研究』 25-2, pp. 124-125.
- [1978] 「「空性思想の形成」研究序説」, 『仏教大学大学院研究紀要』 6, pp. 145-162.
- [1979] 「自性の考察」, 『印度学仏教学研究』 27-2, pp. 252-255.
- 安井広済
- [1961] 『中観思想の研究』, 法蔵館.
- 山口益
- [1935] 『中邊分別論釋疏 : 安慧阿遮梨耶造』, 破塵閣書房, repr. 鈴木学術財団, 1966.
- [1937] 『漢藏對照辯中邊論 : 附中邊分別論釋疏梵本索引』, 破塵閣書房, repr. 鈴木学術財団, 1966
- [1941] 『佛教における無と有との對論』 弘文堂, repr. 山喜房佛書林, 1964.
- [1951] 『般若思想史』, 法蔵館.
- 山口益, 野澤靜證
- [1953] 『世親唯識の原典解明』, 法蔵館.
- 葉阿月
- [1972] 「唯識説における空性説の特色」, 『東方学』 44, pp. 126-144.

横山紘一

- [1970] 「弥勒作論書の著者問題-中辺分別論の五思想に基づいて-」, 『印度学仏教学研究』 19-1, pp. 132-133.
- [1971] 「五思想よりみた弥勒の著作-特に『瑜伽論』の著者について-」, 『宗教研究』 45-1, pp. 27-52.
- [1976] 「nimitta (相)について」, 『仏教学』 1, pp. 88-111.
- [1977] 「唯識思想における否定」, 『宗教研究』 51-1, pp. 43-69.
- [1982a] 「唯識思想の空」, 『仏教思想 7: 空 (下)』, 平楽寺書店, pp. 559-578.
- [1982b] 「「無二」の思想的発展について」, 『宗教研究』 56-3, pp. 47-77.

李 鐘徹

- [2001] 「空と実在に関する巨視的素描」, 『空と実在: 江島惠教博士追悼論集』, pp. 151-161.

渡辺 章悟

- [1983a] 「大乘空観の一考察」, 『東洋大学大学院紀要』 19, pp. 97-112.
- [1983b] 「般若経における空の法数と空義の理由句」, 『印度学仏教学研究』 32-1, pp. 202-205.
- [1985a] 「「般若経」における四句否定の根拠としての abhāvasvabhāva」, 『宗教研究』 58-4, pp. 160-162.
- [1985b] 「「般若経」における無自性と abhāvasvabhāva」, 『印度学仏教学研究』 33-2, pp. 138-139.
- [1989] 「「般若経」における abhāva の用法」, 『印度学仏教学研究』 37-2, pp. 121-125.
- [1992] 「「般若経」における非存在 ABHĀVA の意義」, 『般若波羅蜜多思想論集: 真野龍海博士頌寿記念論文集』, 山喜房仏書林, pp. 47-78.
- [2001] 「スコイエーン・コレクションの『金剛般若経』」, 『印度学仏教学研究』 50-1, pp. 94-102.
- [2009a] 『金剛般若経の研究』, 山喜房佛書林.
- [2009b] 『金剛般若経の梵語資料集成』, 山喜房佛書林.

李学竹・加納和雄

- [2017] 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』第一章(fol. 58r5-59v4): 『中観光明』四諦説三性説箇所佚文」, 『密教文化』 238, pp. 7-27.

